手塚治虫博物館

手塚治虫＋
小林準治

プラスアルファ

手塚治虫略歴

てづか・おさむ―1928年、大阪府豊中市に生まれ、兵庫県宝塚市で育つ。大阪大学付属医学専門部を卒業。おもな作品に、漫画では『ジャングル大帝』『鉄腕アトム』その他多数、アニメーションでは『展覧会の絵』『ジャンピング』その他多数あり、全400巻の『手塚治虫漫画全集』(講談社)も刊行された。宝塚市には手塚治虫記念館がある。1989年に死去。

小林準治略歴

こばやし・じゅんじ―1948年、東京都に生まれる。1966年、アニメーターとして、初めて手塚作品に参加する。1978年には、手塚プロダクション動画部門創設に参画。おもな作品に、『リボンの騎士』(動画)、『森の伝説』(原画)、『ジャングル大帝』(総作画監督)などがある。著書には『手塚治虫 昆虫図鑑』(講談社+α文庫=共著)がある。日本昆虫協会監事。日本昆虫倶楽部会員。

+α プラスアルファ
D・14・3

手塚治虫博物館

手塚治虫＋小林準治

+α プラスアルファ

手塚治虫博物館

D 14・3
手塚治虫＋小林準治
講談社+α文庫
Y980

9784062567701

1920145009807

ISBN4-06-256770-9

C0145 ¥980E (0)

手塚漫画の最も特徴的な点は、そのストーリー展開の中に驚くほど多くの博物的要素を含んでいることである。

本書では、手塚治虫169作品の中から哺乳類、両生類・爬虫類、魚類・甲殻類・貝類、鳥類、樹木、草花・有用作物にわたるまで、191項目をピックアップし、手塚漫画の新たな楽しみ方に光を当てる!!

手塚作品に登場する動植物たちの活躍を知らずして、手塚ワールドの神髄は語れない!! 荒俣宏氏絶賛の書!!

手塚治虫博物館 | 手塚治虫＋小林準治　講談社／定価：本体980円（税別）

好評既刊

『手塚治虫 昆虫図鑑』
手塚治虫＋小林準治＝解説構成

『図説 日本妖怪大全』
水木しげる

＊『水木しげるのあの世の事典』
水木しげる

『マンガ落語大全 まずはここから』
高 信太郎

『ついやってみたくなる「不思議」の本』
日本社

『脳ミソを哲学する』
筒井康隆

『カラー図説 毒草の誘惑』
植松 黎　清水晶子＝絵

『恋する寄生虫』
藤田紘一郎

『バイ菌だって役に立つ』
藤田紘一郎

『マンガ 絶滅する日本の動物』
今泉忠明＋佐藤晴美

＊印は書き下ろし・オリジナル作品

いろんなテーマで、あらゆる視点で。
プラスアルファは、次々生まれます。
講談社+α文庫のテーマ分類は次のとおりです。

A 生き方　B ことば　C 生活情報
D エンターテイメント　E 歴史
F 心理・宗教　G ビジネス・ノンフィクション
H 事典・辞典　I サイエンス

最新刊!!

「本書は手塚治虫による生物歳時記である」荒俣宏

〝漫画の神様〟は類まれなる博物作家だった!! 作品中で躍動する哺乳類、爬虫類、魚類、鳥類、植物などを網羅し、手塚漫画の新たな魅力を発掘!! これぞ真の手塚ワールド!!

Ⓓ エンターテイメント

テーマ別・大きな字・読みやすい

講談社+α文庫 プラスアルファ

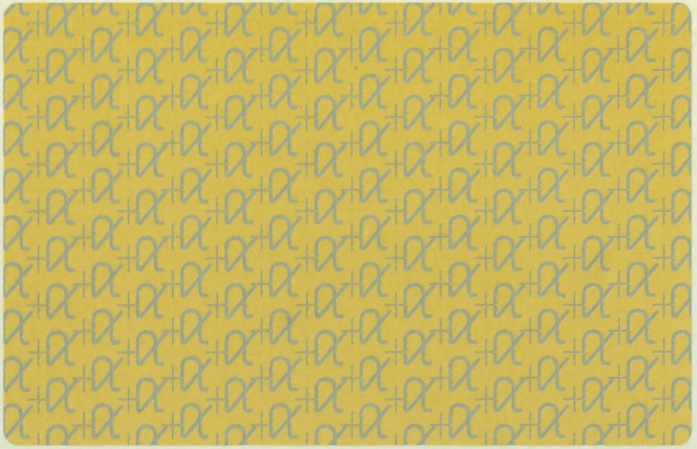
手塚ワールドの神髄ここにあり

講談社+α文庫 Y980

いろんなテーマで、あらゆる視点で。プラスアルファは、次々生まれます。

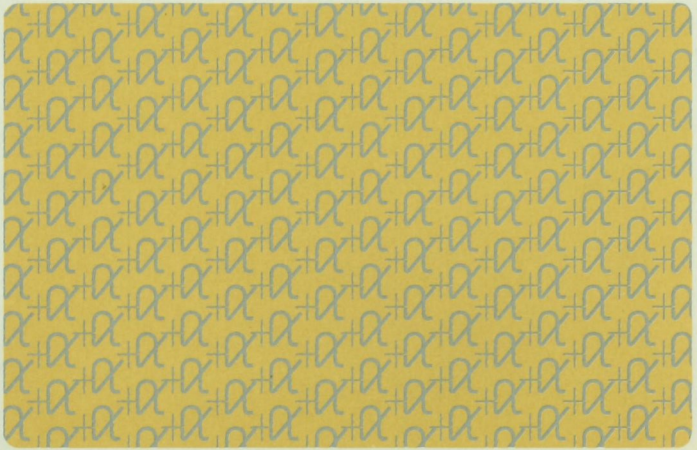
スヌーピーたちのいい人間関係学 | A.J.ツワルスキー=著 笹野洋子=訳
私の「そう・うつ60年」撃退法 | 谷沢永一
社会人心得入門 | 山口 瞳
くらたまのどっちが委員会!? | 倉田真由美
どこでもできる! 1分間疲れ回復法 | 橋口玲子
旅でスケッチしませんか | 永沢まこと
手塚治虫博物館 | 手塚治虫+小林準治
ほとけさまの智恵と慈悲 | ひろ さちや
もったいない | 山口 昭
「トラ番25時」最強阪神タイガース裏事典 | デイリースポーツ=編

手塚治虫博物館
256770-9 (0)



手塚治虫博物館

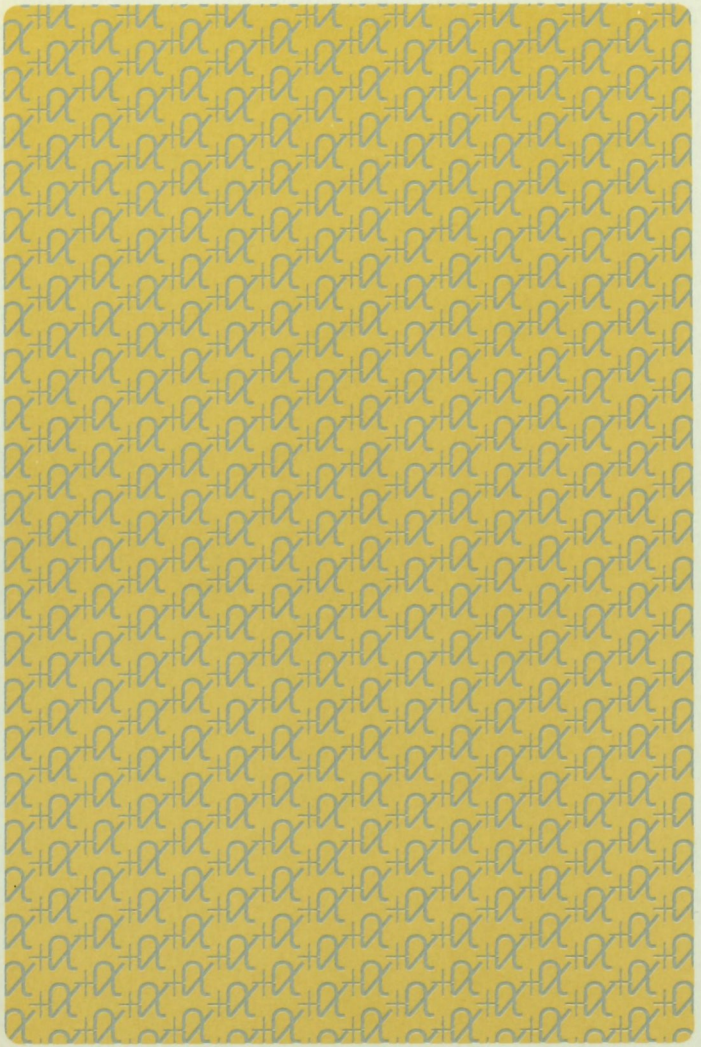
手塚治虫＋小林準治



手塚治虫
小林準治

手塚治虫博物館

講談社α文庫



手塚治虫博物館

手塚治虫＋小林準治

講談社＋α文庫

「手塚治虫博物館」へようこそ

手塚漫画が他の漫画と最も異なる点の一つは、その表現展開の中に博物的要素を驚くほど多く含んでいることだろうと思われる。

ほとんどのジャンルにわたり膨大な数の物語を展開した手塚漫画は、必然的に森羅万象を描いたため、人間ドラマを主としながらも、あらゆる生物や地質、宇宙、天体とその舞台など、物語の伏線は実に多彩だ。特に動物を主人公とした作品には傑作が多く、治虫というペンネームからもわかるように昆虫は無論のこと、樹木や植物へのこだわりも尋常ではない。なによりも博物的テーマが好きでたまらなかったのである。

それは手塚治虫が少年時代から培ってきたもので、地質クラブの仲間と回覧用に描いていた作品などに由来し、ごく自然に身についたもののようである。学校や家庭の環境にも恵まれていたのである。また、あまりにも作品テーマが多かったため、あり

とあらゆるものを描かなくては表現しきれなかったということもあるのだろう。

昆虫については、拙著『手塚治虫昆虫図鑑』（講談社＋α文庫）に記したが、本書では昆虫以外の博物的シーンを選り出し、手塚治虫との思い出、かかわりなどを語りながら解説していった。そして、その結論は、手塚治虫は希有なるストーリーテラーであると同時に、博物的、自然史的な作家でもあったということである。

小林準治

手塚治虫博物館◉目次

「手塚治虫博物館」へようこそ 3
ジャングル大帝的俳句論 荒俣 宏 15

第一章 哺乳類

ネコ 26
ヘケートネコ 28
化けネコ 30
ノラネコ 32
ジャコウネコ 34
オオヤマネコ 36
イリオモテヤマネコ 38
サーベルタイガー 40
トラ 42
ジャガー 44
ヒョウ 46
クロヒョウ 48
ピューマ 50
ライオン 52
チーター 54
ウェコ／レオポン 56
シー・ズー／ビーグル 58
イングリッシュ・ポインター 60
フォックス・テリア 62
グレート・デーン 64
プードル 66
シェパード 68
オオカミ 70
エゾオオカミ 72
タヌキ 74
キツネ 76
キタキツネ 78
イタチ 80
テン／ラッコ 82
カモシカ 84
アカシカ 86
オオヘラジカ 88
レイヨウ 90
ヤギ 92
ロバ 94
ウマ 96
白馬 98
サラブレッド 100
ウシ 102
ブタ 104
イノシシ 106
ヒグマ 108
クロクマ 110
ジャイアントパンダ 112
オカピ／キリン 114
シマウマ 116
カンガルー 118
オオアリクイ 120
ラクダ 122
バイソン 124
カバ 126
バク／サイ 128
ゾウ 130
マンモス 132
メガテリウム 134
グリプトドン 136
ウサギ 138
ミミナガウサギ 140
モグラ 142
リス 144
モモンガ 146
ネズミ 148
ハムスター 150
キタオポッサム 152
コウモリ 154
ニホンザル 156
マンドリル 158
類人猿 160
原人 162

ヒト 164
ミイラ 166
人骨 168
手塚治虫 170
ヒゲクジラ 172
ハクジラ 174
ジュゴン 176
シャチ 178
イルカ 180
アザラシ 182

第二章　両生類・爬虫類（はちゅう）

カエル 186
トカゲ 188
ガラガラヘビ 190
シロヘビ 192
カメ 194

第三章　魚類・甲殻類・貝類

カメレオン 196
ワニ 198
プテラノドン 200
プレシオサウルス 202
ティラノサウルス 204
ゴルゴサウルス 206
ステゴサウルス 208
トリケラトプス 210
ブロントサウルス 212
スギヤマリュウ 214
竜 216
エンゼルフィッシュ 220
コイ 222
アユ／ソウギョ 224
ナマズ 226
ピラニア 228
ピラルク 230
トビウオ 232
サケ 234
シイラ 236
エイ 238
チョウチンアンコウ 240
フクロウナギ 242
シーラカンス 244
ノコギリザメ 246
ホオジロザメ 248
トラザメ 250
イカ／タコ 252
カニ 254
ヤドカリ 256
ウニ 258
ヒトデ 260
オキアミ／ミジンコ 262
アコヤガイ 264
オウムガイ 266
シャコガイ 268

第四章　鳥類

カラス 272
スズメ 274
ハト 276
ツバメ 278
オウム 280
フクロウ 282
トビ 284
タカ 286
ワシ 288
キジ 290
クジャク 292
ニワトリ 294
アヒル 296

カモ 298
カルガモ 300
ハクチョウ 302
カモメ 304
ウミネコ 306
アホウドリ 308
キセキレイ 310
ハクセキレイ 312
ツル 314
フラミンゴ 316
ダチョウ 318
コンゴウインコ 320
ドードー／モア 322
火の鳥 324

第五章　樹木

サクラ 328
ウメ／モモ 330
カキ 332
イチョウ 334
ヤナギ 336
ポプラ 338
クワ 340
サカキ 342
スギ 344
マツ 346
クヌギ 348
クスノキ 350
シラカバ 352
ブナ 354
プラタナス 356
フェニックス 358
ヤシ 360
マングローブ 362
バオバブ 364

第六章　草花・有用作物

キク 368
バラ 370
チューリップ 372
アサガオ 374
コスモス 376
アザミ 378
ツバキ 380
オオマツヨイグサ 382
ハス／スイレン 384
ツタ 386
タケ 388
サボテン 390
カニサボテン 392
ライオンゴロシ 394
ばるぼら草 396
宇宙植物 398
パイナップル 400
サツマイモ 402
ダイコン 404
キャベツ 406
カボチャ 408
ホンダワラ 410
キノコ 412
ヒョウタンツギ 414
ブクツギキュ 416

ボクの会った手塚治虫先生

418

あとがき

426

手塚治虫作品索引

435

手塚治虫博物館

ジャングル大帝的俳句論

荒俣宏

たとえばアンリ・ルソーが動物園に通って写生に励み、ときには図鑑の絵を丸写しにしつつ、あの妖美で素朴な熱帯密林画を描いたと知ったとき、やはりそうだったか、と納得した。ルソーはアフリカや南米の密林を見たことがなかったはずだ、だからこそあれだけ濃密なジャングルの気配が描けたのだ、と思った。

なぜなら、実際の自然は混沌とした無限の世界であり、ときとして幻滅すら味わわせる「したたかな」、捉えがたい存在だからである。この「したたかさ」があればこそ、自然は今日まで繁栄しつづけた。これに対し、わたしたちがイメージする自然は、ほとんどの場合、「物語化された」、理解可能の自然なのである。

自然を物語化するとは、自然を分類し秩序だて、それをイメージとして固定させることである。その担い手こそ博物学なのだ。博物学というものは、まことに因果な営みであって、材料集めは実際のフィールドだが、絵を描いたり分類したり標本を作っ

たりする「まとめの仕事」は、たいてい机上で行われる。鳥や哺乳類は、仮剝製だったり毛皮だけだったりするものを、絵師や剝製師たちはまことしやかに「生きた姿」を再現する。生け捕りにした生きものは、動物園や植物園で飼育され、展示される。そのようにして、いったん自然から分離されてはじめて、わたしたちはジャングルの生物を認識することができるのだ。いきなりアフリカの密林に分け入っても、めざす珍しい動植物をみつけることは容易でない。多くの生きものは擬態や潜伏が巧みで、自然下ではほとんどその姿を発見できない。だいいち、そんなフィールドを無防備でふらついていたら、猛獣の餌食になるのがオチである。

だから、ルソーは熱帯ジャングルを再現するのに、混沌とした実際のフィールドでなく、整理されイメージ化も終わった博物学の中の自然——図鑑や動植物園や標本——に、その材料を探し集めた。

まだ小学一年か二年だった頃、手塚治虫の『ジャングル大帝』を見て興奮したぼくが、おそらく無意識に感じた「熱帯秘境」のおどろおどろしいムード、またそこにうごめく動植物の異様な形態に対する驚異は、ルソーの絵から受ける印象とほぼ同質のものだったにちがいない。いたるところで驚きを味わえるようセットされた自然は、

冒頭に書いたとおり、「物語の自然」だったのである。

手塚治虫もまた、ルソーと同じように「物語の自然」を描くのに秀でた人だった。幼い頃から昆虫採集に熱中した博物学少年であったことが、より一層自然を描く機会を多くしたはずだが、しかし、自然を目で見、体で味わうこと自体は、ダイレクトには「物語の自然」を描くことにつながらないのである。手塚さんは自然それ自体だけでなく、「物語の自然」に対する関心をも持ちあわせていた。ここが大事なのである。

ある漫画家が仮にも「物語の自然」を描ける作家と呼ばれるからには、最低条件として、生物を生物らしく描ける技倆がなければならない。

たとえば、馬。馬を馬らしく描けなければ、時代物や西部物はあきらめたほうがよい。猫や犬も、ちゃんと描こうとすると、かなりむずかしい。鳥にいたっては、写真や図鑑でも手元に置かないかぎり、まともな絵を描き上げることは不可能に近いだろう。

したがって、漫画家は、生物を描く技倆を磨くためにお手本を探すことになるが、おもしろいのはここからである。ふつう、このお手本には生物図鑑や自然写真は選ばれない。だれかが描いた漫画的な生物のイメージが、後進の漫画家にコピーされるの

だ。動物園や植物園へ出向いて、写生から開始する、などということは、まずあり得ない。生きものを生きものらしく描くには、先輩が描いた絵をみつけることが、いちばん肝心な問題となる。ということは、自然や生物を物語化する博物学の先には、すでに物語化されたものをコピーするという、さらに効率的な世界があることを示している。

もちろん、以上の話は漫画だけに限られない。日本画においても西洋画においても、各流派には独自の描き方を教えるコピーテキストが伝わっていた。そこには動植物も含まれ、見習いの絵師たちはテキストをなぞり描きする作業を通じて「生物画」をマスターした。狩野派の鷹の絵、琳派の梅の絵などは、こうして定着し、鷹や梅のイメージを決定することになった。このような作例は、博物学的な自然からさらに一歩先へ踏みだしており、「キャラクター化された自然」とも呼ぶべきものである。

漫画の場合も、まったく同じ事情の下にある。二十世紀にはいり、新聞や雑誌をメディアとする近代漫画が誕生したときから、漫画における狩野派や琳派が次々に成立していった。なかでも日本に甚大な影響を及ぼしたのは、ウオルト・ディズニーの動物キャラクターであった。昭和初期に流行したディズニーの動物キャラクターは、日本においてはポスターや広告チラシ、あるいはマッチラベルに流用され、またたく間に「マンガ的な動物」のイメージを確立してしまった。田河水泡の「のらくろ」でさえ、ディズニー（あるいは盗用され普及した擬似ディズニー）の影響を認めることができる。おそらく手塚治虫の作品に登場するおびただしい数の生物キャラクターも、基本的な霊感源は、実際の動植物ではなく、すでに欧米でイメージ化された動植物画にあったはずである。

ぼくの最初の愛読書は、すでに書いたとおり、手塚治虫の『ジャングル大帝』だったが、同時に、山川惣治の『少年ケニヤ』も大の気に入りだった。何よりもぼくの心をとらえた理由は、どちらも熱帯ジャングルを舞台とし、珍しい生物であふれかえる博物学的な世界を現出していることだったと思うのだ。

手塚も山川も、じつにおどろくべき博物学知識の持ち主だった。今でも思いだすのだが、『ジャングル大帝』には何とオオアリクイが登場し、『少年ケニヤ』にはヒラモンスターらしき毒トカゲが出てきた。どちらも珍しい生態をもつ動物で、博物学的驚異の一例である。

ただし、ここにひとつ、きわめて象徴的な事実が示されている。それは、かれらの

熱帯秘境が「自然」そのものではあり得ず、かといって博物学的な「物語となった自然」でもなく、さらに一歩先にすすんで「キャラクター化された自然」になっていること、とでもいえる現象である。

じつは、オオアリクイも毒トカゲも、中南米にすむ動物であって、アフリカやアジアには分布していない。博物学的には間違った設定といえるのだ。だのに、『少年ケニヤ』も『ジャングル大帝』も、その自由な設定のおかげで物語がより一層多彩になっている。アフリカに中南米の動物がいても、一向に差し支えないのである。なぜなら、それは物語の中のアフリカを彩るキャラクターとして、違和感なく読者に受けいれられるだけの「異質さ（エキゾティシズム）」を具（そな）えているからである。つまり、アフリカという地名も、オオアリクイという動物名も、ともに「秘境の自然」という抽象的なイメージをつくりあげる素材同士なのである。

これは俳句でいえば「季語」、美術でいえば「画題」に当たる、ともいえる。季語は、季節感を出すために用いられる語だが、旧暦から新暦に変わり、さらに気候も大変動した現代にあっては、かならずしも実際の季節感と一致しているわけではない。アサガオやスイカは、どう考えても「夏」を連想させるが、季語として用いると秋に

属する。句の中では秋のシンボルなのである。一方、現実のアサガオやスイカは夏に目に付くし、さらによく眺めてみると、特殊な温室栽培などにより、それらはほぼ一年中見かけることができる。

同じことは画題にもいえる。「梅にウグイス」や「松に巣をかけるツル」は、よく見かける日本画である。どちらも絵の世界としてはまことにナチュラルである。しかし現実の話として、梅の季節にウグイスをみつけるのはたいへんだし、ツルにいたっては松の木に巣をかけることなどあり得ない。

このように見てきたとき、手塚漫画の中で出会う動植物たちの楽しみ方は二倍にふくれあがる。というのも、手塚治虫は以上に触れたような「キャラクター化された自然」を、ほんとうに俳句の季語のように、じつに巧みに、じつに幅ひろく活用しているからである。

たとえば二二一ページに掲載された熱帯魚の例では、『火の鳥―太陽編』にサンゴとチョウチョウウオ、そして大きな、黒地に白い縞（しま）のある美魚フレンチエンゼルが描かれている。また『海の姉弟（きょうだい）』では上の駒にハゼらしき魚、下にニシキヤッコというキンチャクダイの仲間が描かれている。

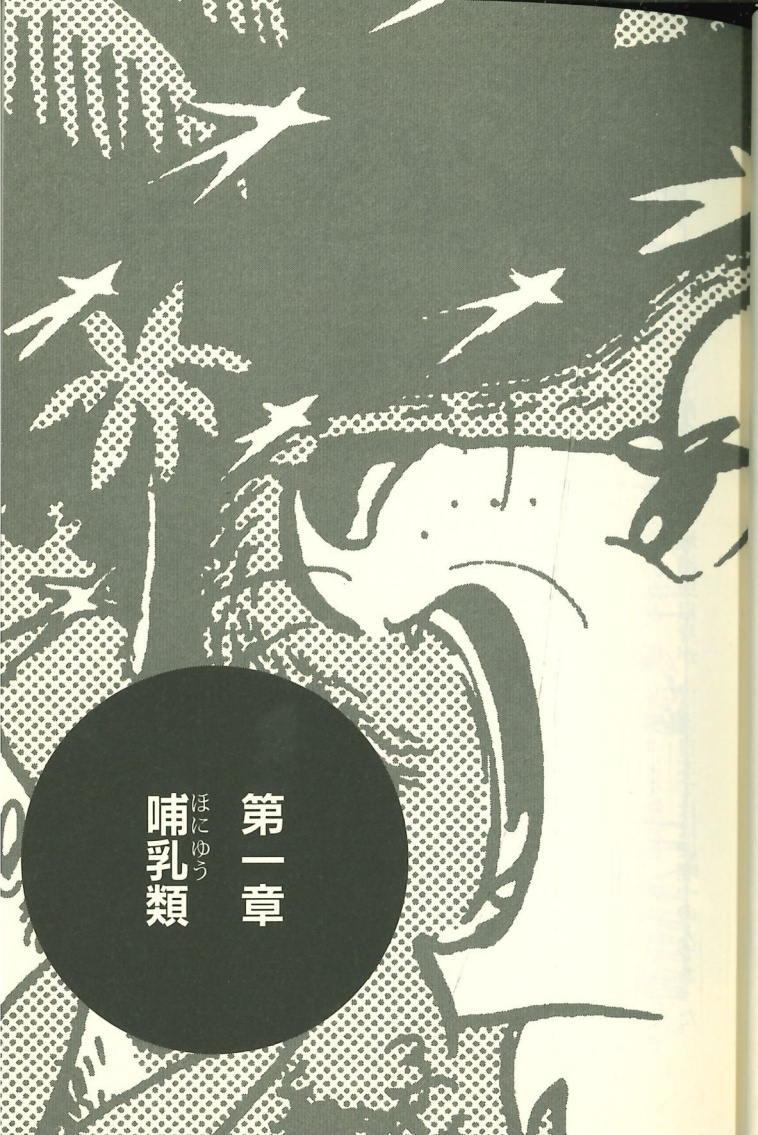
これらの魚はどれも、「熱帯の海」をあらわす季語、あるいはキャラクターとして使われている。もしもこれを博物学的に使用したのだとすれば、『火の鳥―太陽編』はカリブ海、『海の姉弟』は太平洋かインド洋を描いていることになる。なぜなら、フレンチエンゼルはカリブ海にすむ魚であり、ニシキヤッコは太平洋とインド洋にいる魚だからである。

けれども、手塚治虫はそのようなことを主張するためにフレンチエンゼルやニシキヤッコを描いたのではないだろう。どちらも「熱帯の海」にふさわしい季語として、平等に選びだしたものだと思う。

ぼくはさっき、手塚作品に出てくる動植物には二倍の楽しみがある、と書いた。ベースは、右に記したように、季語の使い方をめぐる楽しみだが、この楽しみを二倍にしてくれる別の要素が、手塚作品だけに存在する。それは、こういうことである――手塚が使用し、アレンジした動植物のイメージが、やがてそれ自身で独立し、新しい漫画の季語、漫画のキャラクターとなって、後進の人々に引き継がれていった。いわば「手塚派の絵手本」が形成されていった、そのプロセスなのである。

手塚得意のウサギやブタは、ぼく自身もノートに描き写したことがある。ちょうど習字の手本のように手元に置いて、あの愛らしい描きっぷりを模倣したものだった。そして発見したのだが、手塚の動植物キャラクターは、他のどんな漫画家のそれよりも描きやすく、また憶えやすかった。真似のしやすい絵。それはつまり、手塚治虫の産みだしたキャラクターが、すでにしてみごとな「漫画上の季語」になり得ていたからである。

今回、この膨大な博物漫画を一覧して、つくづくと感じたのは、そのような事実であった。本書は手塚治虫による生物歳時記である。



第一章 哺乳類（ほにゅう）

本書は、左ページに手塚治虫の七〇〇作品からあらゆる博物に関する名場面を種別にセレクトし、右ページに小林準治による解説、イラストを付け加えて構成されています。
また、手塚作品の中の文字の表記については、『手塚治虫漫画全集』に基づいています。

ネコ

実際のアニメートでは、それぞれの間にもう少しポーズがあり、4のクロネコが驚いて逃げていくデフォルメにつながる奇想天外な動きである。

これは『ミッドナイト』に描かれた、大変動きを感じさせるネコである。まさにアニメーション的である。手塚治虫はアニメの中で、ネコなどの柔らかい動きの原画を自ら好んで描き、そのアクションは生き生きとした独特のものであった。

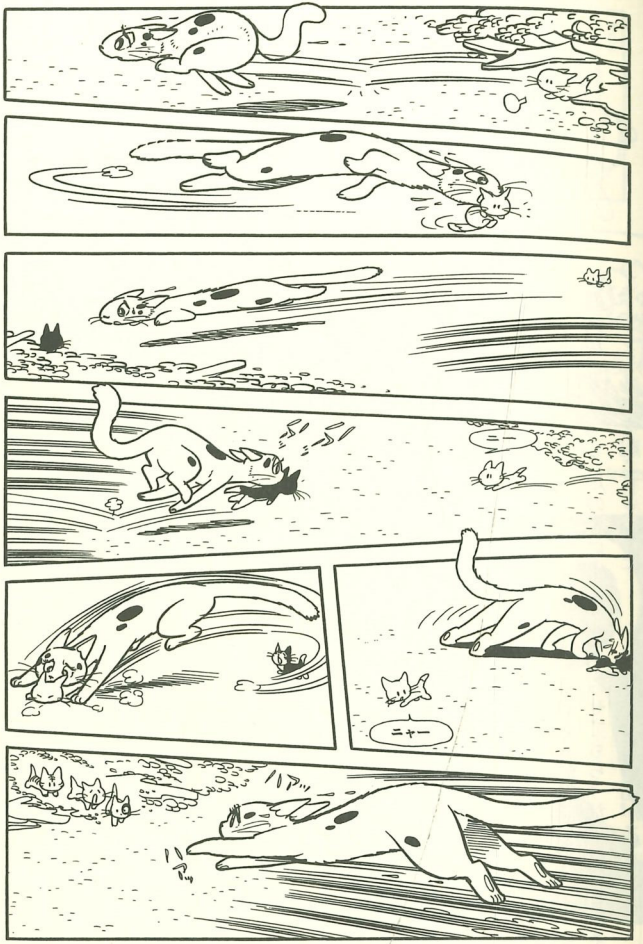
テレビスペシャルアニメの中の『ブレーメン4（フォー）』では女の子がネコに変身するところを、同じくスペシャルアニメ『大自然の魔獣　バギ』では子猫の可愛い動きを描いたが、特に私が素晴らしいと思ったのは、実験アニメーション『ジャンピング』の中のワンカットである。

これは視点がどんどん変化する、全編背景動画ともいうべきもので、ほとんどは私が描いたものだが、ほんの一部分だけ、手塚治虫自身が「ここは私がやります」と言って描いたところがある。灯台の下にいた黒猫が驚いて跳び上がり、空を駆けるように空回りして逃げていくという、二秒ほどのシーンであった。

力学的には必ずしも正しくない連続画が十数枚描かれていた。これできちんと動くのだろうかと危惧したほどだが、フィルムになったものを見たら、すごく感じが出ているではないか。理屈ではない感性の効果というか、並のアニメーターにはとても表現できない動きなのである。

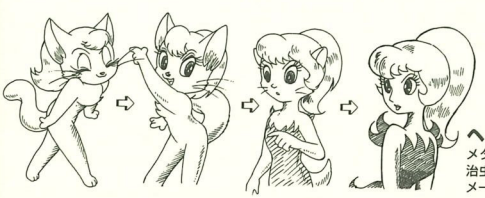
「僕はね、感じを出すアニメーションには、ちょっと自信があるんだ」

そう言っていたのを思い出すが、手塚治虫は漫画家の中で、アニメーションを勉強し、アニメートができる日本ではほぼ唯一の人であった。



●『ミッドナイト』
動きのあるアクティブな線でネコが描かれている。

ヘケートネコ



ヘケートの変身
メタモルフォーゼは手塚治虫が好んで使ったアニメーションの手法である。

『グッちゃんとパイコさん』は手塚治虫の初期の四コマ漫画で、その簡略化された線は、すでにタダモノではない洗練されたものを感ずる。

尊敬していた先輩漫画家の横山隆一の影響もかすかに感じられるが、そのオチは、後の長編漫画に通じる手塚治虫の世界である。

当時、手塚家ではネコを飼っていたらしく、次のような文が残されている。

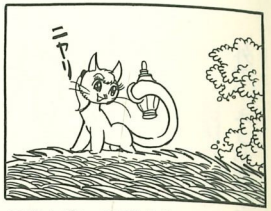
「『来るべき世界』を描いていたときのこと、描き文字を間違えて、ホワイトの絵の具で修正し、原稿を広げて縁側で乾かしていました。それを飼い猫のムックがドタドタと踏みつけてしまい、生乾きのホワイトの絵の具がビターッと足の裏について、カンシャクを起こしました」

大慌ての手塚青年の姿が目に浮かぶようではないか。

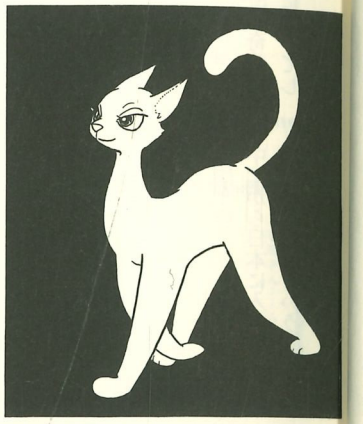
『リボンの騎士』の中のヘケートがネコに変身するシーンは、とても可愛くて色っぽい。一九六七年にテレビアニメーション化されたとき、この変身シーンは当時としてはかなり凝ったものとして評判になった。単に変身するだけでなく、ネコになってからヘケートらしさをより強調するために、ショーダンサーのような踊りをつけたのだ。手塚治虫にとって、アニメーションにおける変身シーンは、非常に重要な要素の一つであった。

新人アニメーターだった私は先輩に頼み込んで、このシーンの動画をやらせてもらった。ヘケートネコにはそんな思い出がある。

●『グッちゃんとパイコさん』
新聞連載の初期の4コマ漫画。
マンガチックで、のどかなグラフィックである。

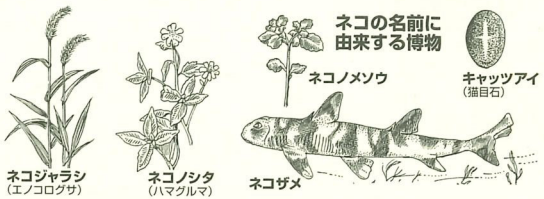


●『リボンの騎士』
可愛くてセクシーなヘケートが化けたネコ。



●『緑の猫』
SFの中に出てきたネコ。

化けネコ



カール・サンドバーグの詩「霧」の中に次のようなくだりがある。

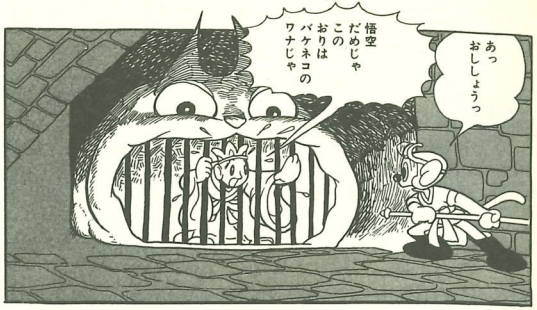
「霧がくる　小さな猫の足つきで
静かに腰をおろして　港と街を　ながめわたしている　それから動いていく」

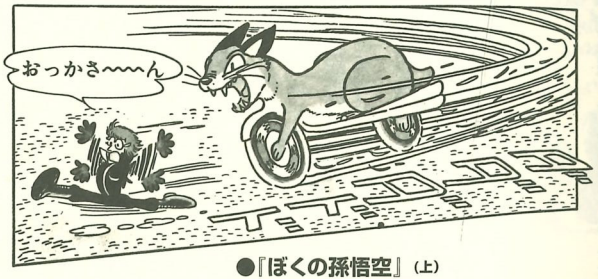
幻想的かつ、ネコのような霧のメタモルフォーゼが感じられる。ネコは怪談の中だけではなく、変身のイメージを内外の人が想念しているようである。

『マンションOBA』は、変身漫画の傑作でもある。住民がみな、いろいろな動物や植物なのである。OLの有馬さんというのは、怪談と結びつけられたネーミングであるが……『ぼくの孫悟空』や『二人のショーグン』のネコとなると、もう奇想天外で、ネコが檻や乗り物になってしまっている。偶然ではあろうが、この二つを組み合わせると、近年評判になった「となりのトトロ」のネコバスによく似ている。もちろん、これらはトトロよりずっと前に描かれたものである。

変身とは異なるが、ネコのイメージからつけられた植物や鉱物の名前、故事ことわざは大変多く、他の動物の追随を許さない。ちょっと考えただけでも、ネコジャラシにネコノシタ、ネコノメソウやキャッツアイ(猫目石)、猫に小判、ネコバンバと、よい意味でも悪い意味でも数多い。

このように人々に愛されたネコの人間とのつきあいは約五〇〇〇年、中国から日本に入ってきて約一一〇〇年にもなるという。





●『ぼくの孫悟空』(上)
●『二人のショーグン』(下)
これらの作品からは「となりのトトロ」のネコバスが連想される。

●『マンションOBA』
ネコは化けるというイメージからの描写である。

ノラネコ

ベルシャネコのクロネコ
アフガニスタンのベルシャとトルコのアンゴラをもとにつくられた。

バーミーズ種
シャムとビルマを交配してつくられた。ビルマネコともいう。

手塚漫画には、イヌと並んでネコの出てくるものが実に多い。ここに紹介できなかったものもたくさんある。その中で特に印象的なものといえば、『おけさのひょう六』や『ブラック・ジャック―ネコと庄造と』などである。

「ネコと庄造と」は、もちろん谷崎潤一郎の名作『猫と庄造と二人のおんな』のパロディで、オリジナルから離れた手塚流味付けがなされているドラマだ。このように手塚作品には、有名な文学や戯曲などのタイトルを参考に、独自のストーリーを組み立てるというものが少なからずあり、それらを比較して楽しむのも、ファンにとって面白いことであったりする。

古今東西、ネコをテーマとした作品は数えるのも大変なほどあり、名作も多い。

夏目漱石『吾輩は猫である』、宮沢賢治『注文の多い料理店』、エドガー・アラン・ポー『黒猫』、ガブリエル・コレット『牝猫』等々…。怪談では『鍋島の化猫』というものがあり、手塚治虫自身もSF的怪談、今日の国際問題も孕んだ『猫の血』という青年コミックを描いている。

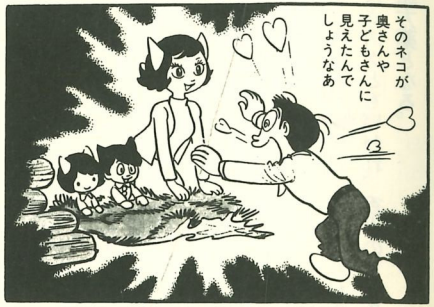
音楽家にもネコに興味を持った人が多く、ドメーニコ・スカルラッティのピアノソナタ「猫のフーガ」や、今世紀に入って作曲されたリロイ・アンダーソンの「ワルツィング・キャット」は大変有名である。

ネコはそれほどヒトにとって、魅惑的な生き物であるといえよう。

●『よろめき動物記―猫』
手塚治虫は、このようなモチーフのネコを晩年にもカラーで描いている。

●『おけさのひょう六』
手塚民話の代表的な作品である。

●『ブラック・ジャック―ネコと庄造と』
谷崎潤一郎の作品のパロディ。



ジャコウネコ

ジェネット
南ヨーロッパからアフリカにかけて生息するジャコウネコ科の美しい小獣。

ジャコウネコ
灰褐色で黒い斑点が縦に並ぶ。全長50センチ。

手塚治虫はジャコウネコという、いってみればスター的でない動物、ふだんはなかなか思いつかないような脇役をたびたび出演させた。

長編の名作の一つである『ブッダ』、児童ものの『ハヌマンの冒険』、そして少年ものの佳作『成功のあまきかおり』と、それぞれジャンルの異なる作品に、このジャコウネコが顔を出している。これらは、動物に詳しい手塚治虫の真骨頂ともいうべきものだろう。

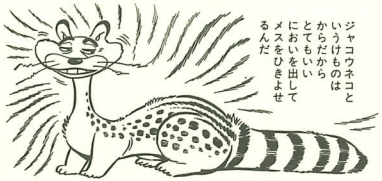
食肉目ジャコウネコ科に属するが、マングース類ときわめて近縁なものと考えられ、ときに一つの科として扱われる。

アフリカジャコウネコ、コジャコウネコ、近縁にジェネット、リンサンなどがおり、日本にも分布しているハクビシンもジャコウネコ科である。

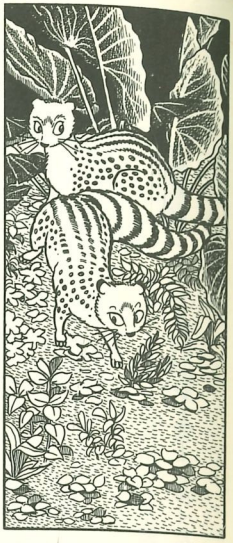
ジャコウネコは原始的なネコに似ており、多くの種は会陰部に臭腺を持ち、ジャコウ臭を発する。そのことが手塚漫画にも記されているが、敵に出会うと、このジャコウ臭が、うんと濃い分泌液となり悪臭となる。

ジャコウの匂いはジャコウジカ、ジャコウシ、ジャコウネズミや昆虫のジャコウアゲハにもある。このように、まったく違う生物に同じような香りがあるというのも不思議なことである。

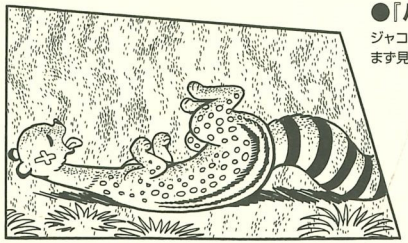
ジャコウは漢字では「麝香」と書く。特にジャコウジカのオスのものはムスクともいわれ、香水のもとや漢方薬となる。



●『成功のあまきかおり』
マンガチックなデフォルメ。

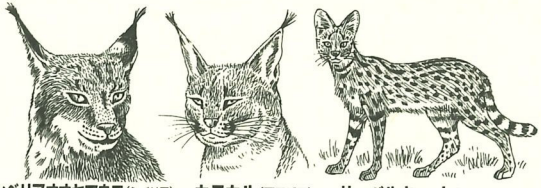


●『ブッダ』
ジャコウネコは、ミアキスというネコと同一の祖先から進化した。



●『ハヌマンの冒険』
ジャコウネコなどは手塚漫画以外では、まず見ることのできない動物だろう。

オオヤマネコ



シベリアオオヤマネコ（シベリア）　カラカル（西アジア）　サーベルキャット（アフリカ）

『ミッドナイト』という作品は、『ブラック・ジャック』と同じように読み切りの形式をとっているが、作品タイトルがついていない。「ACT.1」「ACT.2」というように連載された。

これは、オオヤマネコのエピソードである。ミッドナイトの行きつけの深夜ラーメン屋に、事故で一本の足を失くしたオオヤマネコが居着く話だ。このオオヤマネコは、おそらくペットが逃げ出したものだろう。

オオヤマネコの仲間は日本には存在せず、スペインオオヤマネコ、ユーラシアオオヤマネコ、カナダオオヤマネコなどの亜種がある。その名のとおり、ヤマネコとしては大型で、なかなか風格のある種だ。

長い四肢、雪上を歩くための雪靴をはいたような大きな足、耳先の長い毛などがオオヤマネコの外見を特徴づけている。耳先の長い毛は四〜五センチにもなり、アンテナの役目を果たしている。そのため、聴覚はヒトやイヌよりはるかに優れ、五キロメートル離れたところで鳴らした警官の笛の音に反応を示したという記録もある。ヒトは、その半分くらいの距離にしか反応できないのだから、たいした聴覚である。ところが、この耳先の長毛を切ってしまうと、聴力はかなり落ちてしまうことが確かめられている。

横浜市の野毛山動物園で、私がカナダオオヤマネコにカメラを向けたら、飛びかかってくる動作をし、咆哮した。相手は檻の中とはいえ、恐怖を感じたものである。

●『ミッドナイト』
ヤマネコは世界的に減少の傾向にあり、日本のツシマヤマネコ、イリオモテヤマネコも例外ではない。

イリオモテヤマネコ

イリオモテヤマネコ

手塚漫画の中のイリオモテヤマネコは少数ではあるが、なかなか印象的である。漫画とはいえ、この特殊なヤマネコを描く人はめったにいない。手塚治虫という人は、とにかくあらゆる動物、生物を作品に投影させた希有の作家でもあった。

イリオモテヤマネコがなぜ特殊なのかというと、今までに知られている世界中のどのヤマネコとも、形態や行動が同じではないからである。たとえば鳥を捕って食べるとき、普通のヤマネコは口と前足を使って羽むしりをするが、イリオモテヤマネコはまったく羽むしりせず、羽毛ごと食べてしまうのである。

ちなみにイリオモテヤマネコは、比較的最近（一九六五年）、作家の戸川幸夫氏によって発見されたものである。

一九九〇年、私は沖縄の西表島に行った。そこで島民に聞くと、結構イリオモテヤマネコに会ったことのある人が多いのだ。しかし、彼らはどうも、森に棲むノラネコと混同していることもあるようだった。村の小学校には剝製があり、私も見せてもらったのだが、たしかに野生の顔つきをしていた。西表島では、別名〝ヤマピカリャー〟とも呼ばれる。

かつて西表島に行った手塚治虫もイリオモテヤマネコを見たかもしれないが、そのことについては聞きそびれた。

イリオモテヤマネコの現在の生息数は、推定四〇〜一〇〇頭で、湿地帯の開発、原生林の伐採などによる影響が大変心配されている。

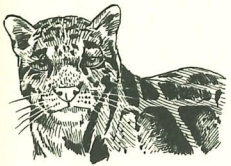
●『タイガーランド』

ほんの脇役にイリオモテヤマネコが出演している。

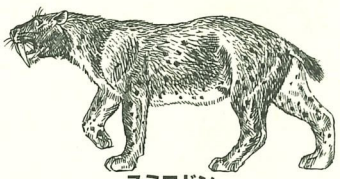
●『ブラック・ジャック―オペの順番』

〝ヒョウタンツギ〟がイリオモテヤマネコに襲われている。

サーベルタイガー



ウンピョウ
スミロドンと共通性の多いヒョウである。



スミロドン
剣歯虎ともいう。更新世に存在した。

『火の鳥―未来編』や『鉄腕アトム―アトム還る』には、剣歯虎といわれるネコ科の猛獣が出演している。これは、サーベルタイガー、学名ではスミロドンといわれる現世のライオンくらいの大きさのネコであった。ロサンゼルスで発掘された化石によると、二〇センチもの長い牙を持ち、更新世末期にあたる八〇〇〇年前頃まで生存していたと考えられている。

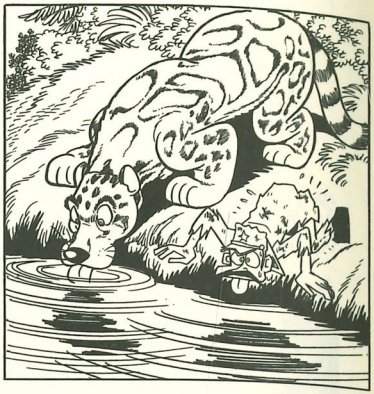
一九六五年に製作された『ジャングル大帝』のアニメーションの中でも、サーベルタイガーが出演しており、レオを苦しめるのであった。

『大将軍森へ行く』のウンピョウは、私の調べたところ、手塚作品への出演はこれ一度のみである。ウンピョウは、この種だけで一属をつくっており、異常に長く鋭い牙を持ったネコで、剣歯虎の末裔ではないかという説もある。

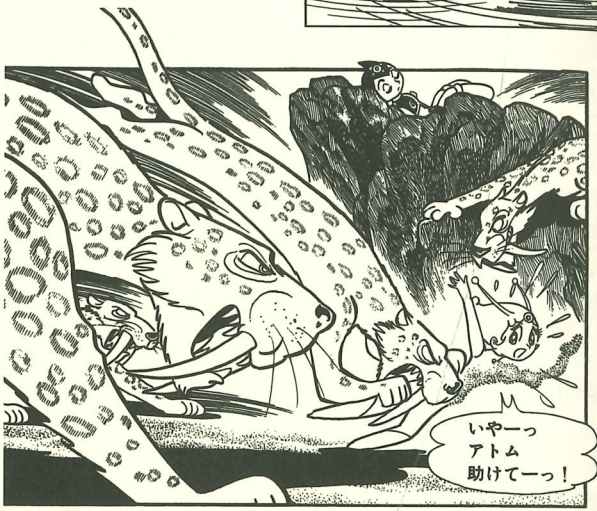
将軍と並んで水を飲んでいるウンピョウの姿を見ると、ライオンほどの大きさであるが、これは漫画独特のデフォルメであって、実際は頭胴長一メートル、体重二四キロを超えることのない中型の存在である。樹上生活に適応したネコといわれ、ネパール、中国南部、スマトラ島、ボルネオ島などに産する非常に珍しい種で、日本の動物園でも数少ない。

私はかつて、ネコ属の写真を撮ることに凝り、名古屋市の東山動物園にウンピョウを訪ねたことがあった。ネコ属に関しては、日本では東山動物園が一番力を入れており、その種類も多い。

●『火の鳥―未来編』
これはヒョウやライオンの先祖ともいえる。



●『大将軍森へ行く』
将軍と並んで水を飲むウンピョウ。



●『鉄腕アトム―アトム還る』
剣歯虎といわれるスミロドンが出演している。

トラ

スマトラトラ

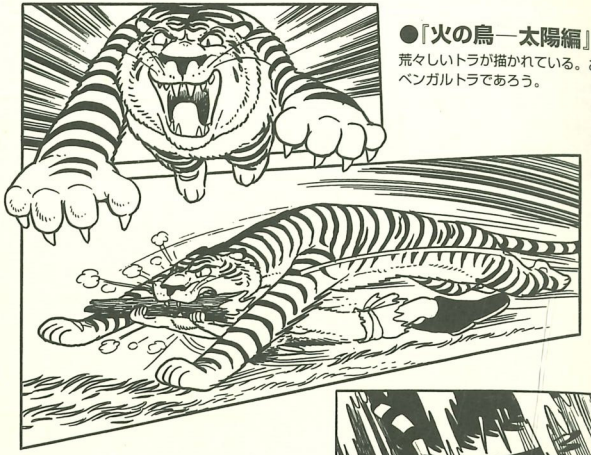
手塚治虫は、『タイガーランド』でトラの親子の情愛を、『勇者ダン』でトラと少年の友情を描き、『火の鳥―太陽編』や『地球大戦』ではトラを脇役として描いている。

トラはネコ科の中では、ライオンと並んで最大かつ最強の猛獣であるが、手塚漫画の中では、人間への驚愕と恐れと愛情、憧憬を合わせ持った存在として描かれている。あまり知られていないが、『勇者ダン』のダンは、名作『ジャングル大帝』のパンジャとレオを合わせたような性格で、唯一のトラのヒーローであろう。私にいわせれば、レオより数段格好よく見える。

しかしながら、トラを主役とした作品は、文学作品などでもきわめて少なく、わずかにH・A・バイコフの『偉大なる王』が有名な程度である。これは名作ではあるが、バイコフは帝政ロシアの歩兵大佐で科学者だったので、事実と自らの経験以外のことはいっさい書かなかったということで、文学的香りを弱くしているともいわれている。しかし、トラの一生と神々しいまでの大自然が謳いあげられている。

映像作品で印象的だったトラには、トラが原野の神のように扱われる黒澤明監督の「デルス・ウザーラ」のアムールトラがある。

トラは動物界の王座を占めるが、現在絶滅の危機に瀕しており、国際自然保護連合（IUCN）のレッドデータブックでは〝E〟ランク（絶滅危惧種）に指定されているほどだ。

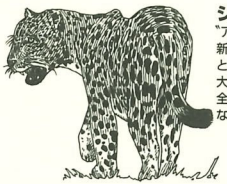


●『火の鳥―太陽編』
荒々しいトラが描かれている。これはベンガルトラであろう。

●『タイガーランド』
これは子供のトラである。

●『勇者ダン』
トラが主役の唯一の作品。

ジャガー



ジャガー
"アメリカのトラ"といわれるように、新大陸で最大のネコ類である。ときにワニやバクなどの大型動物も餌にする。全長2.6メートル、体重120キロになるものもいる。

『大地の顔役バギ』は、動物の漫画をたくさん描いた手塚治虫にしても珍しい、ジャガーが主役の物語である。ジャガーは大型ネコの中で、ライオン、トラに次ぐ重量級で、新大陸では最大のネコである。繁殖地が南米のせいか、日本では人気はイマイチ、それほどの脚光を浴びたことはないようだ。

斑紋（はんもん）がバラの花のようでヒョウに似ているが、ヒョウよりずっとがっしりとしていて、とても優美なプロポーションとはいえない。大きな頭に太い胴、足もヒョウより短い。しかし、そのことが強力なアゴの力を生かすのに有利に働き、南米の動物界の王者たらしめているのだ。

『大地の顔役バギ』では、ジャガーの母親が人間に殺され、子供のバギが人間に復讐（ふくしゅう）する。森林の伐採、毛皮の獲得のために、ジャガーは人間に殺されてきた。人間の利益に反逆する動物は、すべて人間にとって害獣となる。この作品はジャガーの側からの視点で描かれており、「ニンゲン……ニクイ……」とバギはつぶやく。バギにとっては人間こそが、理不尽（りふじん）な存在なのである。ジャガーにかわって、「利益だけのための自然開発は、いいかげんにやめたらどうなのだ」という手塚治虫の心情が伝わってくるようだ。ジャガーに限らず、動物の数が減少してきている原因の大半は、人間にあるのだ。

ジャガーは一九七〇年代から国際的に保護されるようになり、国際自然保護連合でも絶滅の危機にある動物に指定している。

●『大地の顔役バギ』
1940～1960年代にかけて、アメリカだけで7238頭分のジャガーの毛皮が輸入されたという。その数は現在も減り続けている。インディオはジャガーを「ヤグァラ」と呼び、崇拝していたという。ジャガーは中南米の動物の王者なのであるが……。

ヒョウ

『ジャングル大帝』は、一九五〇年に学童社から刊行されていた雑誌「漫画少年」に連載されたものが基本ストーリーとなっている。

いろいろな出版社で何回も単行本化されたが、それぞれ少しずつストーリーが違う。それは細かい改訂や追加という場合もあったが、真四角な原版を新書判にしたりB5判にしたりという、出版社からの要請が主な理由であった。

たとえば判型が小さくなると、文字が読めないくらい小さくなったり、文字数が多くなりすぎたりということもあり、そのつど、ネームを変えたものだという。

全集の「あとがき」では、手塚治虫はこんなことも言っている。

「『ジャングル大帝』は、今までに六回も本になっています。そのたびにストーリーが変わるので、どの本の筋書きが一番まともなのか、本人の僕にもわかりません」

また、基本ストーリーの『ジャングル大帝』とは別に、幼年向きの『レオちゃん』や、学年誌用に新たに描き下ろした作品もあって、いくつものバージョンがあるのだ。ここに挙げたルバーという老ヒョウの出てくるものは、小学三年生版の『ジャングル大帝』である。

「なによりも、僕は動物ものを描くのが大好きなのです」

そう言っていたように、手塚治虫はその作品に、あらゆる種の動物を出演させたのだ。動物や植物、昆虫など、博物的なものがいっさい登場しない作品は珍しいほどである。

●『ジャングル大帝―小学三年生版』
レオと議論をする老ヒョウのルバー。

クロヒョウ

クロヒョウ
ヒョウの黒化型のもので、ヒョウとまったく同じ種である。コーヒー色や濃茶色のものもいるが、アフリカには少ない。

『ジャングル大帝』『ぼくの孫悟空』『ミューズとドン』……みなヒョウが描かれているが、キャラクターも個性も、それぞれ極端に違うのがよくわかる絵である。ワルの三枚目、優しい母、妖美で神秘的な女と、描き分けられている。

ヒョウはトラやライオンに比べれば小型であるが、その恐ろしさにおいては、たいして変わりはない。トラやライオンなど大型ネコ属が少しずつ減少しているのに対して、ヒョウは生活力が旺盛で、分布域が最も広い。中国から東南アジア、アフリカにかけて繁殖している。だが、まだたくさんいるとはいえ、少しずつ減りつつあるのが現状のようだ。

『ぼくの孫悟空』のヒョウはキタシナヒョウという亜種で、普通のヒョウより大きく、毛が長いものと推測される。このヒョウが生息する中国北部はヒョウの分布の最北端にあたり、〝同種でも緯度が高くなるほど大型化する〟という「ベルクマンの規則」にのっとっている。

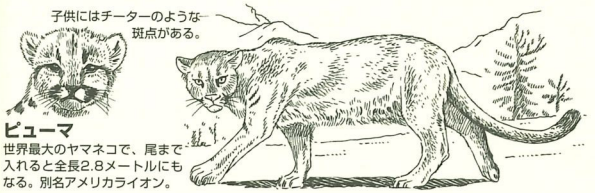
『ジャングル大帝』にも出てくるクロヒョウは、ヒョウとは別種だと思っている人もいるが、普通のヒョウとまったく同じものだ。ごく暗い褐色、及び茶色の毛を持っているというだけにすぎず、東南アジアに多く見られ、アフリカでは稀（まれ）だという。一腹の兄弟に普通のヒョウとクロヒョウが混じって産まれることもあるが、その理由はわかっていない。また、薄いチョコレート色などの中間色のものもあり、これは〝ブラックパンサー〟と呼ばれている。

●『ジャングル大帝―小学三年生版』
ヒョウは恐ろしい動物だが、黒化型のクロヒョウは三枚目役が多い。

●『ぼくの孫悟空』
これは母親ヒョウである。

●『ミューズとドン』
ネコ科の動物は実際には首は長くないが、ここでは、いくらか擬人化したデフォルメが採り入れられている。

ピューマ



ピューマ
世界最大のヤマネコで、尾まで入れると全長2.8メートルにもなる。別名アメリカライオン。

現世のネコ類を大きく分けると、ネコ亜科、チーター亜科、ヒョウ亜科の三つになる。

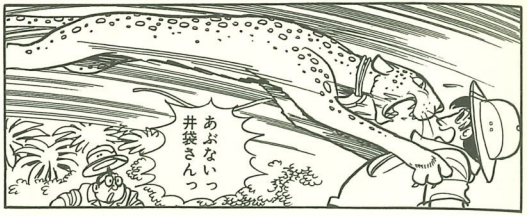
イエネコやヤマネコはネコ亜科、チーターは一種のみでチーター亜科を形成し、残りのトラやライオンなどの大型種はヒョウ亜科に分類されている。

ところが一つだけ例外があり、ピューマはウンピョウやユキヒョウなどの大型種より大きいのに、ヒョウ亜科ではなく、ネコ亜科に属しているのだ。つまり、大きなヤマネコなのである。大きなピューマは全長二八〇センチ、体重一〇〇キロを超すというから、南米の動物界の王者・ジャガー並みである。

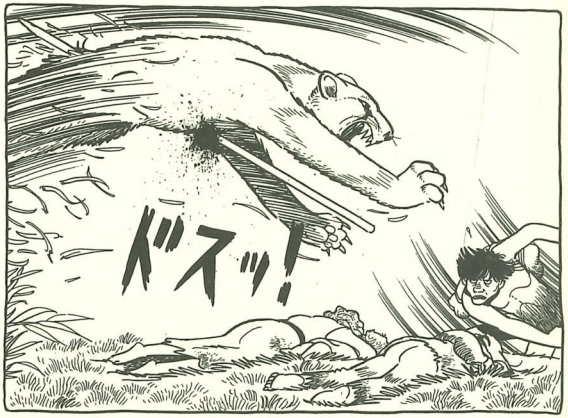
ヒョウ亜科の特徴の一つは咆哮（ほうこう）であるが、ピューマは舌骨の仕組みが小型ネコと同じようになっており、咆哮ができない。また爪の構造などからも、大きなヤマネコだということができる。母親は子供に岩山登りなどを教えるとき、ネコのように「ニャーゴ」と優しく鳴く。『グリンゴ』の中のピューマは人を襲っているが、人を殺した確かな実例は数えるほどだという。

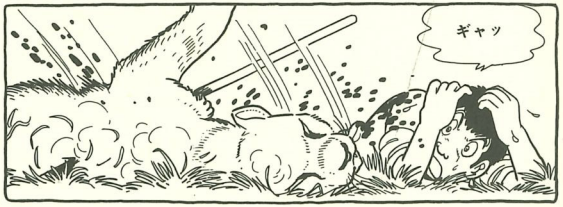
別名はクーガー、アメリカライオン、マウンテンライオン、カタマウント。私が上野動物園で見た印象では、小型のメスだと、やはり猛獣というよりは大きなネコという感じで、可愛く感じられた。

『虎人境（こじんきょう）』のベンガルヤマネコは、他のヤマネコの項には入らず、ピューマの仲間ということで、ここに登場してもらった。



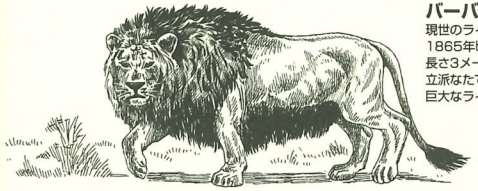
●『虎人境』
これはベンガルヤマネコである。





●『グリンゴ』
手塚漫画に唯一出演しているピューマ。スペシャルアニメ『大自然の魔獣 バギ』にもピューマの出演がある。

ライオン



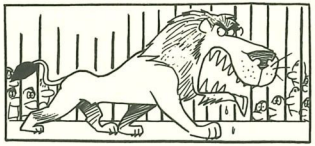
バーバリライオン
現世のライオンの亜種で、1865年頃に絶滅した。長さ3メートルを超すほどの立派なたてがみを持つ巨大なライオンであった。

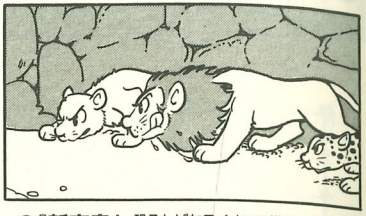
『ジャングル大帝』は手塚治虫の全作品の中で最もよく知られた代表作の一つである。一九六五年、一九六六年、一九八九年の三度のテレビアニメ化、一九九〇年の『交響詩ジャングル大帝』のビデオ・LD化、一九九七年の劇場アニメ化、二〇〇二年のアニメ「森の伝説」の解説バージョンにおけるレオ、そして二〇〇三年のプラネタリウム用番組「ジャングル大帝レオ――空を染める謎の星」と、七度も映像化されている。

主人公・レオの一族は大昔から体色が真っ白で、これが一大特徴として物語は進むが、白化個体はアルビノ（白子）といわれ、一般に弱い個体とされている。しかし、レオ一族は代々知恵と勇気があり、力も抜群のスーパーライオンなのである。

白い個体は実際にときどき生まれ、世界的なニュースにもなるが、手塚治虫が発想したのは、ほんの偶然の出来事からであった。手塚治虫は戦後すぐ、動物ものの絵本の仕事を受けたことがあったらしい。見本にライオンの親子を描いたところ、夜、暗い電灯の下で描いたものだから、黄色の絵の具を塗り忘れて、白いライオンができてしまったという。この絵は、結局ボツになってしまったが、後に『ジャングル大帝』を描くときに、そのアイディアが生かされたのであった。

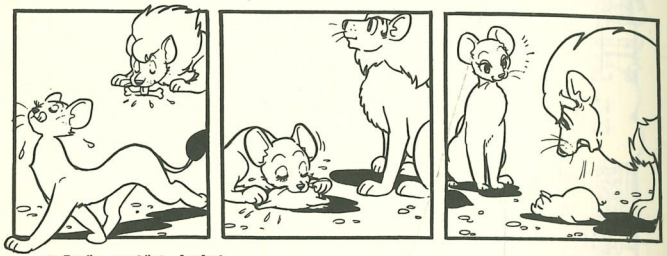
ライオンは一〇〇年ほど前まではケープライオン、バーバリライオンなどの亜種がいて、『ジャングル大帝』にはそういった種も出てきたりして、博物性も十分だった。





●『よろめき動物記―ライオン』
大人もののタッチで、線を省略した描き方である。

●『新宝島』 恐ろしげなライオンの描写である。



●『ジャングル大帝』
幸せだった頃のバンジャとラーガ。このシーンにはセリフがないが、誰が見ても意味がわかる。「漫画は世界の言葉になり得る」という一例である。

チーター

チーター
陸上動物で最高のスピード、時速112キロメートルを誇る。

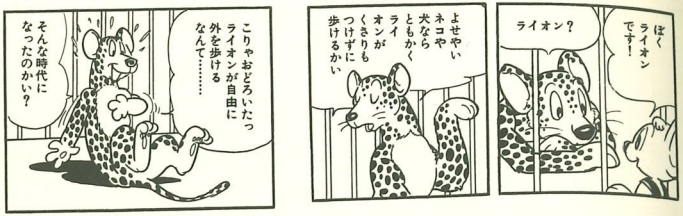
チーターはネコ属の中で最も風変わりな動物で、〝チーター亜科〟を一種だけで形成するだけの価値がある。

外見はヒョウに似ているが、ずっとスマートで、四肢が長くて肩高も高い。体長が一・四メートル、尾長が七五センチと、かなり大きいが、体重は五〇～六五キログラムと軽く、顎の力はヒョウやジャガーよりずっと弱い。また、ネコの仲間で唯一、爪が隠れない。顎の力が弱いということは、ライオンやヒョウよりずっと弱い立場であるということで、事実、せっかく獲ったレイヨウなどの獲物を、ライオンなどに奪い取られてしまうということもある。

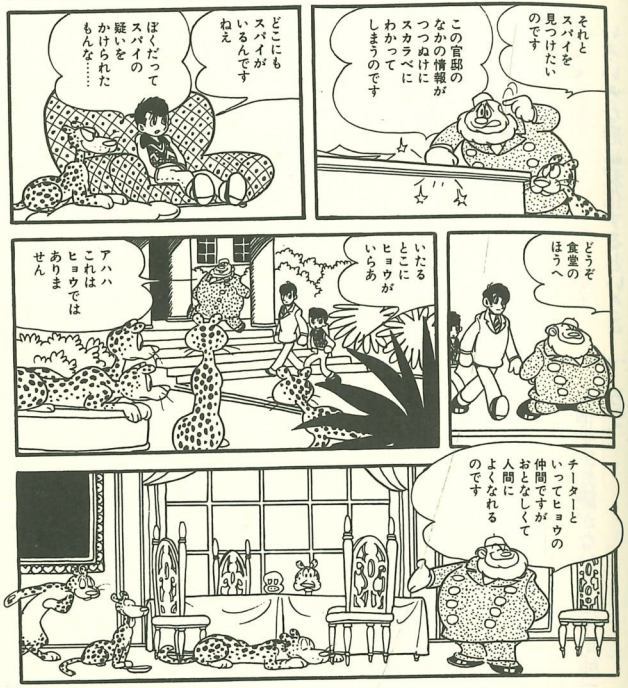
これらのことを犠牲にしても、自然はチーターに最高のプレゼントを与えた。それは、陸地に生きる動物中、世界一のスピードで走れるということである。そのスピードは、時速一一二キロメートルにも達し、走る姿は芸術的で、実に美しい。

これは、一〇〇メートル走に換算すると、約三秒で走り切ることになり、もしも人間の世界記録保持者、モーリス・グリーンと一緒に走った場合、チーターが一〇〇メートルのゴールのテープを切ったとき、グリーンは、はるか後方の三五メートル地点あたりを必死に走っているということになる。

昔、インドの王侯はチーターを馴らし、レイヨウなどを狩らせたため〝狩猟ヒョウ〟とも呼ばれた。『ふしぎな少年』には、そんな経緯が描かれている。

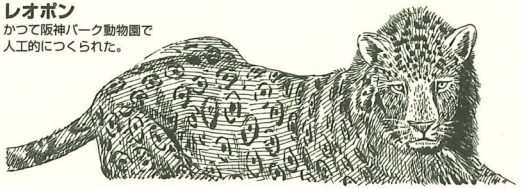


●『ジャングル大帝』
チーターがヒョウキンな役どころで出演している。



●『ふしぎな少年』
チーターは大型ネコ類の中では人間に一番よく馴れる。

ウェコ／レオポン



レオポン
かつて阪神パーク動物園で人工的につくられた。

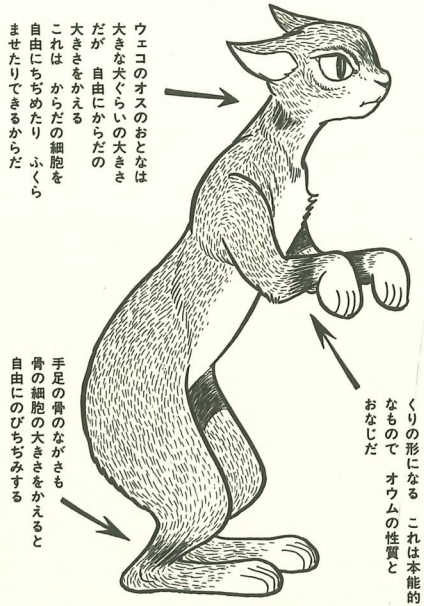
ウェコは『バンパイヤ―第二部』に出てくる、何にでも変身できるという不思議な動物である。もちろん架空の動物ではあるが、説明にもあるとおり、いかにも実在しそうである。

SF的な動物や生物を描くとき、この〝いかにも〟というのが大事な点で、手塚治虫は、その〝名手〟でもあった。それは生涯の作品の至るところに散在し、息づいている。

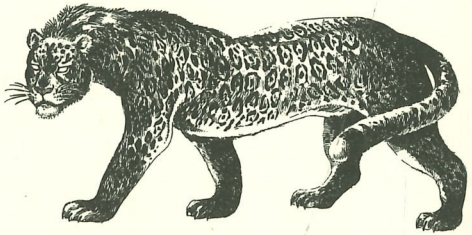
ウェコは、イヌやイタチなどの肉食獣の要素もあるが、もとはネコに近い姿形である。手塚治虫はアニメーションの中でも、変形＝メタモルフォーゼする生物が大好きであったが、ウェコは、漫画の中のメタモルフォーゼ動物の一つの典型である。いろいろな形に変化するということは違うが、『きりひと讃歌』に出てくるレオポンは、実在の大型ネコである。これは、メスのライオンとオスのヒョウの混血で、日本では、甲子園阪神パーク動物園にいたものである。一九五〇年代から六〇年代にかけて、この動物園では混血動物を試みて、数頭を誕生させた。

ライオンの体にヒョウの斑紋があるという、自然界では絶対に存在しない個体で、私も見たことがあるが、なにか生気に欠けている感じがした。数年前に最後の一頭が亡くなり、現在、日本にはいない。普通、こういった動物には繁殖力はない。

いずれにしても、創作動物やレオポンを作品に出演させるには、相当な博物的知識がなければ不可能であろう。



●『バンパイヤ―第二部』
ウェコは不思議なネコ科（？）の動物である。



●『きりひと讃歌』
レオポンは、メスのライオンとオスのヒョウのハーフである。

シー・ズー／ビーグル

シー・ズー
90年代後半の人気ナンバーワン。

シェットランド・シープドッグ
コリーを小型にしたものである。

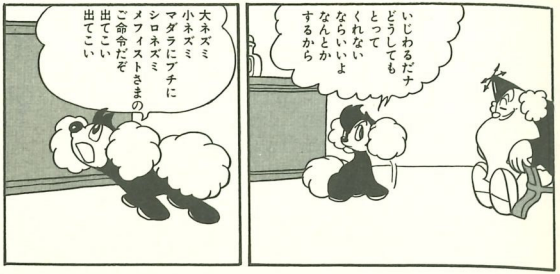
『ファウスト』に出てくる黒い子犬は、メフィストフェレスが変身したものである。主役ともいえるキャラクターであるが、その犬種となるとはっきりしない。小型のムタ犬系であるから、シー・ズーとかスパニエル系のものだろう。

『奇蹟の森のものがたり』のボブテイルや、『ミクロイドS』のビーグルは、この作品のみの出演で、手塚漫画においては珍しいものといえる。

ビーグルはウサギ猟専門の猟犬で、現在は愛玩用としても広く親しまれている。また、ボブテイルは体高六〇センチにもなる大型犬であるが、愛玩犬として室内で飼われることも多い。しかし、本来は牧羊犬で、オールド・イングリッシュ・シープドッグともいわれる。

飼い犬は時代によって流行があり、その人気は、結構めまぐるしい変動がある。一九五〇年代はスピッツ、六〇年代はコッカー・スパニエル、七〇年代はマルチーズ、八〇年代から九〇年代にかけては柴犬、シベリアン・ハスキーからシー・ズーへ、そして二〇〇三年現在ではミニチュア・ダックスフンドと、人気ナンバーワンは変化してきている。

手塚家では、かつてコリーが飼われていた。それは、一九八八年に手塚治虫が体調をくずして入退院を繰り返している頃、もらわれてきたものだという。子犬のコリーを手塚治虫は大変可愛がったというが、残念ながら一九九八年四月、天寿をまっとうした。



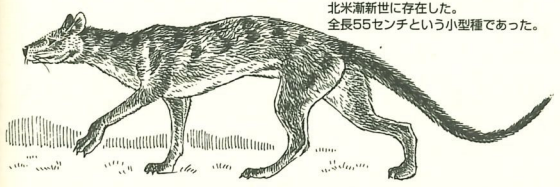
●『ファウスト』
この犬は、シー・ズーかコンチネンタル・トイ・スパニエルを思わせる。

●『奇蹟の森のものがたり』
一番左の犬は愛玩犬としては大型のボブテイル。

●『こけし探偵局』
これは秋田犬である。

●『ミクロイドS』
これはビーグルであろう。

イングリッシュ・ポインター



プセウドキノディクチス
イヌ科の祖先の一種で
北米漸新世に存在した。
全長55センチという小型種であった。

『ミューズとドン』のドンは言う。「いまはタダスくんの友だちだ！かれを裏切ることはできないっ」。また、『ミッドナイト』のイングリッシュ・ポインターのコマの語りにも「なつかしい飼い主のすみかへたどりつこうとした時」とある。このように、犬ほど人間と親密な関係にある動物はいないのである。

犬と人間のつきあいには、驚くほど古い歴史がある。動物が家畜化された歴史をみると、猫が約三〇〇〇年前、馬が約五五〇〇年前であるが、犬は、なんと少なく見積もっても一万年以上も前なのである（五万年〜一〇万年前という説もある）。

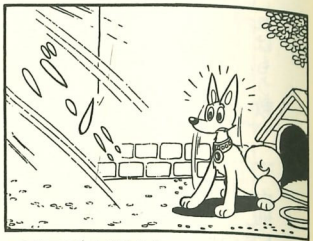
このように、犬の家畜化、馴化は、人間の歴史のかなり早期に行われたわけであるが、それは、石器時代の中期のことのようである。ネアンデルタール、クロマニヨンの後のことで、つまり、犬と人間は、非常に長い時間をかけて友達になったものだと考えられている。

最も原始的な犬の祖先は、学説によれば四〇〇〇万年前、地質時代の始新世の頃に存在していたミアキス（Miacis）という動物であった。その後、シノデクタス、トマークチェス、トマーチェクという動物に進化し、このトマーチェクこそが、犬、オオカミ、コヨーテの共通の祖先となった。

脊椎動物（門）哺乳類（綱）食肉類（目）犬（科）、犬（属）にて、学名カニス・ファミリアリス。これが現在の犬である。家畜動物最大の八五〇種を擁する。

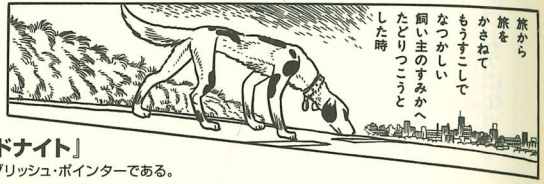
●『ふしぎな少年』
ブルドッグはときどき手塚漫画に登場する。

●『反射』
ショートショート集の中の一編で、犬種はボクサー。



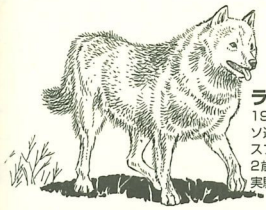
●『スリル博士』
ケンーの友達の雑種犬。

●『ミューズとドン』
ドンはシェパードである。



●『ミッドナイト』
これはイングリッシュ・ポインターである。

フォックス・テリア



ライカ
1957年10月、
ソ連が打ち上げた
スプートニク2号に、
2歳半のメスのライカ犬が
実験動物として乗せられた。

フォックス・テリア
『ジャングルタロ』のハンペンは、
このフォックス・テリアあたりで
あろう。

手塚治虫は『ジャングルタロ』の「あとがき」にこう書いている。

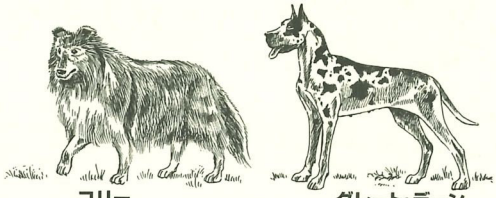
「『ジャングルタロ』は、核兵器実験に使われた動物たちの話です。太平洋の孤島やアメリカの奥地の砂漠での実験の記録映画には、きまって放射能汚染のテスト用に家畜たちが生け贄にされる場面が映ります。無心な動物たちですから、実験開始のギリギリまで、自分がいったいどういう恐ろしい立場に立たされているのか知らないでしょうし、爆発の後、倒れるまで、なぜ自分が死ぬのかを考えることもないでしょう。それだけに、本当にかわいそうです。人工衛星の実験に使われた犬たちが、ついに帰らず、宇宙のチリになったのとは違って、殺戮のための実験台なのですから、これはもう救いようのない犠牲で、なんともやりきれない哀れさを覚えます」

『ジャングルタロ』は、手塚治虫の漫画家生活の前半、宇宙にライカ犬が飛んだとニュースになった頃の作品である。当初は人気があったが、人気は尻すぼみになったという。なによりも、核実験の恐怖が読者に伝わらず、物語をはしょらざるを得なかったので、内容も変わっていってしまった。人気偏重の雑誌の世界では、難しいテーマだったと、手塚治虫は記している。しかし、とても愛着のある作品であったという。

ここに出てくるフォックス・テリアは、もとはキツネに似た毛色だったが、キツネ猟のときにわかりにくいため、ハウンドをかけあわせて、白地に黒の斑を持つようになった。

●『ジャングルタロ』
トップはシェパード、ハンペンはテリア系の犬である。

グレート・デーン

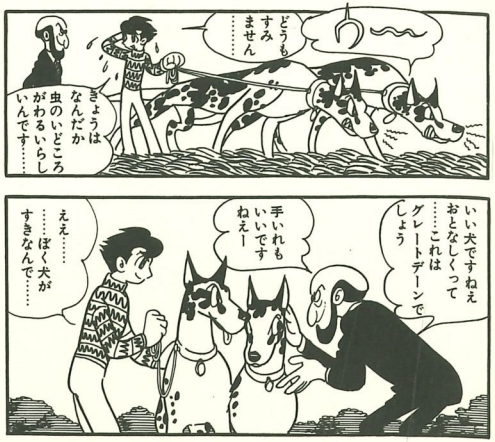


『バンパイヤ―第二部』の中のグレート・デーン、『白いパイロット』の中のコリー、どちらも犬界の大型種を代表する犬たちである。

手塚漫画の中にコリーはいくつか見られるが、グレート・デーンの出演は、他に『ワンサくん』などがあるだけで少数だ。犬の図鑑を見ると、グレート・デーンは、貴族的な外貌の中に威厳と優美さを合わせ持つアポロのような犬とある。確かにそのとおりで立派ではあるが、たまにこの犬を散歩させている人に会うと、私のような犬好きでも、ちょっと恐い感じがする。体高八〇センチ近い超大型の迫力に、圧倒されてしまうのである。

『バンパイヤ』の中のグレート・デーンは、ハールクインという種で、純白な体色に不規則な黒斑がある。グレート・デーンは、体色によって五つの種に分けられるという。茶色のものをフォーン、他のものをハールクイン、ブリンドル、ブルー、ブラックと、専門家は分類している。

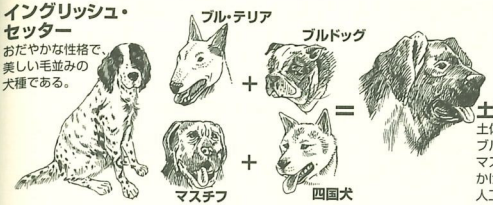
コリーは、『名犬ラッシー』で世界的に有名になったが、エレガントで聡明な犬種である。コリーも体高が七〇センチ近くにもなる大型犬なので、飼うほうもそれなりの体力と愛情、気力が必要である。そこで、コリーそっくりの中型種シェットランド・シープドッグが、コリーに比べて扱いやすいということで、コリーのあとを継いで流行犬種となった。この犬はイギリスのシェットランド諸島原産で、コリーよりも古い犬種とされている。



●『バンパイヤ―第二部』
グレート・デーンの出演は、手塚漫画の中では数少ない。

●『白いパイロット』
コリーは容姿端麗で聡明な犬種である。

プードル



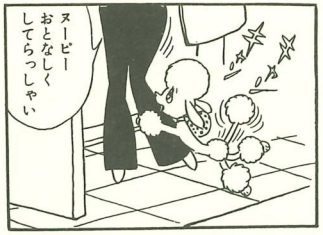
手塚治虫は『ブラック・ジャック―犬のささやき』でプードルを、『リボンの騎士』でイングリッシュ・セッターをと、いろいろな作品で犬を描き分けている。

アニメーションでも、絵コンテを担当した東映の「わんわん忠臣蔵」で、秋田犬を主役に抜擢している。『鉄腕アトム』では「ホットドッグ兵団の巻」にコリーを、スペシャルアニメ『プレーメン4』にはポインターを登場させるなど、枚挙にいとまがない。犬は、猫とともに世界的に最も身近な動物であるから、映画や小説、テレビなどにも頻繁に登場している。

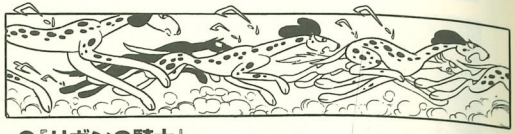
まずコリーを主演としたものに『名犬ラッシー』があり、これは何度も映画化された。『名犬ラッド』という作品もある。シェパードが主役の作品は『名犬リンチンチン』と『名犬ロンドン物語』。いずれもテレビ化された。

この中で実在したのはリンチンチンである。第一次大戦中、アメリカがドイツ軍基地を占領した際、軍用犬の犬舎の中で、生まれたばかりの二頭のシェパードの子犬が発見された。一頭は亡くなったが、もう一頭は生き残り、アメリカに持ち帰られて、大事に育てられたという。これがリンチンチンである。一九二三年、ワーナーと契約し、計二〇本の映画に出演したが、映画会社の赤字を黒字に転換してしまうほど評判がよかったという。

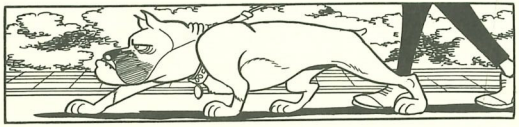
日本では、秋田犬の〝忠犬ハチ公〟の話などが有名である。



●『ブラック・ジャック―犬のささやき』
ブラック・ジャックの手術により、プードルが言葉を話せるようになる。

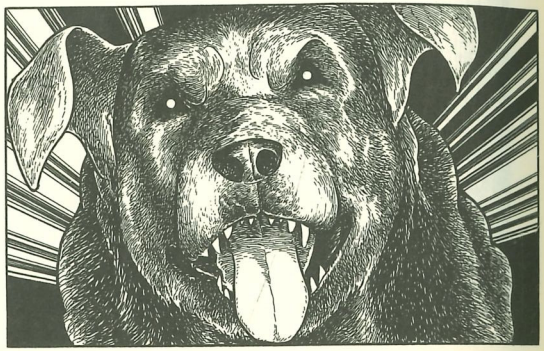


●『リボンの騎士』
これはイングリッシュ・セッターである。



●『猫の血』
これはボクサー種であろう。

●『MW』
狂犬的な表現で、手塚タッチのリアルな描写である。



シェパード

ジャーマン・シェパード
最も高度に発達した犬種で、日本では警察犬として知られている。祖先は牧羊犬である。

『フライングベン』は、タダシ少年と三匹の超能力犬、ベン、ウル、プチが活躍する手塚治虫中期の傑作SFである。SFではあるが動物漫画といってもよく、主役は、そのタイトルのごとく、目にもとまらぬスピードで空を飛ぶシェパードのベンである。手塚治虫は『フライングベン』について「僕は犬が大好きで、どんなに吠えつく犬でもニコニコと応対してやります。ベンには僕の犬への思いがこめられています」と語っている。

スピーディーなベンは、漫画よりむしろアニメーションにぴったりの素材で、事実アニメーションにもなったのである。それはパイロット・フィルムという一種のデモンストレーション・フィルムで、動いているベンは素晴らしかった。

この物語の中の村を恐怖におとしいれる大猿のセリフには印象的なものがある。

「俺たちは食うものもない、ねぐらもない。ひもじい子供や年寄りを抱えて、どこへ行けばよいのだ？　食うために、人間どもが俺たちから奪った食い物をちょっぴり盗む。それだけだ。わかるか、犬、おまえたちのように人間どもに食い物をあてがわれて、のうのうと育ったけだものは、野山の中に生きる苦しさはわかるまい、わかるものか」

大猿の言葉は、乱開発を続ける人間に向けられているともいえ、手塚治虫はドラマを進行させつつ、現在にもあてはまる、決して古くならないテーマを匂わせている。

●『フライングベン』『ジャングル大帝』にも通じる親子愛もテーマの一つであった。

オオカミ

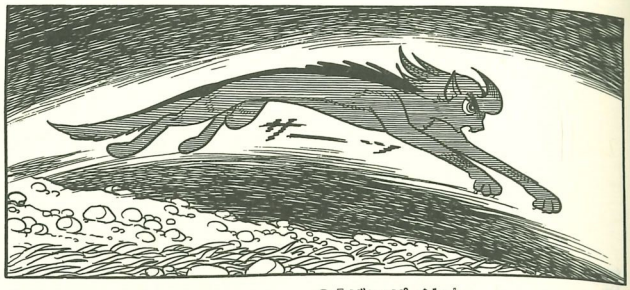
『バンパイヤ』は、主人公の少年トッペイがオオカミに変身するという大ヒット作で、〝狼男伝説〟に基づいて描かれたものだが、内容は手塚治虫のオリジナルであることは無論である。

オオカミは、『火の鳥』では「黎明編」「太陽編」で主役級の活躍をするし、次項の『ロロの旅路』は、まさにエゾオオカミそのものの話である。ここに挙げた作品以外にもオオカミの出演は数多く、イヌに非常に近い動物であることから、手塚治虫の大好きな動物のうちの一つだったということは間違いない。オオカミについて話したことはなかったが、そうでなければ『ロロの旅路』のような作品は生まれなかったはずだ。

オオカミはイヌ科中、最大で最強といわれ、人間以外では、地上の哺乳類の中で最も分布が広い。だが、かつて北海道に生息したハイイロオオカミの亜種、エゾオオカミは一九〇〇年頃、絶滅した。やはり人間の開拓が遠因である。

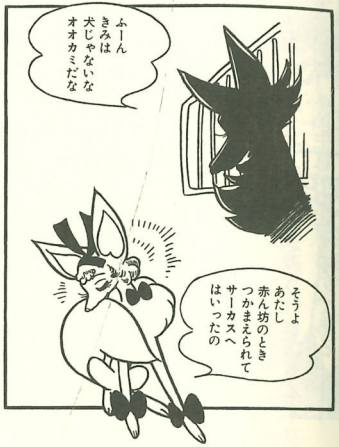
人間が原野を耕地や牧場にしたため、エゾシカが減り、エゾシカを獲物としていたオオカミは、かわりに牧場のウマを襲ったのである。そのため、開拓使は賞金を出してオオカミの駆除を奨励したから、その数は急激に減った。一八七六年から一八八八年の一二年間で、実に二〇〇〇～三〇〇〇頭が捕獲され、これはもはや回復不能の数であったという。

昔も今も、人間と自然界の共存は非常に難しいものである。



●『バンパイヤ』
トッペイはオオカミに変身できる超能力者であった。

●『火の鳥―太陽編』
擬人化されたオオカミである。



●『火の輪』
タテガミオオカミの少女。
手塚治虫は美しいオオカミも描いた。

エゾオオカミ

『ロロの旅路』は、母オオカミを探すロロの感動的な作品であるが、このオオカミはニホンオオカミとある。しかし、これは北海道を舞台にしているので、実はエゾオオカミの間違いなのであった。科学的生物学的考証をきちんとしていた手塚治虫の、思わぬ間違いであった。

かつて我が国には、このエゾオオカミと、少数の小型のニホンオオカミが生息していた。明治時代末期に捕らえられたというニホンオオカミの剝製標本が東京・上野の国立科学博物館にあるが、研究家にいわせると、これは雑犬という説もある。幕末に記録された画や文献には、ニホンオオカミの前足には相似形のススキに似た横線があり、尾にも三条の縞模様が必ずあるのに対して、剝製にはそれらがないというのである。また、四本の足それぞれに水掻きがあるというが、これも見られず、実際のところは謎に包まれている。

ニホンオオカミは本当はまだ生きていると信じている人たちがいる。一九九六年にテレビのニュースで見たのだが、その声を聞いたり、水掻きのついた足跡を目撃したというのだ。餌を仕掛けたり、外国のオオカミの遠吠えの録音テープを流したりして探索しているのだった。もし、まだ実在していたら大発見である。

将来、エゾオオカミの亜種なら日本に健在！　ということはあるかもしれない。というのは、国後島には少数が確認されているから、もしも北方領土が返還されれば、オオカミ生息が復活するのである。

●『ロロの旅路』
滅びゆくニホンオオカミを描いた名作。

●『シュマリ』これは大型のエゾオオカミである。

タヌキ

人里に現れるタヌキ

『ミッドナイト』は『ブラック・ジャック』のタクシー運転手版ともいうべき作品で、実にいろいろなテーマが扱われている。手塚治虫晩年の名作のうちの一つである。これはタヌキが主役の章で、ユーモラスなタヌキたちが出演している。

一九八〇年代になって、山林に手が入り宅地化が進むと、タヌキがすみかを追われ、その姿が人目につくようになってきた。ときにタヌキの出現が新聞記事を飾ったりしていた頃の話である。タヌキはイヌ科の中でも特に変わっていて、木に登るのが上手だったり、イヌの仲間なのにイヌより遠いイタチ科のアナグマや、北アメリカのアライグマに似ていたりする。ネコに似た声を出すこともあり、こんなイヌ科の動物はタヌキだけである。

タヌキがもう一つ変わっているのは、気絶したふりをすることだろう。ハンターに鉄砲で撃たれると、ばったり倒れ、ハンターが「やった」と思っていると、ぱっと逃げてしまう。死んだふりをして人間を騙すのであるが、おそらく神経系に異状が起こり、仮死状態になるのではないかと考えられている。

人家周辺に現れるようになって、餌付けをする人もいて、その数は増えているといわれる。しかし、九〇年代に入って交通事故で死ぬ数も増え、私も埼玉県所沢市の県道で死骸を見た。手塚プロダクションのある新座市でも、スタジオのすぐ近くで、早朝にタヌキを目撃した。急速に郊外が開発されたためであろう。

●『ミッドナイト』タヌキが主役となった章である。

キツネ

キツネを描いた手塚漫画はあまりにも数多く、スタイルも似ているので、ここでは代表的だと思われるものを選んだ。

キツネは、とにかく日本の伝説や民話とは切っても切れないような関係があり、あちこちに登場してくる。それが子ギツネの場合は、『ユニコ』に描かれているように、可愛らしい対象となる。宮沢賢治の『雪渡り』などの童話も、子ギツネと子供との楽しい交流が描かれていて、ほほえましい。

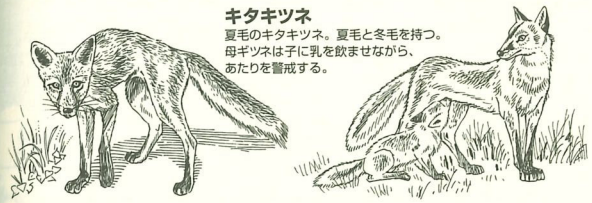
ところが、これが大人のキツネになると、途端に悪役かズルい役、女ギツネなら、やけに色っぽい役になってしまう。〝キツネ眼の男〟などという嫌な表現もある。手塚作品でもそうだが、これが世界的なキツネのイメージらしい。〝狐狸の化かし合い〟というが、タヌキにはまだユーモラスなイメージがあり、キツネにはそれが全然ないのだ。これは、キツネの姿形や、人間の誤った知識などからくるものである。

キツネが〝化かす〟ということは、無論あり得ないのだが、とても賢いことは確かである。たとえば、キツネはウサギを見つけると、ある程度の距離を置いて転がりまわり、苦しそうな演技をする。次に自分の尾を追い、グルグルまわる。ウサギはあっけにとられているうちに捕らえられてしまうのだ。これは、本能か学習したものかはわからないというが、この狩猟方法は「チャーミング」といわれる。

●『ユニコ―小学一年生版』
動物に愛情を寄せていた手塚治虫の気持ちがよく表れている絵である。

●『悪右衛門』
いわゆる〝くずのは伝説〟の手塚流解釈のストーリー。なかなか色っぽい。

キタキツネ



キタキツネ
夏毛のキタキツネ。夏毛と冬毛を持つ。
母ギツネは子に乳を飲ませながら、
あたりを警戒する。

『フライングベン』！　なんてシャレたタイトルなんだろうと、私は連載時に思ったものだ。これは、ベンの妹のプチが道に迷い、キツネと出会うシーンである。

「おまえさん、どっから来たんだえ……」

いかにも鉄火肌のイキな姐さんのセリフである。こういったセリフまわしがまた、他の漫画にはない手塚漫画の不思議な魅力であったのだ。〝女ギツネ〟には、こういったイメージがぴたりとくるのは、単に先入観ばかりからくるものではない。

「キツネがぜんぶ信用ないのは、ちょっとかわいそうじゃない？　なかには誠意のあるキツネもいるのに」

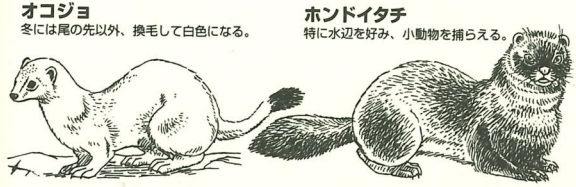
確かにそうなのだ。

『今昔物語』の〝狐の恩返し〟、「葛の葉伝説」の〝狐の生んだ子供が学者になった話〟（これが手塚治虫の『悪右衛門』のもとの話である）、「秋里随筆」の〝親の命乞いをした孝行狐〟など、善良なキツネの伝説も多いのである。

竹田津実氏は、北海道で長い間キタキツネを観察してきた人だ。その著書『キタキツネ』からは、キツネへの愛情がひしひしと感じられる。私も北海道を一周したとき、増毛という峠でキタキツネと会ったことがある。観光客が餌をやるせいか、とても人に馴れていて、わずか一メートルの距離まで接近できた。イヌとはまた違った野性美を持っていた。キツネがズルい動物だというのは、やはり人間の一方的な誤ったイメージなのである。

●『フライングベン』　ちょっと色っぽい姉御肌のキツネ。
こういうイメージは手塚治虫の好むところであった。

イタチ



『チッポくんこんにちは』『モモンガのムサ』『ガムガムパンチ』……これらの漫画に出てくるイタチは、どれをとっても意地悪で、陰険でズルい役柄である。児童文学の名作、斎藤惇夫（さいとうあつお）の『冒険者たち』でも、白イタチは悪役だ。この作品は「ガンバの冒険」というタイトルでテレビアニメ化もされている。

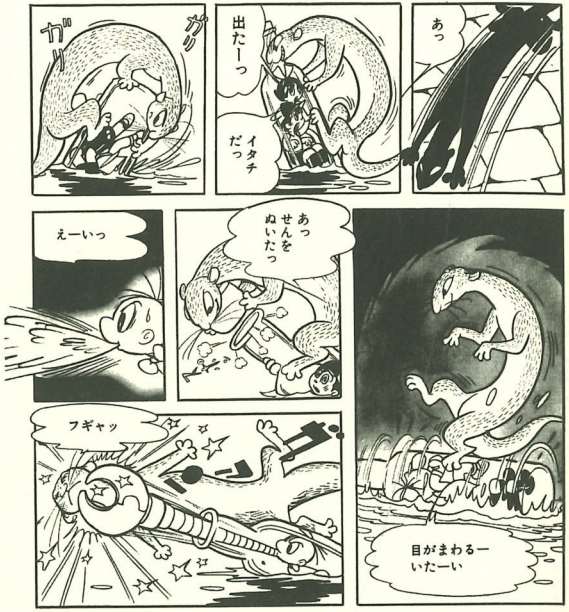
しかし、イタチが悪い動物ということではない。だいたい、悪い動物、よい動物という区別はないはずで、人間の眼から見て判定しているだけにすぎない。イメージというのは恐ろしいものである。胴が長く四肢（し）が短い。鋭いカギ爪で小動物を襲う。ニホンイタチの場合、特に顔の中央部が黒く、ますます印象を悪くしている。童話や漫画では、まず正義の味方になりっこない風貌なのだ。

しかし、同じイタチ科のフェレットは、可愛い動物とされ、ペットとして珍重されている。また、美しい毛皮が高貴な女性たちに喜ばれるミンクも、立派なイタチの一種である。

手塚治虫が初めにつくった会社、虫プロダクションは、東京都練馬区の富士見台（ふじみだい）というところにあった。私がアニメーターとして入社した一九六六年頃は、まだ畑や林も多く、たった一度だけだが、オレンジ色の光線のごとく道を横断するイタチを目撃したことがある。電光石火というか、実に素早い動きで、野生の動物が人家の近くにいることが驚きであった。

●『モモンガのムサ』
真ん中の動物がイタチである。

●『チッポくんこんにちは』
いかにも意地悪そうな表情である。



●『ガムガムパンチ』
ここでもイタチは悪役として登場する。

テン／ラッコ

テンやラッコは、その毛皮や可愛らしい動作から、人間にかなり愛されているほうであるが、あの悪役、イタチの仲間なのである。ほんのちょっとした差で、人間が抱くイメージはずいぶんと変わり、テンなどは他の小動物を血祭りにあげる名ハンターなのだが、仕草が可愛く見えるぶん、だいぶ得をしている。

『シュマリ』の中で、ヒロインの〝お峯〟をキョトンと見ているエゾクロテン。実はテンには、このような習性があるのだ。私の友人のTさんは神奈川県の丹沢で、朽ち木の上でたまたまテンと目が合って、しばらくそのまま見つめ合っていたという。本州のものはホンドテンといわれ、冬になると黄色の冬毛になるものはキテンといわれるが、Tさんがテンと出会えたのは僥倖といわなければならないだろう。

手塚治虫は中学生の頃、夏は連日のように昆虫採集のために野山を歩いていたから、テンは難しいとしても、イタチなどの野生生物に会う機会は相当にあったと思われる。

ラッコは水に入ったイタチで、北海道からカリフォルニアにかけての沿岸に生息していて、泳ぎがうまい。腹に石をのせ、そこで貝やウニを割って食うという、道具を使う動物で、一九八〇年代にはCMに出たりして、妙に人気者になった。ある観察によると、同じ石を一〇〇〇回以上使った記録がある。脇腹が皮のポケットのようになっていて、ふだんはそこに石をはさんでおくという面白い習性もある。

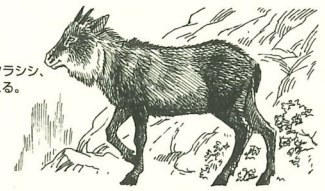
●『モモンガのムサ』
これはテンである。

●『シュマリ』
その大きさから判断すると、これはエゾクロテンである。

●『お客さまは悪魔です』
ラッコがちょっとしたブームになった頃の作品。

カモシカ

カモシカ
地方によってはクラシシ、アオシシと呼ばれる。



カモシカの正式な和名は〝ニホンカモシカ〟という。約一三〇種からなるウシ科の中のヒツジ・ヤギ類に含まれている。

二〇〇万年前の更新世に入ると、ヒツジ・ヤギ類は山岳地帯の開放的な環境へと適応放散していったが、この頃、カモシカは森林にとどまったため、レイヨウなどのような発達がなく、原始的な形態を持ち続けている。「生きた化石」と呼ばれる所以（ゆえん）である。眼の下に眼下腺と呼ばれる切れ込みがあり、これを木の幹にこすりつけてマーキングする。テリトリーを主張する意味があるらしいが、カモシカ特有の行動である。

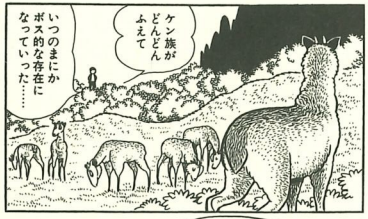
このような特殊なウシの一種であるから、生態などをよく知らないと、漫画のキャラクターにはなりにくい。岩場や絶壁を渡ることも得意で、『ころすけの橋』はマンガチックではあるけれど、少年とカモシカの、ベタベタとしない友情のようなものがほのかに香ってくる佳品だ。

カモシカは寒立（かんだ）ちといって、真冬、高山の断崖に立って日の出を待つ習性がある。そのカモシカと猟師の対決を悲惨なまでにリアルに描いた漫画に『アオの寒立ち』という作品がある。雪や風の冷たさが目に沁（し）みるような描写で、これは手塚治虫を師と仰いだ矢口高雄（やぐちたかお）氏の漫画だ。

〝アオ〟とは、奥羽（おうう）地方のカモシカの呼び名〝アオシシ〟の略である。

カモシカは一九四〇年代までは、主に毛皮獲得のために狩猟の対象となっていたが、一九五五年、特別天然記念物に指定された。

●『タイガーランド』
これはリアルな表現である。



●『ころすけの橋』
ややマンガチックではあるが、動物漫画として記憶に残されるべき作品である。

アカシカ

ホンシュウシカ
ニホンジカの亜種で、日本にはほかにキュウシュウシカ、ヤクシカなどが生息する。

シカのツノ
毎年生え変わり、ツノの枝は年とともに増える（4歳で4本）。必ずしも左右対称ではない。

ブッダは動物の心もわかる聖人である。動物はブッダを恐れずに、いろいろと訴えたりする。これは、『ブッダ』の中の動物を描いた名シーンといえるだろう。ディズニーの表現ほどベタベタしておらず、人間（ブッダ）と動物の間には、ほどよい緊張感がある。東洋的といったらよいだろうか。

『ブッダ』のシカは、大きさや地域性から検討していくと、どうやらアカシカらしい。ニホンジカの仲間は中国東北部より南にはいないのであてはまらないし、インドにいるサンバーは人間と比べると、もっと大きい。形の似ているオジロジカは、アジアにはいない、というわけだ。

ウシ科のレイヨウの中にも、一見シカによく似ているものがいる。レイヨウの一種であるオリックスやインパラは、体も細身でシカのようではあるけれど、その外見的な違いは、角の形であろう。シカの仲間の角は、枝分かれをして生え変わるが、インパラなどの角は、ねじれたり湾曲したりはするが、枝角にはならないし、生え変わることもない。

私はかつて、手塚治虫とシカの写真を撮ったことがある。一九八八年の六月、カナダのアニメーターであるフレデリック・バック氏らと奈良旅行に行ったときのこと、寄ってくるシカに手塚治虫がシカせんべいをあげている写真だ。頭をなでたり背中を触ったり、一行は大喜びだった。亡くなる八ヵ月前のことで、その写真が、私が手塚治虫を撮った最後のものとなった。

●『ブッダ』　このシカは、大きさや地域から分析するとアカシカであろう。

オオヘラジカ

オオヘラジカ
更新世の頃には、このようなシーンがよく見られたであろう。

『双子の騎士』の牝ジカは、言葉をしゃべったり後ろ足で立ったりして、やや擬人化されている。『刑事もどき―鹿の角』のシカはリアルな表現の剝製。

ここには挙げていないが、『プラック・ジャック―ナダレ』『シュマリ』『ザ・クレーター―雪野郎』などのシカは、みなリアルだ。『シュマリ』のエゾシカは図鑑的リアルさも持っているが、なるべく描き方の異なるものを選ぶとなると、これらは割愛せねばならなかったのである。

『ハトよ天まで』のシカは民話的な表現とでもいうか、雪舟の子供時代のネズミの絵の話を連想させる。

作品中の語りには、

「ある御殿の襖の絵を頼まれて、シカの群れを描いているとき、突然、一匹のシカがぴょーんと絵から飛び出したのです。菊麻呂は不思議な絵師でありました。若い頃から、菊麻呂の描く絵には、命が宿っているようなみずみずしさがありました」

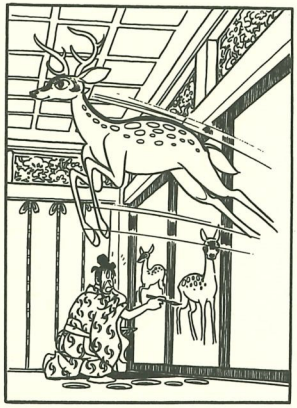
とある。

『ハトよ天まで』は新聞に連載された絵物語であるが、隠れた名作である。

『三つ目がとおる』のオオヘラジカは、今は存在しない絶滅種であるが、超大型のシカであった。二〇〇万年～一万年前の更新世のメガロセラス・ギガンティウスといわれるものである。角の重量が五キログラム、角と角の間が四・三メートルもあり、草地やブッシュのある平地に生息していたといわれる。

●『双子の騎士』
かなり擬人化された表現である。

●『刑事もどき―鹿の角』
これはリアルな表現の剝製。



●『ハトよ天まで』
手塚治虫の代表的民話漫画。

●『三つ目がとおる』
オオヘラジカを例に進化を説明している。

レイヨウ

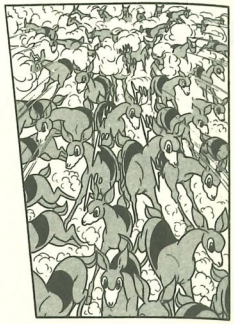
レイヨウは、よくシカと間違えられるが、実はウシの仲間なのである。レイヨウは漢字では「羚羊」と書く。ヒツジはウシ科、だから、もちろんレイヨウ類もウシ科だ。レイヨウは、ウシ目ウシ科の動物のうち、ウシ亜科ウシ族とヤギ亜科以外のものを指し、プロングホーン、クーズー、ヌーなど、八九種がいる。『ジャングル大帝』のトミーは、レイヨウの一種であるトムソンガゼルで、インパラや、やや大型のスプリングボックとよく似ている。アニメーションの『ジャングル大帝』をつくっているとき、スタッフでも、これをシカだと思っている人がいた。

レイヨウはウシの仲間とはいえ、スマートな体型で、バネが強く、跳ねるように走るものが多い。クリップスプリンガーという小型種は、垂直に一〇メートル以上もジャンプできるのである。走り高跳びのチャンピオンといったところだ。

『ボンゴ』にはボンゴが出てくるが、これは、赤茶色の体色に純白のスジがある美しいレイヨウで、珍獣といわれる。この動物には、水に入ると体色が落ちるという面白い現象があると聞いていたので、私は以前、上野動物園で柵越しに、濡れた手で触ってみたことがある。ずっしりと、やや固い肌触りだったが、その話は本当であった。手が少し赤茶色に染まった。とはいっても、体色がすっかり脱色して白くなるというわけではなく、少々色が薄くなるくらいで、しばらくすると、また元の色に戻るらしい。

●『ジャングル大帝』
レオの相棒のトミーはトムソンガゼルである。

●『虎人境』
これはインパラをデフォルメしたものだろう。



●『火の鳥―未来編』
レイヨウの暴走である。

●『ボンゴ』 ボンゴがかなりデフォルメされている。

ヤギ

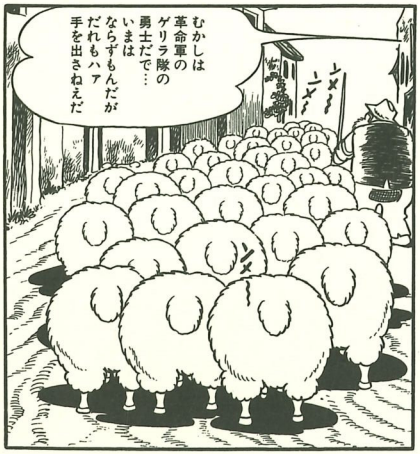
ヤギのイメージというのは、〝優しい〟〝温厚〟、そして、子ヤギの場合は〝可愛い〟、と相場が決まっている。それは、子供の頃に見聞きした童話や童謡の印象がインプットされているからだと思われる。童謡「めえめえ児山羊」などがパッと頭に浮かぶが、『宇宙狂想曲』に出てくるヤギは、なかなか荒っぽい。幅広い手塚漫画の中でのヤギの出演は、他に『ユニコ』で好演しているのが印象深い。

ヤギからもう一つ連想されるのは、〝紙を食べる〟ということだろう。新聞紙のように印刷インクの臭いがあるものでも、ムシャムシャ食べてしまう。しかし、ヤギは紙が大好きで食べているのかというと、どうもそうではないらしい。草があれば、紙ではなく草のほうを食べるという。

ウシ科であるヤギには、ウシと同じように四つの胃があり、それぞれの胃は、胃壁の構造や消化液の組成が少しずつ異なっていて、紙を食べることによって、大量の繊維質を必要とする消化システムを守っているのだ。消化のよい完全栄養食の飼料ばかり食べていると、かえって胃腸障害を起こしてしまうという。ヤギは、このことを本能的に知っていて、繊維質を含む紙や草を食べるのだ。

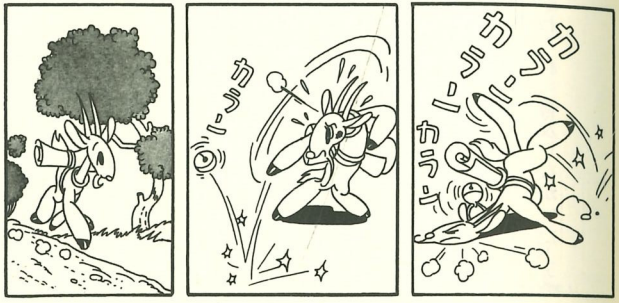
子供動物園にはヤギが放し飼いになっていて、餌の入った紙袋などを持っていると、十数頭のヤギに囲まれたりする。大きい奴になると、かなりの力がある。

●『ブラック・ジャック―道すがら』
なぜかヒツジは後ろ姿のモブ（群集）・シーンが多い。



●『ぼくの孫悟空』
ヤギが擬人化されている。

●『宇宙狂想曲』
これは初期の手塚作品である。



ロバ

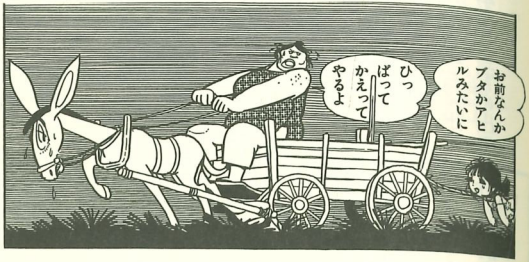
現在の日本で、動物園などの施設以外ではロバを見る機会はほとんどないといってよいだろう。それほど身近な動物でなくなってしまったのに、なぜか親しみを感じる動物である。それは、「ドン・キホーテ」や「ブレーメンの音楽隊」などの世界的に有名な作品のせいであろう。

ロバは粗食に耐え、ウマに比べれば大人と子供といえるほど小柄なのに、頑丈で力が強く、よく働くので、国によっては今も多数が使役されている。中国、西南アジア、アフリカでは、最もポピュラーな動物であるという。そういえば、『ゴブリン公爵』の舞台は中国で、チョイ役の出演ではあるが、ローカルな雰囲気がロバによって醸し出されている。

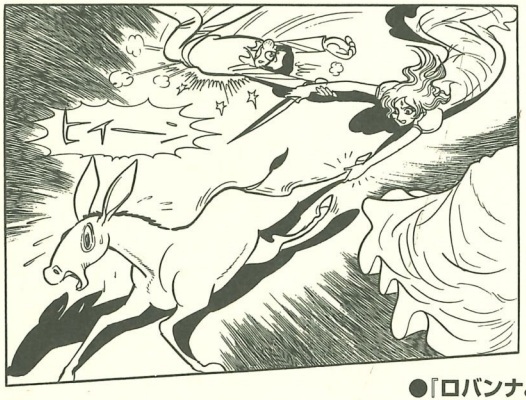
私自身のロバについての記憶をたどってみると、動物園以外の場所でロバを見かけたのは、はるかに昔のことである。一九五〇年代には、東京にもときどき〝ロバのパン屋さん〟というものがやってきた。それは、ロバに屋台を引かせたパン屋で、子供たちの人気者であった。当時の有名な童謡歌手、近藤圭子の歌う〝ロバのおじさんチンカラリン〟という歌とともに、姿を現したものだった。それから四〇年以上も、まったく見ていない。

調べてみたところ、関東近郊では、昭和の初めまでさかのぼっても、ロバが飼われていた記録は少なく、使役としては、ウシ、ウマにとってかわられ、普及しなかったようだ。

●『刑事もどき―エムレット』
シェイクスピアの「真夏の夜の夢」のイラスト的描写で、芝居好きの手塚治虫ならではのものである。

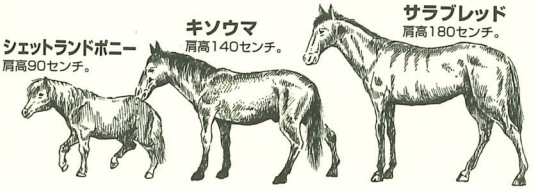


●『ゴブリン公爵』
ロバは人間にとって重要な家畜であるが、もともとはアフリカに分布する野生種を飼い馴らしたものである。



●『ロバンナよ』
ロバは小さな体に似合わず力が強い。

ウマ



『W3（ワンダースリー）』のノッコ、『くるします・いぶ』の色っぽいウマ、『虹のとりで』の変身木馬……すべてマンガチックなウマたちである。

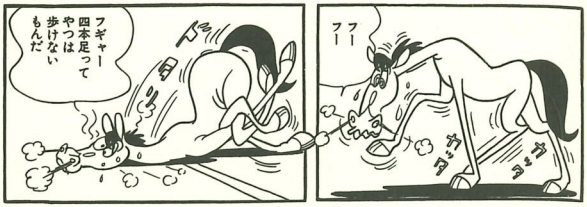
特にノッコは典型的な三枚目のウマである。

手塚治虫は『鉄腕アトム』の生みの親・天馬博士を紹介するにあたって、ウマという文字によるギャグをやらかしている。

天馬博士――ひのえうま生まれ、群馬の人、本名午太郎、家は代々馬鈴薯栽培を営む。練馬大学を卒業後、馬力に馬力をかけ、うまく高田馬場にある科学省任官試験にダークホースとしてパスした。海馬の研究では博士の右に出る駒はない、ついに科学省長官に出馬、今に馬脚を現すなどとヤジ馬に馬鹿げた下馬評をされている――というウマづくしだ。完璧をめざすなら、これに、飲む酒はホワイトホース、趣味は乗馬、得意な料理はさくら鍋で、それは大変ウマいと付け加えたい。

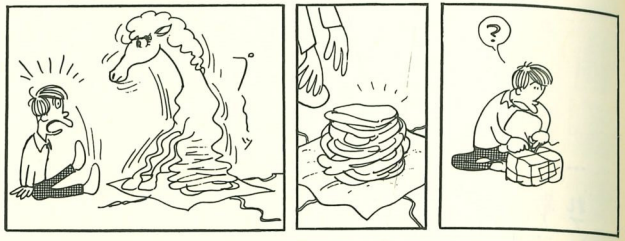
ウマは近年まで重要な家畜として、農耕用、交通用、軍用にと、人間の生活に大変役に立ってきた。また、現在でも競馬、乗馬などで人々に親しまれており、イヌ、ネコにも劣らないほどの人間の友であるのに、「付けウマ」「ジャジャウマ」「ウマ面」と、あまりよくない表現にも多く使われていて、気の毒な面もある。

手塚治虫は、そういう三枚目のウマもたくさん描いたけれど、颯爽たるウマだってたくさん描いている。



●『W3』
宇宙人ノッコは変身機でウマに変身した。

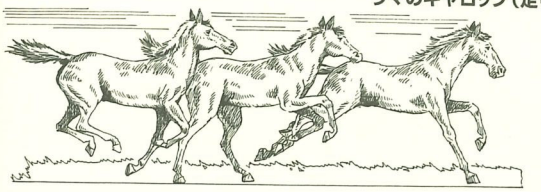
●『虹のとりで』
マンガチックなウマの表現である。



●『くるします・いぶ』
包みを開けると衣類のようなものがウマにメタモルフォーゼする。手塚治虫ならではの表現である。

白馬

ウマのギャロップ（走り）



「アオの物語」は『フィルムは生きている』の中で完成する長編アニメーション、『リボンの騎士』は実際にテレビアニメ化された作品で、両方ともウマが主役、あるいは重要な脇役として出てくる。『リボンの騎士』のサファイヤの愛馬はオパールという名で、信頼できるパートナーという役であった。

私がアニメーターになった頃、一番動きを覚えたかったものは、動物であった。とりわけウマを描けるようになりたかった。そこで週に一度はスタジオに泊まり込み、ひそかに勉強していたことがあった。

ある夜、先輩の描いたウマのフィルムを分析しつつ、ウマの走りを描いていると、私の後ろから、実に通りのよい声がした。

「今頃どうしたのです？　帰らなかったのですか？」

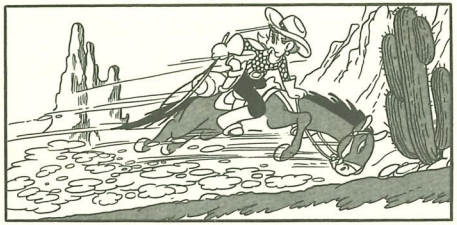
振り返ると、声の主は手塚治虫その人であった。夜中の二時頃、暗い中で一人、動画机に向かっている…これは結構、変な光景であったろう。

「ウマの走りを練習しているんです」と、これは私。「どれ、見せてください」と、先生。「後ろ足が縮まるときには、当然ケツは上がりますよね」。

なぜか私は、このケツという言葉をよく覚えている。そして、私の描いたウマの絵の上から、先生はブルーの鉛筆で、グイグイと力強く修正をしてくれた。天下の手塚治虫が、新人アニメーターに直接指導してくれている。私は大感激した。

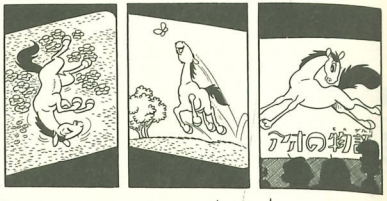
●『黒い峡谷』

数少ない西部劇の一つである。



●『フィルムは生きている』

作中のアニメーション「アオの物語」ではウマが主役として登場する。



●『リボンの騎士』

手塚治虫の代表作の一つで、ウマのオパールは重要な脇役である。

サラブレッド

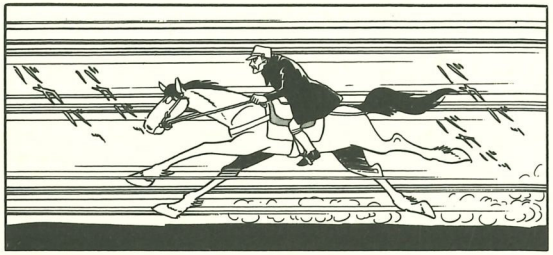
動物の大好きな手塚治虫の漫画の中でも、出演率ベスト3は、イヌ、ネコ、ウマの三つであろう。ウマは、もしかしたらナンバーワンかもしれない。

初期の四コマ漫画は別として、SFもの、西部劇、歴史もの、ファンタジックな作品、大人ものギャグと、ほとんどあらゆる分野の作品に、ウマは登場している。この項目では、手塚漫画の中の比較的リアルなウマを選んでみたが、『シュマリ』のペルシュロン種のようなウマ、『火の山』のサラブレッド的なウマと、うまくその特徴を描き分けている。

家畜になる前の本来のウマといえば、食べることと走ることが仕事であった。その走りは、競馬中継などでいろいろなウマを見ていると、前足と後ろ足が右から着地するもの、左から着地するものと、それぞれ癖がある。

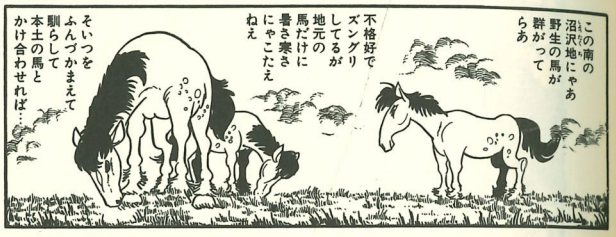
これは調べてみると、癖というより、人間と同じように右利き、左利きがあるようである。「ネコは左利き」「ニホンザルは左利きが多い」「ネズミは右利きと左利きが同じ割合で現れる」といった研究結果もあるという。

ヒトの大部分が右利きであるのは、受精卵の細胞分裂の時代、左側の細胞のほうが成長が早く、このことによる左脳の言語脳優位が右利きと深く関連する。左脳の影響で右利きになるのは、神経系が交叉していることに起因する、ということらしい。



●『火の山』
非常にリアルな表現である。

●『走れ！クロノス』
マンガチックではあるが、リアルさも感じさせる。

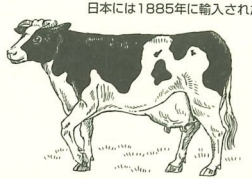


●『シュマリ』 これは野生馬である。

ウシ

オーロックス
ウシの祖先で17世紀に絶滅した。

ホルスタイン
日本には1885年に輸入された。



『レモン・キッド』ののんびりとした景色の中のホルスタイン種のウシ、『お山の三五郎』の擬人化されたウシの親父さん、『地球の悪魔』のとぼけたウシ……みんな楽しい絵である。家畜のウシには緊迫感がおよそなく、のどかで私は好きである。もともとウシは、野生種とは違って、そのようなムードが漂うのである。

ウシは八〇〇〇年も前から家畜化が行われ、祖先種はオーロックス（原牛）と考えられている。オーロックスは一六二七年に絶滅したが、このウシはスペインのアルタミラの洞穴の壁画にも描かれている。

一九八八年のこと、私は、アニメーションの『聖書物語』でウシのキャラクターをつくることになった。

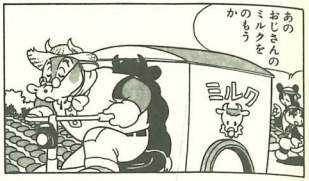
私はウシをあまり描いたことがなく、叩き台としては、そこそこのものを描いたつもりだったのだが、手塚治虫は「ウシの背中とお尻の線は直線くらいでもよい！　もっとうんとデフォルメしてください」と言った。特徴をきちんととらえて誇張する……この当たり前のことが、なかなか難しいのであった。

手塚治虫は仕事となると、個人的な親しみはなくなり、容赦ない厳しい先生であった。これが私と手塚治虫とのウシの思い出であるが、ウシはアニメーションの中では比較的少なかった。

漫画では、ここに挙げた他にも相当の数のウシを登場させた。また、干支が丑年のときには、年賀状に面白いウシをたくさん描いていた。

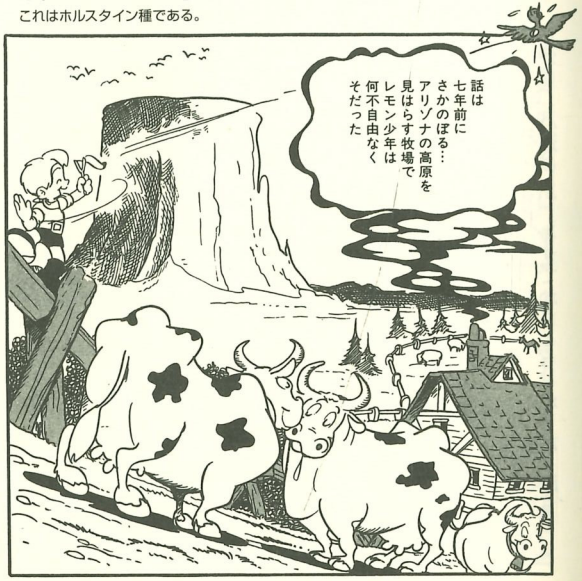
●「地球の悪魔」
とぼけた表情のウシである。

●「1961年の年賀状」
ときのアメリカ大統領ケネディのパロディ。



●『お山の三五郎』
擬人化されたウシが自転車に乗っている。

●『レモン・キッド』
これはホルスタイン種である。



ブタ

バークシャー
全身が黒色をしている。
イギリスのバークシャー地方原産。

メイシャントン（梅山豚）
八戒のような顔つきで、
子供のときから顔にシワがある。
中国上海南部原産。

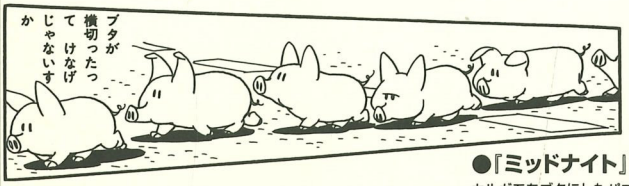
ブタの絵を描くと、どうしても三枚目で、間抜けな笑いものになってしまう。実にかわいそうである。〝ブタに真珠〟などという言葉まである。そのうえ、みんなヒトに食われてしまう。天寿をまっとうするブタは、ほとんどいないに違いない。そういう私もトンカツは大好物だ。ブタが、肉を採るためにイノシシから改良されてから一万年もたった。

手塚治虫がそんなことを考えたかどうかはわからないが、『ミッドナイト』や『おれは猿飛だ！』に出てくるブタも三枚目的である。私が調べたところ、手塚漫画の中のブタの役柄は大同小異で、ほとんどがユーモラスに描かれている。ちょっと変わっているのは『ぼくの孫悟空』の八戒くらいである。しかし、八戒は純粋なブタというよりは、人間に近いブタの妖怪であるので、ここでは省いた。また、『どろんこ先生』のブー子にも悲哀を感ずる。

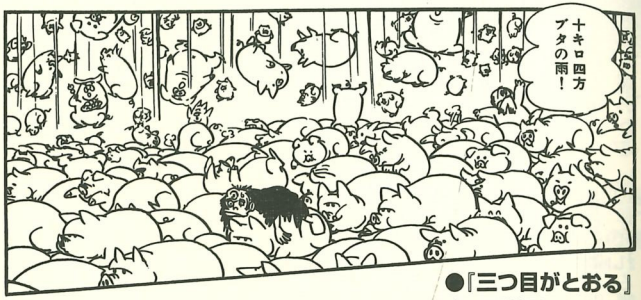
可愛いブタはいないものかと探してみたら、手塚作品以外に見つけることができた。一九七三年頃に公開されたアメリカのアニメーション「シャーロットの贈りもの」の子ブタ、手塚治虫も絶讃したディズニーの「クマのプーさん」の子ブタなどである。それぞれにブタとしてはよい役で、なかなか可愛い。

その逆に悪いブタもいる。手塚治虫の友人でもあった森やすじの描いた東映の「白蛇伝」の黒い大ブタ、近いところでは宮崎アニメ「紅の豚」のブタ、あれも悪くはないが、キザでわざとらしかったと思う。

●『ジャングルタロ』
ブタを逆から読んだ〝タブー〟という名の三枚目のブタ。



●『ミッドナイト』
カルガモをブタにしたパロディ。



●『三つ目がとおる』
ブタの雨が降るというギャグ。

●『ふしぎ旅行記』
なぜか手塚漫画の中のブタはモブ・シーンが多い。

イノシシ

イノシシの親子
イノシシの子供はウリボウと呼ばれる。

イノシシは畑を荒らしたりもする。

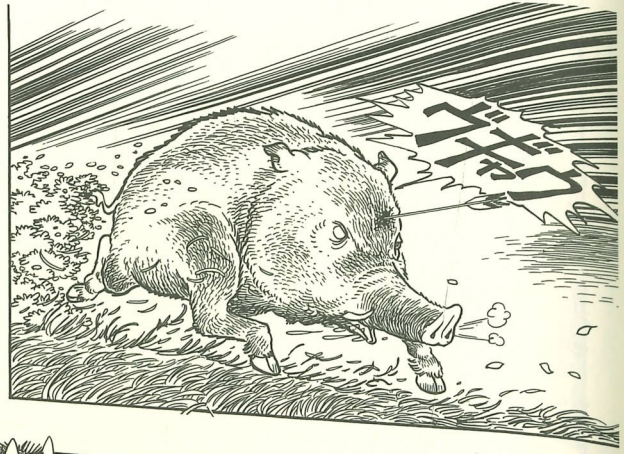
ここに挙げたイノシシは、みなニホンイノシシである。大型の獣の少ない日本では、クマに次ぐ大きさであるが、クマよりずっと人間の暮らしに密着してきた動物であろう。

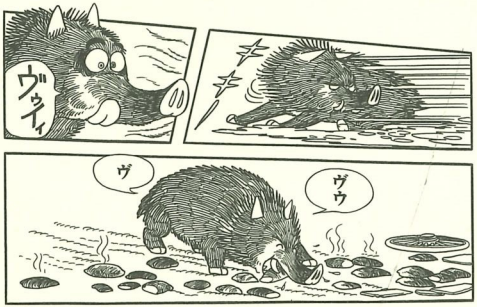
ともにイノシシが描かれている『火の鳥―黎明編』と『七色いんこ』では、ずいぶんと絵のタッチが違う。手塚治虫が、ストーリーものとギャグもので描線を変えていたのがよくわかる。

私が、手塚治虫の絵について驚いたことの一つは、きわめて特殊な動物以外は、だいたい資料を見ずに暗で正確に描いていたことだ。各動物の特徴的な形はすべて頭の中にあったようで、みな、うまくデフォルメされていた。手塚治虫が絵を描いているのを、そっと後ろから覗いたことがあるが、まさにスラスラと描いていて、まるでマジックのようなのだ。見られているとわかると、さっと手で隠すようなこともあり、あれほどの大家でも、人に見られるのは嫌なんだなと思ったりした。結構シャイなのである。

食通といわれる人は、ブタよりイノシシのほうが美味いという。そこで、ある業者がイノシシを飼育し、次々に子を産ませようとした。ところが、三代目、四代目になると、だんだんブタに近づいてきてしまい、結局うまくいかなかったという。人間が飼育すると、イノシシはブタになってしまうのだが、このことはほとんど知られていない。どちらも染色体数が四〇でXY型、イノブタと呼ばれる雑種は容易にできる。

●『火の鳥―黎明編』
このシーンは、1978年に東宝で映画化されたとき、アニメと実写が合成された。





●『陽だまりの樹』
文字通りの猪突猛進。

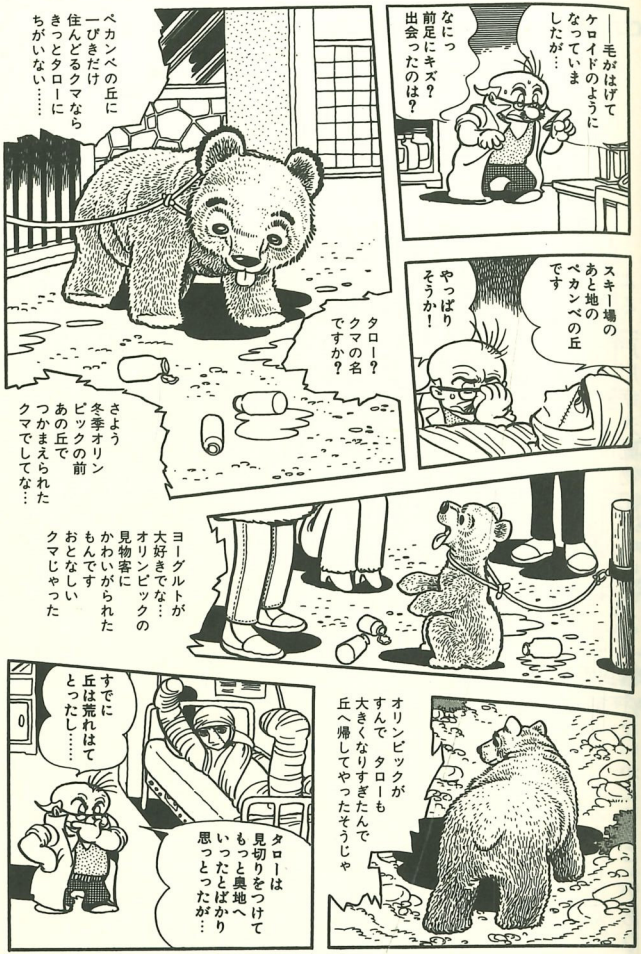
●『七色いんこ』 イノシシの性格がよく表れている。

ヒグマ

手塚治虫はクマにかなり関心を持っていて、北海道の〝クマ牧場〟などにも行き、獰猛といわれるヒグマの中にも、温厚な性格な奴と、そうでない奴がいたということを私に語ってくれた。「北海道の旅」というイラストレーションも描いているが、この経験によって、『シュマリ』や『ブラック・ジャック』の「一ぴきだけの丘」のエピソードに、リアリティーを醸し出している。

ヒグマ（エゾヒグマ）は日本の動物では最大のものであるが（体長二メートル二〇センチ、体重三〇〇キロ）、クマの仲間としては中位である。世界最大のアラスカヒグマ（コディアクグマ）は三メートル、七八〇キロに達するし、ホッキョクグマも大きなものは二メートル五〇センチ、七〇〇キロほどになる。暖かい地方のクマでは、インドのナマケグマが一三〇キロ、マレー半島のマレーグマは六〇キロと一番小さく人間並み、本州のニホンツキノワグマは一〇〇キロくらいである。これも、〝同種でも緯度が高くなるほど大型化する〟という「ベルクマンの規則」にかなっているが、この「規則」には例外も多い。

クマは幼児用の絵本などで、可愛く童顔に描かれ、親しみやすい〝善〟として語られることが多い。以前、動物園の檻の前でクマを撫でようとした子供が指を噛み切られる事件があったが、そのため〝絵本教育の功罪〟などと報道された。どんな可愛らしい顔をしていても、クマは大猛獣なのである。



●『ブラック・ジャック――一ぴきだけの丘』ヒグマは日本では北海道に分布する。

クロクマ

ツキノワグマの親子

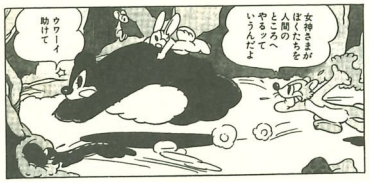
『山太郎かえる』『シュマリ』ではヒグマが、『奇蹟の森のものがたり』ではクロクマをマンガチックにしたものが描かれている。その他、ナマケグマが出てくる『漫画生物学』、『勇者ダン』や『原人イシの物語』など、クマの活躍する手塚漫画はとても数多い。『そらとぶラビ』などの絵本作品にもヒグマが登場しているように、クマは気のいい役どころが多い。

クマは日本では唯一の大型獣ということでインパクトがあるし、北海道開拓時にはヒグマによる悲惨な事件も多発したので、文学作品においても、いろいろな作家がとりあげている。

動物文学の第一人者、戸川幸夫による『戸川幸夫動物記』の中の「羆の村」や「羆風」は、北海道に入植した村での物語で、後者はラジオドラマ化もされた。音だけのドラマだとわかっていても、恐ろしさが十分に伝わってきて、戦慄を覚えたものだった。

吉村昭の『熊撃ち』『羆』もヒグマの話で、日本で恐ろしいクマといえば、ヒグマということになっているようである。しかし、たとえばツキノワグマだって、自然の状態で出くわしたら相当な恐怖を感じるであろう。

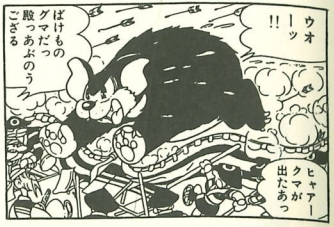
北海道開拓の頃は、牛馬を襲ったり、人間を殺して食ったりと、暴威をふるったヒグマであるが、ヒグマにいわせれば、自分たちの領地に人間が勝手にズカズカ入り込んできたのではないかということであろう。



●『奇蹟の森のものがたり』
初期のディズニー的な表現である。

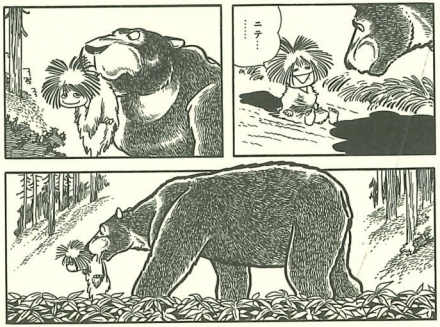
●『山太郎かえる』
これはヒグマである。

●『おはようクスコ!』
可愛い表情のクマである。



●『漫画生物学』
クマが人間を襲う描写である。

●『シュマリ』
ヒグマとクマザサは、なぜかよく似合う。



ジャイアントパンダ

レッサーパンダ
〝炎のネコ〟といわれるが、
性質は静かでおとなしい。

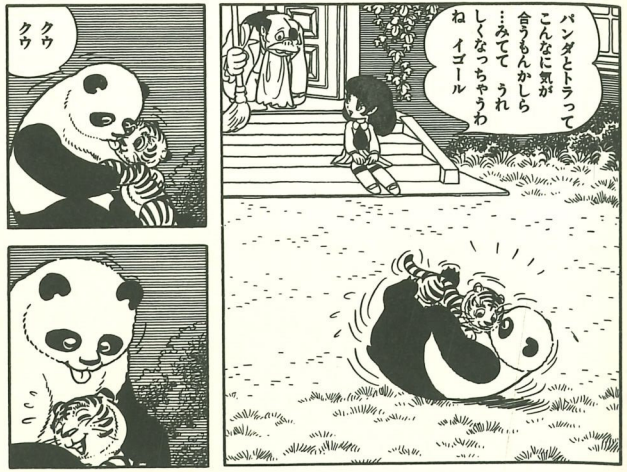
ジャイアントパンダ
可愛いのは
レッサーパンダだが、
面白いのは
ジャイアントパンダであろう。

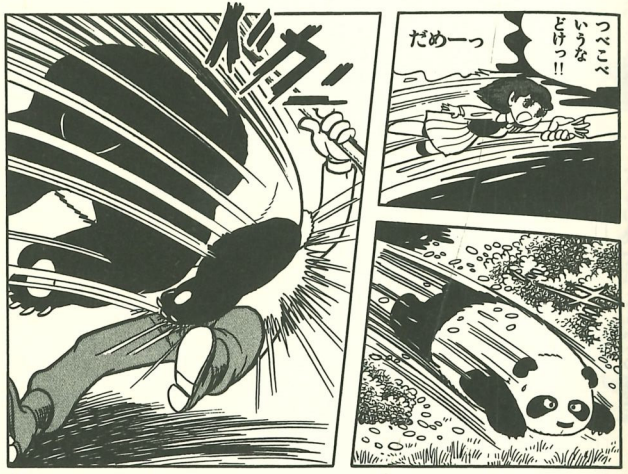
ジャイアントパンダは昔、アライグマ科だったが、現在はパンダ科として独立している。和名はイロワケグマだが、中国より贈られた頃から〝パンダ〟が通り名となった。

パンダ科は、他に赤褐色で小型のレッサーパンダがいるだけで、わずか二種しかいないが、子供たちの人気は抜群である。それは、特異な毛皮、ぬいぐるみのような体つき、愛嬌のあるユーモラスな動きが、人間には可愛らしく映るからだろう。

タケやタケノコが主食とされていて、事実よく食べるが、鳥や魚、ときにはネズミなどの小型の哺乳類も食べるという。可愛らしく見えても、やはり食肉目で、怒ればかなりの力を出す猛獣なのである。イギリスの動物園では、気に入らない飼育係を振り払い、骨折をさせたこともあった、とモノの本にある。

それはさておき、珍獣であることに変わりはなく、世界の三大珍獣というのは、ジャイアントパンダ、オカピ、コビトカバであるという。これにシカの仲間のシフゾウ（四不像）が入ると、四大珍獣となる。シフゾウは、すでに野生状態のものは絶滅し、動物園だけで繁殖している。ジャイアントパンダはそこまでひどくないが、中国四川省西部、新疆ウイグル自治区東部の山岳地帯、東チベットなどに生息するもの全部あわせても、三〇〇頭内外であるらしい。中国政府は第一等の保護動物にランクし、飼育下での繁殖にも力を入れているので、その数は回復に向かいつつあるという。





●『ドン・ドラキュラ』 手塚漫画へのジャイアントパンダの出演は、とても珍しい。

オカピ／キリン

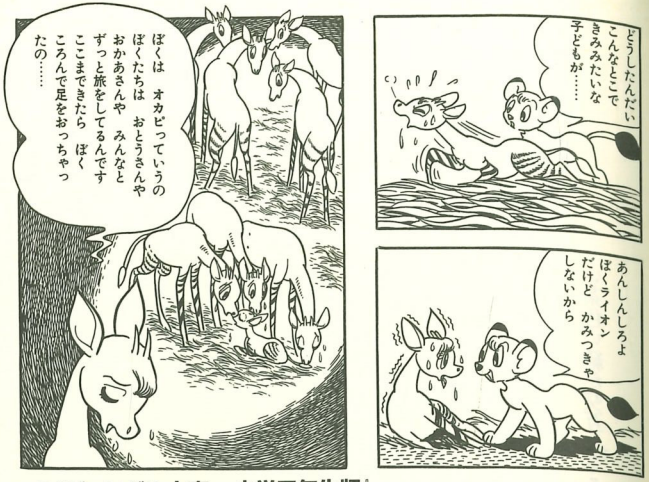
オカピはレイヨウのような形態をしているが、キリンの仲間である。偶蹄目キリン科、これがオカピの戸籍である。最も珍しい動物の一つとされていて、手塚漫画の中でも最も稀な動物であり、出演は、この『ジャングル大帝―小学三年生版』のみである。

オカピは、紫色がかった濃茶色の体、前肢、後肢に白い縞のある美しい配色、そしてビロードのような皮膚を持つ。

珍しい動物ではあるが、パリやドイツの動物園で飼われているので、自然状態のものではないけれど、実際に見ている日本人もいる。その人の話によると、オカピの子に出会った瞬間、その美しい神秘的な瞳に釘付けとなり、神々しいまでの昂揚感を感じたという。これは、オカピを見た多くの人々が一様に感じる不思議な感情であるらしいとのことだ（二〇〇三年現在、日本でも「よこはま動物園ズーラシア」で見ることができる）。

それは、オカピが発見されたのが二〇世紀に入ってからで、しかもキリンの祖先、サモテリウムなどに近い〝生きた化石〟というくらい古い型の動物であるということにも関係がありそうだ。オカピは、一九一九年にベルギーのアントワープ動物園で初めて公開され、一般の人々にも認知されることになった。

キリンについては、手塚作品のところどころに出てはくるが、点景的な脇役ばかりで、とりたてて印象的なものはないようである。



●『ジャングル大帝―小学三年生版』
日本人で実際にオカピを見た人はほとんどいないほどの珍獣である。

●『ジャングル大帝』
手塚漫画でキリンが単独で活躍するシーンは、意外にもほとんどない。

シマウマ

シマウマの種による縞の違い

『ブラック・ジャック』『ぼくの孫悟空』『ジャングル大帝』……それぞれの漫画の中のシマウマは、『ぼくの孫悟空』のシマウマが少々擬人化されているだけで、それほど絵柄的には差がない。シマウマが縦横無尽に活躍する漫画というものはなかったので、平均的な描き方をされたのだろう。

哺乳類は一般的に、鳥類や爬虫類と比べた場合、体色の美しさについては見劣りするものであるが、その中でもキリンやオカピ、トラ、そしてシマウマは美しい動物といえる。

手塚治虫の描いたシマウマは、どれもグラントシマウマという普通種であるが、倍くらいの量の縞を持つグレービーシマウマや、黒い縞と細い茶色い縞が交互にあるというチャップマンシマウマは、実に美しい。

シマウマの話をするとき、よく出てくるのが、〝白と黒のどちらが縞なのか？〟ということである。私は何かの本で読んだのかウロ覚えで、黒地に白い縞というように思っていたのだが、今回、この項目を書くにあたり、いろいろ調べてみたら、この答えは×。正しくは、〝どちらとも言えない〟のであった。

というのは、黒い縞の部分の地肌は黒く、白い縞の部分の地肌は白っぽいのである。つまり毛を刈っても、薄い白黒の縞模様が残るのだという。しかし、一九世紀に絶滅したクアッガというシマウマは、頭から頸だけに黒い縞があり、残りは白っぽかったから、白い部分が地色であるという人もいる。

●『ブラック・ジャック―ちぢむ!!』

これは、かなりリアルな表現である。

●『ぼくの孫悟空』

シマウマが多少擬人化されている。

●『ジャングル大帝』

迫力あるシマウマのモブ・シーン。

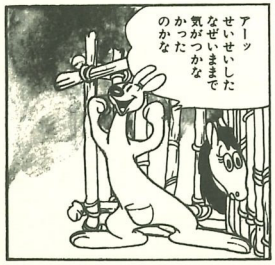
カンガルー

『化石島』『よろめき動物記』『ブラック・ジャック』と、カンガルーが描かれている。それぞれイラスト的、漫画的にと描き分けられているが、ちょっとした脇役だ。

カンガルーは有袋類という古いタイプの動物で、オーストラリア、タスマニア、ニューギニアのみに生き残っている。オオカンガルーなどは、イヌのような顔つきで頭がよさそうだが、実際には知能が低い。これは有袋類一般にいえることで、以前「野生の王国」というテレビの動物番組でフクロネコを見たとき、自分のすぐ右側に獲物のウミワシがいるのに、左側の宙を手でかき、にらんでいるのだ。そのオバカさんぶりに、視聴者の私もテレビの解説者も、あきれるしかなかった。

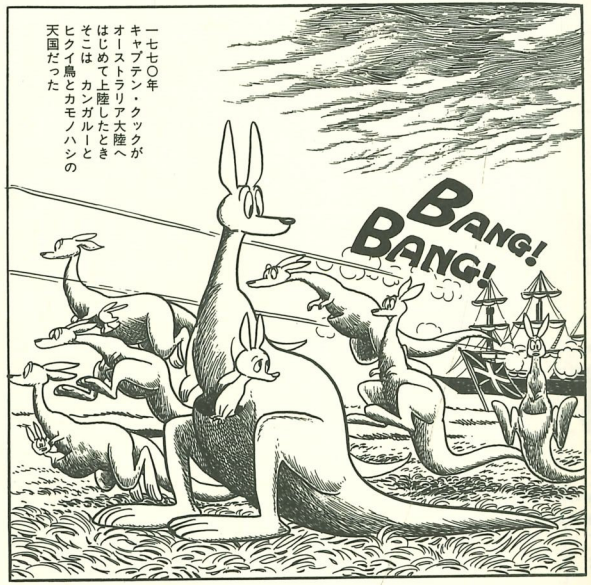
カンガルーは、我々が想像しているよりも繁栄していて、砂漠性のものから樹上性のキノボリカンガルーまで、五五種もいるというから大家族だ。大型のアカカンガルーだと体長一六六センチ、尾長一〇七センチと、人間くらいの大きさがある。小さいほうでは三〇センチのネズミカンガルーまでいて、実に多彩である。

カンガルーの面白い習性としては、オス同士が前肢をからませ、体重を尾で支えて、後肢を使って腹を蹴り合う、俗にいうボクシングをすることだ。これを闘争であるとする資料と、楽しんでやっているとする資料とがあって、私にはどちらが正しいのかわからないが、それは見物であろう。



●『化石島』
擬人化されたカンガルーである。

●『よろめき動物記―カンガルー』
大人が対象読者なので、線を省略したシニカルなギャグ漫画である。



●『ブラック・ジャック―ディンゴ』
オーストラリアといえば、やはりカンガルーであろう。

オオアリクイ

オオアリクイ
アリ塚を襲いシロアリを食べる。
尾を含めると全長2メートルを超す。

コアリクイ
オオアリクイと違って尾の毛が短い。
中南米の森林に生息する。

オオアリクイは異形の動物である。見方によっては実に面白く不可思議で、なかなか味のある動物だと思う。

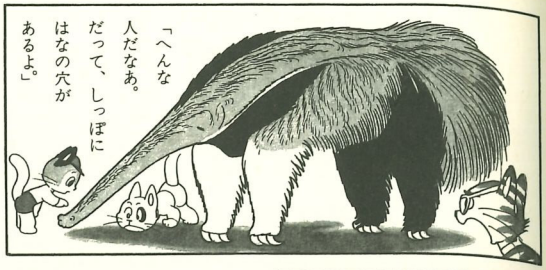
貧歯目といって、歯がないか、あっても、ごく貧弱な歯しか持たない動物の仲間である。とても漫画にはならないと思われるが、こうした脇役も、手塚治虫はユニークな動物として登場させてしまうのであった。

主食のシロアリやアリをなめとるために、その長い鼻づらと、さらには六〇センチもある長い舌をアリの巣に差し込むのである。舌のひと振りで何十匹ものアリがくっつき、それから長い舌をすっと口に引っ込めて丸飲みにする。これを何度も繰り返して、一日に三万匹ものアリを食べるのだ。

三〇センチもある細長い顔、体長ほどの長さのあるフサフサの尾、そして鋭いカギ爪を持つ。寒さに弱い動物で、その長い尾は、保温の働きを持っているという。

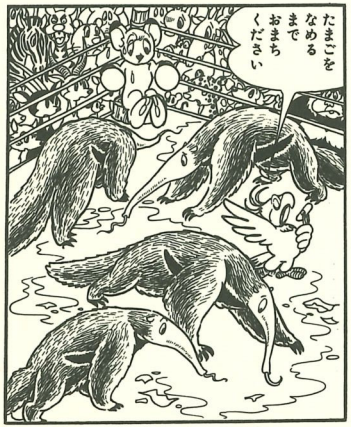
作曲家の團伊玖磨氏はオオアリクイの姿に惚れ込み、ペットにしようとしたことがあるが、思ったよりずっと力が強く、とてもペットにはならないと、著書の中で語っている。

アリクイの仲間は三つの種に分けられる。小型のヒメアリクイ、樹上に登るコアリクイ、完全な地上棲のオオアリクイで、どれもが上手に棲み分けをしている。すべてが同地域の中南米に生息しているが、『ジャングル大帝』では、小学生版ということで童話仕立てになっており、地域性は無視されている。



●『漫画生物学』
アリをなめとる様子を描いている。

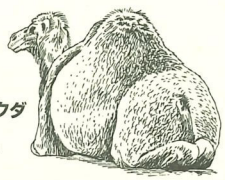
●『チッポくんこんにちは』
長い鼻づらが尻尾と間違えられている。



●『ジャングル大帝―小学三年生版』
アフリカにはオオアリクイはいない。

ラクダ

ラマ
ラクダの仲間である。



ヒトコブラクダ
独特の後ろ足のたたみ方をする。

手塚漫画の中のラクダは数少ないが、『ふしぎな少年』でフタコブラクダ、『大空魔王』でヒトコブラクダが描かれている。

実際、ラクダは我々のふだんの生活にほとんど縁がない。わずかに、童謡「月の沙漠」のラクダの姿が頭に浮かび、映画「アラビアのロレンス」の、ラクダがえんえんと歩く美しいシーンを思い出し、〝キャメル〟という外国煙草は、その名のとおり、ラクダが意匠として描かれていたなと気づく程度である。

ラクダに乗ると酔う、といわれるが、これは、側対歩というラクダの特殊な歩き方のせいらしい。片側の前足と後ろ足をほとんど同時に運ぶため、揺れが激しくバランスがとりづらいので酔うというわけだ。

ラクダは体を揺すって走るので、高速で走るのには適さないが、低速ではゆさゆさとユーモラスに走る。私は実際に、中国でバスに乗っているとき、ラクダの走りを真後ろから見たことがある。もちろん初めての経験で、それはめったに見られるものではないが、そのおかしいことといったらなかった。ラクダは一生懸命走っているのだが、その足つき、首や背、腹の動きがくねってしまっていて、ぐにゃりとした着地のタイミングともあいまって、ラクダには悪いが、滑稽で笑わずにはいられないのであった。バスの中には若い中国人スタッフが何十人も乗っていたが、大爆笑の渦となってしまった。言葉は違っても、これは誰が見ても面白いものであったのだ。

●『ふしぎな少年』
手塚漫画の中のラクダは、ほんの脇役にすぎない。

●『大空魔王』
フタコブラクダはヒトコブラクダ同様、家畜化されたものである。

バイソン

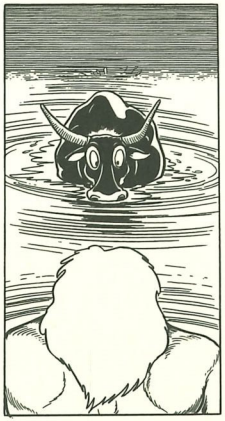
手塚漫画の中のウシ科の出演は実に数多く、動物出演の中のベスト5に入るのではないだろうか。ウシ科というのはレイヨウも含むので、『ジャングル大帝』のレオの友人、トミーもトムソンガゼルだから、ウシの仲間なのである。

『荒野の弾痕』『サボテン君』『珍アラビアンナイト』には、それぞれバイソン（バッファローともいうが、これは俗称）が登場するが、その描き方にはそれほど差はない。

バイソンとは、要するに野牛であるが、ヨーロッパバイソンとアメリカバイソンの二種が存在する。両者とも一時は絶滅の危機に瀕していたことが共通しているが、アメリカバイソンの状態は特にひどかった。一説によれば、最盛期にはアメリカ西部に一億頭近い数がいたといわれるが、白人が西部に入り込んでから一〇〇年の間に、わずか数十頭にまで数が減ったという。当時、英雄といわれたバッファロー・ビルは、たった一人で七ヵ月間に三三〇〇頭ものバイソンを撃ち殺したという。バイソンは肉や皮に価値があり、金になったのである。

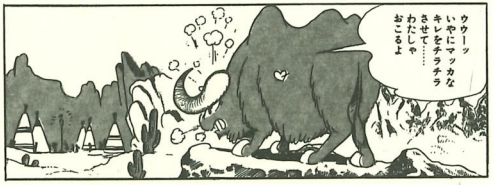
合衆国政府が保護に乗り出したのは二〇世紀に入ってからで、そのかいがあって、アメリカ、カナダ、アラスカで、計三万頭にまで数を戻した。『サボテン君』の中のバイソンは、まだ数が多かった、のどかな時代のものであると思われる。

ヨーロッパバイソンとアメリカバイソンは、その姿は非常によく似ている。

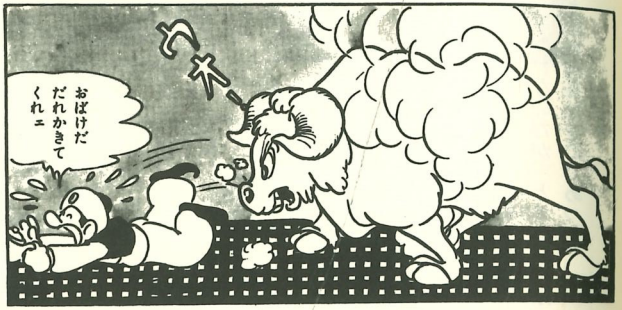


●『ブッダ』

●『荒野の弾痕』

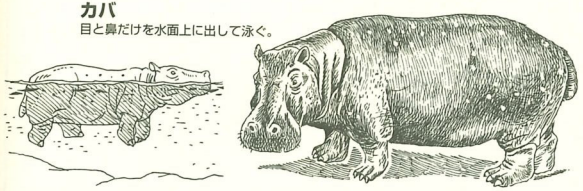


●『サボテン君』



●『珍アラビアンナイト』

カバ



カバ
目と鼻だけを水面上に出して泳ぐ。

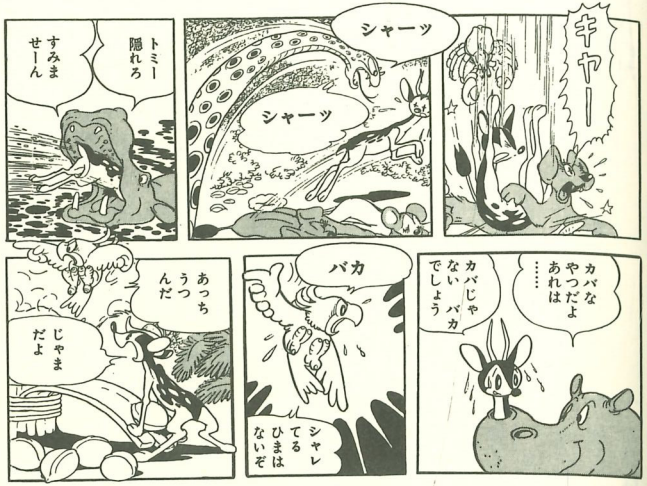
カバを一言でいってしまえば、〝ユーモラス〟であろう。動物園で水から上がって耳をピクピクさせている姿などは、実に楽しい。であるからか、漫画の中でも人（カバ？）のよい三枚目的な扱いであるのは順当なところか。手塚漫画の中でも同じような配役である。

ところが、カバは深刻な面をも持ち合わせている。なんと、血の汗を流すというのである。無論、それは血のように見えるピンクの液体で、実際には血ではない。カバの皮膚は乾燥に弱く、皮膚を守る皮脂腺、体温を調節する機能を持つ汗腺がないかわりに、ピンクの液体を出すのだ。これがカバの皮膚を守っていて、色素が沈着すると、赤い血のような色に見えるというわけなのである。

太った体にカエルのような顔、四肢が短く不格好な体型であるが、その気になれば、時速五〇キロメートルというスピードで走ることができる。カバに攻撃を仕掛けられたら、人間は逃げ切れない。人間は、カール・ルイスやモーリス・グリーンのような超スピードの男たちでも、ようやく時速四〇キロメートルで、それも二〇秒間と続けては走れない。

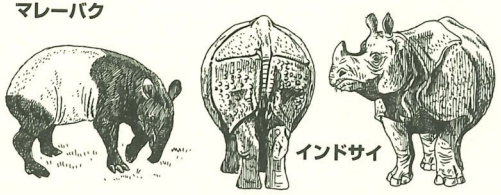
手塚治虫はカバを三枚目的に描くと書いたが、たった一度だけ、迫力のある堂々たるカバを描いたことがある。それは、アニメーション『聖書物語』の中の「ノアの箱舟」のエピソードで、カバが単に画面を横切るだけなのだが、とてもリアルで威厳に満ちたものであった。

●『ジャングル大帝』
カバは物語の彩りとしての出演が多い。



●『三つ目がとおる』
ここでもカバは三枚目的な扱いである。

バク／サイ



バクもサイも出演があまり多くないので、同じ項目で取り上げた。両者とも奇蹄目ということでは共通で、遠い親類のようなものでもある。

『よろめき動物記』は大人もののギャグ漫画で、洒落たタッチでバクが描かれている。扉絵の黒色と白色の体色のバクはマレーバク、本文中のバクは単色なので、アメリカバクかヤマバクであろう。

バクは夢を食うと昔からいわれているが、動物関係のいろいろな資料を調べてみても、その理由はよくわからない。動物園にいるバクを見ていると、細くて小さな目をしょぼしょぼさせて、ウロウロと歩きまわるばかりで、夢とは全然つながらないのだ。

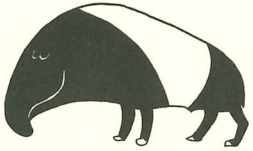
サイは『ジャングル大帝』にたくさん出てきて、それなりの活躍をするのだが、それほど印象的ではなかった。

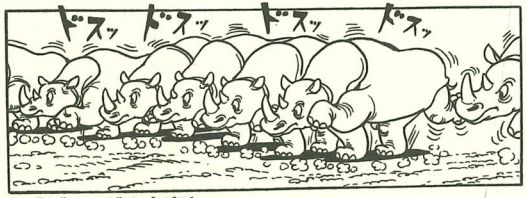
一九九六年に公開されたティム・バートンのファンタメーション「ジャイアント・ピーチ」は、暗い戦争の時代を〝黒いサイ〟に象徴していて、そのサイは大変恐ろしく不気味な存在であった。

ファンタメーションというのは、人形アニメにCG（コンピューター・グラフィクス）を加えたもので、見る側に不思議な効果をもたらす映像である。

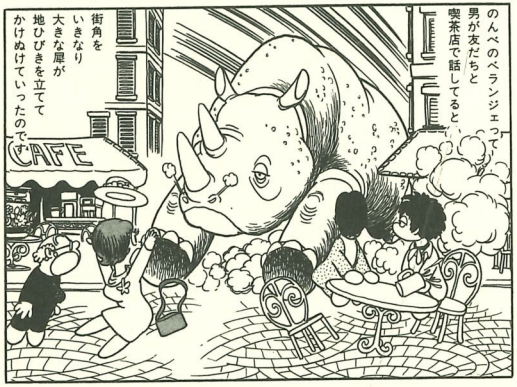
もしも手塚治虫が見たならば、きっと喜んだに違いない。近頃、これほどアニメーションの精神を感じた作品は珍しい。

●『よろめき動物記―バク』
バクの出演は非常に数少ない。





●『ジャングル大帝』
サイはそれほど印象に残らない。



●『七色いんこ』 サイは4属5種があるが、いずれも体が大きい。

ゾウ

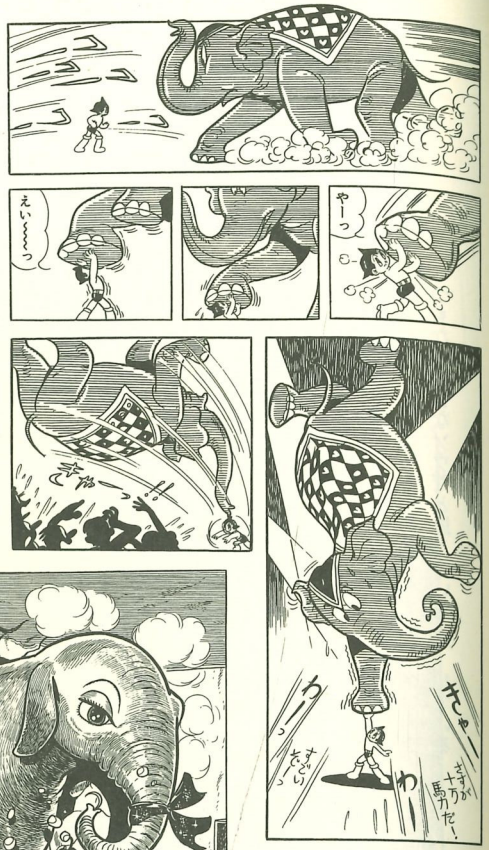
手塚漫画の中のゾウには、アフリカゾウあり、インドゾウあり、マンモスありと、あらゆるゾウが描かれている。

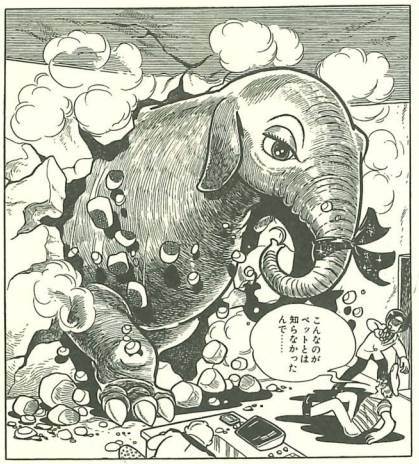
大変な人気者だけに、ゾウのエピソードはとても多い。第二次大戦の末期、上野動物園で餓死した〝かわいそうなゾウの話〟。戦後、インドのネール首相が日本の子供たちに贈ってくれたインディラの話。多摩動物園に初めてやってきたアフリカゾウのエピソード等々。

ここで、私の弟を悔しがらせたゾウの話をしたい。私の弟は子供の頃から大変な動物好きで、また、かなり詳しかった。それは、弟が小学校二〜三年生のときのことだった。理科の時間にゾウの種類を言いなさいとの先生の問いに、「アフリカゾウ、インドゾウ、マルミミゾウ」と答えたところ、その若い男の先生は激怒した。「でたらめを言うな！　マルミミゾウなんて聞いたことないぞ」先生のあまりの怒号に、弟は黙るしかなかったという。毎日、動物図鑑を見ているような子供は、普通の大人より、動物に関してはずっと詳しくなっているものだ。マルミミゾウというのは、体高二・五メートルほどのゾウで、確かに動物図鑑にも紹介されている。アフリカゾウの亜種という説もあるが、西アフリカの奥地に生存し、コビトゾウとも呼ばれるものである。

三〇年以上たった今でも、弟は悔しがっている。きっと手塚治虫のような先生だったら、頭から否定するようなことはしなかっただろう。

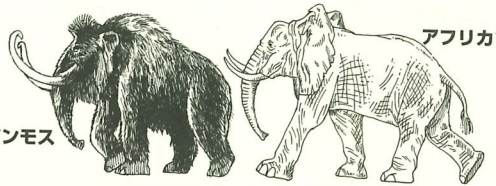
●『アトム今昔物語』
1967年、産経新聞に連載された〝アトムのその後〟。これはアトムとインドゾウの力比べ。





●『ノーマン』
この手のゾウのデフォルメは、江戸時代以前の作品に多く残されている。

マンモス



マンモスとアフリカゾウの大きさの比較
平均的な大きさのマンモスは、アフリカゾウと同じか、むしろ小さいくらいである。

手塚漫画の中のマンモスといえば、即座に思い浮かぶのが『ジャングル大帝』の〝オフクロさん〟であろう。また、『0(ゼロ)マン』や『メトロポリス』にもマンモスがちょい役で出ており、いずれも〝超巨大な大昔のゾウ〟としての出演である。

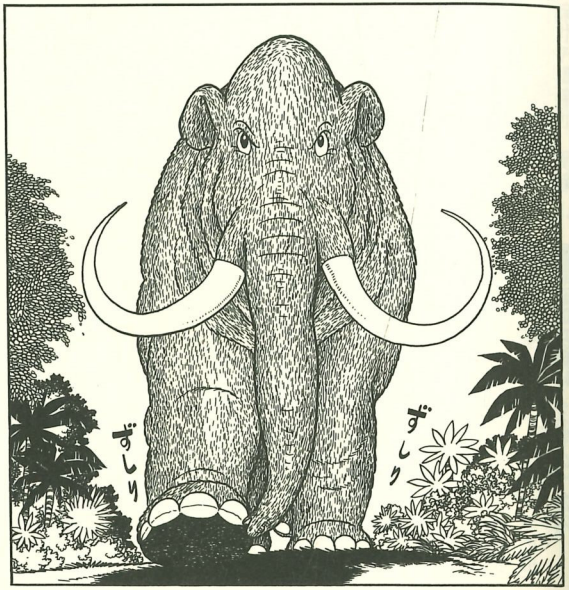
マンモスという言葉は、大きいものの象徴としてよく使われる。〝マンモス都市〟や〝マンモスタンカー〟などが代表的なものであろう。しかし、シベリアの永久凍土(ツンドラ)層からときどき発掘されるマンモスの全身骨格を見ると、大きいものでも体高四メートルと、大型のアフリカゾウより小さいくらいだ。

私は子供の頃、マンモスはアフリカゾウの一・五倍くらいあり、とてつもなく大きなゾウだと思っていたのだが、そうではなかったことを知って、がっかりした覚えがある。それでもマンモスがすごいのは、その一対の牙であろう。鼻の前で交叉し、長さ五メートルになるものも発見されており、全動物の中で最大の牙である。

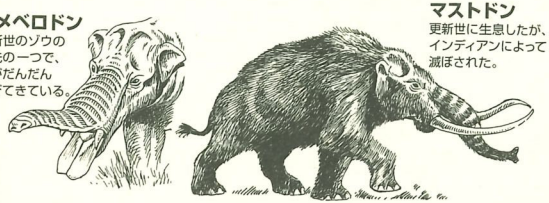
マンモスは、長すぎた牙が原因で滅びたといわれたことがあるが、その説は、どうも怪しいらしい。牙は、実際の生活や闘いには役に立たないが、メスに対するディスプレイという役割を果たしていたのではないだろうか。マンモスが滅びたのは、人間の殺戮(さつりく)がマンモスの繁殖力を上まわり、種の維持を不可能にしたのではないかと、『ジャングル大帝』の監修者・小原秀雄(おばらひでお)博士は推理している。

●『ロマン』
氷河の中から現れたマンモス。

●『ジャングル大帝』
大人になったレオの
母親的存在のマンモス〝オフクロさん〟。



メガテリウム



『火の鳥―未来編』に描かれているナマケモノの祖先、メガテリウムは、恐竜の時代が終わり、二四〇〇万年前の中新世から鮮新世の頃に、南北アメリカに栄えた巨大な哺乳類である。体長が六メートルもあったというから、今のゾウより大きい動物であり、それなりの迫力はあったろうと思われる。

時代によって動物がどんどん変わっていくのも、広義のメタモルフォーゼであるから、動物の進化の変遷を描くのは、手塚治虫にとって楽しみでもあったようだ。

ゾウの祖先、ダイノテリウムがナウマンゾウに進化するのに、四〇〇万～五〇〇万年かかっているが、これは地球史的には、それほど長い時間ではない。中新世や鮮新世、更新世のポイント的、象徴的な動物を、作品は違えど、これほどうまく描き分けて出演させているのは、手塚治虫だけであろう。

ナウマンゾウは日本に存在したゾウとして有名で、化石が発掘された長野県の野尻湖は、そのメッカとなった。一九七五年の第六次発掘には、三〇〇〇人を超える小中学生が参加したという。

このニュースを、子供好きで博物好きの手塚治虫が見逃すはずはない。だから、化石を大の趣味とする少年の話『ブラック・ジャック―デベソの達』は、このニュースをヒントにしたのかもしれない。

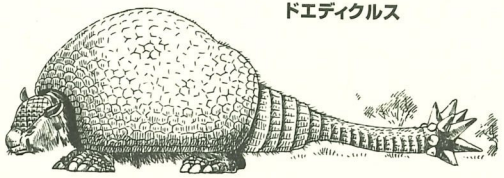
ナウマンゾウの名称はドイツの地質学者、エドモンド・ナウマンの地質調査の功績によるものである。

●『火の鳥―未来編』
ナマケモノの祖先のメガテリウムや
ゾウの祖先のダイノテリウムが描かれている。

●『鉄腕アトム―アトム還る』
これはサイの祖先であるブロントテリウム。

●『ブラック・ジャック―デベソの達』
ナウマンゾウは日本各地で化石が発見されている。

グリプトドン



『漫画生物学』のグリプトドンと『鉄腕アトム―アトム還る』のドエディクルス。これらは地球史的には比較的最近、三〇〇万年前から一万一〇〇〇年前の更新世と呼ばれる時代に生存していた哺乳類である。

グリプトドンは体長一・五メートルほどの小型のものもいたから、これは現世のオオアルマジロとほぼ同じ大きさである。

『鉄腕アトム』に出てくるドエディクルスは、グリプトドンと同じような形をしているが、ずっと大型で、体長四・五メートルもあった。体が甲羅によって保護されていて、さらに尾の先は骨質で棍棒のような形態になっている。この尾の先の部分で敵を攻撃していたようである。

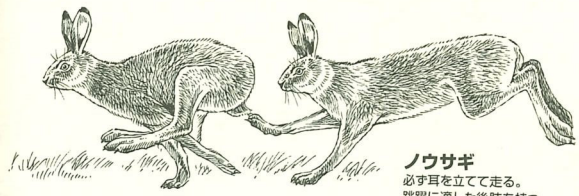
この二種は、ほぼ同時代に存在したものだが、よく似た二種の動物を、手塚治虫は微妙に描き分けている。その違いは、甲羅状の背のうろこが異なっているということだ。グリプトドンのほうは、ハチの巣のような六角形のうろこで構成されていて、一方、ドエディクルスのほうは長方形である。これは、古生物の専門の図鑑を見ていて気づいたのであって、それまでは、私も同じ動物を描いているのだと思っていた。

同じような動物でも、なるべく多くの種を出してやろうと、手塚治虫が考えていたのかどうかはわからない。しかし、似ているものを上手に描き分ける作業を、苦もなくやってのけている。アニメーションをつくっているときにも、これと同じようなことが多々あったものである。

●『漫画生物学』
全長1.5～2.5メートルのグリプトドン。アルマジロの先祖である。

●『鉄腕アトム―アトム還る』
更新世の哺乳類であるドエディクルスは恐竜ではない。全長4.5メートル。

ウサギ



ノウサギ
必ず耳を立てて走る。
跳躍に適した後肢を持つ。

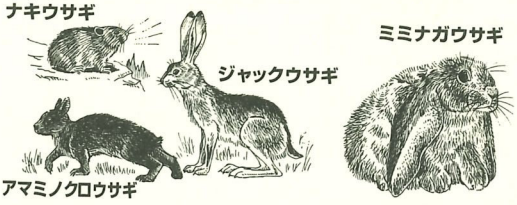
ウサギ目は、恐竜たちが我が世の春と地上を闊歩していた一億年前の白亜紀に祖先を持つ。草食性で擬反芻を行い、一般に耳が長く跳躍に適する後肢を持っている。

世界に五八種いて、哺乳類としては高等とはいえないが、『地底国の怪人』『アバンチュール21』に出てくるウサギの耳男は天才ウサギなのであった。『アバンチュール21』は一九七〇年に描かれたものだが、これは一九四八年に描かれた『地底国の怪人』のリメイクなのである。人物の名前やキャラクター、メカニックは現代的に描き改められているが、ラストシーンで耳男が死ぬ場面は、両者とも同じように感動的である。これを見て泣き出す子供が多くいたというのもうなずける。しかし、子供向けの話にアンハッピーな結末を持ってくるのはおかしいという人がいて、どういう基準でいっているのか知らないが、私は「バカヤロー」と言ってやりたい。

それは〝内容に哲学的な深さを持たせ、人物の配置や構成に文学的な広がりを加える、必ずしも笑いは必要なく、悲劇性、カタストロフィーも拒否しない〟という手塚治虫の作家性が理解できない人なのである。日本の教育が〝生〟のみを教えて、〝死〟を教えないからかもしれない。『地底国の怪人』が、漫画を玩具的で滑稽なものから、多彩な表現が可能なものへと風穴を開けたのである。悲劇的結末のストーリーは、手塚治虫の子供漫画としては、この作品が最初のものであった。

●『地底国の怪人』(上)
●『アバンチュール21』(下)
人間になれなかったウサギの耳男の感動的なラストシーンを比較してみた。

ミミナガウサギ



ウサギも手塚作品に頻繁（ひんぱん）に出演した動物のうちの一つである。昨今では、擬人化された動物の漫画は、幼児向けのごく一部に限られているが、当時は『漫画大学』のガンマンのウサギなど、人間型の動物も多かった。

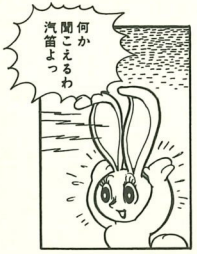
ウサギは、漫画の他にアニメーションの出演もいろいろとあった。手塚治虫最晩年のアニメーションのうちの一つ『聖書物語―ノアの箱舟』に出てくるミミナガウサギは、特に印象が強い。悪さをするロコというキツネを救おうと、二匹のウサギが我が耳を下に向けると、ロコは舟から落ちまいと、その耳を必死につかむ。ゾウの助けも借りて、ロコは引き上げられるが、自分よりも重いキツネを引っ張ったため、ウサギの長い耳が、さらに二倍くらいのナガミミになってしまうのであった。この二匹のウサギの表情がなんとも可愛く、その部分は、手塚治虫本人の作画なのであった。

一九八七年のこと、スタッフでウサギを飼っている人がいた。ところが、飼うのが面倒くさくなったのか、「捨てちゃおうかな」などと言っていた。それを聞いた手塚治虫は激怒した。

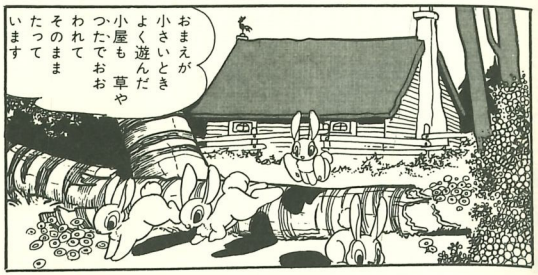
「なんてことを言うんですかっ！」

人間の都合で生命を弄（もてあそ）ぶことが許せなかったのである。飼いウサギがノラウサギになって、都会で生きていけるはずがないのだ。その後、このウサギは他の動物好きなスタッフが引き取り、一件落着したのであった。

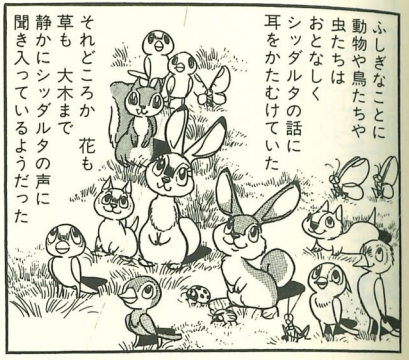
●『漫画大学』



●『ジャングルタロ』



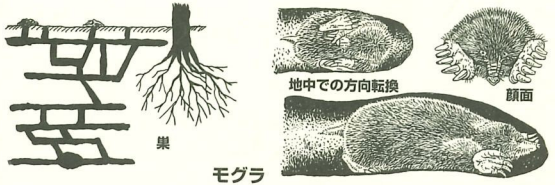
●『罪と罰』



●『ブッダ』

●『W3』

モグラ



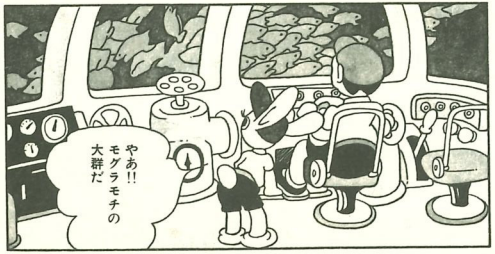
今の若い人たちは〝モグラ〟といっても、知識としては知っていても、見たことはないという人がほとんどであろう。野原が少なくなり、道をアスファルトで固められては、モグラも生きていけない。

モグラは、人類のうんと遠い祖先だった食虫目、哺乳類の中では原始的なグループで、漢字では「土竜」または「鼹鼠」と書く。

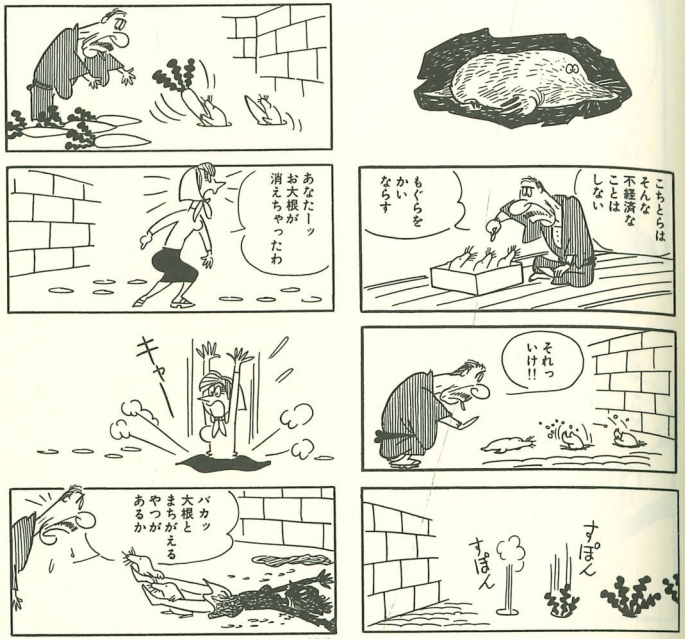
昔は野に畑に、最も普通の動物であった。北海道以外の本州、四国、九州に生息し、関東以東のアズマモグラ、本州中部以西のコウベモグラ、高山帯に棲むミズラモグラなどがいる。ほとんどの時間を地下で過ごし、昆虫の幼虫やミミズを主食としている。モグラは、一日に自分の体重と同じくらいの量の餌を食べないと生きていけないので、掘っては食べ、動きまわっては食べと、重労働の毎日である。なにしろ、土を掘るのには大変なエネルギーが必要なのだ。

ところで『地底国の怪人』では、モグラのことを〝モグラモチ〟といっている。昔はよくこのように表現された。これは、土が高く盛り上がるという意味の動詞「うぐろもつ」が変化した「むぐろもち」が、さらに変化したもので、掘った土を盛り進むモグラの生態からきている。

なお、モグラは日に当たるとすぐに死んでしまうというのはウソで、モグラをガラス管に入れて直射日光にさらしても、何の反応も示さなかったという。体が何かに包まれていれば安心するということらしい。



●『地底国の怪人』
地底に潜る途中でモグラの大群を目撃する。



●『よろめき動物記―モグラ』
洒落た大人もののタッチの漫画である。

リス

『とんから谷物語』のリス

冬毛のホンドリス

リスは比較的描きやすく、描いていて楽しい動物なのだが、手塚漫画の中のリスは、調べてみると意外にもあまり多くない。『0マン』はリスから進化した人間であるが、リスそのものではないし、『ボンゴ』や『八丁池のゴロ』に出てくるリスも脇役で、どうやら主役での出演はないらしい。

手塚作品以外では、手塚治虫の友人であった太田じろうの『子リスのボッコちゃん』や、『シートン動物記』の中の「リスのバナー」などというものがあるが、元来、主役を張るのには存在感がなさすぎる動物なのかもしれない。

私はかつてリスを飼ったことがあるが、一晩中カリカリと板を噛み続けていた。ネズミをはじめ、齧歯目に属する哺乳類は、歯が一生伸び続ける。だから、常に何かをかじって歯を磨滅させていないと、口の皮膚を突き抜けてしまうため、噛み続けなくてはならないという宿命を背負っているのだ。

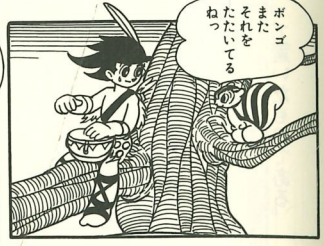
また、餌の果実や木の実を巣に貯め込む習性があることから、リスには貯蓄のイメージがあり、よく貯金などのシンボルマークに使われたりする。一九六八年には、郵政省の貯金切手にシマリスがデザインされた。リスは、物語の主役にはなかなかなれないけれど、また別の意味ではシンボリックに扱われている。

昔あったリス印マーガリンとか、ハリスのチューインガムのマークも、リスのシルエットであったことを思い出す。

●『モモンガのムサ』
リスは木の上で暮らすものと地上性のものがいる。

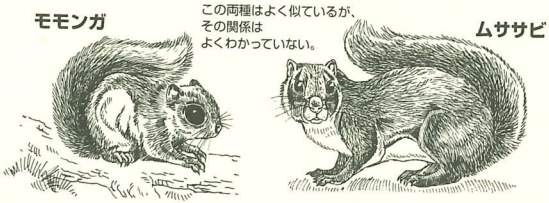
●『八丁池のゴロ』
リスは脇役としての出演である。

●『0マン』
0マンはリスから進化したという設定であった。



●『ボンゴ』
リスは、どのような物語の中でも、ほとんど善を表している。

モモンガ



手塚治虫の描いた動物漫画は、大別すると次のようなものに分けられる。『お山の三五郎』『びいこちゃん』のような動物が擬人化された幼年もの、『勇者ダン』『ジャングル大帝』のような動物が人間と共存していくもの、『よろめき動物記』のようなギャグもの、『鳥人大系』のようなSFもの、そして、『モモンガのムサ』に代表される、動物が人間と敵対するものなどである。

『モモンガのムサ』は、あるモモンガの一生を、自分が実際にその小動物になったかのごとく、鋭い眼で見つめた感動的な中編である。モモンガという、今ではあまり目につきにくいリス科の小動物を描いたという点で、相当にユニークだ。

モモンガは、ムササビと同じように前後肢の間に飛膜を持ち、滑空の得意な樹上生活者である。しかし、ムササビが体長五〇センチになるのに対して、モモンガは体長二〇センチとかなり小さい。

手塚治虫の最後の実験アニメーションとなった一九八八年の『森の伝説』の第一楽章は、大部分が『モモンガのムサ』がモチーフとなっている。アニメーションの歴史にかかわるシーンでは、アニメの創始者エミール・コール風から『恐竜ガーティ』のウィンザー・マッケイ風の絵柄に変わり、『ポパイ』のフライシャー、そしてディズニー風へと、ムサが変化していく。

このモモンガ、アメリカ産のものは、今やペット商が売買しているのを知って驚いたものである。

●『モモンガのムサ』　モモンガは大きな目と丸い口先を持ち、とても可愛い動物である。

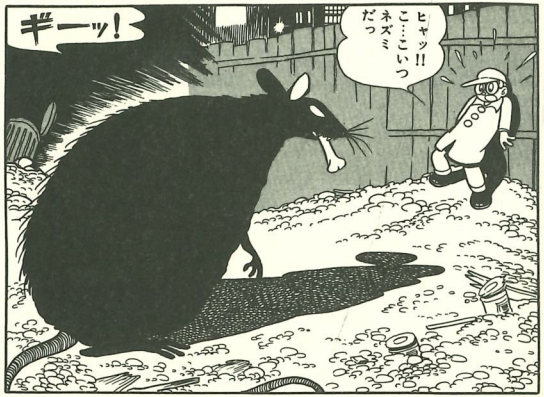
ネズミ

ハツカネズミのような可愛い動物でも、『ビッグX』や『鉄腕アトム』に出てくるような超大型になってしまうと、恐ろしい怪物になってしまう。ここには挙げられなかったが、『ぼくの孫悟空』にも、このような大ネズミが出てくる。

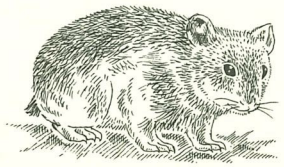
しかし、実際には大型といっても、日本で一番大きなネズミは、奄美大島などに分布しているケナガネズミで、体長二八センチほどだ。ただし、尾の長さを入れると六五センチにもなるから、小型のウサギくらいはある。世界で一番大型のネズミは、スマトラに分布する体長四五センチのスマトラタケネズミである。『ビッグX』に出てくるクマのように大きなネズミは、もちろん現実には存在しない。ネズミの仲間というところまで範囲を広げても、体長一メートル三〇センチ、体重八〇キロがせいぜいのところで、これは南アメリカのカピバラである。世界最大の齧歯類で、〝ネズミの王〟といえなくもないが、顔はウサギに似ており、体つきは子ブタのようである。性質はおとなしく、水草や種子を食べ、肉が美味いため、ブラジル奥地のインディオは家畜にもしている。ジャガーはカピバラが大好物で、カピバラにとってジャガーは天敵である。カピバラは敵に追いつめられると、水に飛び込んで難を逃れる。このユニークな大ネズミの手塚作品への登場はないようだ。

反対に世界で一番小さいネズミは、体長五センチで体重八グラムのカヤネズミである。

●『ビッグX』（上）
●『鉄腕アトム―宇宙の寄生虫』（下）
巨大化した動物は恐ろしいが、ネズミは、そのうえに気持ち悪くもある。



ハムスター



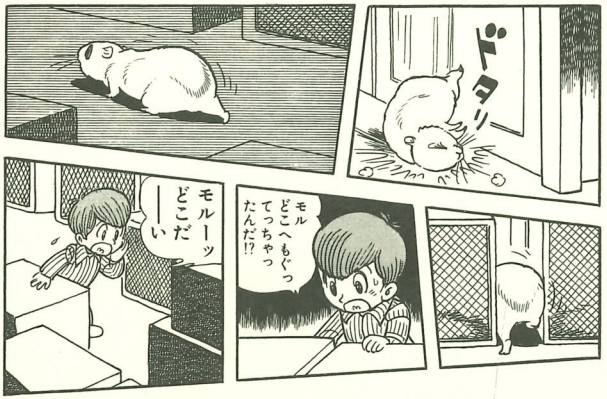
ここ一〇年くらい、ハムスターの人気がすごいらしい。小動物ペット専門のムックや雑誌もたくさん出版されており、書店に行ってびっくりした。フェレットやらオオガラゴ、ナマケモノなどの珍種までペットになっているらしく、ペットを飼う趣味のない私は驚いたのであった。

三〇年ほど前、私の弟が飼っていたハムスターは単なるハムスターで、ペット屋で購入したときも数百円であったが、今やゴールデンハムスターとかジャンガリアンハムスターといった高級な品種を、愛好家たちは我が子のように可愛がっている。雑誌には、〝ウチの△○ちゃんは……〟というような投書が満載、また、ブリーディングの注意点なども掲載されており、マニアの方の思い入れはすごいなあと感心してしまう。

しかし、命あるものを責任を持って飼うということは、電脳ペット飼育ゲームの玩具に熱中するよりは、ずっと素晴らしいと思うのは私だけだろうか。

モルモットは、ハムスターを大型にしたような齧歯(げっし)類であり、もともとは食用として家畜化されたものである。ペットの他、実験動物にもされるため、「患者はモルモットじゃない！」などという恐ろしい言い方もされる。別名テンジクネズミといわれる。

手塚治虫は、この小動物にも関心を示し、ここに挙げた作品以外でも、『カメレオン』や『オズマ隊長』などにハムスターを描いている。



●『ブラック・ジャック—モルモット』
モルモットは実験動物としても広く知られている。

●『コラープス』
これは同じ齧歯類でも小型なのでハムスターであろう。

キタオポッサム

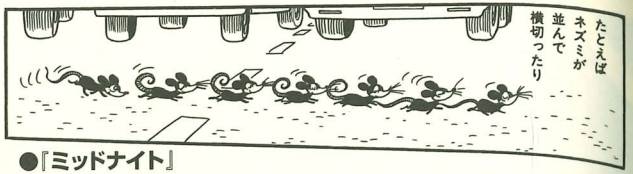
漫画やアニメーションの中で世界一有名なネズミといったら、やはりミッキーマウスだろうが、手塚漫画や手塚アニメの中でも、ネズミは愛情を持ってたくさん描かれている。漫画の中では、あるときはリアルに、あるときはグラフィカルに、またあるときはリアルに、マンガチックにと躍動している。

『ヤジとボク』は、ちょっと知恵の遅れた少年とネズミの友情を描いた作品で、純粋な心で接すれば、本当にあるかもしれないと思わせる話だった。『こけし探偵局』のネズミは、泥棒ネズミだが、ユーモラスだ。

ここには挙げることができなかったが、『ジャングル大帝』でレオが誕生したときにレオを慰めるネズミたちや、『リボンの騎士』でサファイヤを助けるネズミなどは、善玉のネズミたちである。

ところで、『漫画生物学』で数匹の子が母親の背中にくっついている動物は、ネズミのようであるが、ネズミではない。これはキタオポッサムという動物で、有袋目ではあるが、形態が似ているので特にネズミと同じ項に入れたものである。有袋類は通常、オーストラリア、ニューギニアで繁栄しているもので、カナダ南東部からアメリカ東部、メキシコを経てアルゼンチンにまで分布するオポッサムは異例の動物だ。

『ジャングル大帝』にはトガリネズミという動物も出てくるが、こちらはネズミと名がついていても食虫目という小獣である。ネズミに似ているがネズミではないというものは数多い。



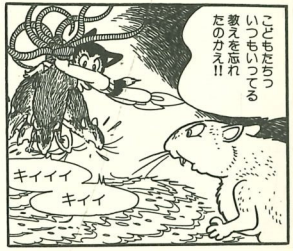
●『ミッドナイト』

●『こけし探偵局』

●『漫画生物学』

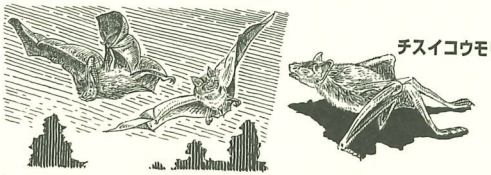
●『アリと巨人』

●『ヤジとボク』



●『アトムキャット』

コウモリ



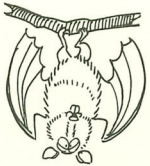
コウモリは、悪の象徴として、鳥でも獣でもない中途ハンパな奴、イーカゲンな奴という登場の仕方が多い動物である。それは、コウモリ類が夜の空中を生活の場とし、なかにはバンパイヤと呼ばれるチスイコウモリのようなものもいて、その気持ちの悪いイメージに由来しているのであろう。ヨーロッパのドラキュラ伝説などは、確かに不気味だ。

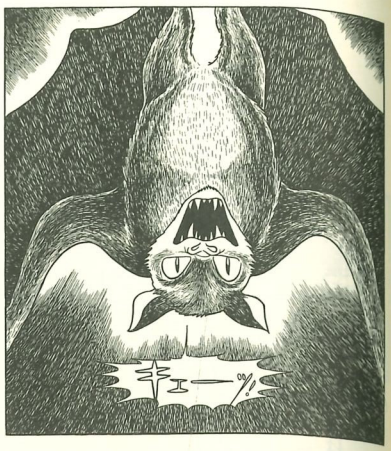
ところが、所変われば品変わるといわれるように、コウモリは、中国では一転して、よいこと、福の象徴として使われている。福の神のまわりには、コウモリが飛んでいるのだ。これに影響されたのかどうかはわからないが、日本でも有名なカステラのメーカーのマークがコウモリだし、以前、コウモリマークのカルテックスというガソリンメーカーもあった。

コウモリは、鼻がしゃくれていてブタのような顔だし、鋭い牙のある口も、あまりよい感じを与えないが、ほとんどの種が昆虫などを食べていて、おとなしい哺乳類なのだ。

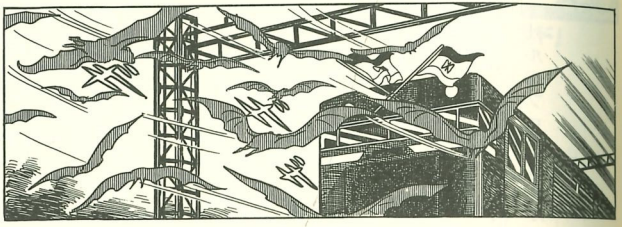
一九七〇年頃までは、東京の郊外に夕闇が迫る頃、独特の飛翔をするコウモリの姿がよく見られたものだ（地域によっては今でも見られるようであるが）。中国に手塚プロダクションの北京スタジオがあるが、私がここに出張した際、二〇年ぶりくらいに、四頭のアブラコウモリが乱舞しているのを見た。なかなか格好よく、また、とても懐かしい気分であった。一瞬、数十年前にタイムスリップしたかのような錯覚をした。

●『バンパイヤ』（右）
●『よろめき動物記—コウモリ』（下）
まったく同じポーズだが、その内容によってキャラクターを描き分けていることがよくわかる。



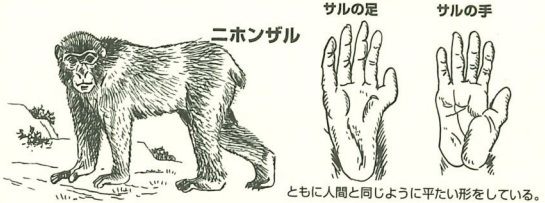


●『八丁池のゴロ』
コウモリもこのように描かれると獣というイメージがある。



●『I・L—ハイエナたち』
コウモリがキーポイントとなる作品である。

ニホンザル



ともに人間と同じように平たい形をしている。

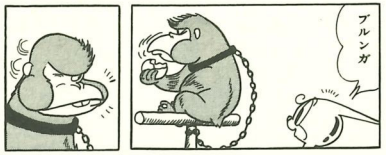
動物を出演させるといっても、出しやすい奴と出しにくい奴、描きやすい奴と描きにくい奴、出したい奴と出したくない奴など、手塚治虫の中でも、いろいろな感情があったに違いないと想像される。

どうしてもヒーローとして出演させたい動物があったとしても、世間一般の人々があまりにも知らない特殊な動物であれば、それは難しい。その点、サルはまず知名度でいえば、知らない人はいない。そのため、イヌ、ネコ、ウマと並ぶトップクラスの出演率を誇っているのだ。この項では、特にニホンザルを取り上げてみた。

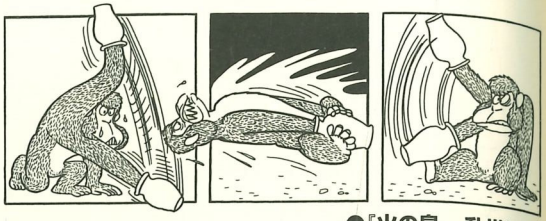
ここに挙げた作品以外にも『フライングベン』『八丁池のゴロ』など、ニホンザルの出演はキリがないほどだ。

ところで、日本は南北に弓なりに長い島国であるから、何種類ものサルがいるように思われるが、意外にも日本に棲むのは、たった一種の霊長目オナガザル科ニホンザルなのである。ニホンザルは世界で最も北に分布するサルとして有名で、北限の青森県下北半島から、南は屋久島にまで生息する（ヤクザルもニホンザルなのである）。昔は日本各地に生息していて、民話や童話などに数多く出てくる。

数十頭の群れをなし、ボスと呼ばれるリーダーのもと、山地の森林などで生活を送っている。音声は三〇種以上あり、知能も高い、というのがニホンザルのプロフィールである。



●『ブルンガ1世』


●『火の鳥―乱世編』

●『タイガーランド』

●『ブラック・ジャック
―戦場ヶ原のゴリベエ』

マンドリル

メガネザル

オオガラゴ

手塚漫画に出てくるサルの種類は数多く、博物的にも興味深い。

サルは、小さな脳と長い吻を持つ原猿（三五種）と、大きな脳と平たい顔、発達した視覚を持つ真猿（一四七種）に大別されている。原猿類は知能が低く、いわゆるサルのイメージからは遠いものである。メガネザルやガラゴに代表されるが、これらは『漫画生物学』にほんのカット的に描かれている以外、ほとんど登場しない。ここに挙げたサルたちは、もう少し進化したものたちである。

『ジャングルタロ』の悪役マンドリルや、『ハヌマンの冒険』のハヌマンラングールのように、はっきりと種がわかるように描かれているものと、『エンゼルの丘』のサルのように特に種にはこだわらず、漫画的にデフォルメされているものとがある。

いわゆるサルということで、特に種を限定しない描き方は、より擬人化しやすく、感情描写という点において有利である。『エンゼルの丘』では、そのような描写が成功しているといえよう。その他の地域説明のカット的なサルたちは、比較的リアルに種を追って描かれている。

なお、東映動画（『西遊記』）や虫プロ（『悟空の大冒険』）でアニメ化された『ぼくの孫悟空』の主人公のモデルとなったのは、キンシコウとも呼ばれるゴールデンモンキーである。また、手塚プロの劇場アニメ「ぼくの孫悟空」は、二〇〇三年七月に公開された。

●『ハヌマンの冒険』

ハヌマンラングールの少年の話である。
この種はさまざまな環境に適応する。

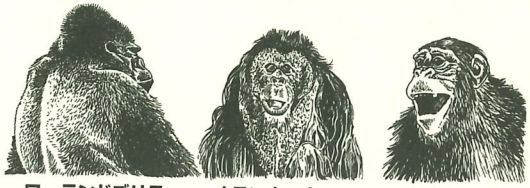
●『エンゼルの丘』

非常にマンガチックに描かれていて、種は不明。

●『ジャングルタロ』

このマンドリルは、
とても凶暴な役で出演している。

類人猿



ローランドゴリラ　オランウータン　チンパンジー

霊長目で一番進化したサルが〝類人猿〟である。具体的にいうとテナガザル、チンパンジー、オランウータン、ゴリラを指し、我々ヒトとはきわめて近い位置にいる。

真猿類を二分すると広鼻猿類、狭鼻猿類に分けられ、狭鼻猿類をさらに二分するとオナガザル上科、ヒト上科に分けられる。そのヒト上科をまた二分するとショウジョウ科とヒト科に分けられ、それぞれが類人猿、人類なのである。人類、つまりヒトが〝裸のサル〟といわれるゆえんである。

『百物語』ではゴリラが凶暴に描かれている。ゴリラが悪、チンパンジーが善という図式は、SF大作映画「猿の惑星」でも同様にパターン化されていた。

実際のゴリラは、むしろ臆病でおとなしく、神経質で怠惰で優しいという。人間が好戦的であれば、ゴリラは攻撃を仕掛けてくるという報告もあるが、誰だって相手が好戦的であれば、怒るのは当たり前のことだ。同じ映画でも「愛は霧のかなたに」では、ゴリラの生態が正しく描かれていた。ゴリラにはローランドゴリラとマウンテンゴリラの二つの亜種がいて、後者は、二〇世紀に発見された数少ない大物動物の一つである。

チンパンジーは人によく馴れ、確かに賢いが、必ずしも善というわけではない。野生では数十頭で群れ、ガゼルの子など他の哺乳類を殺し、食べることもある。動物の本質は、人間の印象で簡単に決められない。

●『百物語』
ゴリラが怪物のように描かれている。

●『ジャングル大帝』
モデルはパタスザルあたりだろうか。

●『化石人間の逆襲』
ゴリラは1954年に日本に輸入された。

原人

カナダのサスカッチ（ビッグフット）

ヒマラヤの雪男（イエティ）

中国の野人（？）

原人らしい生物を目撃したという話は世界各地にあるが、原人という言葉は定義が難しい。ヒマラヤのイエティ（雪男）や、カナダのサスカッチも原人なのか、そうではなく、北京原人やネアンデルタール人のことを指すのかなどと、いろいろと論議の沸くところだ。ただ共通しているのは、二足歩行をし、遠い祖先は現代人、つまりホモ・サピエンスとつながっているということである。

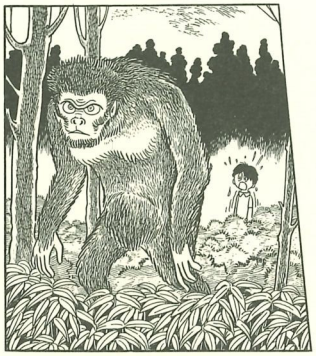
手塚漫画の中には、〝野人〟〝ヒバゴン〟〝ピテカントロプス〟〝アウストラルピテクス〟〝ドリオピテクス〟が出てきており、『原人イシの物語』という作品もある。手塚治虫は、人類の進化を『火の鳥』などで描いており、私と野人の話をしたこともあった。

一九八〇年代、中国の野人や、広島県のヒバゴンの話が一般にも盛り上がりをみせたことがあった。ヒバゴンのほうはどうも眉唾ものであったが、中国の野人は七八年に一一件、七九年には一九件の目撃例があり、中国は国を挙げて〝中国野人科学考察隊〟を組織し、本格的な調査を始めた。野人は四川、湖北省にまたがる地域に生息し、身長二メートル以上、全身に三〜四センチの灰茶色の毛が密生し、前かがみで歩く特徴があるという。その後もたびたび目撃され、一九九三年九月には三人の野人が発見されたと「人民日報」に報道された。

その他、野人ほどの確かな情報はなくとも、世界にはデマも含めて原人、猿人の話は多い。

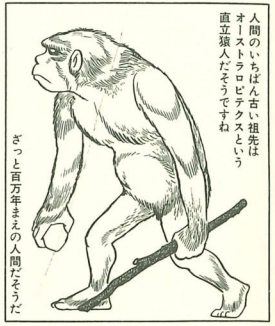
●『さらばアーリイ』
野人。

●『火の鳥―未来編』
ピテカントロプス。



●『三つ目がとおる』
ヒバゴン。

●『三つ目がとおる』
アウストラルピテクス。



ヒト

アウストラルピテクス
300万年前の最初のヒト。

ホモエレクトゥス
ペキネンシス
22万年前の北京原人。

最古のヒトは三〇〇万年前のアウストラルピテクスといわれている。その後に続く原人（シナントロプス＝北京原人など）、旧人（ネアンデルタール人など）は、脇役にもならない説明的な出演ではあるが、ときに手塚漫画を飾った。

中国の野人が日本でもニュースになった頃、私は実験アニメーション『ジャンピング』をつくっていて、手塚治虫とも頻繁に顔を合わせていた。「野人はもしかするとネアンデルタール人の生き残りかもしれませんね」と私。「うーん……野人は野人だよ」と手塚治虫。

確かに野人は野人であるのだが、野人はサルであれヒトであれ、中国が国を挙げて本格的な調査をしており、確かに生存しているらしかったのである。

この手の話は世界中に多数あり、日本の怪生物ヒバゴンなども、手塚治虫の好きな話であった。

「2001年宇宙の旅」の直立猿人や、「猿の惑星」の猿人のメイクなど、原始のヒトの話を始めると、昆虫の話と並ぶほど盛り上がったものである。

また、ヒトの発生や性、愛情を盛り込んだ『アポロの歌』、人間を科学した部分もある『三つ目がとおる』、脳細胞についての話でもある『ヤジとボク』など、ヒトそのものに題材を求めた作品も多い。

昨今、動物やヒトのクローン化が話題になっているが、手塚漫画の中では、四半世紀以上も前に語られていたのである。

●『鉄腕アトム
——一億年前の犯罪の巻』
人類の進化について
説明している。

●『ヤジとボク』
脳細胞についての解説がなされている。

●『ケン1探偵長』
ヒトの祖先を描いている。

ミイラ

修験道の僧侶・鉄竜海のミイラ（山形県）
仏教思想から、自らミイラとなった。

メキシコのミイラ（国立博物館）
1920年代には日本に存在したが、どのようにして渡ってきたのかは不明。

ミイラや人骨、屍蠟と、一般には気味が悪いとされているヒトの死後の変化した状態を、手塚治虫は好んでいるかのごとく、よく描いている。それも、おどろおどろしいものではなく、推理の糸口となるような演出として、ときには崇高な意味合いでの登場もあり、モノをいわない脇役ではあるけれど、一種の名脇役といえる。

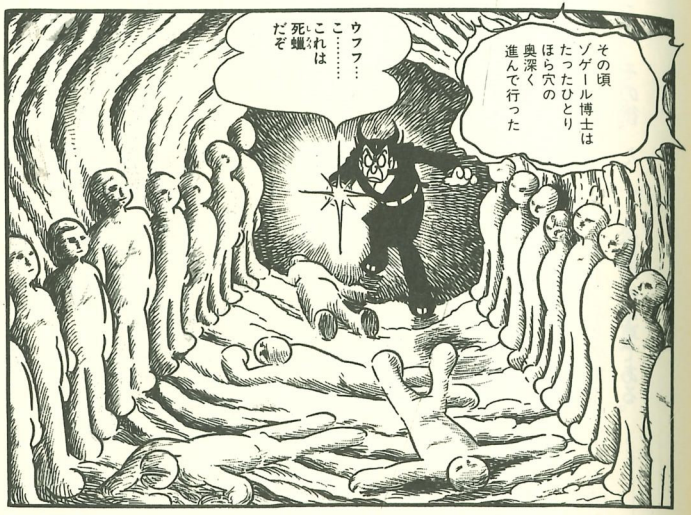
ミイラはポルトガル語で“mirra”と書き、本来は防腐剤の意味であるが、漢字では「木乃伊」と書く。これは、英語の“mummy”の音訳であるという。

手塚漫画の中のミイラは多種多様で、それぞれにミイラ臭（？）が漂ってくるようだが、『アトムキャット』には、なんとネコのミイラが出ている。ネコや他の愛玩動物を主人とともにミイラにするのは、古代エジプトで実際に行われており、ピラミッドの内部から発掘されたものも数多い。

一九八九年二月、手塚治虫は惜しくも逝ったが、その二年後、アルプス山中で五〇〇〇年前の氷漬けのミイラが発見された。二〇世紀最大の解剖学上の発見といわれ、〝アイスマン〟と名づけられ話題になった。頭蓋骨内部には、萎縮してはいたが脳が残っており、周囲からは石製のナイフ、動物の骨でできた道具も見つかったことから、彼はハンターであったらしい。手塚治虫がもし元気でいたら、大変な興味を示したに違いないし、これをヒントに雄大な作品を描いていたかもしれない。

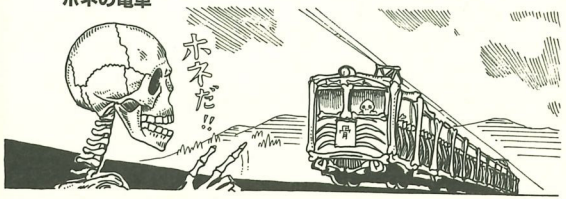
●『アトムキャット』
ネコのミイラも凄味がある。

●『地球を呑む』
ミイラに囲まれた図である。



●『勇者ダン』
屍蠟はミイラとは異なり、ヒトの細胞が石鹸状になったものである。

人骨



骨、それも人骨は、スリラー漫画や妖怪漫画などの分野で描かれることが多いが、学術的裏付けと知識をもって正確な描写をした漫画家は、手塚治虫をおいて他にいない。なぜなら、手塚治虫は自らが医者として解剖などにかかわった経験を持っていたからであり、骨や内臓を描く際には、人間への驚愕や愛着、恐れが滲み出ていたのである。

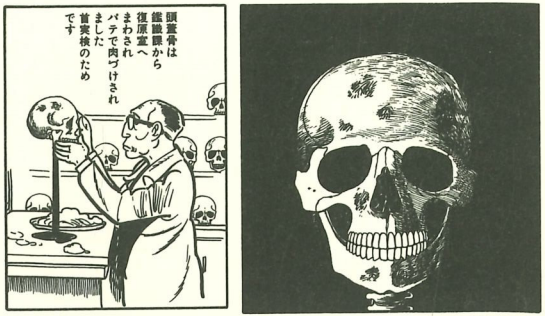
手塚治虫が小学生時代のこと、こんなことがあったという。「今日、ホネ（骨）の電車に乗ったよ」と、治虫は自慢げに弟の浩に言った。「ホネの電車って、どんな電車？」と浩が尋ねると、治虫は「座席とか車体がホネなんだ」と答えたという。それがどんな電車なのか、浩には見当がつかなかった。その後、たまたま兄弟で同じ電車に乗り合わせたとき、治虫が「あ、これはホネの電車だ」とつぶやいたという。

その電車とは、一九三六年製の〝380〟型車輛で、それまでの〝320〟型と違って、座席両端や運転室と客室の区切り、扉の手すり、ルーバーの枠などが、すべてクロームメッキの輝く金属製のパイプでできているものであった。

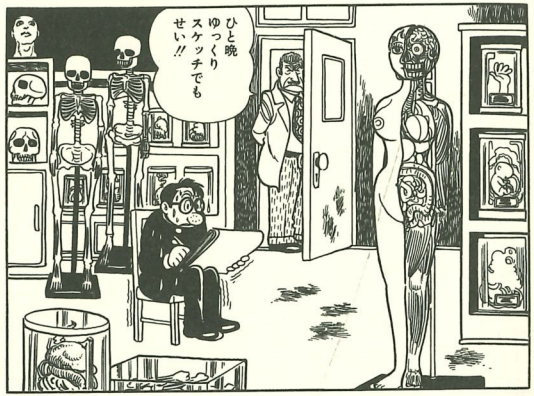
浩は骸骨のような恐ろしいイメージの電車を想像していたので、これが〝ホネの電車〟かと、がっかりしたという。妖怪ものが大好きであった治虫は、そのクロームメッキにホネをイメージし、聞く者に夢やロマンを与えていたのだ。

なお〝ホネの電車〟は、当時の阪急電鉄の電車である。

●『一輝まんだら』

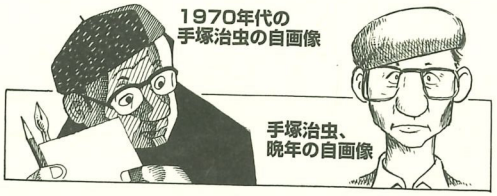


●『MW』



●『どついたれ』

手塚治虫



〝手塚治虫〟も博物なのかと聞かれると困ってしまうが、〝手塚治虫〟は手塚治虫にとって、アトムやレオと同じようなスター・システムの中の一人なのである。スターの一人であるから、当然いろいろな役を演じる。本物の手塚治虫の分身のように振る舞うこともあるし、よりマンガチックになったり、せっかちになったり、『ザ・クレーター―生けにえ』では悪役的出演もあったりという、多彩なキャラクターなのであった。

ここでは、なるべく変化に富んだ役柄の〝手塚治虫〟を選んでみた。『新選組』の侍姿は珍しい役の一つだし、『化石島』の若い漫画家役はなかなかのハンサムな男前である。また、ここには挙げていないが、『がちゃぽい一代記』では老人として登場している。まさに老若男女、いや、さすがに女性役はないが、実に神出鬼没、縦横無尽、自由自在な一流の脇役なのである。

手塚治虫という人が描いているものだが、作品中の〝手塚治虫〟は、また違う人格を持っている。彼もまた広義の博物人ということである。

手塚治虫は若い頃、芝居をやっていたこともあり、テレビ特撮ドラマ『バンパイヤ』では、〝手塚治虫〟役を手塚治虫本人が演じた。このときには、漫画の中と、テレビの中と、本物と、三人の手塚治虫が存在したのである。アルフレッド・ヒッチコック監督は自分の作品に顔を出すことで有名であったが、手塚治虫の出演回数に比べたら、何十分の一にすぎない。

●『モンモン山が泣いてるよ』

●『新選組』

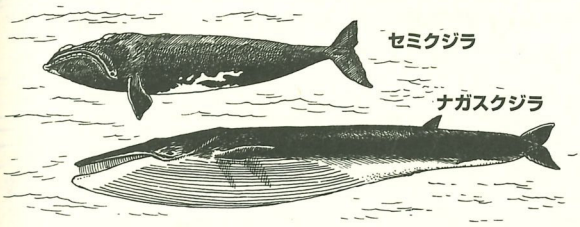
●『ゲーム』

●『鉄腕アトム
―電光人間の巻』

●『ピピちゃん』

●『化石島』

ヒゲクジラ



クジラ目に属する体長四メートル以上の大型のものをクジラと呼ぶ。これがヒゲクジラ亜目とハクジラ亜目に分かれるのは有名である。

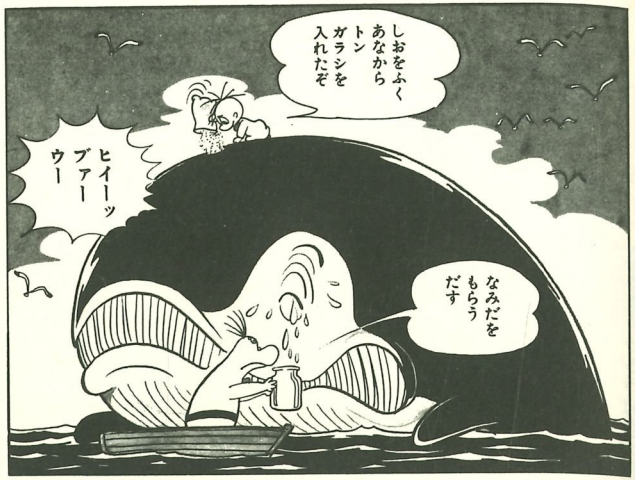
ヒゲクジラの仲間は、特に大型のものが多く、口に歯がなく、上顎に歯茎の変形した数百枚の〝くじらひげ〟が並んでいる。

『ガムガムパンチ』のクジラはナガスクジラ、『鉄腕アトム―エジプト陰謀団の秘密の巻』のクジラは世界一大きい体長三〇メートルのシロナガスクジラであろう。シロナガスクジラの潮吹きは壮大で、その高さは一五メートルにも達する。

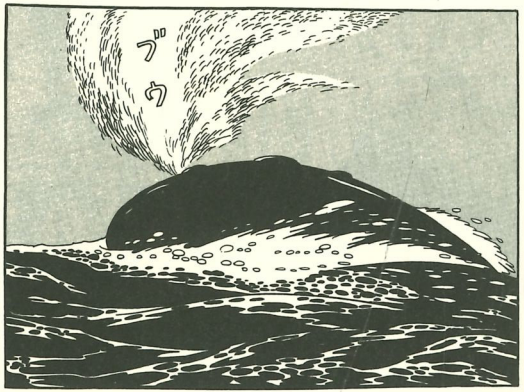
手塚漫画やアニメの中には、主役とまではいかないが、しばしばクジラが登場する。一九六二年の東映の長編アニメ「アラビアンナイト　シンドバッドの冒険」では、手塚治虫はシナリオを担当しているが、ここには可愛い子クジラを出演させ、また実験アニメ『ジャンピング』にはシロナガスクジラを出演させている。有史以来最大の動物であるクジラは、それだけ魅力的な動物なのであろう。

魔性のものや大地にも例えられたクジラは、すでに『古事記』『日本書紀』にその記述が見られる。また、『万葉集』に収められている四五一六首のうち、一二首がクジラについて詠まれたものである。クジラは、実に昔から親しまれ、畏敬されてきたのだ。

個人的には、手塚治虫も絶賛した英国のアニメ「スノーマン」の中の潮吹き鯨が印象深く思い出される。

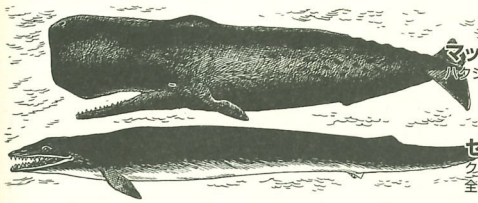


●『ガムガムパンチ』
これはナガスクジラである。



●『鉄腕アトム―エジプト陰謀団の秘密の巻』
これは地球上最大のシロナガスクジラであろう。

ハクジラ



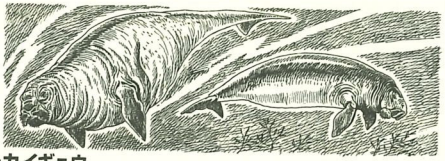
ハクジラの代表的なものといえばマッコウクジラであろう。ハクジラ最大の種で、漫画やカリカチュアの一つの典型的なフォルムとして定着している。この頭でっかちのクジラの頭部には脳油という物質が入っていて、最近の研究では、これが潜水病を防いだり浮力の調節器官としての役割を果たしているともいわれている。

クジラの祖先は、もともとは手足があり、陸上を歩いていたと考えられており、餌を求めて川から海へ下ったものだという。五〇〇〇万年前の始新世に存在したプロジュウグロドンというクジラの祖先は、全長二・七メートルほどの小さなハクジラであった。その後、何百万年もかかって、クジラは巨大化したのだ。ヒゲクジラも子供のときには歯があるので、その祖先はハクジラの仲間であることがわかる。

手塚治虫が大好きでフィルムまで所有していたディズニー映画「ピノキオ」の中の化け物のようなクジラは、マッコウクジラをモデルにしている。また、「メイク・マイン・ミュージック」というアニメーションの中に〝くじらのウィリー〟という話がある。これはマッコウクジラのウィリーというオペラ歌手が、劇場でモーツァルトの「フィガロの結婚」などを朗々と歌うのである。テナー、バリトン、バスの三種類の声を出せるクジラで、モーツァルト大好きの手塚治虫は特に気に入っていたようで、ニコニコと笑いながら、この話をしていたことがある。

●『漫画生物学』（左）
●『ユニコ―小学一年生版』（下）
ともにマッコウクジラである。

ジュゴン



ステラーカイギュウ
海牛目の中で最大の種であったが、人間の虐殺により1768年に絶滅したといわれている。

ジュゴン
乱獲により数が減り続けている。

動物好き、博物好きの手塚治虫をもってしても、ジュゴンを登場させている作品は、わずかであった。

ここでは、『海のトリトン』と『月世界紳士』に出てくるジュゴンをピックアップしたが、いずれも〝人魚伝説〟の人魚の正体だったという共通項が描かれている。

三メートルにも及ぶ体長、クジラかアザラシのような容姿、サンゴ礁などの浅い海で、夜、アマモ、アジモといった海草を食べている姿は、伝説上の美麗な人魚とは、およそかけ離れている。しかし、暗い海の中で、子供を短い前肢で抱いて、お乳を飲ませているシルエットを見たならば、人魚の幻影とダブって見えるのかもしれない。その形態、習性において、ヒトに似ている点もかなりあるという。昔の船員が、そのジュゴンの姿を見て、イメージ的に美化され、伝承されていったこともあったのだろう。

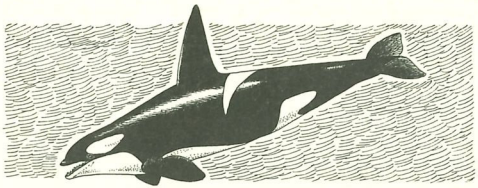
ジュゴンは、その数が激減しており、オーストラリア海域では全面的に保護されている。上質の油が採れ、肉が長寿の薬になるということで、盛んに密猟された結果である。また、近似種のマナティーも数が減り続けている。こちらのほうは残念ながら、手塚作品への出演はない。

ジュゴンやマナティーは、哺乳綱（ほにゅうこう）の中の海牛目（かいぎゅうもく）に属するが、二〇〇年ほど前まで生存していたステラーカイギュウは、なんと体長九メートルという超大型の素敵な海獣であった。この動物は、生き残りがいるかもしれないといわれている。

●『海のトリトン』
ジュゴンは海牛ともいわれる。つまり海の牛なのである。

●『月世界紳士』
ジュゴンという名前自体、この作品が描かれた1951年には一般に知られていなかった。

シャチ



シャチ
イルカの仲間では最大の体長9.5メートルにもなる。知能が高く人間によく馴れる。

シャチについての人々の印象というのは、〝海の殺し屋〟など、あまりかんばしいものではない。これは、シャチがアザラシやアシカ、ナガスクジラなどの大型クジラを襲って、生きたまま食うということに起因しているようだ。しかし、それがシャチの生きる道なのである。また、野外観察が進むにつれて、血に飢えた猛獣集団というイメージは修正されてきた。

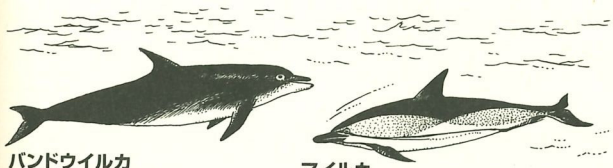
こんな例が目撃されている。数十頭のシャチがサケの群れを追い、円陣を組んだ。その円の中にサケを追い込み、八〜九頭のシャチが入れ替わりでサケを食べる。そうして、群れ全体が腹いっぱいになってしまうと、その後、そばにクジラがいようとアザラシがいようと、知らん顔をしていたという。また、水族館のシャチは、人の足を優しく噛み、自分は危険ではないということを知らせるという。人間並みの高等生物ならではの行為である。

本当のことかどうかわからないが、シャチが人間を殺したり傷つけたりした事実はいっさいないという報告もある。人間に対しては、驚くほど素直であるという。猛獣なのに、これほどヒトに馴れるという動物も少ないのである。

手塚治虫は子供の頃から、大島正満の『動物物語』などを愛読していたように、動物について大変詳しく、大好きであった。だから、シャチと人間の関係も熟知しており、そこから『ブラック・ジャック』のシャチのエピソードが生まれた。

●『ブラック・ジャック―シャチの詩』
シャチは人間によく馴れ、さまざまな芸も見せる。

イルカ



バンドウイルカ
日本の水族館で一番多く飼われている。
体長4メートル。

マイルカ
船を追いかけて泳ぐというクセがある。
体長2.5メートル。

海の愛嬌者、イルカは『海のトリトン』と『ブラック・ジャック―海のストレンジャー』以外にも、『リボンの騎士』や『七色いんこ』など、多くの手塚作品に姿を現している。また、アニメーションの『鉄腕アトム』の中の「イルカ文明の巻」は、イルカが主役のSFであった。

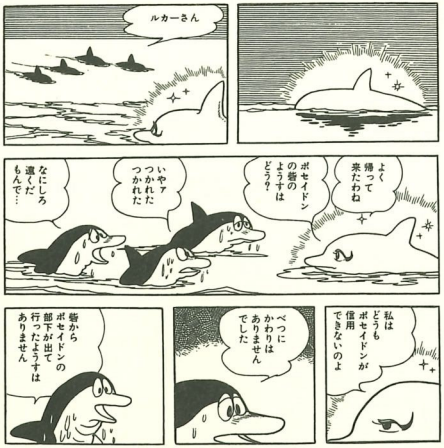
水族館などで芸をするバンドウイルカは、なかなかお茶目で可愛らしいが、イルカがマッコウクジラなどと同じハクジラの仲間であることを知っている人は多くはないだろう。クジラ目の中では、実は、このイルカ類が最も種類が多く、六科六七種もいて、優れた知能と学習能力は、おそらくバンドウイルカとシャチが断トツであるという。

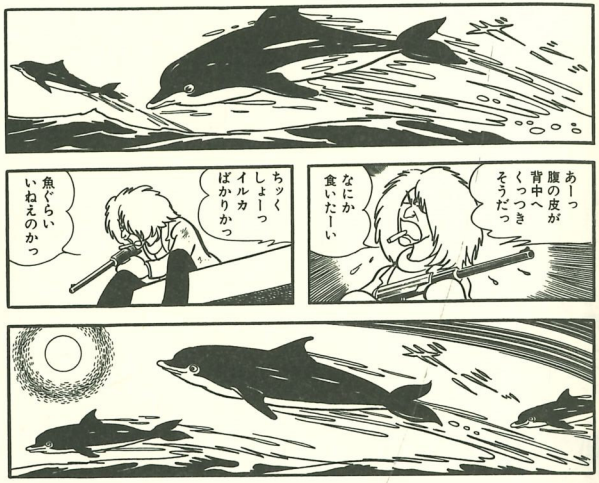
イルカが水中で音声を発し、仲間同士でコミュニケーションをとることはよく知られている。また、泳ぎが得意で、汽船などと競争して遊んでいるような姿を見かけることもある。

『海のトリトン』のイルカたちは、その形態から見るとバンドウイルカで、〝ルカー〟はその色からシロイルカだと思われる。この作品が連載され、テレビアニメ化されたのは、もう二〇年以上も前のことなのだが、いまだに〝トリトンファン〟というマニア的な人が多い。イルカが好きというよりは、人間的キャラクターのトリトンのファンということらしいが……。

イルカは世界的にも人気があり、「フリッパー」や「イルカの日」など、イルカが主役の映画も多い。

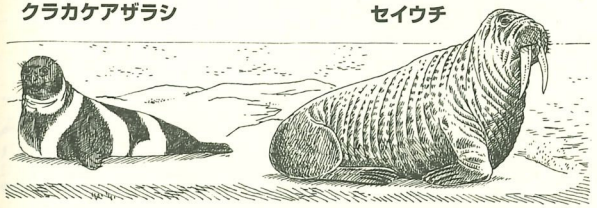
●『海のトリトン』





●『ブラック・ジャック―海のストレンジャー』

アザラシ



私が手塚漫画を好きな理由の一つの要素に、直接ストーリーには関係ないが、情景的にホッとするようなカットがちりばめられているということがある。

『アドルフに告ぐ』のゴマフアザラシは、その代表的なもので、北極海という地域をも表している。戦争中にも自然界の生物は淡々と生きているということが、わずか二コマで表現されているのだ。これが実に嬉しい。

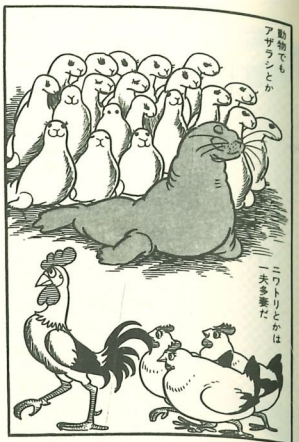
アザラシやアシカは、もともとはイヌやネコと同じ祖先を持つと考えられており、食肉目の中の鰭脚亜目で、ヒレアシ類とも呼ばれている。

哺乳類として、クジラやイルカが完全に水中生活を選んだのと比べると、ヒレアシの仲間は、半水中、半陸生の生活をしている。水中と陸生の中間ともいうべきであろうか。浜に上がって子供を産み、陸で眠る。そして、水中で餌を追う、という生活形態なのである。

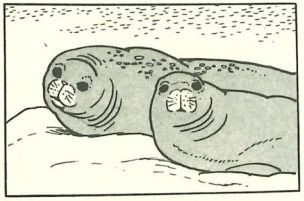
アザラシと近縁の動物は、アシカ、オットセイ、セイウチ、オタリア、海馬と呼ばれるトド、体長六メートル五〇センチ、体重三五〇〇キロに達する最も大型のミナミゾウアザラシと数多い。これらは手塚漫画に、というより、日本の漫画にほとんど登場したことがないと思われる。

手塚治虫の遺作アニメの一つ『聖書物語』の「ノアの箱舟」のエピソードでは、オットセイが元気よく舟に乗るシーンがあるが、これは非常に珍しい例の一つだ。

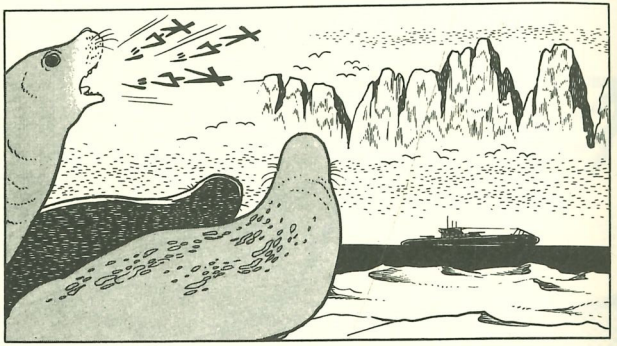
●『海のトリトン―たのしい幼稚園版』
人魚の子供に乳を飲ませるトリトン。

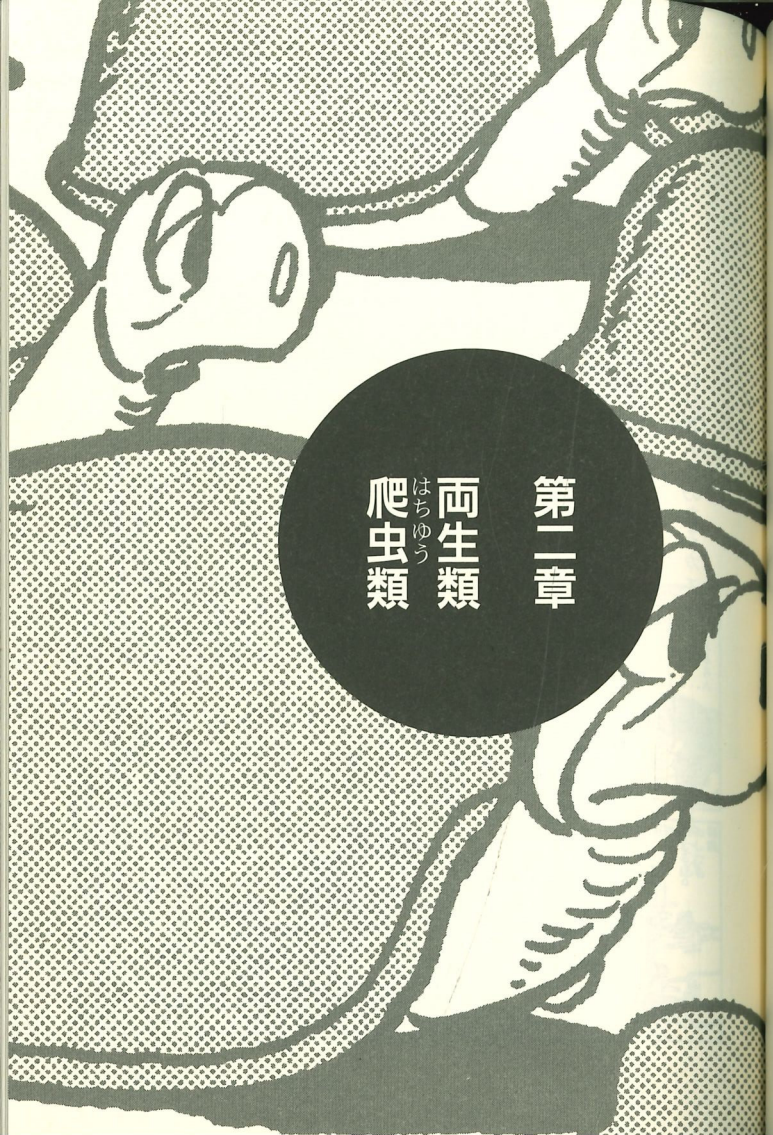


●『やけっぱちのマリア』
アザラシが象徴的に描かれている。



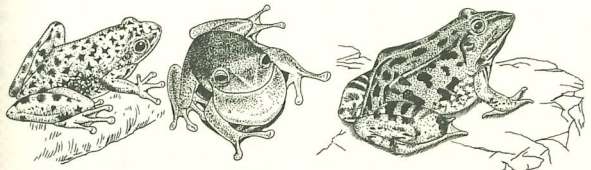
●『アドルフに告ぐ』
情景描写の息抜きのカット。
これはゴマフアザラシであろう。





第二章
両生類
爬虫類（はちゅう）

カエル



モリアオガエル　シュレーゲルアオガエル　トノサマガエル

両生類であるカエルは、ヒトからは離れた存在ではあるが、擬人化しやすいフォルムを持っている。頭と体、手足の長さのバランスが、ヒトと似ているからだろう。

カエルは古今東西の漫画、文学、アニメーション、唱歌にと、幅広く登場しており、俳句の季語にも〝かわず〟として普遍的に現れる。日本最古の漫画といわれる、かの鳥羽僧正の作とされる「鳥獣人物戯画」の中でも主役級の扱われ方である。画家の武井武雄は好んでカエルの絵を描き、その擬人化されたカエルの描写は、ユニークで大変楽しかった。また、詩人の草野心平も有名なカエル好きで、たくさんのカエルの詩をつくった。

これほど人気のあるカエルであり、手塚漫画の中にも数多く出演しているのにもかかわらず、主演作品となると、これが見当たらない。すべて脇役としてのものだ。『八丁池のゴロ』には、珍しいモリアオガエルが出てくるが、このカエルを博物的に描いた漫画家は、手塚治虫しかいないだろう。

手塚治虫は一九六一年、アニメの殿堂〝虫プロダクション〟をスタートさせるが、そのお手本となったのは、尊敬する先輩漫画家、横山隆一の〝おとぎプロ〟であった。〝おとぎプロ〟は、なぜかカエルのアニメーションが多く、佳作「ひょうたんすずめ」は、手塚治虫が絶賛したフィルムであった。カエルの親子をユーモラスに描いた作品で、美しく可愛い映画であった。

●『八丁池のゴロ』

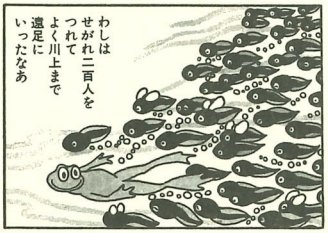
手塚漫画の中には、このような教育的な要素も織り込まれている。

●『おれは猿飛だ！』

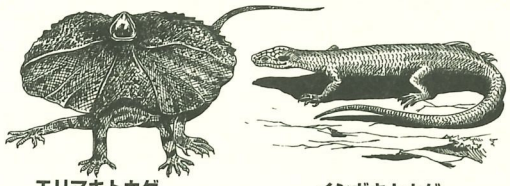
これは可愛いメスのカエルである。

●『そよ風さん』

そよ風さんは手塚治虫の理想の女性という説がある。



トカゲ



エリマキトカゲ　　イシガキトカゲ

トカゲは漢字で「蜥蜴」と書く。気のせいなのだが、私は、「トカゲ」と書けば何も感じないのだが、「蜥蜴」と記すと、非常に気味が悪く、おぞましい感じがする。不思議なことである。

手塚作品の中のトカゲといえば、反射的に思い出されるのは『鉄腕アトム』の「ミドロが沼の巻」のエピソードだ。人間並みの知能を持つトカゲが出てきて、ちょっとカレル・チャペックの『山椒魚戦争』を連想させるような話であった。

その他にも脇役として、いろいろな作品にトカゲは登場しているが、私が最も印象深かったのは、アニメーション『大自然の魔獣　バギ』にほんの少しだけ特別出演したエリマキトカゲであった。これは、「24時間テレビ・愛は地球を救う」という番組の中で放送されたものだ。

『バギ』は一九八四年の製作である。この年に流行ったのが、なぜかエリマキトカゲで、そのグッズが巷に溢れていた。わずかひと夏のブームではあったが、この当時は毎年、変な動物がブームになっていた。ちなみに『バギ』の舞台は南米の砂漠地帯だ。

「ここにエリマキトカゲが驚いて走っていくシーンを入れたら面白いね」

打ち合わせの最中、突然、手塚治虫は言った。緊張感の中をエリマキトカゲが走る……。これは、ホッとする間にもなる。こういった閃き、サービス精神を、私は心から愛した。決して邪道などであるものか。

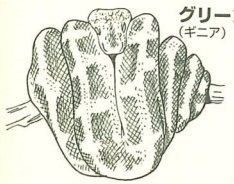
●『グロテスクへの招待』
SF的な味つけがなされた
怪奇ショートストーリー。

**●『鉄腕アトム
—ミドロが沼の巻』**
人間並みの知能を持つトカゲ。

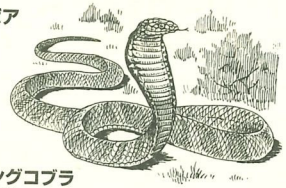
●『ボンゴ』
デフォルメされたトカゲである。

●『鉄腕アトム—テストパイロットの巻』　ときに善意のトカゲも登場した。

ガラガラヘビ



グリーンボア
(ギニア)



キングコブラ
(インド)

手塚漫画の中の迫力のあるヘビの絵ばかり抜粋してみた。『ブッダ』の大蛇も、『タイガーランド』のコブラも、『夜よさよなら』のガラガラヘビも、二筋の舌を出している。

ヘビは、舌を出しているところが特に怖く、いかにもヘビらしい特徴だと思われるのだが、実は、この描写は、動物学的には間違っているのだ。というのは、ヘビは口を開けたときには舌が引っ張られ、奥に引っ込むような構造になっているため、舌を出すのは口が閉められているときに限られる。口を全開にしたときには、舌を出そうにも出せないのだ。だから、これらは恐怖の演出としての絵なのである。

ヘビは自分と同じ太さのヘビを飲み込むことができるかという質問があるが、その答えはイエス。ヘビの口のあたりの骨は特殊な構造になっていて、上下一八〇度近くまで開くことができる。また、肋骨もほぼ自由に広がるので、自分の胴体よりも太い動物を飲み込めるのだ。

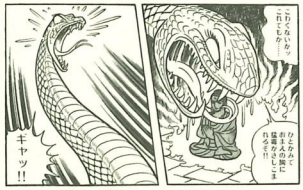
『ブッダ』や『ナンバー7』のヘビは、みんな恐ろしい大蛇であった。しかし、ヘビは超小型でもなかなか迫力があるもので、私は、体長三〇センチほどの優雅な雰囲気を持つヒバカリが、水たまりのオタマジャクシを次々と飲み込んでいく光景を見て、多少の恐怖感を持ったものである。このヘビは特に温和な性質のヘビとされているが、まさにミクロな「ジュラシック・パーク」といった趣で、自然の摂理とはいえ、弱肉強食の世界なのであった。

●『タイガーランド』

これは明らかにコブラである。

●『ブッダ』

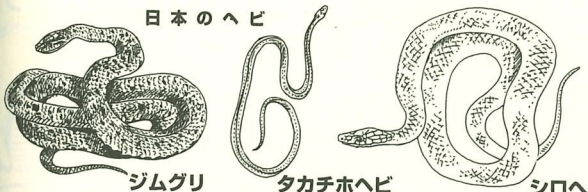
この絵からはヘビの種は特定できない。



●『夜よさよなら』

ガラガラヘビがストーリー上の重要な脳役として登場する。

シロヘビ

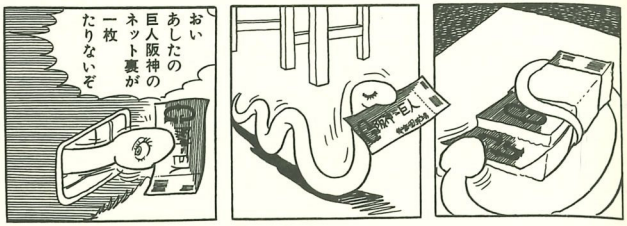


一般にヘビは嫌われものの筆頭のようにいわれる。〝蛇蝎のごとく〟という言葉もある。ヘビやサソリは最悪の忌み嫌われるものの代表というわけであるが、それは毒を持つことや、ニョロニョロした姿形からきているものだろう。

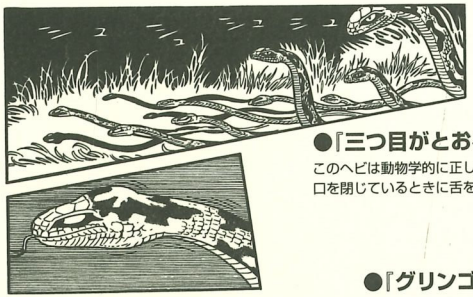
人類が出現した遠い昔、まだアウストラルピテクスといわれていた時代、いや、さらにもっと前の時代からかもしれないが、ヒトはヘビの祖先である大型の爬虫類にいじめられていた、もしくは食われていた。そんな記憶が現代のヘビに投影されていて、ヒトを恐がらせているという説もある。まあ、そういうこともあるのだろうが、そんなふうに思われているヘビは、いささかかわいそうである。どちらかといえば、ヘビはおとなしい動物で、温和な性格を持つものが多いのである。

ヘビは物語の中では、どうしても悪役が多くなってしまうのであるが、なかには少数ではあるが、善玉役もある。少年とヘビの友情を描いた短編『四谷快談』。怪談ではなく、快談である。この作品の中には、美しい女の幽霊がシロヘビに変身して少年を助けるシーンがあり、このヘビが、なんとも可愛く色っぽい。

そういえば、かつて手塚治虫が絶賛した我が国初の色彩長編アニメ「白蛇伝」（一九五八年・東映動画）も、ヒロインは白いヘビであった。手塚治虫はこの作品に感動し、後に東映作品の「西遊記」や「シンドバッドの冒険」に参加することになるのであった。



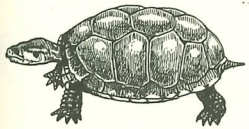
●『四谷快談』
いかにもギャグっぽいタイトルである。



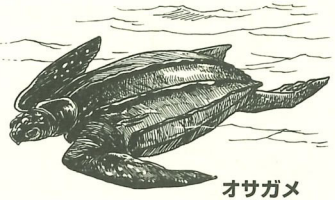
●『三つ目がとおる』
このヘビは動物学的に正しく、口を閉じているときに舌を出している。

●『グリンゴ』
これはクサリヘビであろう。

カメ



セマルハコガメ
（体長18センチ）



オサガメ
（体長240センチ）

カメというと、〝もしもし亀よ、亀さんよ〟の童謡や、浦島太郎の亀を思い出し、愛らしいイメージが浮かぶのではないだろうか。

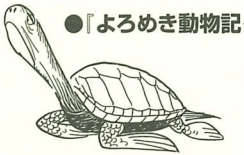
長生きの象徴として〝亀は万年〟の吉兆のイメージ、亀甲の持つ幾何学的シンボル模様など、とにかく日本においては、めでたい生物なのだ。そんなことから、昔からカメは、爬虫類の一種というより、可愛い動物として認識されてきた得な生物なのである。

カメは手塚漫画の中でも、だいたいはそんな感覚で出演しているが、なかには『どろろ』に見られる妖怪変化といった役まわりもある。百鬼丸は体長五メートルもありそうな大ガメに乗っかっている。現実にも三メートル近いオサガメという超大型のウミガメがいるが、これは特別なもので、陸に棲むものでは、一メートルほどのゾウガメがせいぜいである。ほとんどは体長数十センチ以下の平和的な性質の生物といってよい。

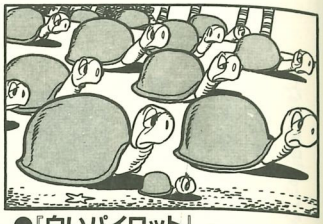
私は、ある年、沖縄の石垣島で夜道を一人で歩いていた。そのとき、真っ暗な道の後ろで軽やかな音を聞いた。〝カロン！　カロン！〟というような乾いた音で、ちょっとびっくりしたが、懐中電灯で照らすと、体長二〇センチほどのセマルハコガメという箱形のカメが歩いていた。「こんなところを歩いていると、車に轢かれるよ」

カメというより、うんと小さい人間の子供に出会ったような気がしたものである。

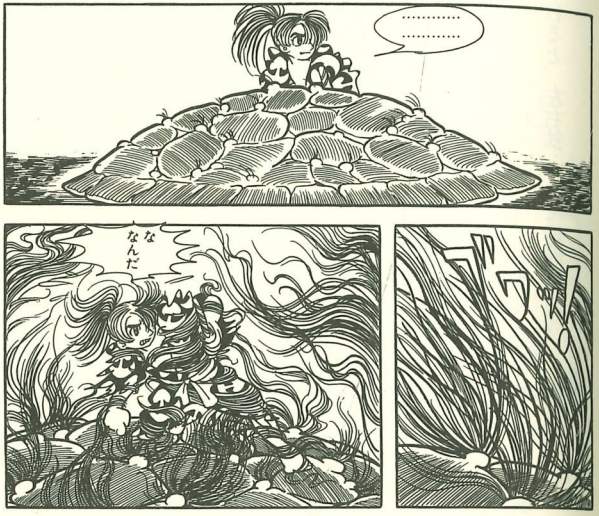
●『火の鳥―鳳凰編』



●『よろめき動物記―カメ』



●『白いパイロット』



●『どろろ』

カメレオン

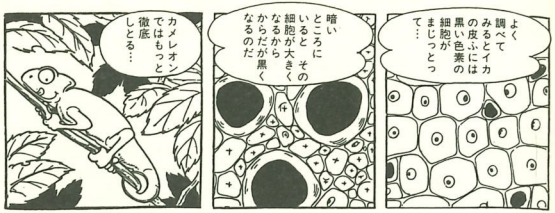
ディレピスカメレオン
（南アフリカ）

カメレオンは、実にユニークで特徴のあるトカゲだ。手塚治虫は、普通の漫画家が一生涯描かないような生物をよく描いたが、カメレオンもその一つである。

〝カメレオンのような奴〟というのは、相手によってコロコロ態度を変える胡散臭い卑屈な人間のことを指し、決してよい表現ではないが、カメレオンそのものは、非常に興味深い形をしていて、また、美しい色彩を持っている。

まず、頭はヘルメットのように角張っていて、角を持つものもいる。尾にも特徴があり、なんと縦に丸めることができ、木の枝に巻きつけて体を支えることも可能なのである。歩き方はぎこちなく見えるが、餌となる昆虫などを見つけると、左右独立して別々に動く円錐形の目で焦点を合わせ、電光石火、瞬間的に長い舌を出して捕らえる。この様子が大変面白いので、ある商品のコマーシャルに使われたことを記憶している方もいるだろう。また、体色変化をすることでも有名である。とにかくいろいろな技を持ったトカゲで、タダモノではない雰囲気を漂わせている。これが人気の原因なのは明白である。

体の色が変わるのは、神経や皮膚が、光の強弱や温度変化を感じて反応するからだそうだが、グリーンの地色が赤や青に変わるのは、一種の変身といえる。変身＝メタモルフォーゼを好んだ手塚治虫にとっては、カメレオンは素晴らしい生物に映ったに違いない。

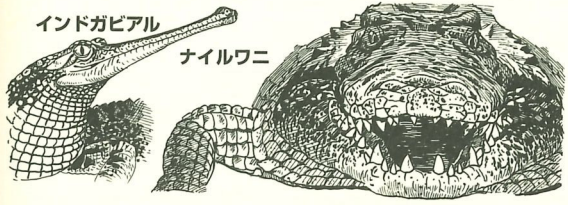


●『漫画生物学』
勉強漫画といった趣が感じられる。

●『カメレオン』
理屈ではわかっていても、体の色が変わるのはやはり不思議である。

●『バンパイヤ』
変身についての解説のために使われている。

ワニ



ワニは爬虫類では最大のものの仲間で、その姿は中世代からほとんど変わらずに繁栄を続けている。いかつい姿形は、現世の生物の中で一、二を争うもので、擬人化して描くのは大変難しい。

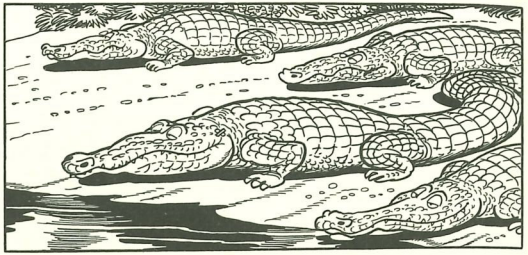
手塚漫画の中にも、かなりの数のワニが登場しているが、多少のデフォルメはあるにしても、ほとんどがリアルな形のままである。つまり、ワニの擬人化はサマにならないのである。

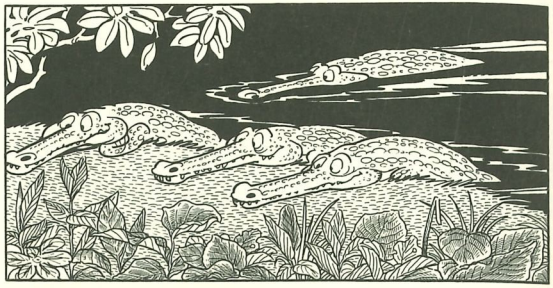
初の大人向きアニメーション『千夜一夜物語』に色っぽいワニを登場させようという案もあったが、人間と交わると、ワニはどうしてもグロになってしまって絵にならない。とうとうそのアイディアは没になってしまった。

ディズニーの音楽アニメーションの大傑作「ファンタジア」は、手塚治虫が特に好んだアニメーションであるが、この作品中に、実に巧みにワニを擬人化した例がある。〝時の踊り〟というエピソードの中のバレリーナのワニがそれで、ワニというよりトカゲっぽいものなのだが、そのキャラクター、動きのタイミングのよさは、今見ても素晴らしくリズミカルだ。まったく古くなっていない。

そういう前例があっただけに、手塚治虫は、ワニを色っぽく擬人化しようと考えたのだ。

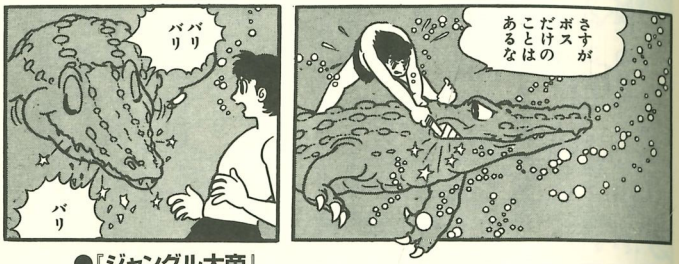
しかし、あのワニの形態は、バレリーナとしての踊りには使えても、エロティシズムとは無縁のものであると思われる。





●『虎人境』(上)　●『ブッダ』(下)

ともに同じような角度から描かれているが、
クロコダイル(『虎人境』)とカイマン(『ブッダ』)の特徴をうまく描き分けている。



●『ジャングル大帝』

ワニの鋭い歯を表現している。

プテラノドン

モササウルス

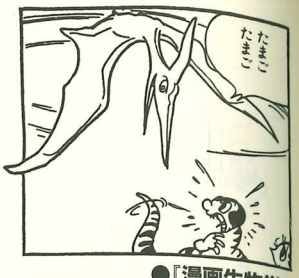
ここに挙げた古代爬虫類の中には、翼竜目のプテラノドン、ランフォリンクス、魚竜目のイクチオサウルス、ワニの祖先のような有鱗目のモササウルスなど、魅力あるものが実に多い。

『ロストワールド私家版』の生物以外は、いずれも古い型の爬虫類で、手塚治虫の古代爬虫類に対する関心の高さを証明するものだが、さすがにティラノサウルスやトリケラトプスなどのスター級と比べると、いかんせん地味で、作品への出演も脇役ということになってしまうのである。

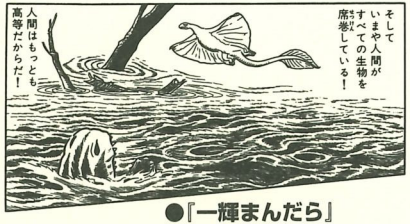
それでも『漫画生物学』のプテラノドンは翼竜としては最も有名なもので、他に『鉄腕アトム』などにもそこそこ重要な役で採用されている。プテラノドンは、九〇〇〇万年前の白亜紀後期の大グライダーで、長い翼を持ち、翼を広げると全長七メートルにも及んだ。その飛行は、上昇気流にのって空高く舞い上がり、滑空するというようなものだったと考えられている。また、体の表面には毛が生えていた。爬虫類は変温動物だが、プテラノドンは、外界の熱を吸収しなくても体温の保てる定温動物だったと考えられている。

手塚治虫が愛したアニメーション映画「ファンタジア」の中には、このプテラノドンが白亜紀の空を飛ぶシーンがあるのだが、その飛行がストラビンスキーの音楽と、タイミングがピタリと合っているところがある。これは、手塚アニメ『森の伝説』の参考にされた。

●『ロストワールド私家版』
とても味のある画風である。

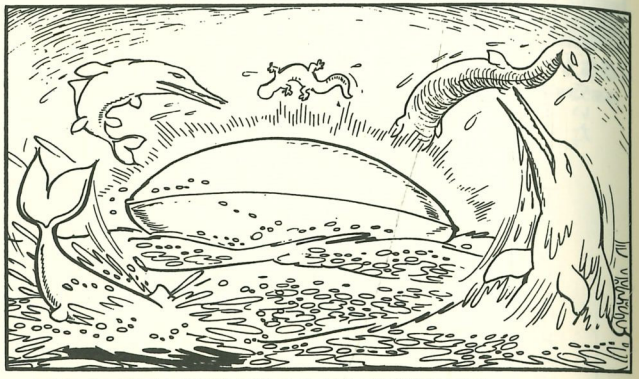


●『漫画生物学』
最も有名な翼竜であるプテラノドン。



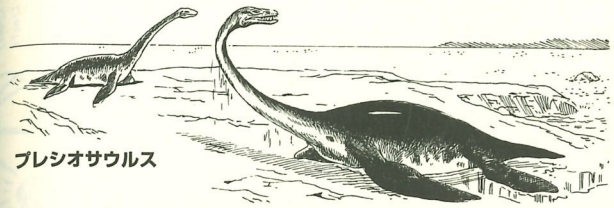
●『一輝まんだら』
空飛ぶ爬虫類であるランフォリンクスかディモルフォドンのような翼竜。

●『火の鳥―未来編』
エダフォサウルスという帆を持つ古代爬虫類。



●『オズマ隊長』 "魚竜"と呼ばれるイクチオサウルスが描かれている。

プレシオサウルス



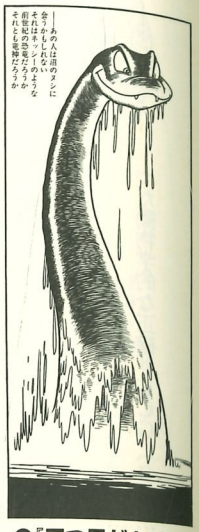
プレシオサウルス

〝恐竜〟とよく間違われるものに、○△サウルスと呼ばれる首長竜や魚竜、空を飛ぶ翼竜がいる。これらは古代の爬虫類で、恐竜ではない。

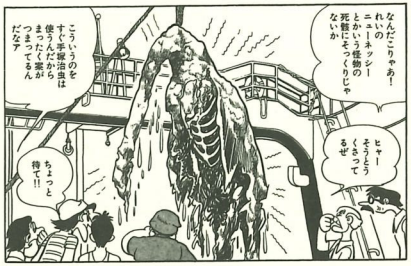
ここ一〇〇年ほど、スコットランドの〝ネス湖の怪物〟の話題は絶えることがなかったが、撮影された写真を見ると、首長竜のプレシオサウルスやムラエノサウルスとよく似ていて、これが〝ネッシー〟と呼ばれていることはあまりにも有名である。もっとも、この〝ネッシー〟の写真は、結局はインチキであった。『三つ目がとおる』に描かれている首長竜は、その典型的なものである。特にニューネッシーと呼ばれているものは、ある漁業会社の乗組員の方が実際に写真に撮ったものを模写したものである。これは一九七七年の大ニュースで、古代生物か大ウバザメか大海牛かと、手塚治虫ともども、私たちは大興奮したものである。結局、その体の組織はウバザメとも違い、USO（未知の水泳物体）となってしまったようである。

現在、実際にこの種の巨大爬虫類が細々とでも生き残っているのかどうかはまったくの謎であるが、その思いを馳せることはできる。

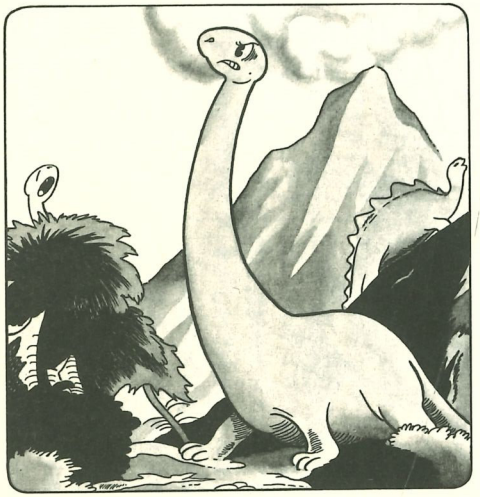
手塚治虫は、完全に過去のものとなった恐竜より、もしかしたら生き残っている可能性があるかもしれない首長竜への思いのほうが大変強かったようだ。当時、巨大な何かがいるといわれた鹿児島県の池田湖にも視察旅行に行っており、これはマスコミによって〝イッシー〟と呼ばれていた。



●『三つ目がとおる』
典型的な首長竜の描写である。

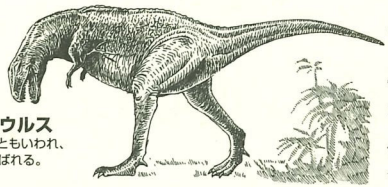


●『三つ目がとおる』
これは1977年に発見されたニューネッシーがモデルである。



●『地底国の怪人』
マンガチックなブラキオサウルスであろうか。

ティラノサウルス



ティラノサウルス
ゴジラのモデルともいわれ、"暴君竜"とも呼ばれる。

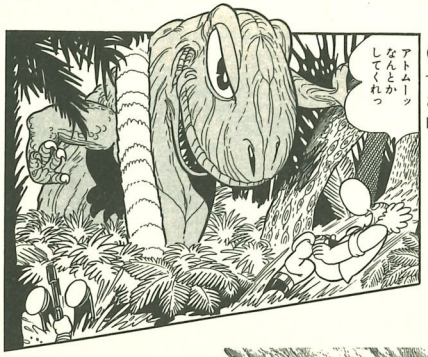
ティラノサウルスは、最も強く最も凶暴な肉食恐竜で、恐竜の帝王といった存在として知られてきた。体長一四メートル、体重八トンもあったといわれている。

一九九〇年には、アメリカのサウスダコタ州において、今までで最大のサイズの化石が発見された。六五〇〇万年前のメスで、全長一五メートル、〝スー〟という愛称がつけられ、一九九七年一〇月、シカゴの博物館が落札して話題となった。その額、なんと一〇億円！

そして、なんといっても、ティラノサウルスに迫真の名演技をさせた映画は「ジュラシック・パーク」である。恐竜の研究は、この十数年間、めざましいものがあり、そういった動物学的な正確さもCG（コンピューター・グラフィクス）に採り入れられるため、現在の作品は、過去のいかなるリアルなものをも凌駕（りょうが）している。

『一輝（いっき）まんだら』に描かれているティラノサウルスは昔のスタイルを引きずっているが、これは一九七〇年代の解釈をもとにしているので、いたしかたないところである。

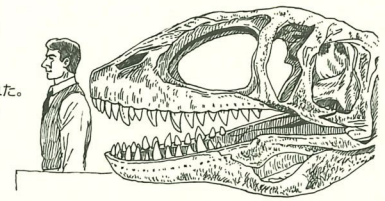
ティラノサウルスは史上最大の肉食恐竜と見られていたが、最近、アメリカの自然科学アカデミーが復元したギガノトサウルスは、さらに一まわり大きい。モロッコで発掘されたカルカロドントサウルスなども巨大で、今後の研究では、さらに大物が出てくる可能性がある。手塚治虫が健在であったら、どんなに喜んだことだろう。



**●『鉄腕アトム
—テストパイロットの巻』**
これはティラノサウルスのような
肉食恐竜である。

●『一輝まんだら』
昔のティラノサウルスの
スタイルを引きずった描写である。

ゴルゴサウルス

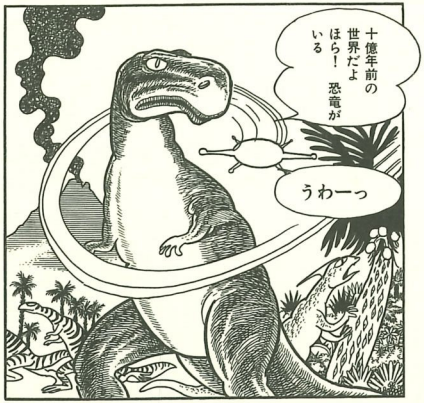


カルカロドントサウルスの頭部化石
ゴルゴサウルスと同じ仲間の恐竜で、1997年にモロッコの砂漠で発見された。頭長1.6メートル、体長14メートル、体重7トンという大きさで、地球上に存在した最大の肉食恐竜の可能性があるという。

『ブラック・ジャック』の中のエピソード「デベソの達」は、化石を発掘することにのみ異常な才能を発揮する少年の話である。彼が発掘したゴルゴサウルスは、今から約一億年前の白亜紀後期に生息した〝けもの竜〟で、全長一〇メートルであったというから、恐竜のチャンピオン、ティラノサウルスよりは一まわり小さい。

私は「デベソの達」にゴルゴサウルスの名を見つけたとき、とても懐かしい気持ちになった。というのは、中学時代に見たイギリスの怪獣映画「怪獣ゴルゴ」を思い出したからである。ゴルゴはロンドンで大暴れするのだが、モデルはもちろん、ゴルゴサウルスであった。

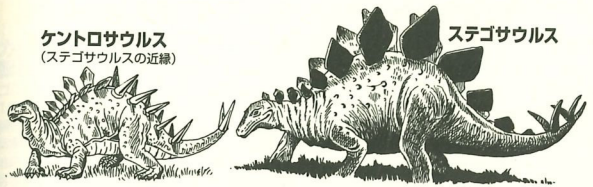
ゴルゴサウルスは、ひと頃、恐竜の本からその名が消えていた。一九七〇年にカナダの恐竜学者ディル・ラッセルが、この名は間違っていて、本当はアルバートサウルスであると発表したのである。ゴルゴの頭骨は、一九〇五年に発見されたアルバートの頭骨とまったく同じものだったとのことで、この場合、国際命名規約によれば、先についていた名に帰属するからである。そのため、二〇年もの間、ゴルゴサウルスの名は、この世から消えていた。ところが、一九九〇年に、また新たな発見があり、さまざまな化石の比較検討の結果、やはりアルバートサウルスとは別種ということがわかり、〝ゴルゴサウルス〟の名が復活したのである。恐竜の世界では、いまだにこういうことが頻繁（ひんぱん）に起こるらしい。



●『三つのスリル』
これは代表的な肉食恐竜のアロサウルスであろう。

●『ブラック・ジャック―デベソの達』
ゴルゴサウルスには仲間が多い。

ステゴサウルス



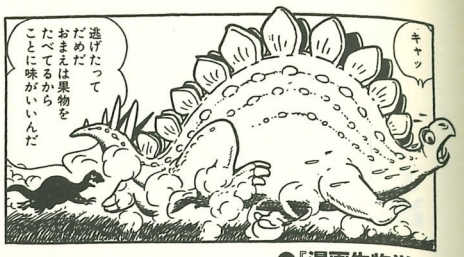
両者ともジュラ紀後期に生存していた。

恐竜好きの人にとって、今も昔も人気のある種の一つが、このステゴサウルスである。なんといっても背中の骨板がユニークかつ立派で、生きていたら飼いたくなるほど魅力的だ。ステゴサウルスは剣竜類の中の代表的な種で、この骨板は、他の肉食恐竜の攻撃から体を守る役割を果たしていたらしい。太陽熱を吸収したり放射したりして、体温調節を行うために使われていたという説もある。ソテツやシダ植物などを食べ、おとなしい性格であったようだ。

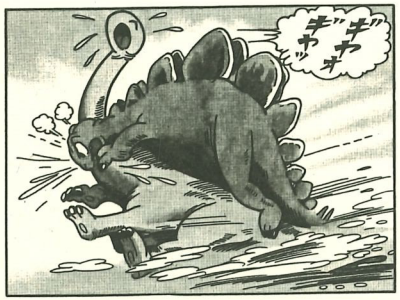
『漫画生物学』では、そんなステゴサウルスの気の弱い一面をうまくとらえており、なんとなく可愛らしさえ感じてしまう。ここに挙げた『ロストワールド』や『マグマ大使』以外にも、ステゴサウルスは数多く登場しており、手塚治虫の好きな恐竜であったと思われる。

私は、手塚治虫とステゴサウルスについては話したことはない。ただ、ディズニー映画「ファンタジア」の〝春の祭典〟の中で、ステゴサウルスの骨板に小さな恐竜がひっかかって落っこちるというギャグ的なシーンがあり、それについては「とても面白くて可愛いね」と言っていた。ステゴサウルスそのものではなく、〝骨板についての思い出〟とでもいったらよいのだろうか。

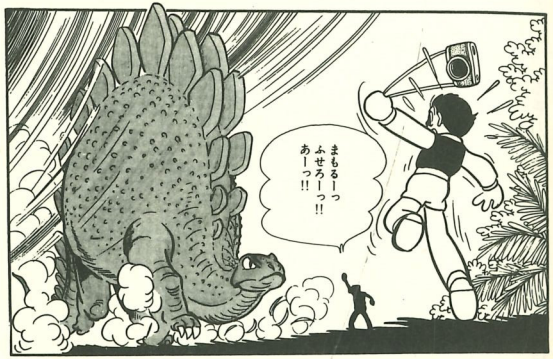
「ジュラシック・パーク」の続編映画で、一九九七年七月に公開された「ロスト・ワールド」では、冒頭にステゴサウルスの親子のシーンが出てくるが、それは手塚的ファンタジーを連想させてくれた。



●『漫画生物学』
草食恐竜の中では、トリケラトプスとともに脇役的スターである。

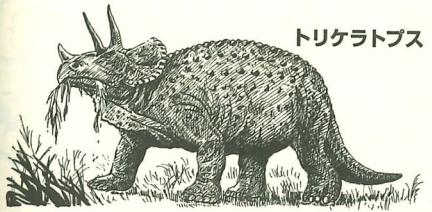


●『ロストワールド』
このように強気のステゴサウルスはちょっと珍しい。



●『マグマ大使』
恐竜温血説をとれば、このくらいのスピード感はあったかもしれない。

トリケラトプス



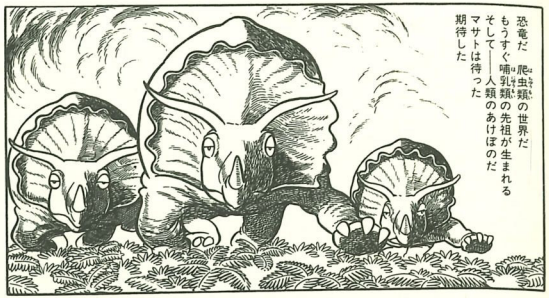
トリケラトプスは角竜といわれ、ティラノサウルス、ステゴサウルスとともに、子供たちの三大人気恐竜のうちの一つである。首の上に突き出した骨質の襟飾りを持ち、ヤシやソテツを食べていた草食の恐竜で、現世の哺乳類のサイのようなイメージがある。『漫画生物学』の絵は、そんなトリケラトプスの感じがよく表れている。

「巨大なトカゲ型が多い恐竜の中で、トリケラトプスは四本足で歩く獣型なので、親近感がわくのかもしれませんね」

手塚治虫がそんなことを言っているのを聞いたことがある。

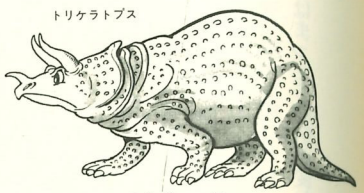
一九九三年に公開された映画「ジュラシック・パーク」では、トリケラトプスが臨場感豊かに描かれていたが、手塚治虫は恐竜映画も好きであった。しかも、人が中に入って動かすゴジラ型のものより、レイ・ハリーハウゼンに代表されるコマ撮りアニメーションの技法でつくられたもの、「恐竜グワンジ」や「恐竜100万年」のような特撮ものを特に好んでいた。

これは、恐竜のモデルを一コマずつ動かして撮影していく方法で、一種の人形映画でもある。だから、その動きの中に、どうしてもカタカタとして流れがスムーズでないところが出てくる。これはこれで素晴らしい技法であるのだが、近年のCGによる恐竜は、筋肉の感じや眼球の潤いの質感まで表現されていて、リアルそのもの……手塚治虫にもぜひ見せたかったものである。

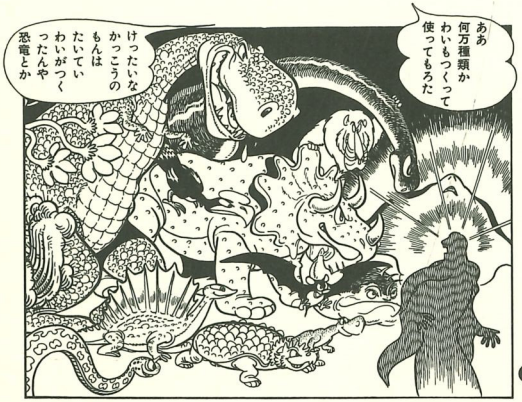


●『火の鳥—未来編』

●『漫画生物学』

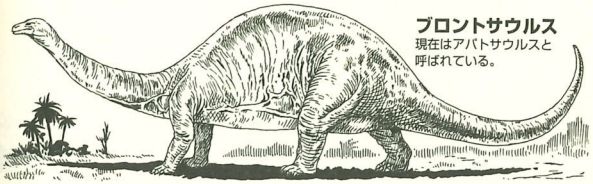


●『ボンゴ』



●『ブルンガ1世』

ブロントサウルス



ブロントサウルス
現在はアパトサウルスと呼ばれている。

恐竜を大きく二つに分けると、〝竜盤目〟と〝鳥盤目〟に分けられる。これは、恐竜を骨盤の形で分類したもので、一八八七年にイギリスの古生物学者のH・G・シーリーが発表した分類方法であり、それが現在も使われているのである。しかし、この二〇年ほどで恐竜の研究はぐんと進み、特に日本での恐竜化石の発見の成果にはめざましいものがある。

私は一九七〇年代の中頃、ある動物研究会に属していて、その会の動物ジャーナリストたちに影響されて、恐竜の資料や図鑑をずいぶんたくさん購入した。しかし、現在は研究が進んだため、ブロントサウルスの生活環境や復元形態なども、当時の資料とはまったく解釈が変わってしまい、驚くほどである。

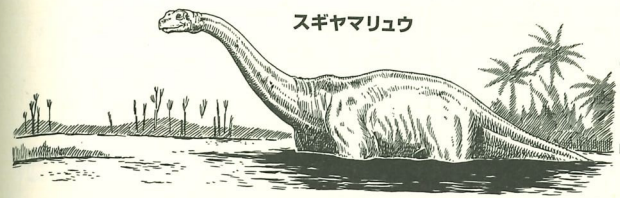
『火の鳥―未来編』や『ノーマン』は、一九六〇年代に描かれたものであるから、その時代を尊重してブロントサウルスと紹介しているが、この懐かしい馴染み深い名称は、今は使われていない。現在は、アパトサウルスというのが世界的な名称となっている。恐竜の進化により、また研究の成果により、恐竜の世界では、こういうことがときに起こるのである。

手塚作品の中のブロントサウルスは、この他にも数多いが、ここでは斜め後ろから描かれたものを選んだ。『火の鳥―未来編』の誇張（デフォルメ）はどうだろう。すごい大きさが感じられて迫力があり、なおかつ漫画の精神も忘れていない。

●『火の鳥―未来編』
恐竜は非常に広角に描かれている。

●『ノーマン』
まわりの植物は石炭紀の頃のようである。ムード満点のシーンだ。

スギヤマリュウ



『ぬし』は、手塚治虫の作家生活の中の中期に描かれたものである。物語の時代は江戸中期、浪人とメスの恐竜との交流を描いた、いささかロマンチックな作品である。この恐竜は、その形態からいって、どうやら草食の竜脚類でブロントサウルス（アパトサウルス）の仲間であろう。これは一億五〇〇〇万年前のジュラ紀後期に生息していた恐竜で、体長二三メートルという巨大なものであった。

日本でも、一九七八年頃から恐竜の化石が発見されるようになり、〝ぬし〟のような竜脚類のマメンチサウルスの仲間や、カマラサウルスの仲間のスギヤマリュウ（杉山竜）の化石が出ている。であるから、〝ぬし〟のような恐竜が日本にいても、まったく不思議ではない。

『ぬし』は大変に面白いストーリーであるが、手塚治虫はちょっとした間違いを犯している。それは、ネス湖の怪物になぞらえた解説図に、ひれ足の水生恐竜を描いている点である。このひれ足の爬虫類は恐竜とはいわない。〝恐竜〟とは、空を飛べず、泳げず、陸上歩行をする爬虫類のことであるからして、ネッシー型のプレシオサウルスやイクチオサウルスなどの魚竜、空を飛ぶプテラノドンなどは恐竜ではないのである。恐竜の図鑑には、必ずこれらの生物も紹介されているので錯覚しやすいのだ。漫画の中でも、これらは区別しなくてはならないものであるが、珍しくも、博学の大家、手塚治虫のミスであった。

スコットランド・ネス湖の怪物は　ことしの三月三十一日に「死体で発見された」というエープリル・フールのウソニュースのあと　まだ姿を現していない
ネス湖の騒ぎが大きくなるにつれ　世界のあちこちで同じような怪物が湖で見つかったというニュースが流れている

信州上午の庄助沼になぜ同様の怪物が現れたのか？　多分庄助沼が水生恐竜が生き残るのに最高の条件をそなえていたからであろう

●『ぬし』

もし本当に〝ぬし〟がいたら、スギヤマリュウのような、かみなり竜であろう。

竜

リュウの名は、なぜか植物に多い。

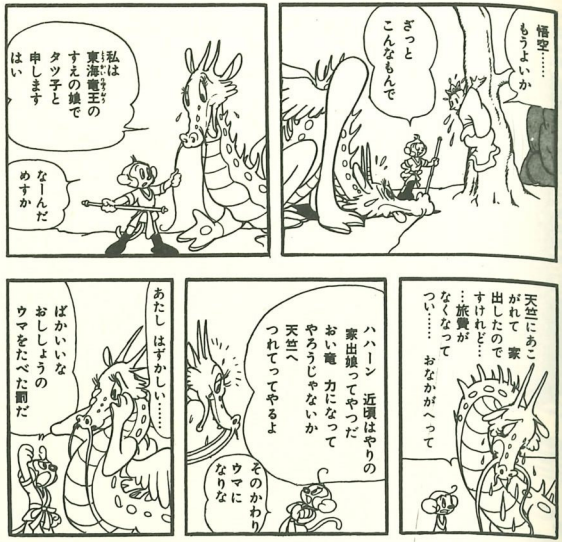
竜は想像上の動物である。一般的な定義は、水中または地中に棲み、大きなヘビに似た長い胴体、シカに似た二本の角と長い髭、背中には八一枚の鱗、五本の指を備えた四本の足を持ち、飛行ができ、雲を起こし雨を降らす、というものだ。

「りゅう」の他に「たつ」とも読み、勇ましいものに「竜」の文字のつくことが多い。全国各地に「竜」のつく地名があり、また動植物の名前にも多い。〝竜舌蘭〟〝竜眼〟〝竜馬〟、マッコウクジラの結石から採れる香料〝竜涎香〟、将棋の〝竜王戦〟……〝朝青龍〟〝琴龍〟など、大相撲の力士の四股名にも、竜が勇壮なイメージを喚起させるので、ときにつけられたりする。

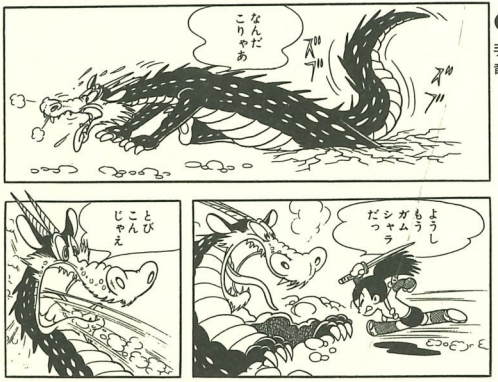
こうしてみると、竜は男性を連想させるもののようであるが、『ぼくの孫悟空』のタツ子は女性で、これは少々変わった例である。テレビアニメ化された『悟空の大冒険』では、タツ子は悟空の恋人的役柄で、妖術の使える女の子になっていた。

その他、手塚作品の中に竜の出演は数多いが、『ユニコ』や絵本『もえよドラゴン』では、同じ竜でも「たつ」ではなく、羽根のある西洋の竜、ドラゴンが出てくる。西洋の竜は体長が短く、コウモリのような羽根を持つ。これは、恐竜の体型からきているようだ。であるから、プロ野球の中日ドラゴンズの竜は、西洋型のドラゴンであると思われる。

ついでに、ドラゴンフライといえば、英国では、ヤンマのような大型のトンボのことをいう。



●『ぼくの孫悟空』
タツ子は竜の化身で、とても可愛かった。



●『おれは猿飛だ!』
手塚漫画には、
竜の出演は数多い。

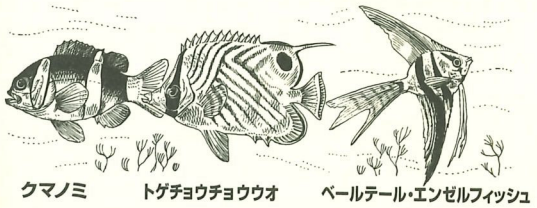
第二章

魚類

甲殻類

貝類

エンゼルフィッシュ

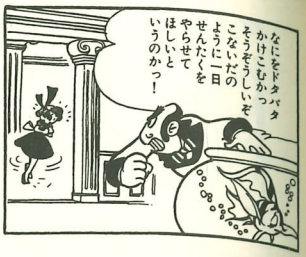


『ロビンちゃん』ではエンゼルフィッシュをデフォルメしたもの、『海の姉弟』ではハゼとキンチャクダイの仲間、『火の鳥―太陽編』ではフレンチエンゼルとチョウチョウウオ、『ふたりは空気の底に』ではグッピーが、それぞれに描かれていて、モノクロの絵にもかかわらず、実にきらびやかで美しい。

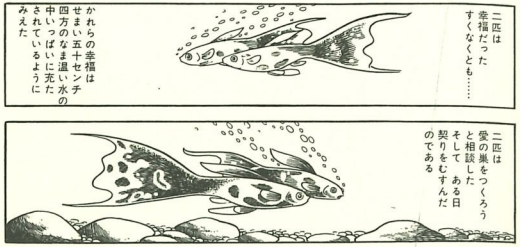
熱帯魚は、応接間や玄関先のインテリアとして、潤いのある生活を楽しむための観賞用の魚としてファンも多い。原色豊かなものや奇異な姿のものが、ずらりと並んだ水槽の中を見ると、昆虫界のチョウの美しさに匹敵するものがある。一般に熱帯魚とは、熱帯のサンゴ礁に棲む小型の魚類を指すが、温帯の岩礁性の魚も熱帯魚として扱われることが多い。

手塚漫画の中の熱帯魚は、ほとんどが作品に彩りを添えるという、単なる情景描写にとどまっている。しかし、『ふたりは空気の底に』では他と異なり、重要な役割を果たしている。人類がすべて絶滅した後、特殊ドームに生き残った二人の男女の悲劇的物語を、ラストでグッピーに例えており、非常に示唆的である。このグッピーの絵があって、ラストがぐんと厚みを増した。このような結びつきの展開は、手塚治虫独得のもので、他の追随を許さない。

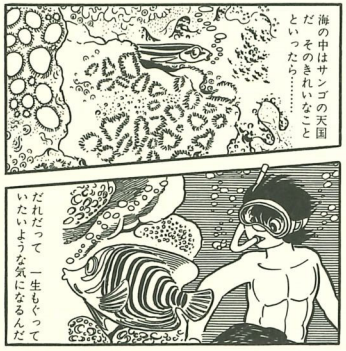
熱帯魚には縞があるものが多いが、頭を右か左に置いて、縞が横に入っているものを縦縞、縦に入っているものを横縞という。人間のように、頭を上にして考えるのである。



●『ロビンちゃん』
エンゼルフィッシュが擬人化されている。



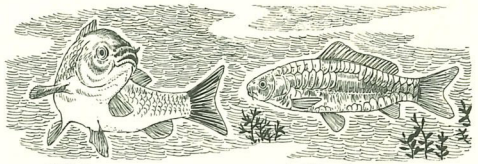
●『ふたりは空気の底に』
これはグッピーである。



●『海の姉弟』
ハゼのような魚（上）とキンチャクダイの仲間である。

●『火の鳥―太陽編』
フレンチエンゼル（右）とチョウチョウウオが描かれている。

コイ



ノゴイ
日本の代表的な淡水魚である。

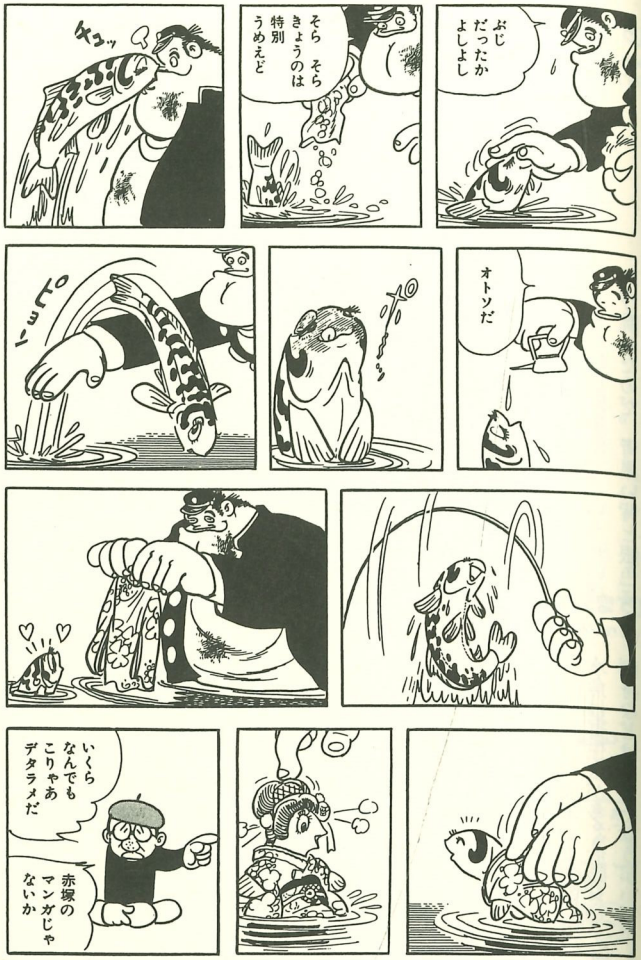
カガミゴイ（ドイツゴイ）
鱗が少なく、体が銀色に輝く。

コイは淡水魚の王様といわれる。それは、性質が温順で姿形がよく、日本全国の平野部の河川や湖沼に生息していて、日本人に親しまれてきたことに由来する。鯉こくなどの食用として、またニシキゴイなどは観賞用として人気のある魚である。

『ブラック・ジャック―デカの心臓』では、手塚治虫本人が出てきて「いくらなんでもこりゃあデタラメだ」と言っているが、ここまではいかなくても、コイには確かに条件反射的な馴れはあるようだ。観賞用として池で飼っている人の話によれば、コイの名前を呼んで手を叩くと、そのコイだけが寄ってくるようになったというから、ある種の学習能力はあるらしい。

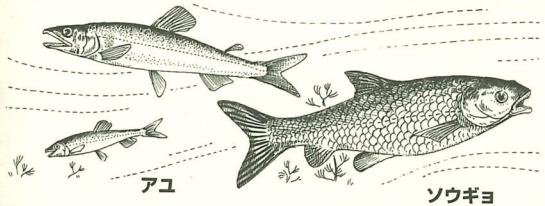
中国には二メートル近くに達する大物がいるという。これは、魚としてはものすごい大きさである。コイは雑食性であるがゆえか、びっくりするほど汚い川でも見かけることがあり、その生活力には驚かされることもしばしばである。手塚プロダクションのある埼玉県新座市の野火止用水や柳瀬川などは、必ずしも清流ではないが、こんなところでも、コイは悠々と泳いでいる。

〝コイの滝登り〟という言葉があるが、実際にコイが滝を登ることはなく、これは中国の故事伝説〝登竜門〟からきたものらしい。黄河上流の竜門という急流を登りきることのできたスグレもののコイだけが竜になることができる……登竜門とは立身出世のための関門のことであり、その語源はコイだったのである。



●『ブラック・ジャック―デカの心臓』コイには実際、ある種の学習能力があるらしい。

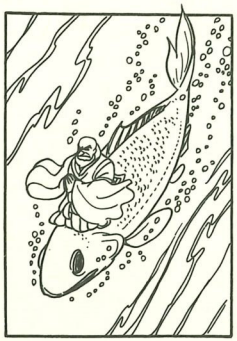
アユ／ソウギョ



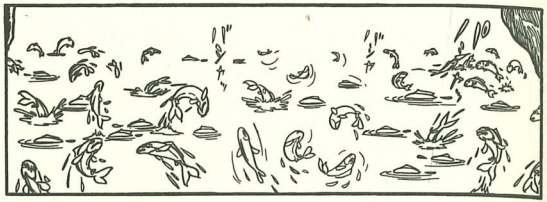
ここはアユという項目でまとめたが、本当にアユだとわかるのは『ハトよ天まで』の描写だけである。『タイガーランド』の跳ねている魚たちは、アユというより、たぶんアユも混じっているであろう淡水魚の群れである。

もう二〇年以上も前のことになるが、私はこの『タイガーランド』の絵とそっくりな光景に出くわしたことがある。それは釣り好きの先輩と利根川にハゼ釣りに行ったときのこと、川の流れが横に数十センチほども揺れる地震があった。震度三か四くらいあっただろうか……そして、その地震が起こる一分くらい前に、ハヤだろうかフナだろうか、中型の淡水魚が数百匹単位で、いっせいに飛び跳ねたのだ。青黒い背と銀色に光る腹が、スローモーション映像のように、やけにゆっくりとしていて鮮明に見えた。そんな昔の出来事を思い出させてくれたカットである。『ハトよ天まで』（上）の魚は、ソウギョのような巨大な淡水魚である。中国には、コイ科の巨大魚が広大な土地の河川に生息しており、体長二メートルクラスのものもいるらしい。ソウギョはコイと酷似しているが、背びれの基底が短く口ひげがないので、すぐに区別がつく。

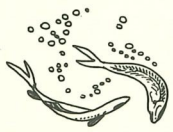
食べて美味しい淡水魚はやはりアユで、独特の香りを持つことで知られている。淡水魚の女王的存在ではあるが、よく火を通さなくてはならない。いくら姿形が美しくても、淡水魚は寄生虫が多く危険だ。アユの刺身などはやめたほうがいい。

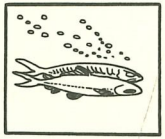


●『ハトよ天まで』
巨大なソウギョのようなもので、中国でよく見かける魚である。



●『タイガーランド』
魚たちは地震を感知して、このように飛び跳ねる。





●『ハトよ天まで』
泳いでいるアユが二枚におろされている。

ナマズ

レイオカシス
タイに分布するナマズ。

ゴンズイ
海のナマズといわれる。

ナマズ
日本各地、東アジアに分布する。

『よろめき動物記』『Aチャン B子チャン探険記』『ぼくの孫悟空』と、それぞれの作品にナマズが出てくるが、すべてスタイルを変えてある。

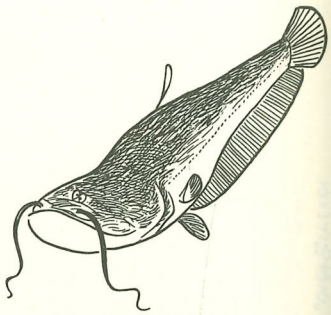
手塚作品の中の魚類は、他の生物と比べても遜色ないほどの出演数があるが、ナマズに関しては、それほど多くはない。しかし、『ぼくの孫悟空』に出てくる妖怪〝黒水怪(こくすいかい)〟はナマズの化け物で、ゲスト出演ではあるけれど、この話では準主役的な活躍をする。ナマズとしては特筆すべきものとして記憶されてよいであろう。『ぼくの孫悟空』は連載当時、とても人気が高く、「西遊記」というタイトルで東映でアニメーション化もされた。

ナマズの種類は全世界に約二〇〇〇種と非常に多く、日本にも一〇種が生息する。子供の頃、釣りに行ってナマズがかかると、よく外道(げどう)などといったものである。目的のフナに比べると、品がないような感じがしたからであるが、かといって、わざわざ逃がすという子供はいなかったように思う。体長が二〇センチもあるとバカにできない大きさで、風格があったためだろうか。

一九世紀にロシアで捕まえられたヨーロッパナマズは、体長四メートル五七センチ、体重三三六キロもあったというから、淡水魚としては空前絶後であろう。現在でも二メートルクラスのものは、東南アジアのメコン川あたりでは普通らしい。

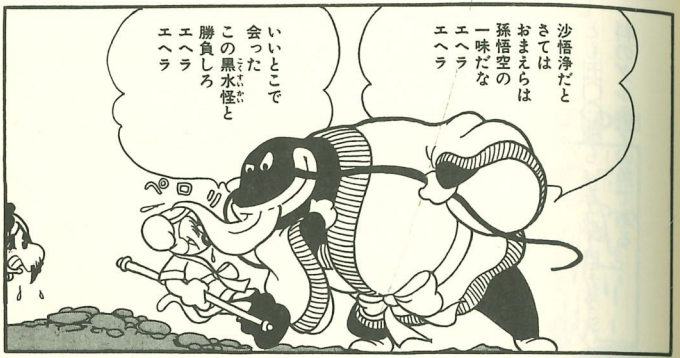
また、世界的に最も有名なナマズのエピソードといえば、ナマズが地震を予知するという説であろう。

●『Aチャン B子チャン探険記』

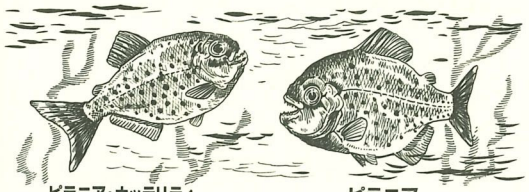


●『よろめき動物記―なまず』

●『ぼくの孫悟空』



ピラニア



ピラニア・ナッテリティ　ピラニア

ピラニアは一九五三年の記録映画「緑の魔境」で一般に知られるようになり、その後の熱帯魚ブームなどによって、普通に人々の口にのぼる魚になったという感がある。〝ピラニアのような奴〟というのは、あまりよいイメージではなく、それがピラニアの性質を表している。

『グリンゴ』や『ボンゴ』にはピラニアがたくさん出てくる。『プライム・ローズ』のフライング・ピラニアというのは、架空の漫画的なものであるが、ここではいちおうピラニアの一種として選んでみた。

ピラニアは水に落ちたウマやヒトを数分で骨だけにしてしまうということで有名になったが、私はこのことに関して、昔から疑問に思っていることがある。モノの本によれば、ピラニアが襲うのは、傷などから出血しているウマやヒトに限られるという。血の臭いをかぎつけると、ピラニアは集団で襲ってくるが、血さえ出ていなければ、ピラニアは知らん顔をしているとある。しかし、ただ水に落ちただけでピラニアが襲ってくると記してある資料もあり、どちらが本当なのか、いまだにわからないでいる。手塚漫画によれば、血など出ていなくても、ヒトとみれば襲ってきていて、ヒゲオヤジが悪戦苦闘している。

このように恐ろしいイメージのピラニアであるが、あの美しい観賞用熱帯魚、ネオンテトラと同じ仲間であるというから驚いてしまう。両者とも五〇〇種もいるコイ目カラシン科のグループの魚である。

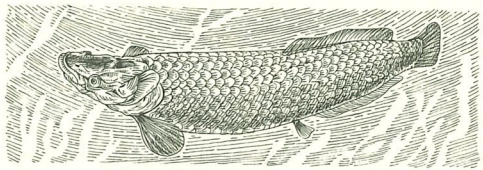
●『プライム・ローズ』

●『ボンゴ』

●『グリンゴ』

●『鉄腕アトム―デッドクロス殿下の巻』

ピラルク



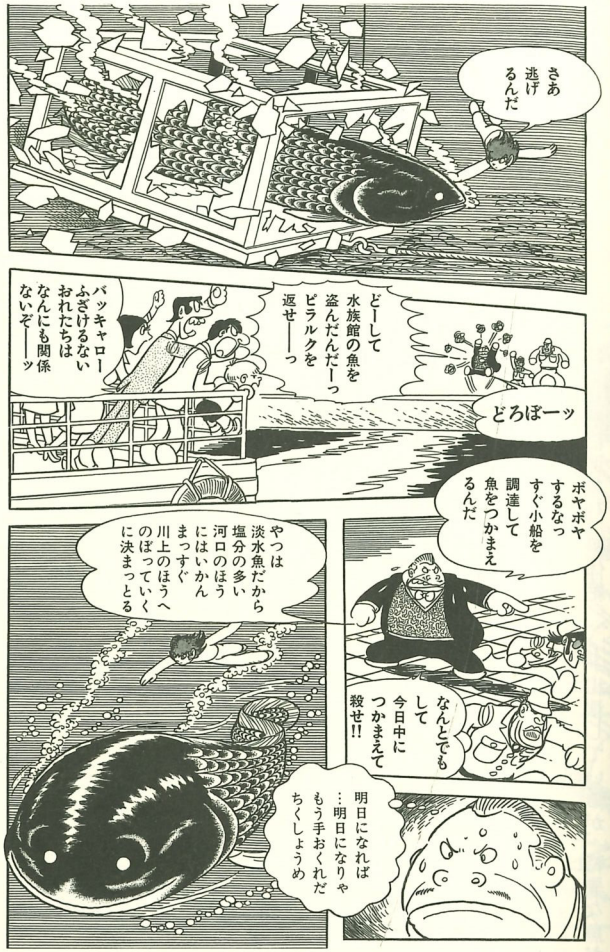
ピラルク
この名は"赤い魚"という意味である。

ある資料によると、全世界の魚類は三万種、日本近海には五〇〇〇種がいるという。ということは、普通の魚類図鑑に出ている種など、ほんの一部分にすぎないのである。

これらの膨大な数の魚たちは海水魚と淡水魚に分けられるが、後者の淡水魚の仲間で一番大きいものは何かとなると、これについては論議が起こる。一九世紀に記録された体長四メートル五七センチのヨーロッパナマズや、日本にいる謎の怪魚タキタロウなどの名が挙げられるが、巨大魚に成長する確率からすると、これはたぶん、熱帯アマゾン川に棲むピラルクということになるだろう。

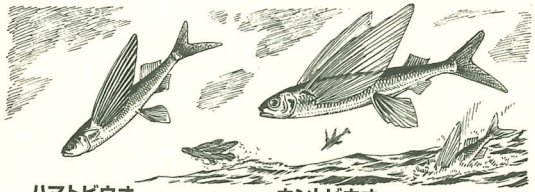
上野の水族館にいるものは二メートルにも満たないが、私は原地人のボートよりも長いピラルクの写真を見たことがある。ある本によると、かつて七メートルにも及ぶピラルクがいたというが、これはちょっと眉唾ものであろう。大変美味であるため（マグロのトロのような味だという）、現地では盛んに捕獲され、現在は大きいものは数少ない。

『牙人』は三話しか描かれなかったが、手塚治虫晩年の珠玉の作品で、そのうちの一話にピラルクを登場させている。頭がやや平べったいこの魚は、手塚タッチによって面白くデフォルメされた。前から見た図などは、巨大なオタマジャクシのようでユーモラスだ。また、鱗が美しいのも特徴の一つで、そのへんも点描の手法を用いて表現している。手塚治虫のピラルクへの愛情が十分に感じられる一編である。



●『牙人』　ピラルクがオタマジャクシのようにデフォルメされている。

トビウオ



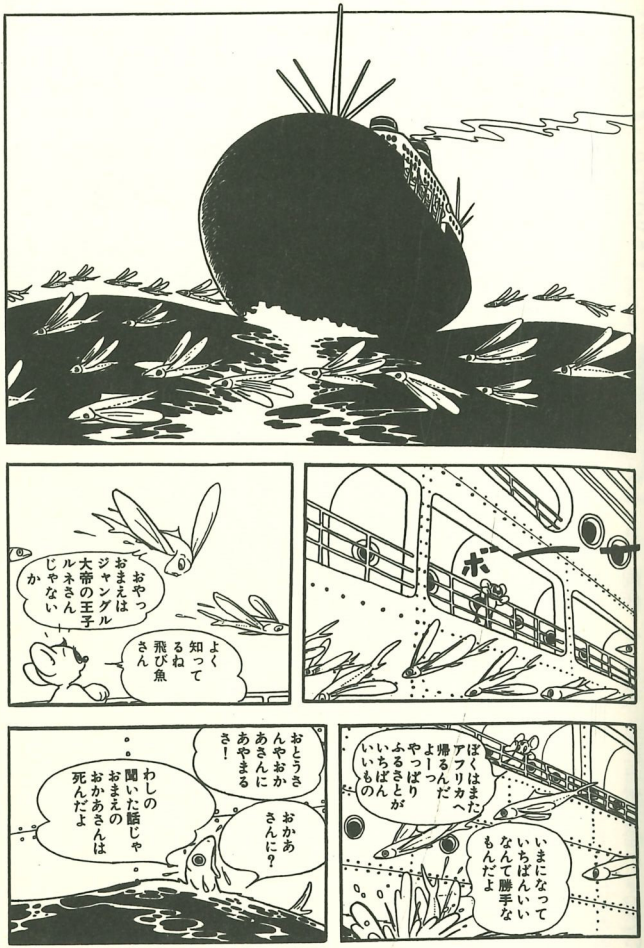
地球上にはたくさんの生物がいるが、どの種類にも空を飛ぶという特殊な技能を持つものがいる。哺乳類にはコウモリの仲間、滑空まで入ればヒヨケザルやムササビがいるし、両生類や爬虫類にも飛膜を開いて滑空するカエルやヘビがいる。そして、魚類にはもちろん、このトビウオがいる。

世界各国に分布していて、どこの国でも〝飛ぶ魚〟と呼ばれる。英語では〝フライング・フィッシュ〟、フランス語では〝ポアソン・ボラン〟、ロシア語では〝レチューチア・ルイバ〟という。すべて〝飛ぶ魚〟という意味である。

しかし、いつも飛んでいるというわけではなく、敵に追われて絶体絶命のときなどに飛ぶのである。巨大な胸びれをいっぱいに広げて離水し、五～一〇メートル滑空してから風に乗る。この胸びれは、ちょうど飛行機の主翼に該当する。風具合によっては、最大五〇〇メートル飛行し、時速六〇キロも出すというから、鳥を除けばナンバーワンのスピードであろう。空中で胸びれを羽ばたかせることはなく、グライダーのような飛び方をする。ときどき船の甲板の上に落ちて、人間に捕まり食われてしまう運の悪い奴もいる。

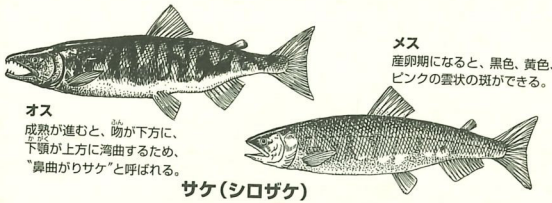
トビエイ、トビハゼなどは、海面上を跳ねるのがせいぜいで、空中を飛ぶのは無理。

『ジャングル大帝』では、まるまる一ページにわたってトビウオがゲスト出演しているが、特異な魚だけに、他の作品への出演はない。



●『ジャングル大帝』
トビウオが出演している唯一の作品である。

サケ



サケ（シロザケ）

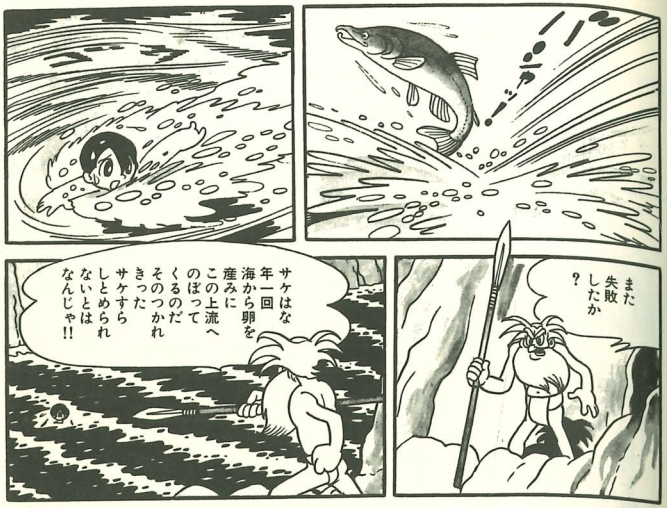
日本を代表する魚としては、タイ、サンマなどが挙げられるであろう。タイは〝めでたい〟といってありがたがられるし、サンマは秋の味覚を代表する魚である。そして、もう一つ、日本を代表する魚といえばサケであろう。

昔からサケは大衆魚であったし、それは日本で初めての本格的な缶詰の素材であったことからも証明されよう。サケの缶詰は北海道開拓使が開発したもので、それは一八七七年（明治一〇年）頃のことだという。江戸時代が終わってから、わずか一〇年ほどで缶詰がつくられていたというのは驚きである。

手塚治虫も『勇者ダン』と『シュマリ』にサケを生き生きと登場させている。ここで気づくことは、両作品とも北海道を舞台としたアイヌの男の話であるということである。手塚治虫はアイヌの人々と歴史に大変興味を持っており、彼らの孤高な生き方を描きたかったのだ。しかし、それは「必ずしも成功したとはいいがたい」と書き残している。

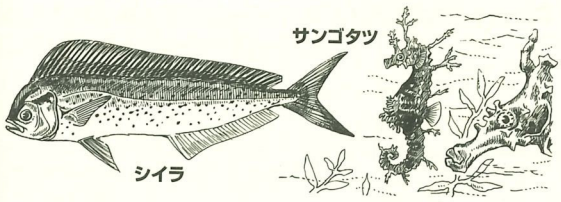
まあ、それはさておき、サケとアイヌ民族は切っても切れない関係にあり、最初にサケとつきあいはじめたのがアイヌの人々なのである。だいたい、サケという魚名自体、アイヌ語が語源になっているのだ。つまり、〝夏の食物〟を意味するアイヌ語〝サク・イペ〟という言葉が訛って〝サケ〟になったのだという。

『勇者ダン』の中では、じいさんがサケを獲っている光景が描かれているが、実に自然な絵になっている。



●『勇者ダン』（上）
●『シュマリ』（下）
両者とも、その舞台は北海道である。

シイラ



ここでは、シイラの他、いろいろな海の魚を取り上げてみた。

『ピピちゃん』のタツノオトシゴなど、魚とは思えないほど面白い形で、いかにもマンガチックである。どこか手塚治虫のユニークキャラクターの傑作〝ブタナギ〟を思わせるが、めったに出演しない。

『ブラック・ジャック―青い恐怖』のシイラは、本当にこんなふうに獲ることができるのかどうかは疑問であるが、この絵はシイラの頭のつまった特徴がよく描かれている。一目でシイラとわかるものだ。

シイラは成魚になると、体長一八〇センチにもなり、普通トローリングやマグロ延縄で漁獲される。面白い漁獲法としては、一メートルくらいの長さに切った竹を何本も束ねて、その竹の陰に集まってきたシイラを網で捕獲するという方法がある。これは、シイラが海面に浮かぶ流木や藻の下に集まる習性を利用したものだというが、ぜひ一度見てみたいものである。

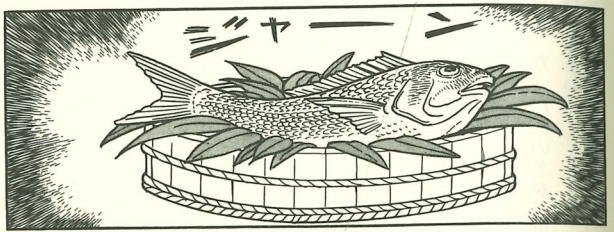
海で泳いでいるときのシイラの体色は、濃いブルーを帯びたグリーンで、大変美しい。その色は、昆虫のアオカナブンのような透き通ったグリーンであるが、死ぬとすぐに黒味を帯びて、くすんだ灰青色になってしまう。

私は以前、伊豆七島の式根島でシイラを釣り上げ、持ち帰って料理してもらった。しかし、あまり美味しい魚ではなかったように思う。また、シイラは別名、マンビキ、クマビキといわれる。

●『ロロの旅路』
漫画的な中にも、
リアルさがよく表現されている。

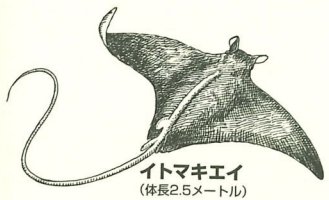
●『ピピちゃん』（右・下）
タツノオトシゴとヒラメである。
この作品は海洋漫画なので、
数多くの魚が登場した。

●『ブラック・ジャック―青い恐怖』
シイラの特徴がよく表れている。

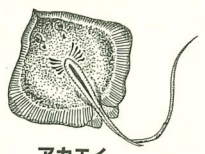


●『陽だまりの樹』
これは大変美味なマダイである。

エイ



イトマキエイ
（体長2.5メートル）



アカエイ
（体長2メートル）

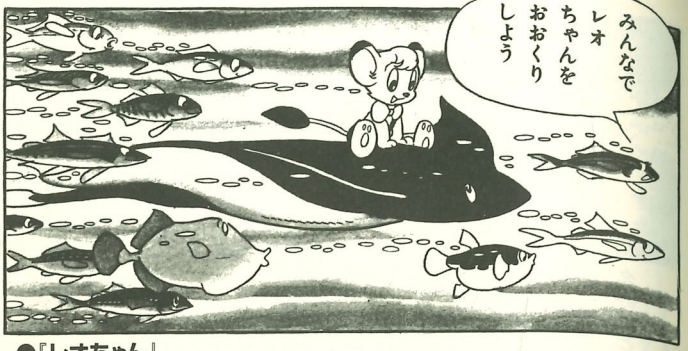
『レオちゃん』では、レオがエイの背中に乗っている。その形からすると、イトマキエイのように見える。しかし、イトマキエイは体長三メートル近くにもなる大型のエイであるから、他の魚と比べると、実際はもっとずっと大きい。

エイは漢字で「鱏」または「鱝」と書き、世界に四〇〇種もいるというから、魚族の中でも大家族である。日本近海にも約六〇種が見られるが、一般には身近に感じられない魚である。

オニイトマキエイというエイの最大種が、〝マンタ〟という名で、ときどきテレビのノンフィクション番組などで紹介されるくらいであり、特に関東地方では、本物のエイを見る機会はない。水族館などを別にすると、魚屋などでもあまり見られない。

さすがに手塚漫画の中でも出演は少なく、普通の人間には記憶の隅にも残らないくらいの存在であると思われる。『レオちゃん』でエイが採用されたのは、魚としては大変ユニークな形をしていて、森の王の子、レオを乗せるのにふさわしいものとして選ばれたのだろう。

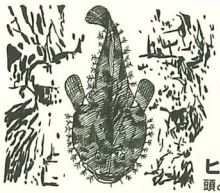
エイはプランクトンを口の中に流し込み、漉し取って食べる平和的な魚であるが、〝マンタ〟などは、英語で〝悪魔のエイ〟と呼ばれる。すなわち、デビル・レイ。一見奇怪とも思えるような形から命名されたものだろうが、このように、実際の習性とはまったく反対の名をつけられた生物は数多い。



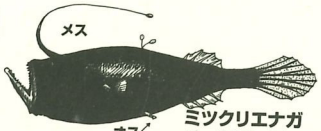
●『レオちゃん』
ウマヅラやタラのような魚が、エイとともにレオを見送っている。

●『ピピちゃん』
ハリセンボンや熱帯魚たちが、にぎやかに描かれている。

チョウチンアンコウ



ヒメアンコウ
頭と体に房状の皮弁を持つ。



ミツクリエナガチョウチンアンコウ
オスは体長1.5センチで、メスから栄養をもらっている。

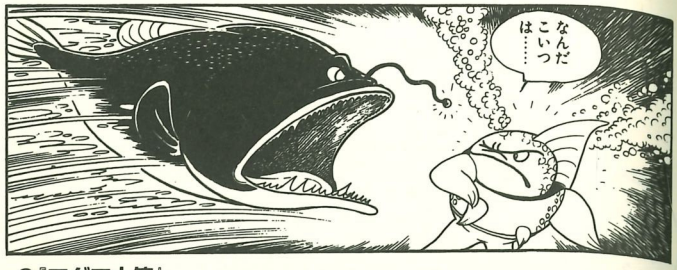
アンコウの仲間は日本の沿岸に一科五一種もいて、そのすべてがお世辞にも美しいとはいえない魚である。はっきりいってしまうと、醜いほうの魚の代表であろう。

しかし、醜い魚に限って人気が高い。それは、ヒトにとって美味であるからで、厳寒の冬、アンコウが〝吊るし切り〟のために割烹などの厨房にぶらさがっている様子は、風物詩的趣さえあるように思えてしまう。アンコウは体が軟らかく粘りがあり、包丁が入れにくいので、まな板の上で料理せずに吊るして切っていくのである。

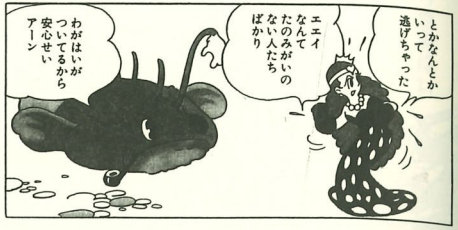
数多いアンコウの仲間ではあるが、とりわけ面白い形をしているのがチョウチンアンコウである。その名のごとく、頭の上にチョウチンのような発光性の擬餌状体の突起がある。

手塚治虫が「漫画化するのには、これにかぎるわい」と思ったかどうかは知らないが、『マグマ大使』をはじめとする作品群に描かれているアンコウは、すべて〝チョウチンアンコウ〟なのである。『ピピちゃん』では、よりマンガチックに誇張されていて、擬餌状体が本当の釣り竿のように描かれていて笑わされる。チョウチンアンコウは漫画になりやすいせいか、他の漫画家の作品でも、一コマ漫画などでときに見かけることがある。

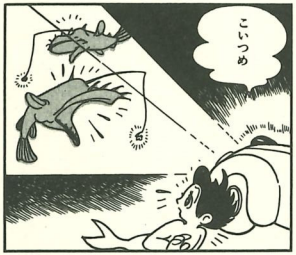
チョウチンアンコウは、メスが体長六〇センチもあるのに対して、オスはわずか二センチと、典型的な超ノミの夫婦であるということだ。



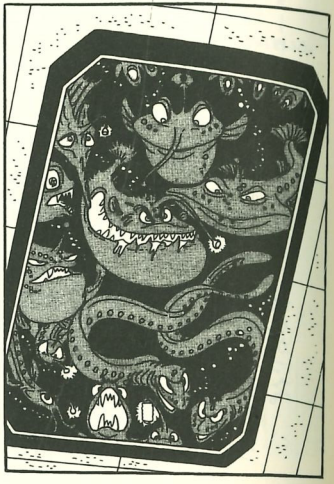
●『マグマ大使』
初期の作品よりリアルな描写になっている。



●『奇蹟の森のものがたり』
ほとんどが強そうな役柄で出演している。



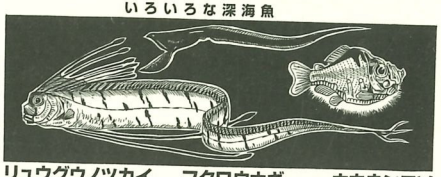
●『ピピちゃん』
これは痩せていて貧相で、ユーモラスでもある。



●『火の鳥―太陽編』
恐ろしい表情の深海魚が描かれている。

フクロウナギ

いろいろな深海魚



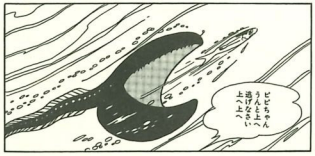
リュウグウノツカイ（体長10メートル）　フクロウナギ（体長75センチ）　ホウネンエソ（体長9センチ）

『ピピちゃん』と『鉄腕アトム―コバルトの巻』に描かれている黒くて長い魚は、深海魚のフクロウナギである。口が袋のようになっているところからつけられた和名であろう。体の側面に白い点々がついているが、これは小さな発光器で、深海に棲むものには、発光器を持っているものが多い。

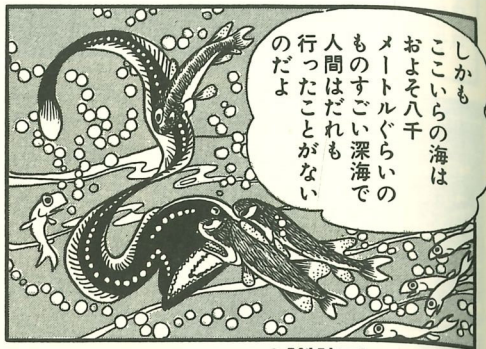
アトムとコバルトが深海に潜っていくシーンには、二人の下に三匹のホウネンエソや深海性のエビが描かれている。このように、情景描写的カットの中でも科学的な生物考証がなされているところが、手塚漫画の特徴の一つだ。リアルな形態を残したマンガタッチ――これが素晴らしいところである。

深海魚は、水深一〇〇〇メートルから二〇〇〇メートルという、あまり栄養のない地帯に生息するため、小型のものが多い。ホウネンエソは体長六～九センチだし、ハダカイワシも一〇センチを超えない。

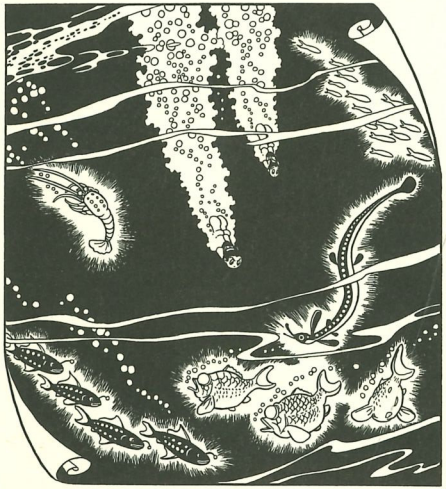
それでも例外的に大型で、目をみはるほど美麗な深海魚がいる。〝火の鳥〟の五本の赤い鶏冠のような角状の背びれ、紅色と銀色のメタリックなボディーを持つ〝リュウグウノツカイ〟である。なんと体長一〇メートルという奇跡的な深海魚で、長さだけでいえば、大型のサメも真っ青という雄大さである。生きて泳いでいるのを目撃することは大変稀であり、それを見た人には幸運が訪れるという伝説がある。残念ながら、約七〇〇作の手塚漫画の中にも、ついに姿を現すことはなかった。



●『ピピちゃん』
フクロウナギは両顎が非常に大きいのが特徴である。

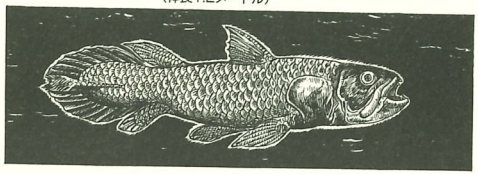


●『鉄腕アトム―コバルトの巻』
いろいろな深海魚が描かれている。



シーラカンス

シーラカンス
（体長1.2メートル）

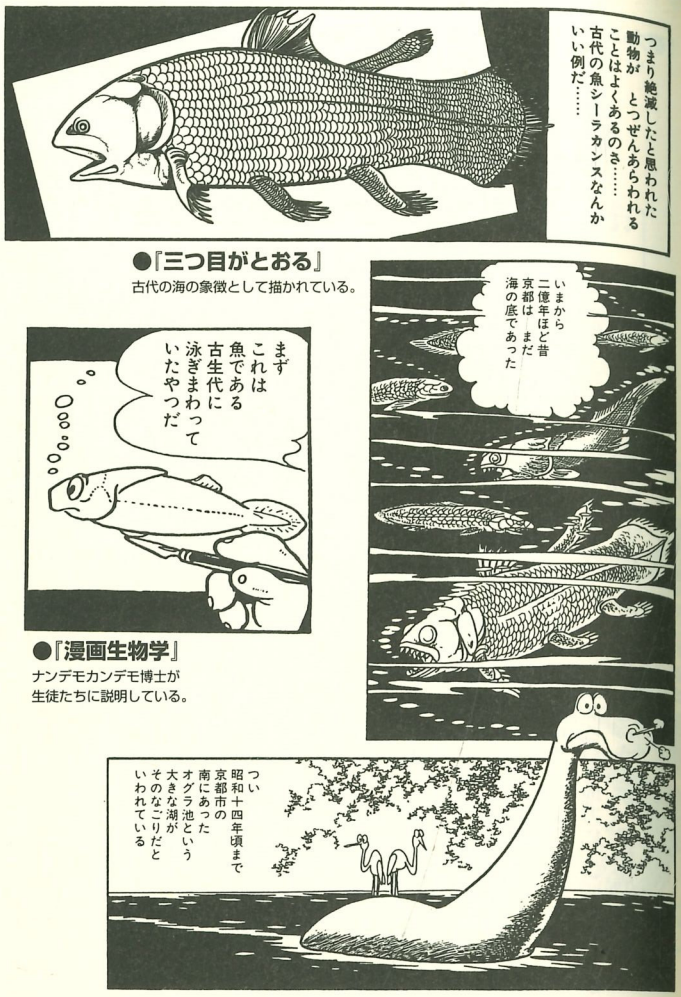


手塚治虫ならずとも、博物好きな人ならば誰もが興味ある魚というのが、シーラカンスであろう。『三つ目がとおる』『漫画生物学』や、ここには挙げていないが『海のトリトン』など、手塚作品はシーラカンスだらけだ。

なにしろ、この超古代魚は、とっくに絶滅した化石種だと思われていたのだが、五〇年ほど前に生きているものが発見されたので、世界中が大騒ぎになった。世界的なビッグニュースだ。『漫画生物学』は、それからちょっと後に描かれたものであるから、手塚治虫がすぐに作品中に取り込んだものだろう。それは一九五三年のことであったが、実際には、すでに一九三八年に南アフリカで捕獲されていた。

捕獲の報告を受けたのは、イーストロンドン町の博物館のラティマー女史であった。そして、彼女の手紙と標本を見て、高名な魚類学者のJ・L・B・スミス博士は、この魚は数億年前に地球上に出現し、その後絶滅したと思われていたシーラカンスであると同定（どうてい）した。博士によって、ラティマー女史の名前から、〝ラティメリア・チャルムナエ〟という学名がつけられた。これがシーラカンスの本名というわけである。その後よく調べてみると、マダガスカルに近いコモロ諸島では、以前から島民によく捕まえられて、食用にされていたということもわかった。

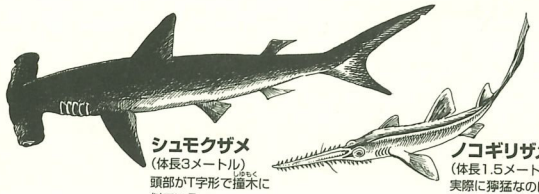
フランス政府より日本にも標本が一匹贈られて、現在も、よみうりランドで見ることができる。



●『三つ目がとおる』
古代の海の象徴として描かれている。

●『漫画生物学』
ナンデモカンデモ博士が生徒たちに説明している。

ノコギリザメ

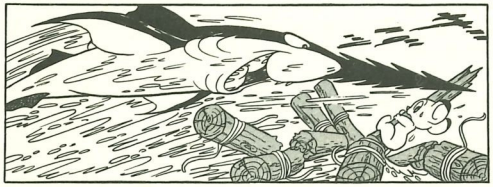


『ジャングル大帝』や『チッポくんこんにちは』では、同じようなシチュエーションでノコギリザメが出てくる。『ジャングルタロ』に出てくるサメは、目と目の間隔の広い獰猛なシュモクザメである。また、実際にはサメの仲間ではないが、コバンザメも登場していてにぎやかだ。

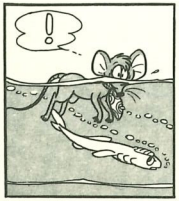
特に『ジャングル大帝』のノコギリザメは、アニメーション版でも大暴れし、レオを苦しめるが、実物は体長一・五メートルほどのおとなしい種類だ。吻が扁平で細長く、その両側に大小の鋭いトゲが一列に並んでいるのをノコギリに見立てたものであるが、そこに漫画的な趣があり、起用されたものだろう。

ノコギリザメは小魚の群れの中に突入し、ノコギリを振りまわして小魚を突き刺し食べるというが、歯は鋭いがもろくて、実際は、とてもイカダを壊すほどの力はない。多分に物語の中で誇張されているものであるが、『ジャングル大帝』の冒頭シーンの印象深いエピソードである。またノコギリザメは、カマボコの原料になることでも知られている。

ところで、サメの専門家の矢野憲一氏によると、「サメとフカはどう違うのですか？」という質問が大変多いという。広辞苑には、サメ類の特に大型のものをフカというとあるが、フカはサメの異名で、生物学的にはフカという魚はいない。関東地方ではサメ、関西地方ではフカと呼ぶことが多い。山陰地方ではワニというから、各地方によって呼び名が違うというのが一般的解釈である。

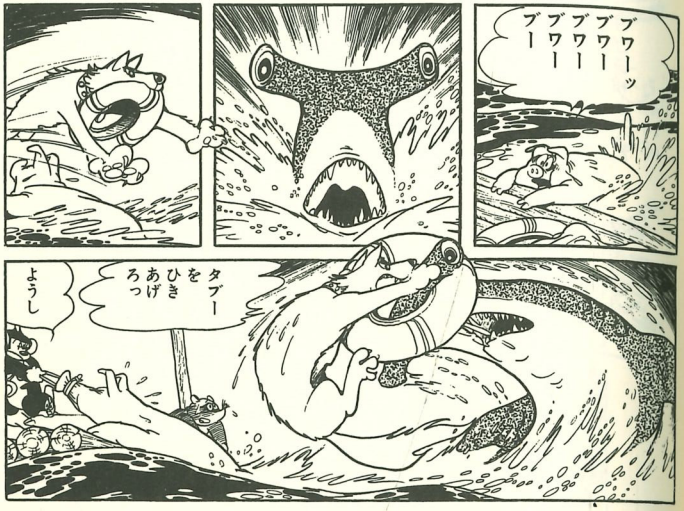


●『ジャングル大帝』
レオを襲うノコギリザメ。



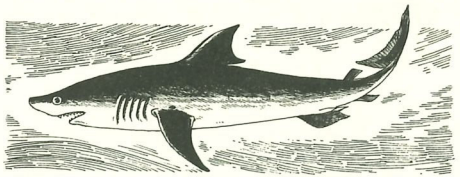
●『ジャングル大帝』
手塚漫画の中でも珍しいコバンザメ。

●『チッポくんこんにちは』
ここでは、チッポくんに降参している。



●『ジャングルタロ』　シュモクザメはT字形の先端に目がある。

ホオジロザメ



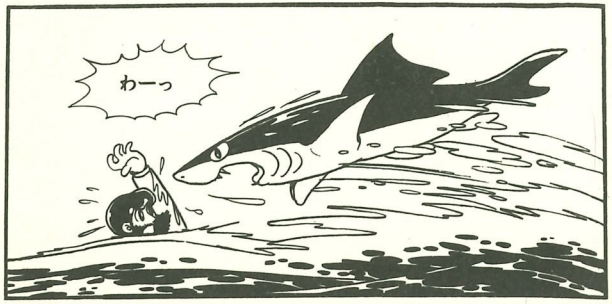
ホオジロザメ
世界で最も凶暴なサメである。

世界で約二五〇種、日本では約一〇〇種が知られているサメのうち、人を襲うのは二〇種ほどらしい。『エンゼルの丘』や『ブラック・ジャックーアヴィナの島』では、いずれもサメが人を襲っているが、その形態からすると、アオザメかホオジロザメであろう。特にホオジロザメは人間に危害を加えるサメで、巨大ホオジロザメといえば、どうしてもスピルバーグの映画「ジョーズ」を思い出す。映画好きの手塚治虫は、この映画を高く評価していた。

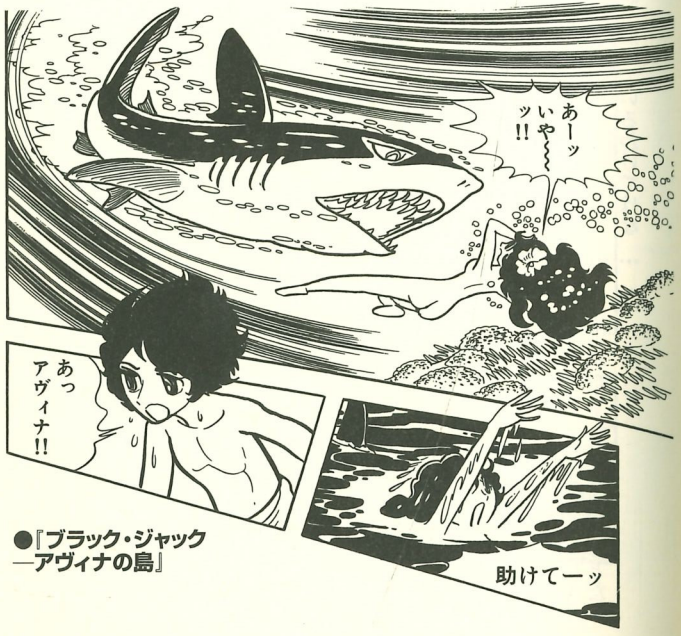
これらのサメは成長すると、体長八メートルにも達し、マンイーター・シャークと呼ばれる。すなわち「人食いザメ」という英名である。この他にイタチザメ、ヨシキリザメ、オオワニザメ、ヨゴレザメなどが危険なサメとされている。

八メートルもの体長は、その体積も考えあわせれば、ヒトから見たら途方もない大きさである。しかし、古代、新生代第三紀には、メガロドンというホオジロザメの祖先のような奴がいて、体長二〇メートル以上あったという。顎と歯の化石から復元すると、大人が立って口の中を歩けるほどの大きさであったというから、さすがのジョーズもかなわないだろう。

現存している超大型のサメというと、クジラを思わせる体長二〇メートルのジンベイザメ、一〇メートルを超すウバザメがいるが、これらはヒトに危害を加えない。プランクトンなどを食べている温和な性質のものである。

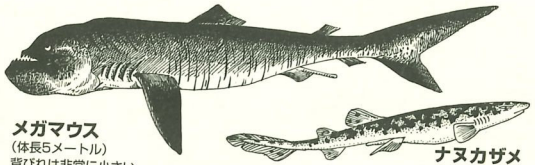


●『エンゼルの丘』



●『ブラック・ジャック
―アヴィナの島』

トラザメ



メガマウス
（体長5メートル）
背びれは非常に小さい。

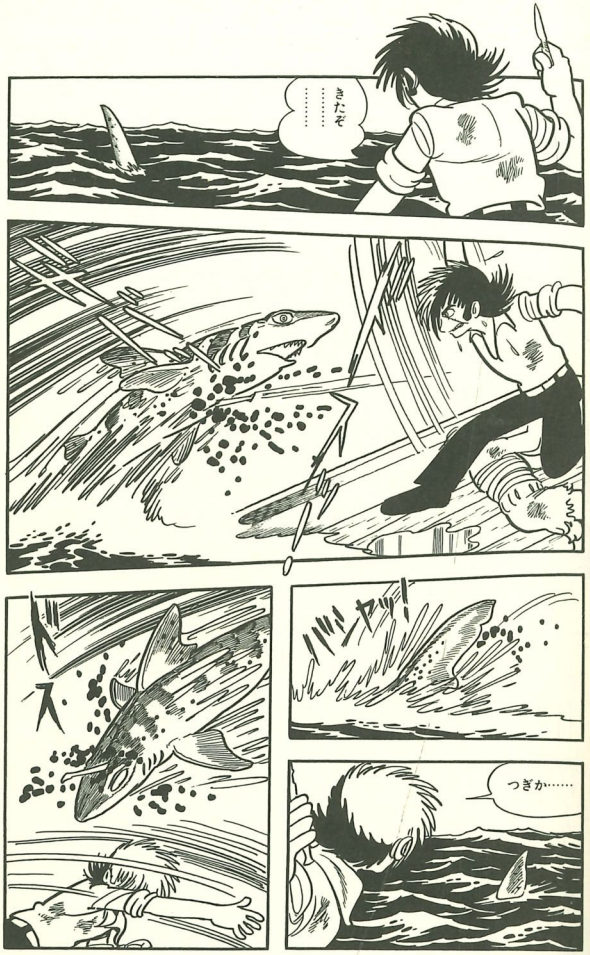
ナヌカザメ
（体長1メートル）
フグのように腹部をふくらます。

「漫画の本質は風刺と誇張にある」と言っていたのは手塚治虫であるが、このブラック・ジャックを攻撃しているサメは、誇張そのものである。手術用のメスで応戦するのにほどよい大きさとアクションのため、一メートルほどのサメを描いたのだろう。

このサメの種類を推測すると、その模様からトラザメが思い浮かぶ。また、ナヌカザメにも見える。しかし、トラザメは五〇センチ、ナヌカザメは一メートルほどの大きさであるが、両者とも動作は不活発でヒトを襲うことなどできない。漫画の中で、小型のサメのデザインと、ヨシキリザメなどの凶暴なサメの性質をミックスしたものだろう。

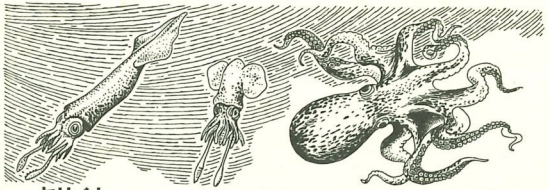
学術漫画を描いているわけではないから、ドラマを盛り上げるうえで、これは当然の設定をしたまでで、許されるウソである。

一九七六年、ハワイ諸島で新発見された巨大ザメ〝メガマウス〟は、大変なニュースとなった。五メートルを超す体長、下顎が前に突き出た特異な形態で、プランクトンを食べて生きている。新発見以来二五年以上過ぎた今も、世界で一〇例が捕獲されたのみである。最近の捕獲例は、一九九七年六月一一日、三重県尾鷲市沖で捕獲された個体で、世界で二例目のメスであった。これは一般の新聞でも報道されたが、体長五メートル四四センチもある世界最大のものであった。このような新種は、これからも発見されることだろう。



●『ブラック・ジャック―ご意見無用』
トラザメもナヌカザメも、同じトラザメ科である。

イカ／タコ



イカもタコも同じ軟体動物である。手塚作品の中では、イカは人を襲うシーンが多く、ここではその代表的なものとして『オズマ隊長』のカットを選んでみた。逆にタコはそのスタイルから、漫画にするとどうしても剽軽な形になり、ギャグ的な生物になってしまうようだ。

手塚治虫が子供の頃、師と仰いでいた田河水泡の『蛸の八ちゃん』や、村田安司の『蛸の骨』などのアニメーションは存在するものの、タコやイカはヒーロー、ヒロインにはなかなかなり得ないようだ。手塚アニメでも、わずかに『リボンの騎士』や『海のトリトン・パイロット版』などの中に、ほんの少し登場しているくらいだ。

イカもタコもよく似た生物で、ともに墨を吐くという共通点もあるが、決定的に違うのは、ご存じのとおり腕の本数だろう。腕は普通は足と呼ばれるが、イカには八本の短い足と、触腕と呼ばれる二本の長い足があり、タコには触腕の二本がないため、八本のみである。

また、吸盤の構造もまったく異なっている。イカの吸盤にはワイングラスのような柄があり、内側には硬いリングがはまっている。リングには、イカの種類ごとに一定の形のギザギザがある。これに対して、タコの吸盤には柄も硬いリングもなく、ぺったりと、相手に直接吸いつくようになっている。

イカ、タコは食べ物としても人気があり、特にイカは日本人が最もたくさん食べている魚介類である。

●『ロビンちゃん』
ここではタコが人間を襲っている。

●『月世界紳士』
いかにものどかな、
とぼけたタコとイカである。
手塚治虫初期のギャグ漫画。

●『オズマ隊長』
巨大イカの話は世界各地に伝わり、
実際に体長が数十メートルの
ものがいるらしい。

「ノーチラス号」
それは、ゆうめいな空想小説にでてくる怪潜水艦のなまえだ。
ネモ艦長というなぞの人物がそうじゅうして、七つの海をあばれまわり、大イカとたたかったり、するけれど、ほんとは、商船をおそう怪物なんだ。
こんどの事件は、その小説にそっくりだ。
だけど、世界がこんなに平和になったのに、そんな潜水艦なんか作れるはずはない。

カニ

カニはオスとメスでは腹側の形が異なる。

手塚治虫中期のSF傑作『ビッグX』とは、生物を巨大化する薬品の名前である。ガザミのようなカニが敵役ハンス・ヘングルを圧倒している。また、『ピピちゃん』のカニは、その特徴から世界最大のカニ、タカアシガニだということがわかる。漫画的デフォルメはあるけれど、手塚治虫はあらゆる生物を実証的に描いた。

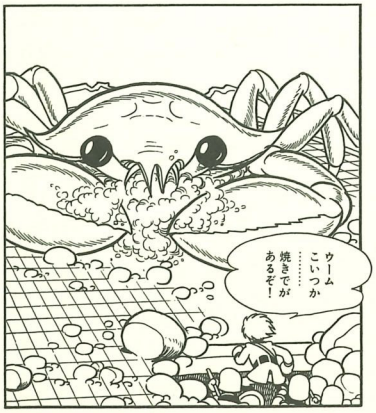
図鑑類に、その生物の味まで記されているものは、魚類と海浜生物類だけであるが、カニはそういった水産生物の中でも、特に美味しいものの一つである。ガザミは一般に、料理屋やレストランでは〝ワタリガニ〟と呼ばれるが、たとえばガザミのグラタンといわれたら、語感がゴツくて美味しそうじゃないからであろう。手塚治虫は、このワタリガニのグラタンを好んで食したもので、私も何度かお供をしたことがある。

「これをご飯と一緒に食べると、とても美味しいんですよ」

とニコニコしていた覚えがある。

カニは、まるごと食べられる小さなサワガニなどを別にすると、頑丈な外骨格と胴体が大半を占め、食用にするところは、足と腹部の一部にすぎない。半分くらいは捨ててしまうことになるが、最近は、この固いキチン質を医療や工業用に再利用する研究が進んでいて、実用化もされているという。

『世界を滅ぼす男』のヤシガニは、宿貝を持たない大型のヤドカリで、次項で取り上げるが、カニの仲間ではない。



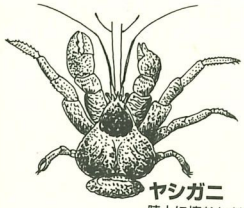
●『ビッグX』
ガザミは非常に美味である。

●『ピピちゃん』
タカアシガニは、全長3メートルを超す。

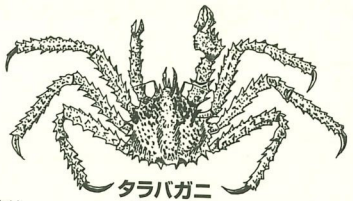
●『よろめき動物記―カニ』
大人もののギャグ漫画の線である。

●『世界を滅ぼす男』
ヤシガニはヤシの実を好んで食べるが、木から切り落とすことはない。

ヤドカリ



ヤシガニ
陸上に棲むヤドカリ。



タラバガニ
ヤドカリの仲間である。

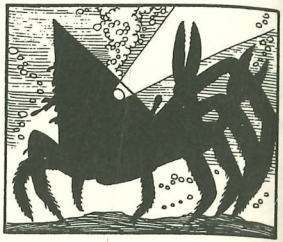
最近ではヤドカリも、海へ行って磯遊びしているときや、夏祭りの屋台でペットとして売られているのをときおり見かけるくらいで、現代では顧みられることの少なくなった生物である。教育的な要素を含んだ勉強漫画ともいえる『漫画生物学』や『ミッドナイト』などで、手塚治虫はヤドカリを取り上げているが、その数は少ない。

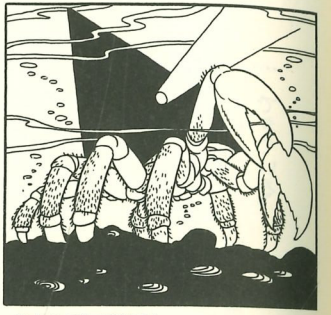
ビデオやコンピューターゲームなどの娯楽がなかった私の子供の頃は、ヤドカリやザリガニのような小動物は、男の子の人気ものであった。ザリガニは、適度にメカニカルなフォルムと鋏を持ち、ヤドカリの場合は、一つ一つ異なる背中のカイが特徴的であった。祭りの後の登校日などに、巨大なヤドカリを持ってくる同級生がいると、みんなの羨望の的になっていたのを思い出す。

私は子供の頃から昆虫だけでなく、ほとんどの生物が好きであったから、各種の図鑑をよく見ていたが、その頃、一大発見をした。なんと、あの美味しいタラバガニがカニではなくて、ヤドカリの仲間であることを知り、びっくりしたのである。当然、クラスの誰もそのことを知らず、後年、大人になってからも、知る人はほとんどいなかった。

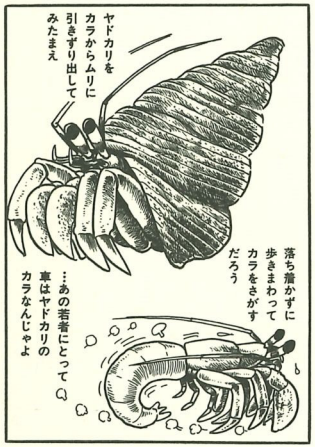
デパートなどのカニ缶売り場で最高級品として売られているので、誰もがカニだと思ってしまうのは無理からぬことだ。しかし、足が四対しかなく、五対の足を持つカニの仲間とは大きく異なる。タラバガニは、やはり巨大なヤドカリだったのだ。

●『漫画生物学』



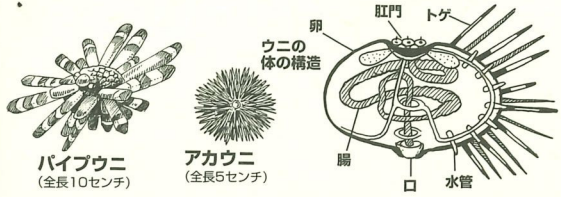


●『オズマ隊長』



●『ミッドナイト』

ウニ



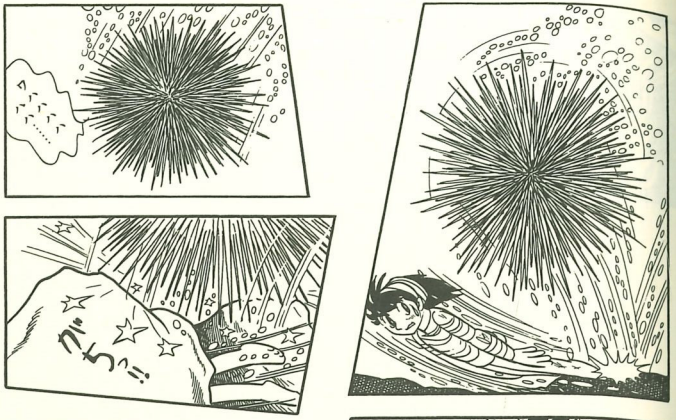
『海のトリトン』に出てくるウニ型の怪人は、ガンガゼのようなウニを模したものである。『ふしぎ旅行記』のものは、一般的なイメージのウニの形をしている。さすがに人格、いやウニ格が感じられるほどの出番はないが、博物的な要素は感じられる。

一時、「頭がウニになっちゃう」などという言葉を聞くことがあったが、これはどうやら、暑くて（？）脳みそがウニのようにトロトロになってしまうという意味らしい。

ウニといえば、なんといっても江戸前寿司のネタとして最高級品であり、好んで食する人も多い。しかし、逆にウニが嫌いという人もかなりいて、食品として極端なものがあるようだ。

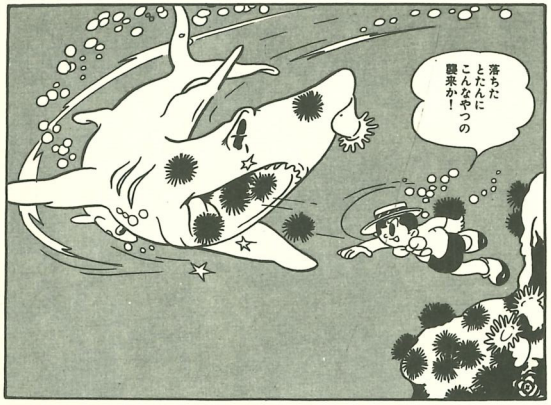
昆虫好きという点で手塚治虫と共通している漫画家の松本零士（まつもとれいじ）氏は、プロデビューする以前、手塚治虫に原稿の手伝いを頼まれた。二、三日徹夜の状態が続き、ようやく仕事が終わった後、寿司を食べさせてもらったという。それも、ウニばかり十（お）何個も食べたというのだ。とても美味（い）しかったらしく、その感激をずっと後にエッセイに書かれていた。

私はかなり長い間、手塚治虫と一緒にアニメーションをつくってきて、何度も食事をご馳走になったが、不思議と寿司屋に行ったことは一度もなかった。ウニは美味しいものであるけれど、実は我々はウニの生殖巣を食べているのである。ちなみに針のような固いトゲは石灰質でできている。

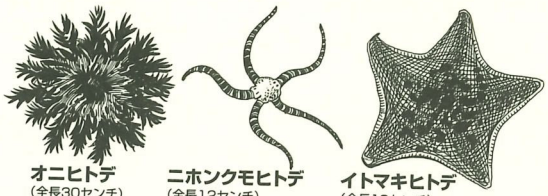


●『海のトリトン』
ガンガゼのような鋭いトゲを持ったウニである。

●『ふしぎ旅行記』
ウニがなかなかの活躍をしている。



ヒトデ



オニヒトデ（全長30センチ）　**ニホンクモヒトデ**（全長12センチ）　**イトマキヒトデ**（全長10センチ）

ヒトデは漢字で「海星」と書く。なるほど、海の星である。また、人の手に似ているので「人手」という説もある。

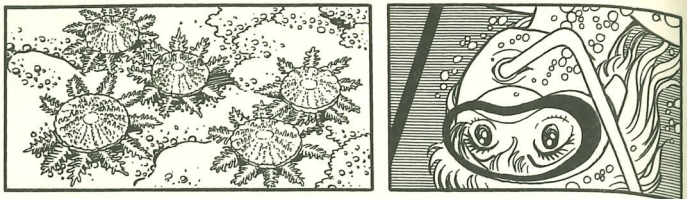
棘皮動物門ヒトデ綱に分類されているが、こんな言葉は専門家以外では、学校の生物の授業くらいでしか、まずは聞かないものである。私などは、ヒトデを物語の中に採り入れようなどとは夢にも思わない。

手塚治虫は、こんな一般的でない生物もいくつかの作品に登場させていて、しかも『ひとでの秘密』では、主役をも与えている。あらためて博学の天才といわざるを得ない。

ヒトデは、いってみれば不気味な存在であるが、こんなヒトデもウニの親類なのだから、食ってしまおうと考えた人がいる。その人が、淡路島に仲間と旅行したときのこと、海でヒトデを拾ってきて、旅館の調理場へ持っていき、料理してくれと頼んだのだ。旅館の人が怒ってしまい、結局、料理してもらえなかったそうであるが、こんなことをしたのは誰あろう、若き日の手塚治虫その人であった。

後年には聞いたことがなかったが、手塚治虫が若い頃は、結構ゲテモノ食いであったという。このとき、ヒトデは食べられなかったが、フジツボとヤドカリの佃煮は食べたという。「芝エビやアミとおんなじ味である」と、「オール読物」（一九六二年一〇月号）にエッセイを寄せている。

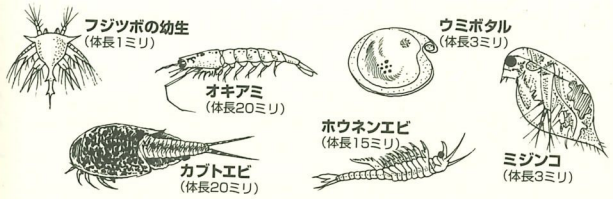
はてさて、ヒトデはどんな味がするのであろうか。



●『海の姉弟』
これはオニヒトデであろうか。

●『ひとでの秘密』
ヒトデが主役の作品である。

オキアミ／ミジンコ



『鉄腕アトム―海蛇島の巻』のオキアミのようなもの、『火の鳥―鳳凰編』のミジンコまたはプランクトンのようなもの、いずれも極小の世界の住人である。

『火の鳥―鳳凰編』には「ごみのようにちいさなあわれな生きものだ」というセリフがあるが、これはストーリー上、どうしても登場させなくてはならなかった微生物である。このように、ほとんど何も考えずに生きているだけの生物に対しても、手塚治虫の愛情が感じられる絵である。

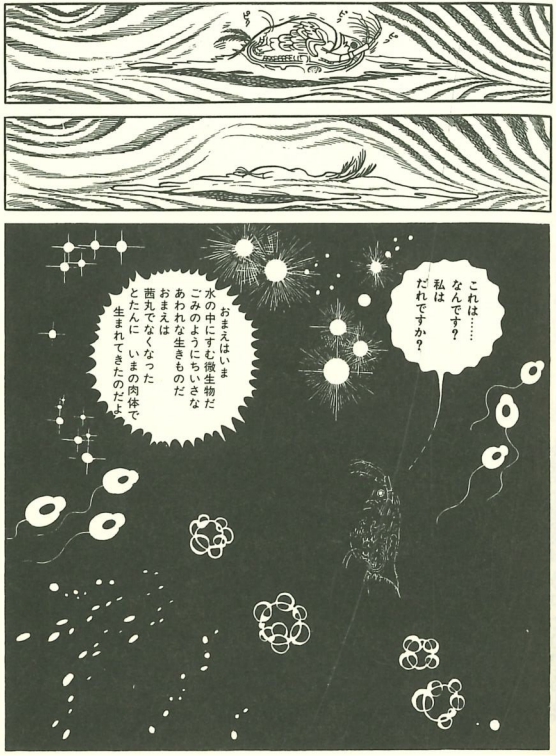
たんぼや水たまりに発生するミジンコの研究といえば、音楽家の坂田明氏がすぐに思い浮かぶが、氏によれば、ミジンコは知れば知るほど面白い生物なのだという。トンボの幼虫のヤゴなどにも共通するような、水中生活の不思議さは理解できるような気がする。やはりたんぼに発生するカブトエビや、発光する甲殻類のウミボタルなど、これら小型甲殻類には面白いものがたくさんいる。

かつて、ある粉末を水に入れると超小型生物となり、その顔が猿に似ているというので〝シーモンキー〟と称して通信販売されていたことがあった。うまく育てれば、体長二センチにもなり、顔もはっきり見えるようになるとあった。

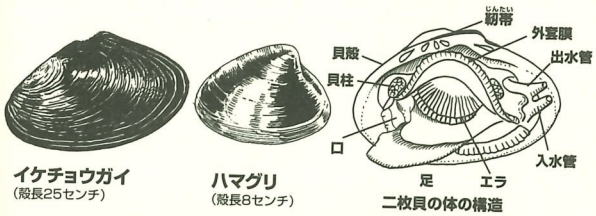
世にも不思議な生物だったが、これは、今考えてみると、水分を与えると孵化する小型甲殻類の仲間だったのだろう。卵が乾燥した状態だと、何年間もそのまま保存できるという砂漠性のものもあると聞く。

●『鉄腕アトム―海蛇島の巻』
オキアミは重要なクジラの餌となる。

●『火の鳥―鳳凰編』
手塚治虫の微生物に対する愛情も感じられるコマである。



アコヤガイ



イケチョウガイ（殻長25センチ）　ハマグリ（殻長8センチ）

こんなクイズがある。

「この世で一本足の生物がいるが、それは何か？」

そんな生物が本当にいるのか？と誰しも考えてしまうが、その答えは二枚貝である。内臓の塊は筋肉に包まれ、その腹側に斧形の一本の足がある。それで、二枚貝綱を斧足綱と呼ぶことがある。

『海のトリトン』と『ピピちゃん』では、数多くのシーンに二枚貝が登場しているが、海洋ものといってもいい分野の漫画なので、これは当然のことかもしれない。カイが大活躍するわけではないが、海洋ものとしての味を濃くしている。

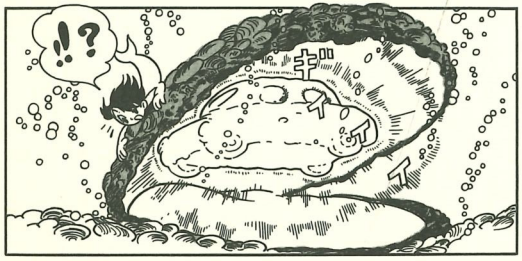
『ピピちゃん』に出てくる真珠貝は、海の宝石といわれる真珠をつくることで有名であるが、これは俗名で、シンジュガイという種類のカイはない。おもにアコヤガイ、淡水産ではイケチョウガイなどがそれで、これらのカイの殻の中に、別のカイの外套膜の組織と核を入れると、核のまわりに美麗な真珠の層をつくるのだ。これを一般に真珠貝の養殖といっている。

二枚貝の中でも一般的で、味がいいのはハマグリであるが、この大型のカイの内側は色が白く、文字を書けるほどの大きさがある。そこで、ここに和歌の上、下の句を書いたものが歌ガルタとなった。私も以前、ハマグリの貝殻に、アトムやレオたちの表情を二種類ずつ描き、貝合わせのようなことを試したことがある。食べた後の貝殻も、日本人の生活と密接な関係があったのである。

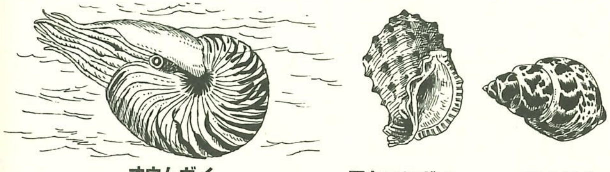
●『海のトリトン』

●『冒険放送局』

●『ピピちゃん』



オウムガイ



オウムガイ　　アカニシガイ　　バイガイ

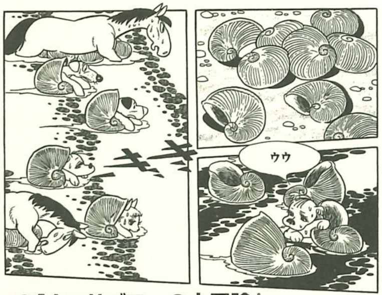
『タマサブローの大冒険』に出てくるオウムガイは二〇センチほどの大きさで、頭足状の体を出して泳ぐ〝生きている化石〟とも称される軟体動物の一種だ。なにしろ中生代の三畳紀頃からほとんど姿形が変わっておらず、種としては大変な長生きだといえよう。現在、三種が生存している。

『I・L―封蠟』の巻き貝はホラガイ、『地球を呑む』の口絵のカイは造形的な美しさを持つホネガイである。『エンゼルの丘』のカイも典型的な巻き貝となっている。

ところで、巻き貝の巻きの方向は、ほとんどが右巻きである。例外的に左巻きのものとして、ヒダリマキマイマイ、サカマキガイといったものもいることはいる。キセルガイの仲間も左巻きである。

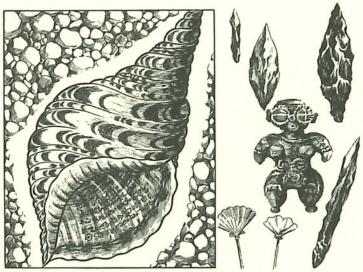
面白いのは、本来は右巻きの種なのに、稀に左巻きのものが出ることである。ある研究報告によると、大量のオナジマイマイを飼育したところ、七〇〇〇分の一の確率で左巻きのものが出たという。右巻きが圧倒的に多い理由は、これは実はわからないのだそうだ。

タカラガイの仲間が大昔、お金のかわりに使われていたのは有名な話だが、その名残か、今もお金に関する漢字には「貝」のつくものが多い。買、販、財、購、貨、貸、貢、貧……などがあり、昔はカイは貴重品であったのだろうか。カイを通貨のかわりに使っていたのは世界的なことで、インド、アフリカ、秦時代の中国などの例がある。

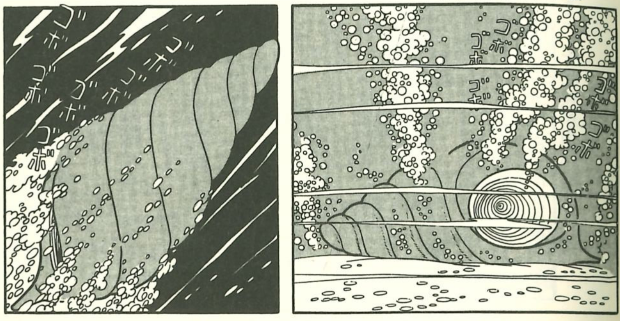


●『タマサブローの大冒険』
玉サブローが原始的なオウムガイに乗って登場した。

●『地球を呑む』
大人ものの一種の風刺ドラマで、ホネガイはストーリーには関係なく、対比的な構図を表すために使われた。

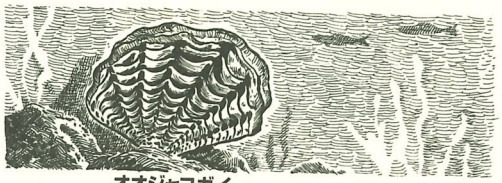


●『I・L―封蠟』
これは作品の冒頭に使用された。



●『エンゼルの丘』
ホラガイのような典型的な巻き貝である。

シャコガイ

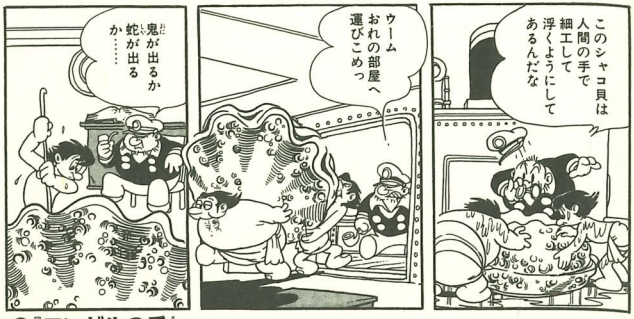


オオジャコガイ
威風堂々たるカイの王者である。

クジラならシロナガスクジラ、魚類ならジンベイザメ、カニならタカアシガニと、海に棲む生物でもその最大種となると、帝王的な堂々たる貫禄があるものだ。カイでいえば、それは殻長一メートル四〇センチ、重さ二三〇キログラムにも達するシャコガイの王、オオジャコガイである。世界最大の二枚貝で、仏教教典では七宝の一つにも数えられているから、たかがカイなどとはとてもいえない迫力だ。『ブラック・ジャック―青い恐怖』の中では、その迫力が見事に表現されていて、読む者の度胆を抜く。

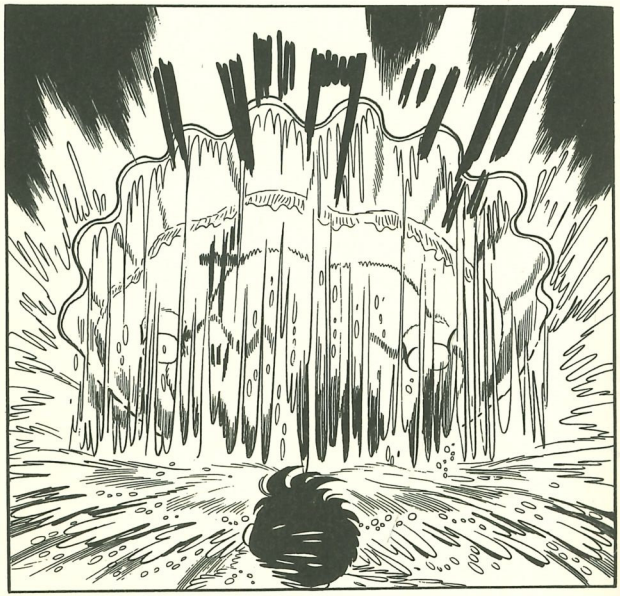
私には、子供の頃のシャコガイの思い出が二つほどある。その一つは、上野の科学博物館にあった標本についてである。それは、殻長一メートル程度のものであったと思うが、巨大さもさることながら、その貝殻の厚みに驚いた。厚さが数センチもあって、何十年か前には、遠い熱帯地方の海に生きていたのかと思うと、その海の底の情景が想像されるのであった。

もう一つは、博物好きの父の蔵書の一冊に描かれていた、シャコガイに足をはさまれている男の絵である。ダイバーの酸素ボンベには、あまり残量がない。時間は刻々と過ぎていくが、シャコガイの締めつける力はますます強くなっていく、というような絵で、ダイバーの悲惨な表情が忘れられない。少年の日に見たものが強烈な記憶となっているらしく、今でもシャコガイの写真などを見ると、その絵が思い出される。



●『エンゼルの丘』
シャコガイは熱帯のサンゴ礁の海に棲む。

●『ブラック・ジャック―青い恐怖』
シャコガイの恐ろしさが見事に描かれている。



第四章 鳥類

カラス

街中のカラス
（埼玉県新座市）

都心で一番目につく鳥といえば、まずカラスが挙げられる。しかし、愛鳥週間などでも、カラスはまったく相手にされていないのである。ゴミをついばみ、知恵があって悪戯をする。それに、恐れを知らぬような面構えに、あの真っ黒な色。人々は、その色にまで不吉を感じ、カラスを嫌悪する。だが、人間も勝手なものである。都心にカラスが増えたのは、土地開発をし、不用意に生ゴミを出す人間のせいなのである。

カラスは、鳥類の中でもトップクラスに入るくらい頭がいいらしい。ひと頃、鉄道の線路の上に小石を乗せるという悪戯が流行ったが、無人カメラが撮影したビデオによると、真犯人はカラスであった。実際には、線路際の小石の中に餌を隠しているときに、偶然、勢いで石が線路の上に乗ったものなのであった。

実験アニメ『ジャンピング』を製作中のときのこと、そこには手塚治虫のアイディアで、カラスが登場することになった。いっさい画面に出ることのない見た目の主役が、空中でカラスと衝突するのである。「ところで、カラスのくちばしの色はどうしましょうか?」と私。アニメや絵本のカラスのくちばしの色は、昔から黄色と決まっている。本当は灰黒色なのに、いつの頃からか、黄色系が普通になってしまったのである。結局、『ジャンピング』のカラスのくちばしも、やはり山吹色になってしまった。黒い体に黄色いくちばしを持つのはキュウカンチョウなのである。

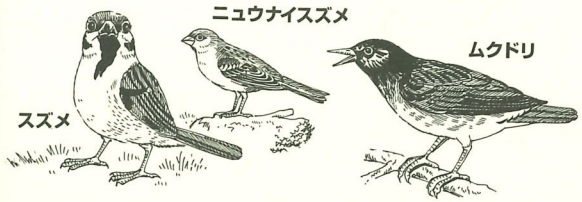
●『プライム・ローズ』
カラスというよりカラスモドキである。

●『アトムキャット』
典型的なカラスの描写である。

●『鳥人大系』
カササギはカラスの仲間だが、日本には少ない。

●『ケン1探偵長』
日本には5種のカラスが生息する。

スズメ



手塚治虫の描く小鳥は多様で、一見してスズメとわかる描き方のものと、最大公約数的な、いわゆる小鳥という描き方のものがある。また、その中間的な描き方のものもあって、分類するのは難しい。

『ひまわりさん』や『鳥人大系』の小鳥は、その特徴から、すぐにスズメだとわかる。ところが、『モモンガのムサ』や『リボンの騎士』の小鳥は、かろうじてキツツキかカワセミらしいと思われるくらいで、それぞれの特徴を顕著には表現していない。つまり、作品の内容によって描き分けられているのである。

手塚邸は、東京都東久留米市の丘陵斜面にあり、野鳥たちがたくさん飛んでくるという。手塚治虫は、エッセイに次のように書き残している。

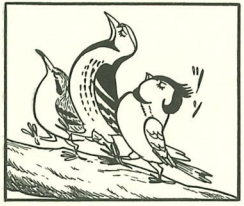
「家でインコやジュウシマツを飼っているせいか、モズ、シジュウカラ、ウグイス、カラス、ドバト、スズメはもとより、オナガ、ヒヨドリ、マヒワ、カッコウ、イカル、ムクドリ、コジュケイ、メジロ、ツグミ、コマドリ、セキレイなどの野鳥が、日ごとに訪れる」

セキレイというのは、たぶんハクセキレイの間違いではないかと思うのだが、所沢、東久留米、清瀬市などの、いわゆる東京郊外にあたる地には、確かに野鳥が多い。オナガなどは本来、里の鳥であったが、新興住宅地が増え、次第に街中にも増えてきたというものである。

手塚漫画には、ここに挙げた以外にも、たくさんの小鳥が登場する。

●『ひまわりさん』

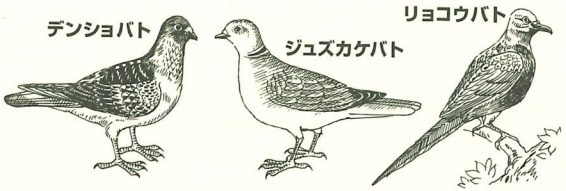
●『鳥人大系』



●『モモンガのムサ』

●『リボンの騎士』

ハト

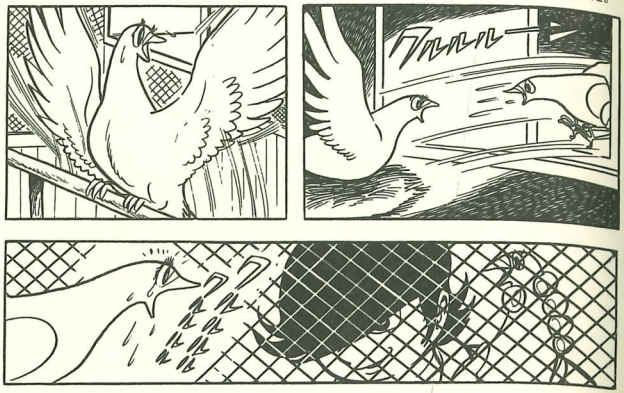


ハトは手塚作品の中では、いずれも平和の象徴としての描写が多いが、『ソロモンの指環』を著したK・ローレンツ博士は、同書の中で、ハトの意外な凶暴性について記している。それは、ジュズカケバトとキジバトを広いカゴの中に一緒に入れて飼っていたときの事件であった。羽毛をむしられ赤裸にされたキジバトの上に、ジュズカケバトがふんぞり返り、なおも羽や皮膚をつつきまわしていたのだ。博士はたくさんの動物を飼い、その行動を研究していたが、同族の仲間をこれほどまでひどく傷つける脊椎動物は見たことがない、とまで書いている。

ハトについては、私が胸をしめつけられるくらい残念なことがある。それは、手塚治虫もついに漫画化することはなかったが、リョコウバトについてである。このハトは、かつて北アメリカの鳥類の中で最大の個体数を誇っていて、有名な鳥類学者で画家でもあったオーデュボンによると、その数は一億二五〇〇万羽と見積もられていた。一九世紀中頃までは、何百万単位の大群は普通であり、この群れが飛行すると、太陽が見えなくなるくらいの密度であったという。しかし、おもに食肉用として捕殺され、野生のリョコウバトの最後の一羽は、一九〇七年に殺された。また、地上最後の一羽は、一九一四年九月一日、シンシナティ動物園で老衰死した。一つの種の絶滅が、このように正確に記録された例は珍しい。青銅色に輝く美しい大型のハトであったという。

●『ベニスの商人』
ロックホームがハトの群れの中を走る。

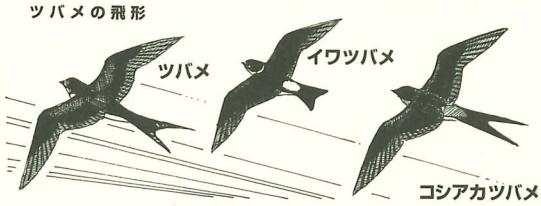
●『アポロの歌』
ハトは平和的に描かれることが多いが、手塚治虫にかかると必ずしもそうではなかった。



●『ぼくの孫悟空』
ハトといえば、やはり豆である。

●『陽だまりの樹』
時代ものの中のハトの描写は珍しい。

ツバメ

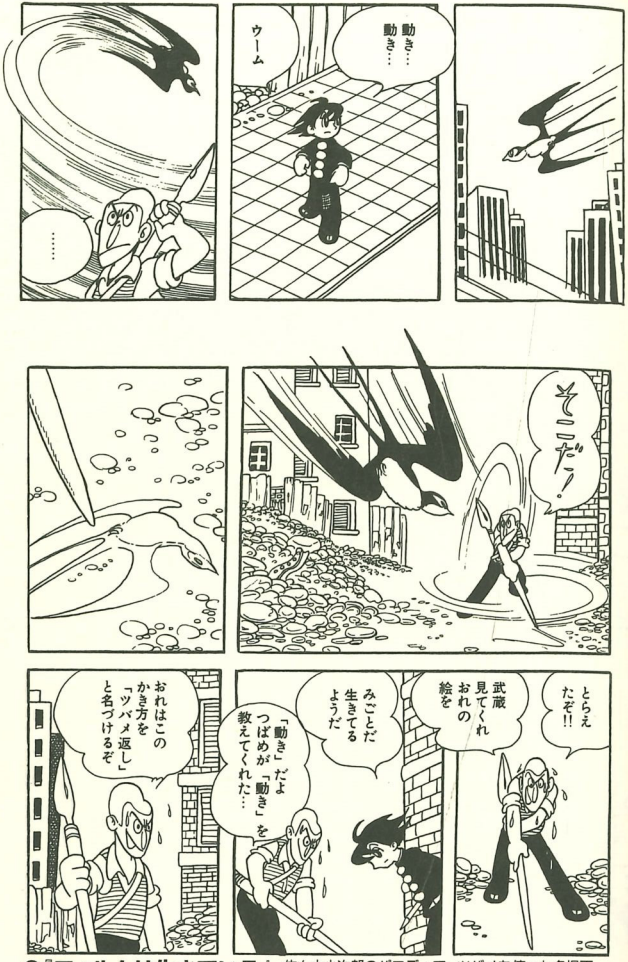


ツバメはツバクラ、ツバクロともいわれるが、清く美しく、めでたい鳥という感じがする。それは、害虫を食べる益鳥、白と黒と赤という実に簡潔なデザイン、スマートな体形などに由来するものであろう。

『万葉集』や『日本書紀』にも、つばめはすでに登場しており、古くから万人に愛されていたようである。ツバメが家に巣をつくると縁起がよい、雨中にツバメが飛べば天気がよくなる、などと言い伝えにもよいものが多い。物語の世界でも、ツバメはだいたい善玉で、西洋でもオスカー・ワイルドの『幸せの王子』などの童話では、感動的な役どころであった。

最近は、都会ではツバメを見ることが少なくなったが、郊外では、まだときに見かける。私は一〇年ほど前に、板橋区でかなりの数のツバメを見かけたことがある。しかし、普通のツバメとは、どこかちょっと違う。お腹の白い部分と背の黒い羽の部分が、あまり鮮やかではないような感じがするのだ。後でわかったことだが、そのツバメによく似た鳥は、近似種のイワツバメであった。また、やや大柄のコシアカツバメという種もおり、これは腹部が薄い赤色をしている。

手塚治虫は自作の中に、ツバメを好んで描いている。アニメーションの世界に生きる二人の若者の物語である『フィルムは生きている』の中のツバメが登場する場面は、私が大好きなシーンで、その描写は特に臨場感に溢れている。



●『フィルムは生きている』　佐々木小次郎のパロディで、ツバメを使った名場面。

オウム

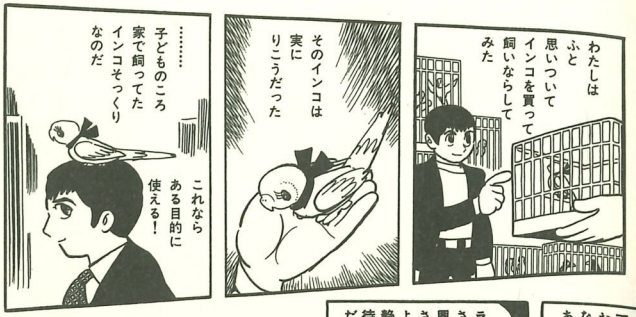
オウムは、手塚作品へ数多くの出演を誇っている鳥だ。『七色いんこ』『ジャングル大帝』『エンゼルの丘』『サロメの唇』『ケン1探偵長』『虹のとりで』……と、手塚治虫の黎明期の作品から晩年の作品に至るまで、オウムは出演しつづけた。

そのほとんどが愛らしい役柄で、実際にも可憐で美しい鳥だ。オウム目の約三三〇種のうち、一般に大型で尾が短く、羽冠の発達している約二〇種をオウムと呼び、その他をインコと呼んでいるが、分類学上の意味はない。

オウムは本来、熱帯と南半球の温帯に生息する鳥であるから、日本とは縁遠い鳥であったはずなのだが、かなり昔から日本にもいた。『日本書紀』には、六四七年（大化三年）、「新羅より鸚鵡一羽を孔雀とともに貢る」という記録がある。当時の権力者に対する献上品、貢ぎ物として渡来していたのだ。それが一般の実力者の間に広まり、次第に見せ物として庶民の間にも知られるようになったのである。

『サロメの唇』は、幕末の頃の若い医者と外国人女性の話であるが、さりげなく、オウムが木の枝に止まっている絵が描かれている。実際に飼われていたのはごく少数であったことがうかがわれる。

手塚治虫夫妻は大変な鳥好きで、家には巨大な鳥小屋がある。その中のインコの何羽かは、野生化したインコが飛んできたのを捕まえたものであると、手塚治虫は「野鳥」（一九八二年一一月号）に記している。



●『七色いんこ』

●『ジャングル大帝』

●『サロメの唇』

●『エンゼルの丘』

フクロウ

フクロウの耳の構造
右の耳の穴は上、
左は下を向いている。

コノハズク
体長20センチの
小型のフクロウ。

フクロウ
"ゴロスケホーホー"
と鳴く。
体長50センチ。

夜行性の猛禽といえば、フクロウ科の鳥たちだ。『双子の騎士』のシルエットのミミズクは三枚目的なメルヘンチックなものであり、ミミズク形の置時計や、ディズニーのアニメーションの中のフクロウなどのように、剽軽なイメージや善のイメージが強いようだ。しかし、その実体は、小動物や昆虫などを襲う猛禽であるから、『モモンガのムサ』的な生態が真実なのである。

ここで注目しなければならないのは、その足の描き方である。手塚治虫が描いているように、フクロウの仲間は他の鳥と違って、その指爪を前に二本、後ろに二本という形で木の枝に止まる。一般的な鳥は前に三本、後ろに一本という形であり、他の漫画家が描くフクロウは、たいていそうなっている。

蝶の翅脈まで描き分けるのと同じように、博物好きの手塚治虫は、ここでもきっちりと正確に描いていたのである。

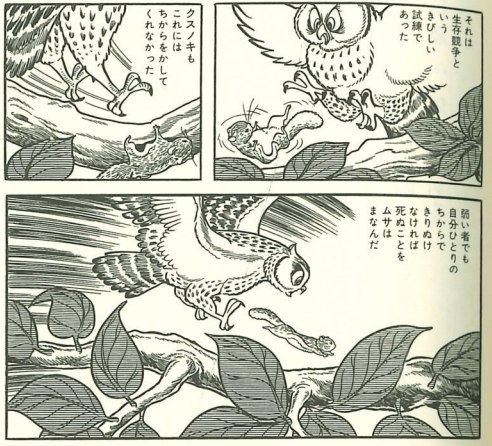
手塚治虫が一三〇回も見て研究したというディズニーのアニメーション「バンビ」には、森の物知りじいさんのフクロウが出てくる。手塚治虫が好きだった音楽アニメの短編「プカドン交響楽」にも、フクロウがインテリとして登場する。

これは、ひとえにフクロウ科の鳥の顔に原因があるのだろう。眼がほとんど前を向いていて、人間の顔に近く、視野が広い。そして、くちばしの下の白い羽毛が髭に見え、人間に見立てると老学者などのように見えるのである。

●『鳥人大系』
「赤嘴党」の章に出てくる
リアルなフクロウ。

●『双子の騎士』
メルヘン的な
シルエットである。

●『あらしの妖精』
木のうろの中のミミズクが可愛い。



●『モモンガのムサ』
恐ろしい猛禽としての
フクロウが描かれている。

トビ

トビ
上昇気流に乗って、輪を描くように空を上っていく。

「鳶」「鵄」「鴟」……どれもトビと読む。これほどたくさんの種類の漢字があるということは、かつてトビがいかに身近な鳥であったかということを示している。

一九六四年頃までは、東京の上空でも、くるりと輪を描いて滑空しているトビの姿がよく見られたものだ。一九六二年の記録によると、港区三田では、五月中旬に最も多くのトビが見られ、その日の午前中だけで、六羽が確認されたという。

外見は明るい茶色系の立派なタカの仲間であるが、イマイチ人間様の評判はよろしくない。というのも、人の買い物カゴから油揚げをかっぱらったり、動物の死体などを平気で食べたりと、品格に欠けるのである。昔から数が多くて親しみ深い鳥であるが、どうもちょっと馬鹿にされているところがあるのである。トビからすれば、「鳶が鷹を生む」などという言葉は、許しがたいものであろう。

しかし、私は人の心をのどかにするということで、好きな鳥の一つだ。

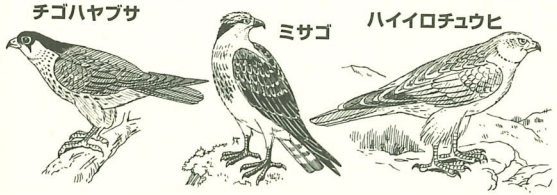
以前、四国地方をバイクでツーリングをした際、私は吉野川の堤を走っていた。そのとき、ヘルメットのすぐ上に、大きなトビの影が映った。そして、餌と間違えたのか、私の頭上五〇センチくらいのところまで降りてきた。一瞬、目と目が合ったが、私がバイクを止めると、みるみる上空に上っていった。

これが唯一、トビとニアミスした思い出である。

●『火の鳥―黎明編』
実際にトビがヒトを襲うことはあるのだろうか。

●『七色いんこ』
ここでもトビがヒトを襲っている。

タカ

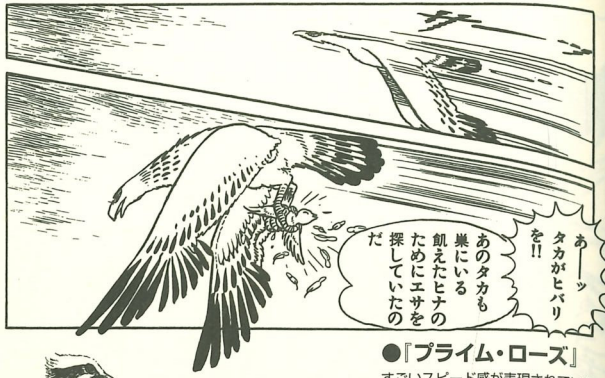


シジュウカラなどの可愛らしい小鳥、オシドリやコガモなどの水鳥、フウチョウ（ゴクラクチョウ）やハチドリの仲間のような極彩色の華麗な鳥、それぞれに趣のある各界の鳥たちであるが、勇壮かつ雄大、男性的な鳥といえば、猛禽と呼ばれるワシ、タカの仲間であろう。

『プライム・ローズ』や『鳥人大系』のタカは、物語の中では脇役でも、その存在は空の主役といった描写である。タカは世界に二九〇種が分布し、そのうち日本には二〇種がいる。

私は昔から思っていたのだが、これらワシ、タカ類の呼称は、なんと個性的で味のあるネーミングなのであろうか。ハイタカやイヌワシのような当たり前のものもあるが、順不同に挙げると、ハヤブサ、チョウゲンボウ、チュウヒ、サシバ、ミサゴ、ノスリ、ツミ、ハチクマ……などがおり、いずれも中型の猛禽たちである。〇〇タカとか△×ワシといった安易なネーミングでなく、これらの鳥たちの名を図鑑や動物園の前で見るたびに、私は心が弾んだ。

この和名は、いったい誰が考えたのだろうか。これらの鳥たちの感じを実にうまく表現しているように思える。私だけの思い込みかもしれないが、これらのネーミングは、昆虫であるチョウのスミナガシやコツバメなどに匹敵する独得のものだ。ミサゴなんて、カイの一種のような優しい感じの名前だが、羽を広げると、全長一六〇センチもある立派なタカだったりするのである。

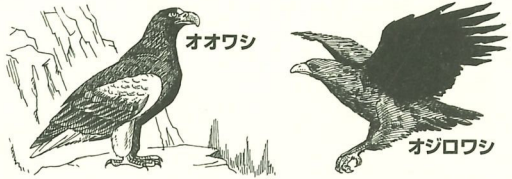


●『プライム・ローズ』
すごいスピード感が表現されている。

●『鳥人大系』
ハイタカがリアルに描かれている。

●『ノーマン』
ハゲタカは、
現在はハゲワシといわれる。

ワシ



猛禽（もうきん）というより、全鳥類の王ということになれば、やはりワシであろう。生物ピラミッドの頂点に立ち、なかでもオジロワシやオオワシは、翼開長二メートルを超し、空高く飛んでいる姿を見た人によると、ゆったりとした雄大な気分になれるという。

残念ながら、私は映像でしか見たことがないが、動物園の猛禽舎の中で窮屈そうにしているワシとは、まったく違う鳥に見えるのかもしれない。

また、頭部が白色のハクトウワシはアメリカの国鳥にもなっており、外国ではワシを模した紋章も多い。

手塚漫画の中でのワシは、これは実に数多い。ここに挙げた作品以外にも、『ふしぎな少年』『鳥人大系』『ボンゴ』『鬼丸大将』『アリと巨人』などに出演しており、点景的なものまで入れたら、数えきれないほどである。さすがにワシともなると主役級の活躍も多く、ここでも鳥のキングだ。

『聖なる広場の物語』は、全編が鳥ばかり登場するSF寓話ともいうべき名作で、いきすぎた鳥の欲望を描いている。その結果、足が四本に進化、変身していき、結局、ワシ同士の意地の張り合いによって、破滅への道をたどることになるのである。当時の米ソの冷戦をも風刺したシニカルな作品で、これは鳥の話であるが、人間の話でもあるのだった。

しかし実際には、ワシはカラスなどと比べると、むしろ平和的な鳥という要素も持っているようである。

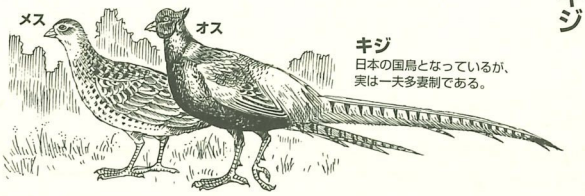
●『アトムキャット』
なんとなく哀れさを感じさせるオオワシである。

●『ビッグX』
オオワシの雄大さを表現している描写である。

●『オズマ隊長』
これはコンドルである。

●『聖なる広場の物語』
米ソの冷戦をも風刺したシニカルな作品である。

キジ



キジ
日本の国鳥となっているが、実は一夫多妻制である。

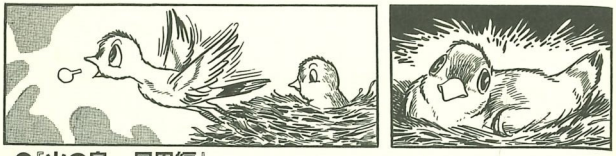
手塚治虫がいくら博物好きで、七〇〇という膨大な作品を描いたからといっても、図鑑を描いていたわけではないから、もちろんまったく描かなかった鳥もたくさんいる。

ただ、描かれた鳥については、いくらデフォルメしてあっても、その鳥の種類はわかるように描かれていた。しかし、唯一『火の鳥―鳳凰編』に出てくる鳥は、何の鳥かわからないのだ。鳥の形や模様からすれば、ホトトギスかツグミにも見えるが、しかしホトトギスは子供を育てないし、ツグミともちょっと違う。図鑑や写真類の資料を調べてみても、こんな感じの鳥は見当たらないのだ。そこで、これは、一般的にイメージされる山の鳥の最大公約数的な鳥、ということにしたい。

『ころすけの橋』の「テッペンカケタカキョキョ」と鳴いているシルエットはホトトギスである。これは「特許許可局」とも聞こえる。『シュマリ』の「ケーンケーン」と鳴いている鳥は、日本の国鳥キジである。『火の鳥―乱世編』のリアルな鳥もキジだ。

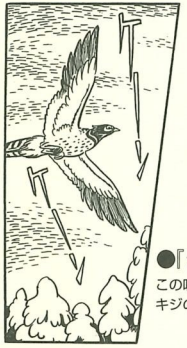
私が大型の野鳥で唯一よく見かけたのがキジである。東京近郊の狭山湖近辺に昆虫採集に行っていた頃のこと、何度かキジに遭遇した。全長八〇センチもある鳥だから、一人で歩いていると、その姿と大きな音にギョッとすることがしばしばであった。

昆虫採集で山を歩くことの多かった手塚少年も、よくキジに出会っていたのではないだろうか。



●『火の鳥―鳳凰編』
この絵からは鳥の種は特定できない。

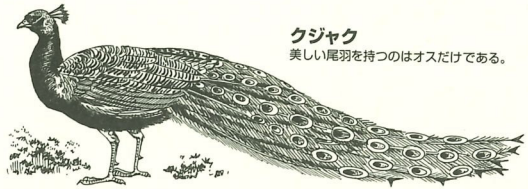
●『ころすけの橋』
ホトトギスは別名が非常に多い。



●『シュマリ』
この鳴き声はキジのものである。

●『火の鳥―乱世編』
とてもリアルなキジの描写である。

クジャク



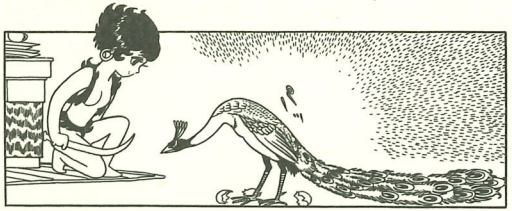
クジャク
美しい尾羽を持つのはオスだけである。

手塚漫画の中のクジャクは、とても数多い。ある意味で最高に美麗な鳥であるから、どうしても出演回数は多くなる。マンガチックなものあり、グラフィックなものあり、リアルなものありと、豪華絢爛である。

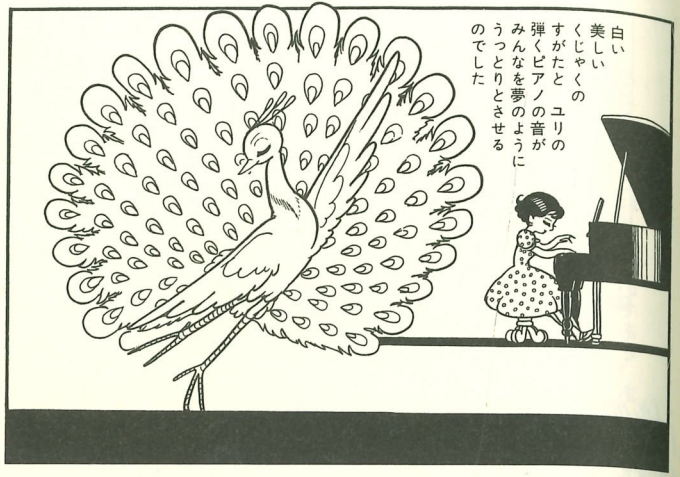
クジャクが最も美しいのは尾羽で、大きく広げてメスを誘うディスプレイをする。グリーンを主体としたきらびやかさは、何度見てもうなるほどだが、これはオスだけのものである。一般に、鳥類や昆虫のチョウ、哺乳類のマンドリルなど、オスのほうが美しいものが多い。だから、クジャクを女王の風格などと書いてあったら、これは嘘だ。

横浜市の野毛山動物園では、園内にクジャクを放し飼いにしている。私は動物写真に凝っていた頃、よく写真を撮りに行っていたのだが、あるとき、クジャクが繁みから突然躍り出てきて、パッと尾羽を開いた。こちらが移動すると、クジャクも向きを変え、その美しい尾羽を誇示するのであった。私が急いでシャッターを押したのはいうまでもない。

一般的なクジャクはインドクジャクであるが、これは全長二三〇センチもあるので、普通は家庭では飼えない。しかし、ペット（？）にしている愛鳥家も稀にいる。一九六九年、『千夜一夜物語』を製作していた頃、当時の虫プロダクションの近くにクジャクを十何羽も飼っている豪邸があり、よく観察に行ったものである。その姿に似ず、鳴き声は「ケーンケーン」と、なかなかけたたましいものであった。



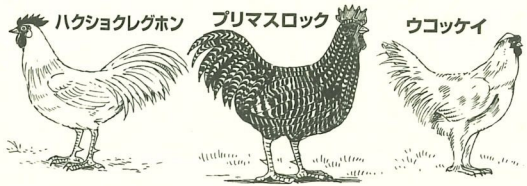
●『こじき姫ルンペネラ』



●『白くじゃくの歌』

●『成功のあまきかおり』

ニワトリ



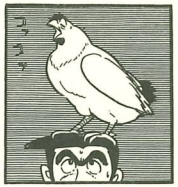
昨今では、普通の飼い鳥であったニワトリを見かけることも少なくなった。それでも早朝に「コケコッコー」という鳴き声を聞くことがたまにあり、その存在を確認できる。

手塚漫画やアニメーションの中のニワトリは数多く、『リボンの騎士』や『プレーメン4（フォー）』などのテレビアニメにもずいぶん出てくる。

記憶に鮮明なのは、実験アニメーション『ジャンピング』製作時のことだ。私が、メンドリが出てくるシーンのラフスケッチの原画を描いていたら、手塚治虫が「ここは僕に描かせてください」と言うのだ。見る側の視点が鳥小屋に落ちたところで、なぜかメンドリばかりが右往左往して、カメラの前に走り込んでくるようにしたいというのである。あっさりとスラスラ描くのだろうと思って後ろで見ていたら、かなり苦心して描いていた。消しゴムで何度も修正もしていた。

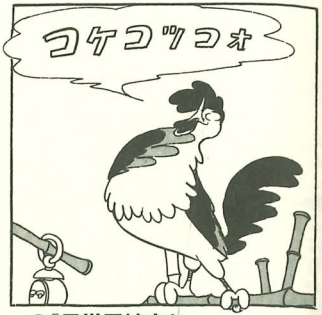
このニワトリはハクショクレグホンだったから、その色は当然白だと思っていたら、ごく薄いベージュを指定された。手塚治虫は、その色にやけにこだわっていた。写真でハクショクレグホンを見ると、どうしても白だと思うのだが、手塚治虫は、多少土で汚れた感じを出したかったのだろうか。

『羽と星くず』に出てくるシチメンチョウは、日本人にはニワトリほど馴染（なじ）みがないが、分類的には同じキジ科なので、取り上げてみたものである。なお、この作品は漫画ではなく、絵物語の形式をとっている。

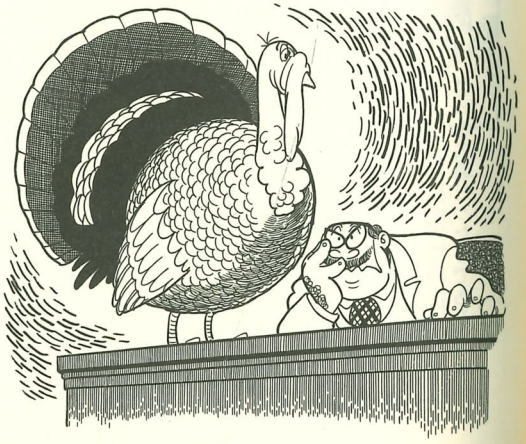


●『どついたれ』

●『ぼくの孫悟空』

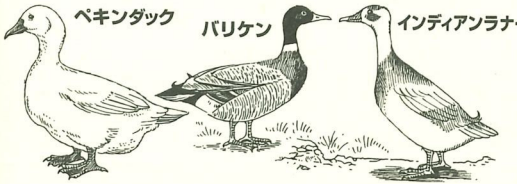


●『月世界紳士』



●『羽と星くず』

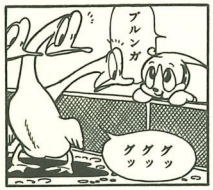
アヒル



アヒルはマガモを家禽化したもので、その顔つき、体つきから、漫画にするとどうしても三枚目となる。カモの仲間は首が長くて足が短いという共通のフォルムを持っていて、その典型的なものがアヒルといえよう。ペキン種というアヒルは、一番よく見かける白色の太った種だが、体を左右に揺らしながら歩くさまは、実にユーモラスである。

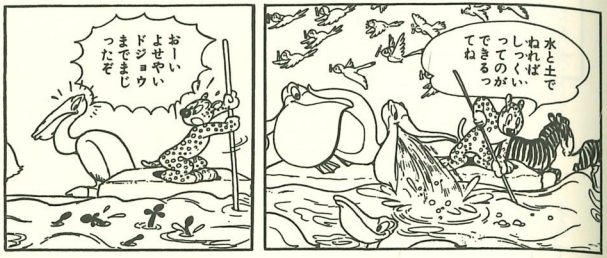
三〇年も前のことになるが、私は家でアヒルを飼っていたことがある。夜店で買ってきた二羽のアヒルのヒナが、たまたまオスとメスであった。普通、夜店などで売られているものには、メスはまずいないといわれているが、このメスがずいぶん卵を産んだ。庭に小さな池をつくってやったが、そこはもっぱら水遊び用で、産卵場所は、庭のヒマワリの生え際の草むらや、縁側の下の石の間などであった。何日かに一回、そのような場所を探すと、ニワトリより一まわり大きい卵が必ず産んであった。変な場所ばかりに産むものだなと思っていたが、人目に触れない場所という点で共通していた。

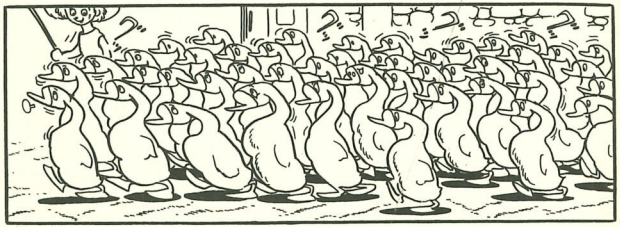
アヒルの思い出はもう一つある。一九八五年、台湾でのこと、列車は台北から高雄に向かっていた。窓の外を眺めていると、はるか遠くの線路際の土地が真っ白なのだ。そこだけ雪が降ったような感じなのだが、なんだかジワジワと動いている。最初は何だかまったくわからなかったが、列車が近づいていくと、そこは、何千羽というアヒルが飼育されている広場だったのである。



●『ブルンガ1世』
アヒルの特徴がよく表れている。

●『ジャングル大帝』
ペリカンが愉快に描かれた。





●『ブラック・ジャック―道すがら』 非常にユーモラスな描写である。

カモ

オナガガモ

キンクロハジロ

『ブッダ』の中のカモのエピソードは、人間の生活に擬人化しつつ、一種の家族的、アットホームな連帯が感じられ、一つの面白い小ストーリーとなっている。「カモらしく、この池で暮らすべえ」というセリフがあるが、すべての生物は分相応ということが大事であるという、気取りのない手塚治虫の性格が表れているようだ。しかし、このカモたちは、あまりにもデフォルメされているため、どんな種のカモなのかはわからない。

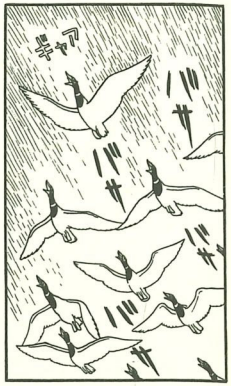
日本に飛来する冬鳥として、カモは馴染みが深く、最近では郊外の池や川でも数が多くなったような気がする。私は所沢市の用水池で毎年観察をしていたが、真冬の最盛期には一二〇羽を超すカモが飛来し、その約九割がオナガガモであった。キンクロハジロや小型のカイツブリがいることもある。もっとも、カイツブリはカモの仲間ではなく、カイツブリ科の鳥である。

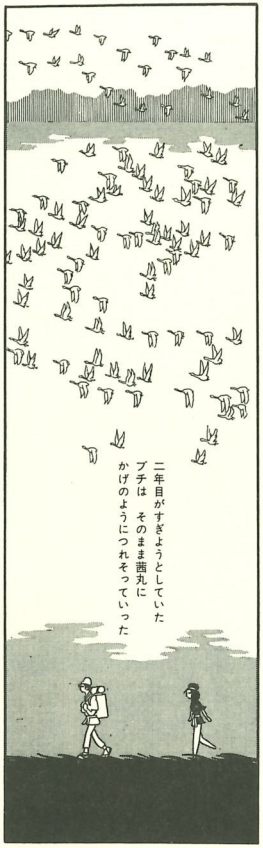
カモをはじめとする冬鳥は、暖かくなればまた北国へ飛び立ってしまうはずなのだが、なかにはサボっているのか、留鳥としてとどまってしまうものもいる。その用水池では、三〜四羽が夏でも見られた。東京・上野公園の不忍池には、多いときで一万羽を超すカモがやってきたが、やはり少数ではあるが、帰らないものがいる。

不忍池を詠んだものかどうかは不明だが、正岡子規のこんな句がある。〝鴨啼くや上野は闇に横はる〟。名句である。

●『火の鳥―太陽編』

これは首のデザインから、ノガモのオスだとわかる。





●『火の鳥―鳳凰編』

日本画的な構図で、一種の形式美を感じさせる。

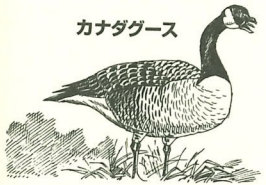
●『よろめき動物記―渡り鳥』

擬人化されたユーモラスな描写である。

●『ブッダ』

手塚治虫の気取りのない性格が表れた作品である。

カルガモ



手塚治虫中期のSF名作『W3（ワンダースリー）』で、銀河連盟の宇宙人であるプッコ中尉は、地球に来てカモに変身する。物語全編にわたって、ウサギのボッコ隊長、ウマのノッコ兵長とともに準主役級の活躍をする。『W3』の連載の始まった一九六五年は、あのビートルズが世界的に人気の爆発した時期で、カモのプッコの頭のデザインも、ビートルズのメンバーと同じマッシュルームカットだった。そのへんもプッコのキャラクターにうまくマッチした。

ひと頃ブームになったカルガモなども『ミッドナイト』に登場させ、時事性を反映させているが、きちんと役のあるカモというのは、『W3』のプッコにとどまる。

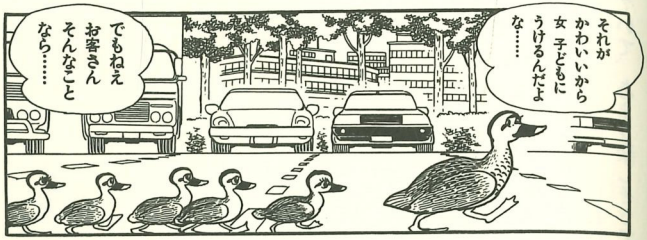
一九八五年の科学万博で「空のかなたへ」という映像を見た手塚治虫は、エッセイの中に次のように記している。

「二羽のカナダグースにカメラはぐんぐん寄っていき、毛の一本一本がはっきり見分けられるほどに接近する。リズミカルな羽音がカモの息づかいを感じさせる。カメラはどこまでも、えんえんと彼らの上になり下になりして追っていく。いったいどうやって撮ったのだろう。お尻の穴が実に大きく色っぽく見えるのだ。カモの下半身がこんなにエロチックだとは初めて感じた」

これは、アイマックス社の開発した超大型スクリーンで、普通のスクリーンの一一倍の大きさの巨大画像であった。

●『W3』
カモのプッコの髪型はビートルズと同じである。

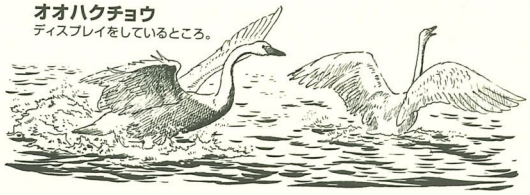
●『観たり撮ったり映したり』
これはエッセイの中に描かれた挿画である。



●『ミッドナイト』
ブームとなったカルガモも取り上げている。

●『ブラック・ジャック―鳥たちと野郎ども』
トニオと鳥たちの心の交流を描いた。

ハクチョウ



オオハクチョウ
ディスプレイをしているところ。

ハクチョウといえば、誰もが清楚で美しい姿を思い浮かべ、善のイメージを連想することだろう。「白鳥の湖」やアンデルセンの童話『みにくいアヒルの子』などに出てくるハクチョウもみな善である。また、「白鳥の歌」や「白鳥処女説話」などの伝説もある。

『リボンの騎士』や『アポロの歌』『鉄腕アトム―ロボットランドの巻』などに出てくるハクチョウも、すべてよい鳥だ。『リボンの騎士』や「ロボットランド」のロボットの白鳥は、そこにプラス悲劇的要素も入り込んでくるのである。

実際のハクチョウは、皇居のお堀にいるものなどを見ていると、なんだかつまらなさそうな顔で、所在なげに漂っていて、あまり楽しそうではない。つまりハクチョウも、カモやガンと同じ仲間の、ただのガンカモ科の巨鳥といってしまえば身もフタもないが、物語の中では、その容姿でずいぶん得をしているのだ。

新潟県の瓢湖は、オオハクチョウが多数渡ってくることで有名である。ここのオオハクチョウ、ハクチョウは餌付けされていて、ずいぶん人に馴れているという。これらハクチョウの幼鳥は、灰白色で醜いとされたため、『みにくいアヒルの子』の童話ができたらしいが、実物は決して醜くなく、可愛らしい。

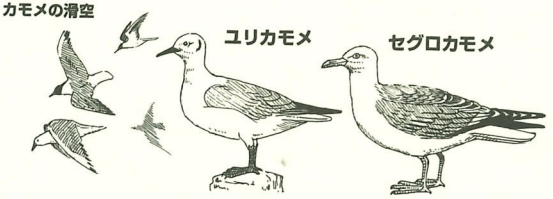
なお、手塚治虫が将来アニメーション化したいと思っていたもののうちの一つに、バレエの「白鳥の湖」がある。音楽はもちろん、チャイコフスキーの同名曲であったはずだ。

●『リボンの騎士』
ハクチョウは美しい鳥なので、いろいろな音楽家がハクチョウをテーマにした曲をつくった。

●『双子の騎士』
いかにもメルヘンチックな話なので、ハクチョウがぴたりとはまる設定が用意されていた。

●『アポロの歌』
まさに鳥瞰図という構図である。

カモメ

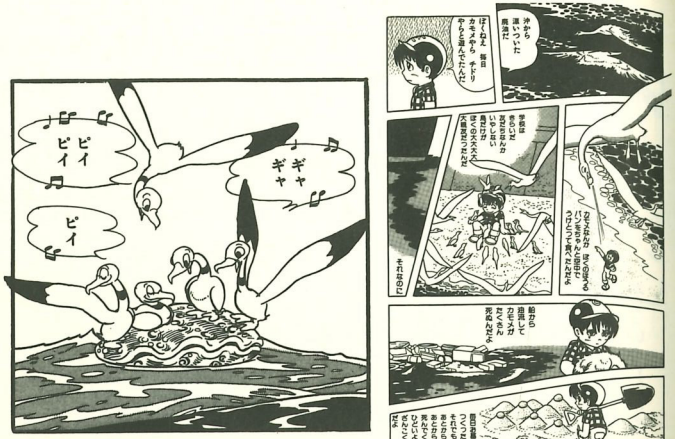


海の風景を描くとき、いかにもらしくするのにぴったりの鳥がカモメである。また、同じカモメ科で、鳴き声を別にすると、姿形や大きさがそっくりなウミネコでもよい。

それはそれとして、カモメは手塚マンガ、アニメーションの中に実に数多く出演していて、数えきれないほどである。『エンゼルの丘』『ブッダ』『ミッドナイト』……ここには挙げていないが、他にも『火の鳥―乱世編』『アラバスター』など、枚挙にいとまがない。それぞれに情感たっぷりの絵である。

東京都の都鳥として定着したユリカメモは、一九八五年頃から、都内の住宅地を流れる小河川でも普通に見られるようになってきて、今や都市鳥となった印象がある。上野の不忍池でも一〇〇〇羽前後が乱舞し、海からはかなり遠いはずの石神井川や神田川にまで遡行するユリカモメの数も、年を追って増えている。生活力が旺盛なのだろう。

余談になるが、湾岸副都心を走る〝ゆりかもめ〟という名のモノレールは大人気である。先頃、手塚悦子夫人がある賞を受賞し、私は、そのパーティー会場に行くために、この〝ゆりかもめ〟に初めて乗った。夕方であったこともあり、副都心のSF的高層ビル群のイルミネーションが、遠方に見える海とともに素晴らしい景色であった。それはまるで、手塚治虫初期の名作『メトロポリス』を彷彿とさせる光景であった。はるか遠くにカモメらしき数羽の鳥が飛んでいたのも印象的であった。

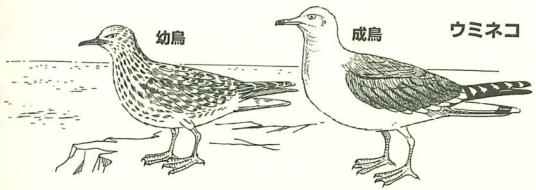


●『エンゼルの丘』

●『ミッドナイト』

●『ブッダ』

ウミネコ



漫画のようなある種の略画では、ウミネコもカモメも同じ鳥になってしまう。もとの姿がそっくりなので、これはいたしかたないところだが、実は簡単に描き分けることができる。擬音に「ニャオニャオ」と書き入れれば、それだけで海のネコ、ウミネコになってしまうのだ。実写の映像では、こうはいかない。

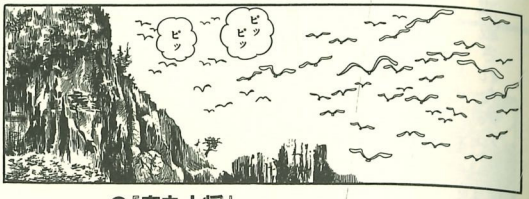
夏の海水浴場で見かけるカモメは、実際は一〇〇パーセントに限りなく近くウミネコである。まあ、ウミネコも日本にいる一四種のカモメのうちの一つだから、カモメといっても間違いではないが、やはり正確にはウミネコだ。というのは、ウミネコ以外のカモメは冬鳥で、夏には日本にいなくなってしまうからだ。そういうわけで、『鉄腕アトム―海蛇島の巻』は、その季節が夏ということからして、この鳥はウミネコと判断したものである。

ウミネコのコロニー（集団営巣地）は、青森県の蕪島、山形県の飛島、島根県の経島が有名であるが、私はこのうちの蕪島に行ったことがある。まさにここそこにと、おびただしいウミネコの数で、鳴き声も異常に騒がしい。何千匹ものネコが、ニャーニャーと鳴いているようであった。このコロニーは天然記念物になっている。

同じ海鳥でも、ウミネコやカモメのように平和的でなく、他の海鳥のくわえている魚を奪い取ることで有名なトウゾクカモメという鳥がいる。飛び方がタカに似ているため、海の猛禽ともいうことができる。

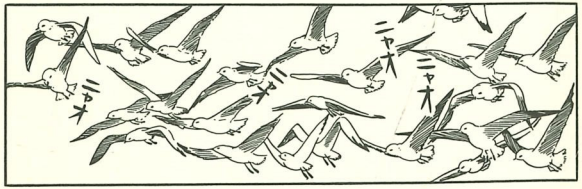
●『鉄腕アトム―海蛇島の巻』

●『三つ目がとおる』

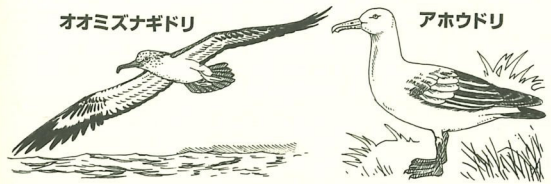


●『鬼丸大将』

●『シュマリ』



アホウドリ



この項では水辺の鳥を集めてみたが、あまり一貫性はない。

『海のトリトン』では、セリフの中にアホウドリとあるが、どこにアホウドリがいるのかよくわからない。たくさん描かれているカモメのような鳥の全部がアホウドリなのか、一部がそうなのか。アホウドリは戦前（一九四五年以前）に絶滅したとされ、その後、鳥島で細々と生き残っていたものが、保護下において少しずつ増えてきたというのが現状なので、このコマのような状況はあまり考えられない。

『鳥人大系』の扉絵には、たくさんのカモメが描かれている。ラルス（Larus）とは、カモメ類の名前の頭につく学名である。『鳥人大系』は、あるSF誌に連載された大人向きのSF漫画で、人間以上に進化した鳥の話である。SF映画「猿の惑星」の鳥類版といってもよいかもしれない。

『鳥人大系』にはミズナギドリも描かれている。この鳥は図鑑ではお馴染みという感じだが、実物を見た人は少ないだろう。この科の鳥の多くは、繁殖期に離れ小島などの陸地に飛来するだけで、通常は海上で生活しているからである。ミズナギドリという名称の由来は、この鳥は水面上を低く、翼を張ったまま体を左右に傾けて飛ぶので、長い翼の先が水を薙ぐように見えるためだという。漢字では「水薙鳥」と書く。

『ブッダ』のモブ（群集）・シーンの鳥は、コチドリかイカルチドリであろう。

●『鳥人大系』
ミズナギドリは日本ではあまり見られない。

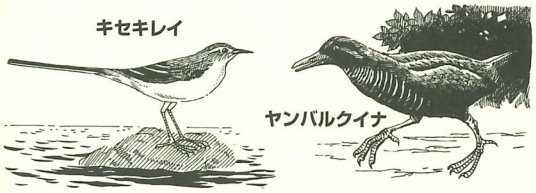
●『海のトリトン』
アホウドリは中央にいるのであろうか。

●『ブッダ』
これはコチドリである可能性が高い。

第2章　ラルス・フスクス・イグニス

●『鳥人大系』
扉絵に描かれたカモメ。

キセキレイ



『陽だまりの樹』では、キセキレイの生態をよくとらえている。

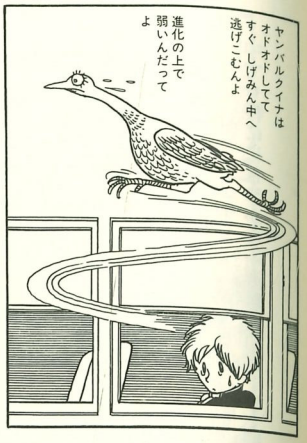
セキレイの仲間はハクセキレイ、キセキレイ、セグロセキレイが普通種として存在するが、いずれも尾を上下に振る習性がある。スズメほどの大きさだが、尾と足が長いぶんだけスマートに見え、なかでも腹部がレモンイエローのキセキレイはより美しい。

私はときどき野鳥を観察しているが、キセキレイを目撃したのは二度しかない。それは、長野県の松本城のお堀と、山梨県の石和で見たものである。手塚プロのある埼玉県新座市でも、ハクセキレイはよく見かけるが、黄色いものは見たことがない。ただ、図鑑によれば、大都市のビルの壁の隙間にも巣をかけることがあるとの記述がある。

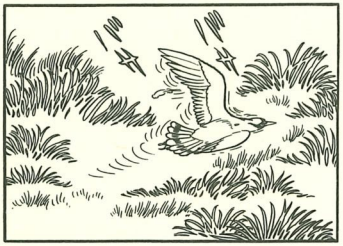
『はなたれ浄土』は読み切り形式の作品であるが、ここにヤンバルクイナが初登場している。ヒクイナなどは水辺の草むらに巣をつくるが、ヤンバルのほうは常緑広葉樹林に生息し、飛翔力はほとんどないらしい。なにしろ、一九八一年発見の新種である。沖縄本島北部の山原の人たちは、この奇妙な鳥の存在を知っていたといわれるが、いずれにしても、体長三〇センチもある鳥が、二〇世紀後半に新たに発見されたこと自体が大変な驚きであった。

『はなたれ浄土』は一九八三年に描かれたものだが、博物的要素をすぐに作品に採り入れる姿勢は、手塚治虫の博物好きを証明するものであろう。

●『陽だまりの樹』
キセキレイの尾の動感が、その特徴をよく表している。

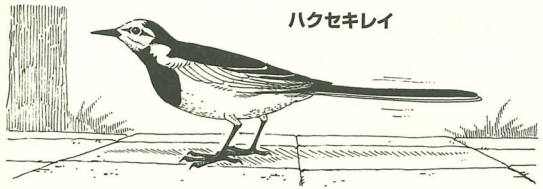


●『はなたれ浄土』
クイナは漢字で「水鶏」と書き、水辺に棲む鳥である。



●『七色いんこ』
チドリ類は営巣中に敵を見つけると、警戒音を出し、翼をばたつかせて地上を走る。これは擬傷といって、ヒナを守る演技だ。

ハクセキレイ



手塚治虫晩年の少年漫画『ミッドナイト』は、〇△の巻というような作品タイトルはついていないが、読み切り形式の週刊誌連載の作品である。タクシー運転手の青年を主人公として、毎回ストーリーが進む。

ここに挙げたのは、ミッドナイトとハクセキレイの友情（？）を描いた心温まる話で、車のトランクの中にハクセキレイが棲みついて、ミッドナイトが困るような場面もある。

昔は街中では、ハクセキレイなどは珍しい鳥であった。それが一九七〇年代後半から、ずいぶん目立つようになった。たとえば、東京の荻窪駅前の商店街には、一五〇羽前後のハクセキレイが棲みついているというし、一九九〇年秋には、埼玉県の中でも特ににぎやかな所沢駅西口ロータリーで、五〇〇羽前後が街路樹や植え込みをねぐらとしていたという報告もある。人や車の往来が深夜まで激しい都会でも、見かけることが多くなってきた。そもそも街中で五〇〇羽というのは、大変な数である。

かつてハクセキレイは、本州以南では冬鳥であり、留鳥化したのは一九五〇年代から七〇年代のことである。その原因は、まだ解明されていない。駅前のネオン街に棲んでいるハクセキレイも、ずっと同じ場所にいるわけではなく、一〇年とたないうちに移動する。どうやら日本の自然環境の激変が原因の一つであると思われるが、よく人目につく鳥となったところで、手塚治虫は物語に登場させたに違いない。

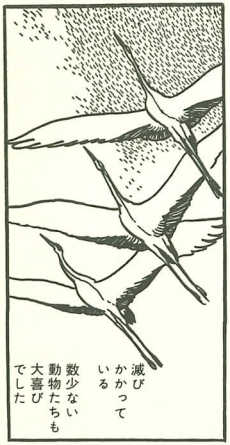
●『ミッドナイト』　ハクセキレイがとても可愛く描かれている。

ツル

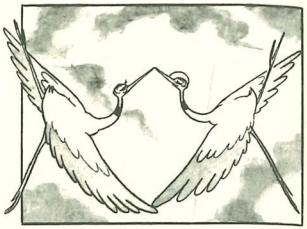
ツルは古来から、めでたい鳥として尊重されている。一瞬の隙も見せないような、ムダのない端正な姿勢が日本人好みなのだろう。

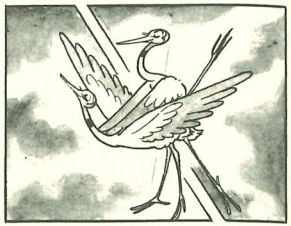
究極のツルらしいツルといえば、タンチョウである。『タイガーランド』のツルがタンチョウで、『鳥人大系』のツルはマナヅルに見える。タンチョウは北海道東部の湿原に約四〇〇羽が生息し、冬は群れをつくる。主繁殖地である釧路湿原は乾燥化が少しずつ進んでいるといわれ、決して安心できる状態ではない。特殊鳥類に指定され、特別天然記念物としてワシントン条約でも保護されている鳥だ。

私の先輩アニメーターの勝井千賀雄さんという人は、鳥を描かせたら日本一といわれた人で、なかでも特にツルに情熱を持っていた。私などもいろいろな鳥を描いては指導してもらったものである。一九七八年に公開された市川崑監督の「火の鳥」は実写版であるが、五分ほどのアニメーションが合成されている。火の粉から火の鳥のヒナが誕生し、それが、みるみるうちに親鳥になり、舞うという場面だ。そのシーンを描くのに、勝井さんはタンチョウの有名な習性〝求愛ダンス〟を参考にしたという。火の鳥は実在しない鳥だから、現実の鳥を参考にしてイメージで描かなくてはならないのだが、それは素晴らしい動きとなった。一九六五年のテレビアニメ『ジャングル大帝』のオープニングのフラミンゴや、エンディングのツルも、この勝井さんの代表作である。

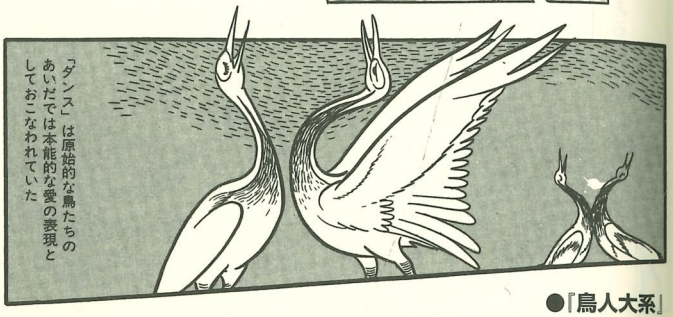


●『タイガーランド』



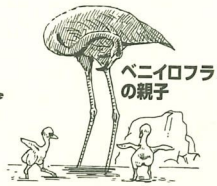


●『火の鳥―ギリシャ編』



●『鳥人大系』

フラミンゴ

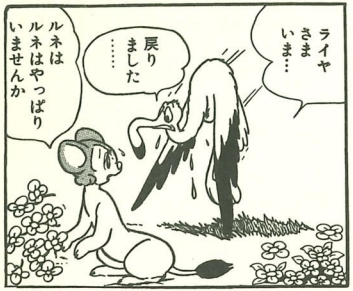


名作『ジャングル大帝』は、一九六五年に初の国産カラーテレビアニメーションとして放送されたが、その色彩の美しさに度肝を抜かれ、ついに日本でもこんなに美しい番組ができたかと狂喜したのは私だけではあるまい。

そして、この作品に彩りを添える鳥として欠かせないのがフラミンゴである。パンジャの威風堂々たる走りとともに、フラミンゴの優雅な飛翔は、我々に忘れ得ぬ印象を残した。フラミンゴは、その後の一九八九年のテレビアニメ化のとき、一九九七年の劇場映画化のときと、必ず画面に姿を現した。

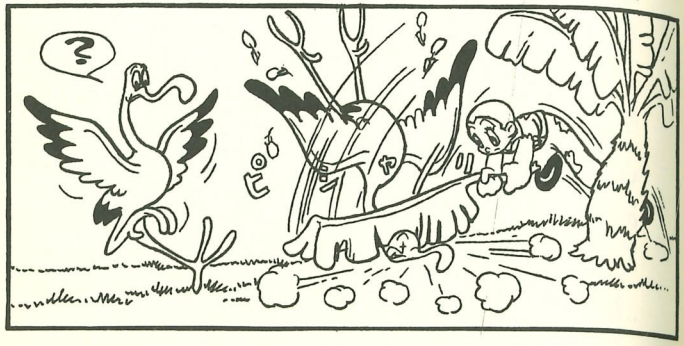
一九五〇年から描かれていた漫画の『ジャングル大帝』では、フラミンゴのことをベニヅルと呼んでいる。この時代には、ジャイアントパンダがイロワケグマといわれたりしたのと同様、図鑑にも俗称的に記されていた。このベニヅルは、だからベニイロフラミンゴのことであろう。アフリカからインド北西部に分布するピンクのコガタフラミンゴや、チリ、ペルーの高地で数千羽単位のコロニー（集団営巣地）をつくるチリフラミンゴなどもいて、フラミンゴ一族もなかなかにぎやかである。

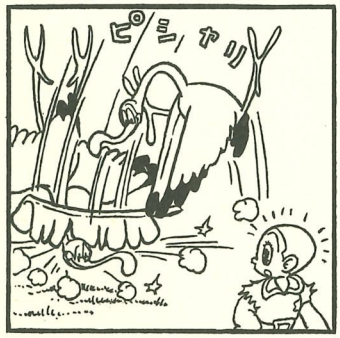
一九九七年九月一五日の敬老の日に上野動物園は、この年の長寿動物にチリ生まれのチリフラミンゴを選んだ。三九歳とのことであったが、一九五八年に入園したとき、すでに成鳥だったから、本当はもっと高齢であるらしい。



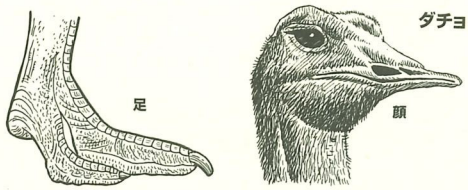
●『ジャングル大帝』
フラミンゴはベニヅルといわれていた。

●『世界を滅ぼす男』
実際には美しい鳥だが、その曲がったくちばしから、漫画ではどうも三枚目になってしまうようである。





ダチョウ



現世の鳥類では最大の大きさを誇るダチョウであるが、猛禽のような怖さはなく、その顔には愛嬌がある。そのためか、手塚漫画の中では、すべて三枚目でヒトがよい、ではなく、トリがよい役である。

手塚治虫が絶賛した音楽アニメーションの傑作「ファンタジア」にも、バレリーナの一群として、ダチョウは剽軽なキャラクターで登場している。

手塚アニメの『聖書物語―ノアの箱舟』にもダチョウが出てくるが、そのシーンは私が作画したものである。

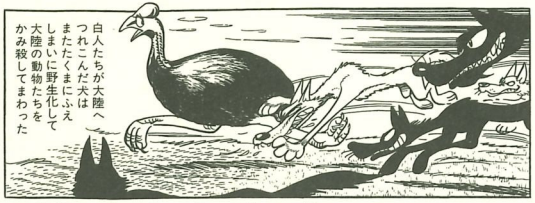
実は最初、図鑑などを見ないで、ちょっといいかげんにダチョウの足を描いた。どうせ手塚先生が直してくれるだろうと思っていたのだが、その甘い考えがいけなかった。

「これ、想像で描いたでしょう。調べてきちんと描いてくださいっ！」

と叱られてしまった。ほんの二カットしかないダチョウのシーンであったが、私は思わず身を固くしたものであった。

ダチョウに近縁の鳥はいくつかいて、それはオーストラリアのエミュー、アメリカダチョウともいわれるレア、火を食うという俗説のあるオオヒクイドリなどである。すべて飛翔力はないが、走るのは速い。

『ブラック・ジャック―ディンゴ』で、ディンゴに追われる鳥に、オーストラリアという土地が舞台ということで、わざわざオオヒクイドリを選んだのは、いかにも手塚治虫らしい。

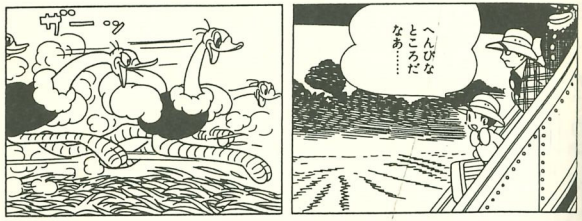


●『ブラック・ジャック―ディンゴ』

これは、ダチョウの仲間のヒクイドリであろう。

●『ピピちゃん』

ダチョウはどうしてもユーモラスに描かれてしまう。



●『魔神ガロン』

これは、ディズニーの「ファンタジア」のダチョウを連想させる。

コンゴウインコ

ここに挙げた鳥たちは、日本にいる親しみ深い鳥ではなく、南洋の鳥たちであることは一目でわかる。

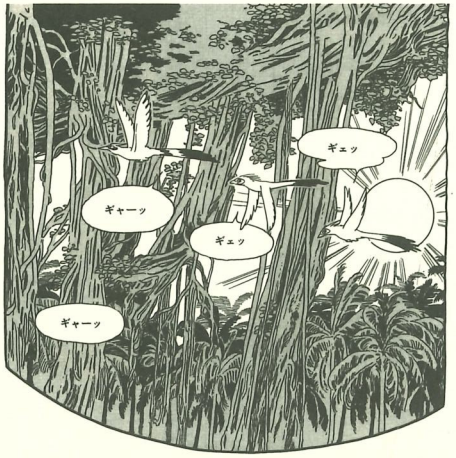
絵柄がそれほどリアルでないので種の特定はできないが、『グリンゴ』のものはコンゴウインコのような鳥、『ブラック・ジャック―絵が死んでいる』のものはキヌバネドリの仲間、とおおよそ推定でき、いずれも中央・南アメリカの鳥の様相をとらえている。これらの鳥は、日本では動物園などでもあまり見ることはできず、馴染(なじ)みが薄い。だから、物語の筋には関係なく、ムード的な描写にとどまるのはいたしかたない。

映画などでは、本編への導入シーンに、こんなカラフルな鳥が飛んできてムードを盛り上げるが、確かに南洋にはきらびやかな鳥が多い。日本にもカラフルなものは存在するが、その数は少ない。

一般に日本の鳥は単色系が多く、渋い美しさではあるが、メタリック系の派手さはない。この色彩の違いは、どこからくるものであろうか。これは、昆虫のチョウなどにもいえることであるが、実は、生物の色と形態は、棲(す)んでいる地域に大変影響されるものであるらしい。この説には、私も賛成なのであるが、詳しく知れば知るほど、調べれば調べるほど、確かにそうだと思われる。温帯の鳥でもキンケイやギンケイは、いかにも中国的であるし、ヨーロッパ産のツグミの仲間であるロビンは、その品のいい褐色と赤の配色が、ヨーロッパ調でエレガントに思われるのである。

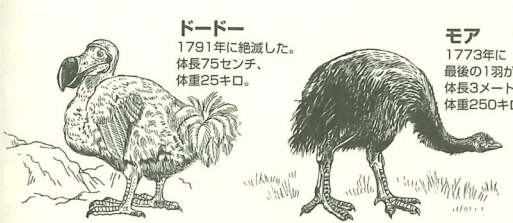
●『ジャングル大帝』
典型的なアフリカの小鳥というムード的な出演で、楽しいシーンである。

●『グリンゴ』
これはコンゴウインコのような鳥である。



●『ブラック・ジャック―絵が死んでいる』
象徴的な南アメリカの鳥たちである。

ドードー／モア

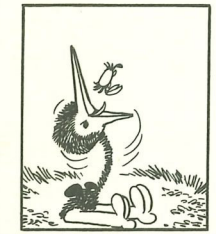


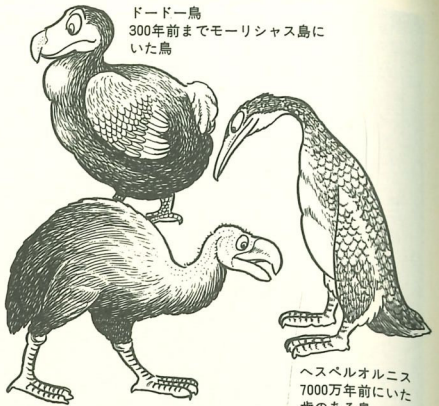
有史以来、生存した鳥種はおよそ一六万種、このうち現存する鳥は約九〇〇〇種であるというから、九五パーセントは、もうこの地球上にはいないことになる。

古代の鳥類はすべて自然によってもたらされた絶滅であると思われるが、この四〇〇〇年間の一五〇種の絶滅鳥類は、ほとんど人類によって直接的、間接的に絶滅させられていった。乱獲、生息環境破壊、加害動物の移入などがその原因である。

その最も有名なものが、インド洋モーリシャス島のドードーと、ニュージーランドの巨鳥モアであろう。両方とも何種類か分布していて、特にドードーのほうは異色の体型で、ルイス・キャロルの童話『不思議の国のアリス』によって世界的に有名になり、手塚治虫の大好きであったディズニーがアニメーション化をして、さらに有名になった。ドードーは、一五〇七年にポルトガル人に初めて発見され、以後、食用に乱獲され、一六八一年に絶滅、完全な標本すら残っていないというのだから、なんとも哀れである。ロドリゲス島産のものは、一七九一年頃まで生きながらえたと記録にある。

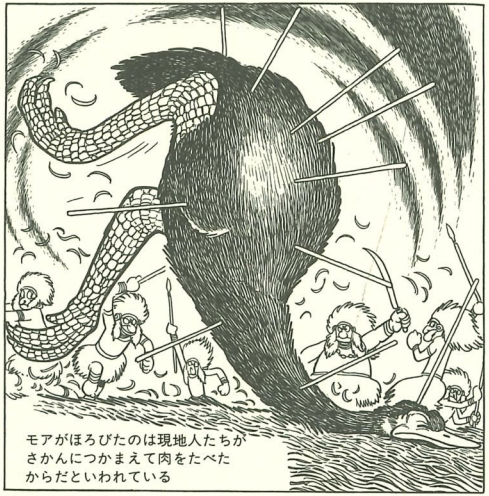
伝奇ロマンとして描かれた『三つ目がとおる』には、モアが出てくる。特にヒナのモアは相当数の出番があり、立派な脇役として活躍している。モアは、その化石から、十数種いたことが知られているが、やはり原住民の食用にされ、一八世紀に滅びた。体長三〇〇センチもある巨大な鳥であった。





●『三つ目がとおる』

モアとモアに近い鳥たち。
重要な役柄のキャラクターである。



火の鳥

〝火の鳥〟の想像図
もしも〝火の鳥〟が実在したら、このような姿であったであろう。

『火の鳥』は手塚治虫の代表作の一つで、もちろん架空の鳥であるが、博物的見地から見たら、〝火の鳥〟のモデルはいろいろと考えられる。私が手塚治虫に「キンケイの派手さ、クジャクの豪奢かつ華麗さを持ち、足はさしずめダチョウといったところですか？」と聞くと、「うーん、そんな感じですかねえ」というような答えが返ってきた。

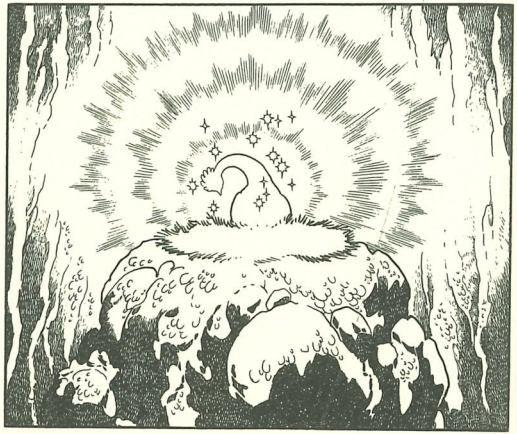
一九七九年、『火の鳥』のアニメーション化のときは、私は大いにはりきって〝火の鳥〟を作画したが、ずっと後に、手塚治虫はこんなことをエッセイに書いている。

「描き手の立場からまず書かせてもらうと、鳥ほどアニメの主人公として描きにくいものはない。（中略）私の作品『火の鳥』は、長い間アニメ化することに二の足を踏んでいた。その大きな理由の一つに、『火の鳥』のキャラクターを動かすと、せっかくの神秘的でファンタスティックなイメージがむしろ薄れて、ただのまともな鳥になってしまうのではないかという懸念があった。（中略）なによりも失望したのは、私が予想していたとおり、マンガのときは漠然とした巨大なスケールだった火の鳥が、アニメの中ではちまちまとまとまってしまったことであった」

この文章から、手塚治虫はアニメの〝火の鳥〟の飛翔が気に入らなかったということがわかる。しかし、手塚治虫のライフワークである〝火の鳥〟を〝火の鳥〟らしくアニメートすることは不可能かもしれない。

●『火の鳥―エジプト編』（上）
●『火の鳥―ギリシャ編』（下）
火の鳥にこんな親子愛が描かれているのは意外に思われるが、『少女クラブ』連載のものは設定から他と異なっていた。

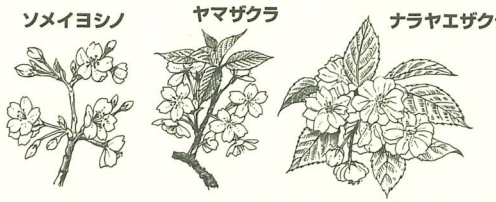
●『火の鳥―鳳凰編』
これは〝火の鳥〟というより鳳凰であるが、世界各国のフェニックス伝説は、不死鳥という点で共通している。



●『火の鳥―太陽編』まばゆい感じが、よく描かれている。

第五章
樹木

サクラ



日本の国の木はヤマザクラで、東京都の花はソメイヨシノだということを、どのくらいの人々が知っているのかは定かではないが、これらのことから、サクラは日本を代表する木、及び花であるということがよくわかる。

小学校の校庭などでもよく見られ、また、お花見に象徴されるように、サクラは日本人にとって、物心ついたときから生活に密接していて、切っても切れない関係にある木であろう。

手塚治虫もサクラが好きで、こんな文を残している。

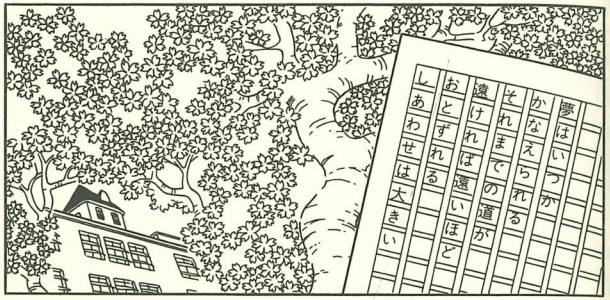
「なぜ、僕がサクラが好きかというと、僕の故郷である大阪近郊の宝塚は、サクラの名所であるからだ。歌劇やレジャーランドで知られた宝塚は、四月にはサクラの天国である。歌劇場へ行く途中、昔は川の堤だったものをサクラ並木の通りにしたプロムナードは〝花のトンネル〟とも呼ばれ、戦前から宝塚の象徴でもあり、歌劇場へのアプローチだった。アーチ形に何十本も並んだサクラから、花吹雪が、それこそレビューのフィナーレの紙吹雪のように、観光客の頭へ降り注いで楽しませる。

宝塚周辺には、〝一目千本〟といわれたサクラの林もあり、パッといっせいに開花すると、初めて春の実感がわいたものだ」

もしも、日本の全国民に「一番好きな花、木は何ですか?」と問えば、ほとんどの人が「サクラ」と答えるような気がする。

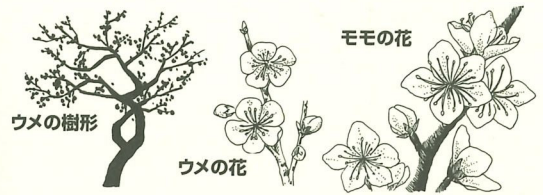
●『奇子』
近景、中景、遠景と、それぞれ描き方が異なっている。

●『火の鳥―乱世編』
モノクロであるが、
サクラの華やかさがよく表れている。



●『ナスビ女王』
漫画的グラフィックとでもいうような表現。図案ぽくもある。

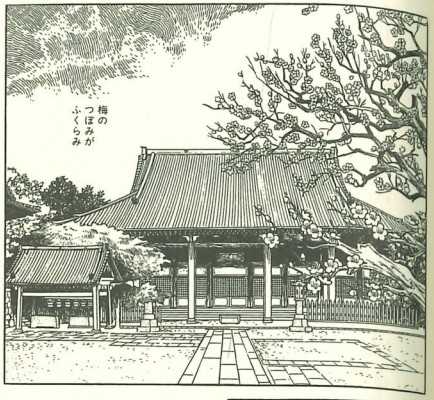
ウメ／モモ

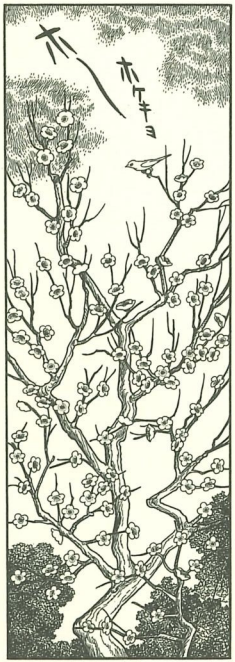


手塚漫画の中のウメ、モモの木はそれほど多いものではないが、それぞれ複数の出演がある。ウメやモモの木は、特に時代劇にしっくりくるということで、ここではその代表として『陽だまりの樹』を挙げた。寺社とウメの木、そこにウグイスが鳴いている図などは、いかにも日本的であり、季節感溢れるものであるが、それぞれのコマは、そんな感じをよく表している。

『陽だまりの樹』の時代を生きた歌川広重の「東海道五拾三次」や「木曾街道六拾九次」などの浮世絵にも、何ヵ所かにウメが描かれており、現在でも日本画に多く描かれている。木には、それぞれ形態的特徴があるが、ウメの幹や枝ぶり、紅や白の花は、一種抽象的な美すら思わせ、図形的なアンバランスな心地よさは、墨絵などにも適している。花の観賞も昔から好まれ、各地に梅園がある。特に水戸偕楽園は有名で、徳川斉昭が造園したものといわれ、ウメは茨城県の県木となっている。

ウメは花も果実も有用であるが、モモはどちらかといえば果実を採るための樹木だ。ウメの果実が梅酢や梅干しなど加工して用いられるのに対して、モモは生食が中心である。ただ、モモの花も岡山県の県花になっており、アメリカのデラウェア州の州花にもなるなど、こちらも人気は高い。街中に「桃」の字が溢れているのは、中国湖南省の桃源というところだ。この地方の人はモモの花を愛し、シーズンには桃林のモモの花の花見をする。





●『陽だまりの樹』

ウメ、モモは早春を飾る花である。排気ガスなどで汚れていない江戸時代の空に最も調和するものの一つであったろう。

カキ

カキの花

フユウガキの実

マメガキの実

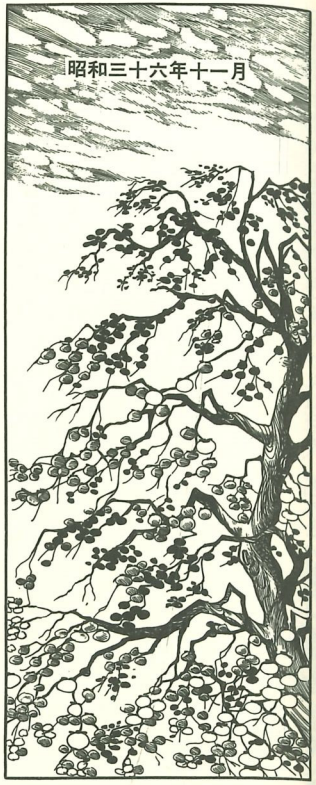
カキは東アジアの原産で、日本、中国、韓国を中心として原生していた。日本では原始時代から果実を利用していたらしい。青空のブルーに朱色に熟したカキの実という光景は、秋を代表する景色である。『奇子』に描かれているのはモノクロの絵だが、その色が浮かび上がってくるようだ。

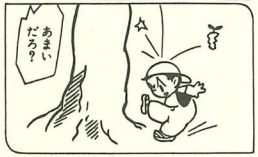
果実の形を大きく分けると、『奇子』に出てくる偏平なフユウガキのような形、『I・L―栄光の掟』に出てくる縦長のフジガキのような形、そして、円形に近いマメガキのような形の三つに分けられる。一〇〇〇年以上前に書かれた『本草和名』（九一八年）、『倭名類聚抄』（九三一～九三八年）では、すでに野生と栽培種のカキとが区別されていて、いかに日本人が昔からカキを愛好してきたかがわかる。

カキの実で重要なのは、甘いか渋いかであるが、系統学的には、渋ガキは第一次の形質、甘ガキは第二次的に生成したものと思われている。『マアチャンの日記帳』が描かれた一九四六年頃は戦後まもない頃で、菓子などは貴重なものであった。だから、カキは当時の子供にとって大事な食料で、それが甘いか渋いかは大問題であった。ここでは、そんな感じが実によく表れている。

ときに、新年になっても、枝に真っ赤なカキの実がついていることがある。雪が積もっても落ちないのである。中はもうゼリー状になっているのだろう。それは太陽の光に透けるようで、とても美しい。

●『奇子』





●『マアチャンの日記帳』

●『I・L―栄光の掟』

イチョウ

イチョウの葉の成長
短い枝から
たくさんの葉が出るのが
イチョウの特徴である。

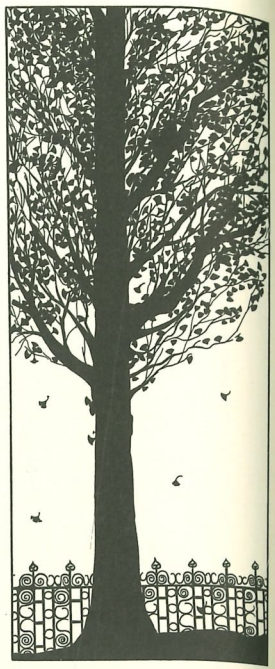
イチョウは、生きている化石植物といわれる。一属一科の一種の樹木で、他にまったく仲間が現存しておらず、中生代に栄えたものであり、いってみれば現世のイチョウはその生き残りなのである。

どんな植物図鑑を見ても、イチョウは中国原産の落葉高木とある。しかし、中国・北京（ペキン）では意外に少ない。とても不思議に思っていたが、現在では中国南部にわずかに残っているだけだと聞かされて、なるほどと思ったものだ。それにひきかえ日本では、全国的に植樹され、大昔から自生していたかのように思えるが、実は、もともとは日本の木ではなかったのである（日本の木であるという説もある）。

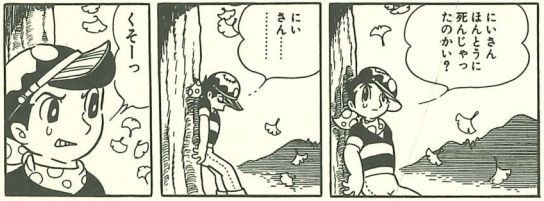
イチョウには巨木、名木といわれるものが多い。『江戸名所図会』に紹介され、すでに江戸時代から名木と評判の高かった千葉県葛飾（かつしか）八幡宮の千本イチョウや、樹齢一五〇〇年を誇る富山県上日寺（じょうにちじ）のイチョウの巨木など、挙げていったらきりがない。イチョウは古くから寺や神社で霊木、神木として、庶民に愛されてきたからであろう。

『きりひと讃歌』のコマは、イチョウの葉からなめた構図で、その葉の形がきれいだ。イチョウの葉は鴨（かも）の脚に似ていて、中国では「鴨脚」と書いて〝ヤーチャオ〟と発音する。これがイチョウの語源だという説があり、この説を信じれば、中国伝来の木であるという理屈がつく。漢字では「銀杏」と書くが、この漢字の並びは非常に美しい。

●『きりひと讃歌』
イチョウなめのムードシーン。



●『ザ・クレーター―双頭の蛇』
シルエットで表現されたイチョウ。
実に情感溢れる背景となっている。



●『W3』 兄の光一の死を知った真一少年が、イチョウの木の下で泣く名シーンである。

ヤナギ

ヤナギの樹形

シダレヤナギの葉と花

ヤナギを一目見たときの印象は、優しい感じといったところだろう。風が吹いて垂れた枝が次々と波打って揺れるさまは、他の木にはちょっと見られない風情がある。しかし、ものは見ようで、イギリスではそんな感じを「泣いているヤナギ」と表現し、その花言葉は「死者へのなげき」であるという。日本でも幽霊が出るのはヤナギの下というのが定番となっている。

手塚漫画の中のヤナギは、すべて情景として描かれていて、その登場の場所や時代も範囲が広い。『リボンの騎士』は中世のヨーロッパ、『あらしの妖精』は江戸中期、『陽だまりの樹』は幕末から明治初期、『アドルフに告ぐ』は昭和初期の日本という具合である。それぞれ情緒があり、爽やかさが感じられ、陰鬱な感じはまったくしない。

ここでの『陽だまりの樹』の絵は、まもなく明治に入ろうかという江戸末期で、すでにヤナギは街路樹の様相を呈している。最近の調査では、街路樹で一番数が多いのはイチョウで三〇万本、二番目はプラタナスで二〇万本と圧倒的で、シダレヤナギは九万八〇〇本で四位である。これは一九八二年の二二の都市での調査結果であるが、明治初期には銀座や皇居のお堀端の並木は、ほとんどがヤナギであったという。並木の樹種にも隆盛と衰退があるのだった。

ちなみに『陽だまりの樹』の手塚良庵と夜鷹のお紺の向こう側のヤナギも、シダレヤナギであろう。

●『あらしの妖精』
ヤナギが清々しい。

●『リボンの騎士』
ヤナギの優しい感じが出ている。

●『アドルフに告ぐ』
画面の手前にヤナギを配したことで、涼しさが表現されている。

●『陽だまりの樹』 背景の樹種にまで神経が行き届いている。

ポプラ

北京のポプラ
日本のポプラより大きく樹勢がある。

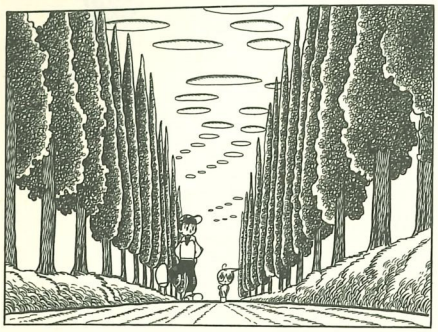
ポプラの実と葉
種子は白い綿毛を持ち、風に飛ばされる。

『モンモン山が泣いてるよ』では、ポプラの木が重要な脇役の役割を果たしている。蛇神社は宝塚に実在するもので、手塚治虫の少年時代の思い出が込められている作品だ。『ブルンガ1世』や『シュマリ』では、映画「第三の男」のラストシーンばりのポプラ並木が印象的だ。ポプラという言葉やポプラの写真を見ると、なぜか牧歌的で異国的な木のように思われるが、日本にもヤマナラシとドロノキというポプラ属の木が自生している。

ポプラは二〇世紀に入ってから日本に伝わり、それ以前には日本には存在しなかった。そのため、一九〇〇年（明治三三年）、夏目漱石はロンドンに留学した際に、初めてポプラの木を見たという。漱石が「あそこに並んでいる木は何ですか?」と尋ねると、宿のおかみさんは「あれはポプラですわね」と答えた。すると漱石は「へえー、あれがポプラですか、なあるほど」と、思わず感嘆の声を発したということだ。

私は、これと似たような経験をしたことがある。アニメーションの仕事で中国・北京に初めて出張したときのこと、宿舎は歴史を誇る風格ある庭園ホテルで、そこには花園があり、周囲は数百本のポプラ並木で囲まれていた。五月のことであったから、陽光にきらめく葉がひらひらして、樹形全体で一〇段階くらいの緑色がキラキラ光るのである。その美しさは、文や絵では伝えられないくらいで、圧倒されたのを覚えている。

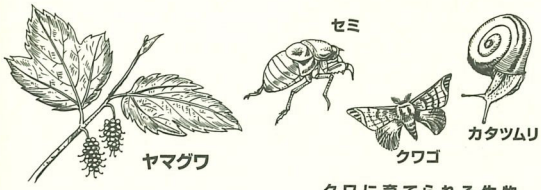
●『モンモン山が泣いてるよ』



●『ブルンガ1世』

●『シュマリ』

クワ



クワに育てられる生物

手塚作品七〇〇余りのうち、明らかにクワとわかる木が出てくるのは、ここに挙げた三作品である。手塚漫画といえども、クワのようなマイナーな木は、さすがに出てこないだろうと思っていたが、物語の中のほんの一コマだけに描かれていたりするのだ。

日本中で都会化、街化が進み、戸外で遊ぶ子供が少なくなっている昨今、クワをはじめ、動植物や多々の自然現象を肌で知る機会がなくなってきている。どんな生物でも、テレビ画面やシミュレーションでは理解できないことがある。実物を見て、実際に触ってみなければ、わからないことがあると思うのだ。だから、今後、博物的な描写を背景の一部にでも描くような漫画家は少なくなる一方であろうし、手塚治虫を超える者は、もはや出現しないだろう。かつての手塚治虫の博物描写は、その意味からも貴重な記録といえるのだ。

私は一九九五年秋までの九年間、埼玉県所沢市に住んでいたが、家のまわりにはたくさんのクワ畑が点在していた。しかし、古くからの地元の住民に聞くと、今は養蚕業を営んでいる家はないという。クワとは、その葉を蚕の餌とするために植えられた樹木なのであるが、私が観察したところでは、現在はカタツムリが棲み、初夏を過ぎた頃には、アブラゼミが羽化する場所になっていた。『奇子』の舞台となった一九五〇年代初めは、所沢でも養蚕が全盛期であったという。

●『人間昆虫記』
今でもクワは山里には多く見られる。

●『奇子』
これは冬のクワである。

●『平原太平記』 手塚漫画初期のクワの描写。

サカキ

サカキの花
小型で白い5枚の花びらを持つ。

サカキの実
直径6〜8ミリで、黒く熟す。

サカキはツバキ科の常緑樹で、長楕円形の厚い葉をつける。漢字では「榊」と書く。その文字を見てもわかるように、サカキは〝神様の木〟で、大昔から神木として、枝葉を神に供えられてきた。サカキのような木が、どうして漫画の中に出てくるのか不思議な感じもするが、いずれも神を扱ったエピソードにのみ出演しており、さすがに神木といったところである。

『火の鳥―黎明編』では、神のために踊る女がサカキの枝を持っている。日本神話の〝天の岩戸〟でお馴染みのシーンである。『火の鳥―太陽編』『タイムマシンのみこと』でも、サカキが出てくるのは神事の場面であるということで共通している。このことからも、サカキは、どこにでもあるというものではなく、神社によく植えられているというのもうなずける。また、墓地にも多く植えられていて、やはり神に関係があるものだということができる。

私にとって、サカキの暗緑を帯びた葉のついた小枝は、とても親しみ深いものである。それは、母が家に小さな神棚をつくって信仰をしているからで、サカキを花ビンに生けて供えている。神に仕える植物として見ると、なんだか高貴な植物に思えるが、それは、実はサカキではないのかもしれない。なぜならば、本物のサカキは関東地方では手に入りにくく、別種のヒサカキで代用することが多いからだ。

サカキは、灯籠の添え木としても使われるという。

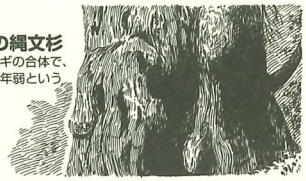
●『火の鳥―黎明編』
左が「COM」版、右が「漫画少年」版のものである。

●『火の鳥―太陽編』
サカキは日本では関東以西に分布する。

●『タイムマシンのみこと』
とぼけた味のSFギャグで、
他の作品とは違った
手塚治虫の魅力が感じられる。

スギ

スギの樹形



屋久島の縄文杉
何本かのスギの合体で、樹齢3000年弱という説もある。

かつて、私は屋久島の縄文杉のことを知り、どうしても実物を見たくなった。樹齢七〇〇〇年といわれ、風格ある太い胴体には、縄文土器のような紋様が刻み込まれているという。一九八一年、ついに私は、この木を見ることのみを目的として旅立った。しかし、たった一本の木を見るために屋久島まで行くというのは、相当に酔狂な話である。

縄文杉は、島の中央部に近い高塚山西南の肩にある峠の下の登山道に位置し、たどりつくまでは、なかなかの強行軍であった。地元の人を案内に雇い、途中で数匹のサルに囲まれたりしながら五時間歩いて、その姿をようやく見ることができた。

そこで見たものは、単なる木ではなく樹精、木の神というような存在で、自然に頭が下がるような生き物であった。胴体の紋様は、遠くから見ると縄文土器というより、哲学者の顔のようにも見える。その木肌は温かい。『火の鳥―乱世編』の巨スギを二まわりも三まわりも大きくしたようなスギで、根まわりが四三メートルもあるのだ。木のサイズというのは高さ、樹高ではなく、目通りの幹まわりの太さを基準としている。それは目の高さということで、地上一・五メートルの部分のことである。スギの巨木は各地にあるが、縄文杉は他を完全に圧する。

このスギの話を手塚治虫にしたところ、「ぜひ僕も見たいですね。絶対に屋久島に行きますよ！」と言った。私が縄文杉を見た感想は、ただ一言だ。「会えてよかった」。

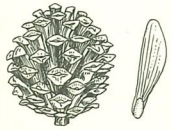
●『リボンの騎士』
スギによって、
美しさの中にも荒涼とした感じが
表現されている。

●『白いパイロット』
これは、デザイン的な
ヒマラヤスギである。

●『火の鳥―乱世編』
スギの幹まわりは通常、
15メートルほどになる。

マツ

クロマツの樹形


マツカサと種子

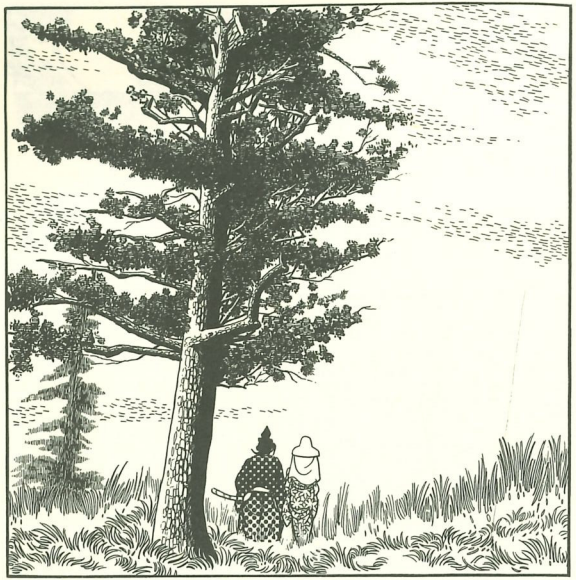
一口にマツといってもその種類は多く、モミやトウヒ、ツガといった木もマツ科に入る。これらは知識がなければとても見分けられるものではなく、非常によく似ている。

手塚漫画の中には、アカマツやクロマツなど一般にマツと呼ばれるものが出てくる。その描き方も『悪右衛門』では写実的に、『丹下左膳』では単純明快に、『ハトよ天まで』ではその中間的にと、さまざまである。その他現代ものにも、それぞれスタイルを変えてマツが描かれているが、マツはやはり時代劇によく似合うようである。

そのためか、マツは日本特有の樹木のように思われるが、実は、北半球の温帯、亜寒帯に広く分布している。幹の独特の割れ方をした樹皮、枝の松かさ、針葉樹を代表する針のような葉などが特徴的な木である。

自然描写を得意とし、その精密描写で知られるアメリカの画家アンドリュー・ワイエスの作品に「松ぼっくり男爵」という絵があるが、これは笑いの要素はないのに実にユーモラスだ。また、イタリアの大作曲家レスピーギの「ローマの松」は、世界的に有名な交響詩だ。日本だけでなく、どうやらマツは世界中で愛されているようだ。

私は長さ三五センチ、横幅一二センチもの巨大な〝松ぼっくり〟を持っている。一九八七年、アニメ『森の伝説』製作中に、私がこれを手塚治虫に見せたところ、ちょっとあきれた顔をして、「これは松ぼっくりのお化けだね」と言っていた。

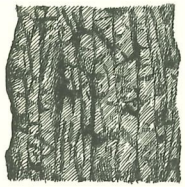


●『悪右衛門』(上)
●『ハトよ天まで』(下)
ともにリアルな表現のマツである。

●『丹下左膳』
初期の手塚作品の簡潔で略画的な描写である。

クヌギ

クヌギの葉と実
実はオカメドングリといわれる。



クヌギの樹皮
深い裂け目ができる。

カナブンやクワガタ、カブトムシなどの甲虫が特に好きな昆虫採集家にとって、クヌギやコナラの木は、宝の山のようなものである。これらの木の樹液には、先の甲虫類をはじめ、オオムラサキやゴマダラチョウのような美蝶が集まるからで、『アドルフに告ぐ』で木の穴に手を突っ込んでいるアドルフの気持ちはとてもよくわかる。穴の下には樹液が流れた跡が描かれているが、これは手塚治虫の少年時代の光景そのものであると思われる。

クヌギは燃料としても貴重で、関東近県では、その枝を切って利用していたが、近年では電気やガスの普及により顧みられぬまま伐採され続けている。クヌギが減り、里山の風景が変わってきている。

クヌギの樹皮は灰黒色から濃茶色で、硬くて縦に不規則に裂けているが、この形がクヌギの木を特徴づけていて、なんとも落ち着いた味のある模様になっている。これはコナラも同様で、コナラとクヌギの混成林が、今も埼玉県新座市の手塚プロダクションの正門前には健在だ。このあたりは、手塚プロがこの地に移ってきた一九八八年当時と比べると、住宅地がめっきり増え、緑地が減ってきているため、これは大変貴重なものである。秋になると種子であるドングリが落ち、かつての里山の面影をわずかながら残している。

クヌギは、サクラやスギ、クスノキのような名木にはならないし、天然記念物にも指定されないが、いつまでも存在してほしい木だと思う。

●『アドルフに告ぐ』
手塚漫画の中の樹木で、
明らかにクヌギとわかるものは数少ない。

●『火の鳥―乱世編』
これは、木の股の分かれ方や瘤の形から、
クヌギであろうと認められる。

クスノキ

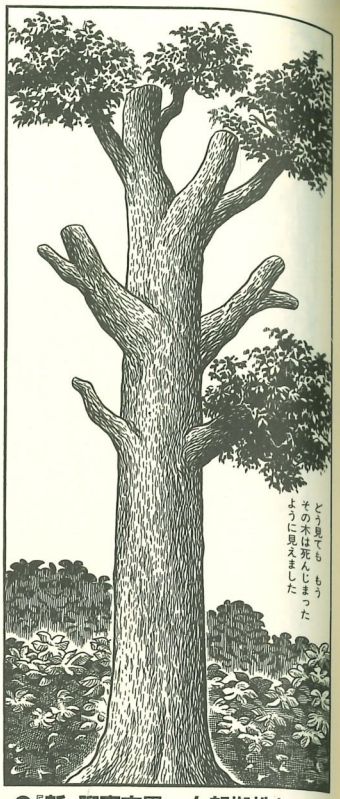
鹿児島県蒲生のクス
幹まわり33メートルの
日本一巨大なクスで、
特別天然記念物である。

本当にたくさんの木を正確に描き分けてきた手塚治虫が、一番思いを込めて、敬愛の気持ちを持って描いたのは、クスノキだと思われる。『アリと巨人』や『モンガのムサ』では、単なる樹木というより母親的な存在として描かれているし、『新・聊斎志異―女郎蜘蛛』では、怪異の対象として登場している。

また、アニメーションでも、クスノキが主役、重要な役どころとして描かれている。テレビシリーズ『W3（ワンダースリー）』の中の「くすのき物語」や、最後の実験アニメーションとなった『森の伝説』がそうである。『森の伝説』では、特殊撮影のモデルとしてミニチュアを使ったが、そのミニチュアがクスノキなのである。わずか六秒間のシーンを撮るために、直径一メートルの石膏のクスノキの根元を専門家につくらせたのである。それは、セル画と合成するための素材なのだが、「ここまでやるのか！」とスタッフに言わせるほどの思い入れであった。

一九八八年初夏、私は他のメンバー数名と、手塚治虫との最後になった旅行のお供をした。そのとき、手塚治虫は、奈良・春日大社の樹齢一〇〇〇年はあるかと思われるような大クスノキを、いつまでも眺めていた。これらのことを思い出すと、クスノキは手塚治虫にとって、ただならぬ木であったと確信できるのである。

ちなみに、手塚少年の育った宝塚市のある兵庫県の県木もクスノキである。



●『新・聊斎志異―女郎蜘蛛』
この絵は、手塚治虫が育った宝塚市の旧居のクスノキである。70年以上たった今も、その地に健在である。

●『アリと巨人』
クスノキは手塚作品に実に数多く描かれているが、これは漫画的表現のクスノキである。

シラカバ

シラカバとは、白いカバノキという意味であろうが、本来はシラカンバというのが正式名称らしい。木肌の色は、ヒトの肌の色がそれぞれ違うように、樹木によっていろいろであるが、シラカバは部分的に純白に近いものもあり、ひときわ特徴的である。緑の山の中にシラカバ林があると、とても目立って美しいものだ。これは、亜高山帯でよく見かける。

『火の山』は、大噴火した昭和新山を買い取り、その山の成長を観察した三松正夫の物語である。ここには、亜高山帯の焼け跡や伐採跡地の日当たり良好の地に生えるシラカバが描かれているが、説明にはイタドリ、ヨモギ、ハンノキなどの記述があるだけで、文字としては「シラカバ」とないのが巧みである。

『勇者ダン』や『罪と罰』のシラカバは、『火の山』に比べてデフォルメされた描き方だ。

これらの作品の他にも、背景として数々のシラカバが登場しているが、どうやらシラカバは、手塚治虫がかなり好きな木であったらしい。それは、一九六〇年、東京・練馬区富士見台に自宅を建てた際、その庭に数本のシラカバの木を植えていたことからも想像できる。

その六年後に私は虫プロに入社したのだが、シラカバを目の当たりにしたのは、そのときが初めてで、非常に強く印象に残っている。庭にシラカバの木がある家は、当時はとても珍しかったのである（今でもめったにないと思うが）。

●『勇者ダン』
北海道が舞台だけに、シラカバの背景が多い。

●『火の山』
植物の回復の指標として、シラカバが描かれた。

●『罪と罰』
ドストエフスキーの原作を漫画化したものである。

ブナ

冬のブナの葉
春まで葉をつけている。

ブナの葉と実
実は食用となる。

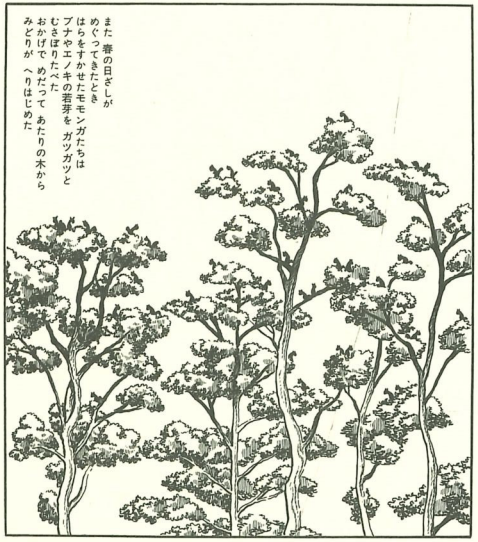
『ブラック・ジャック―過ぎさりし一瞬』のブナの成木と、『モモンガのムサ』のブナの若木は、手塚漫画の中の数少ないブナの描写である。ブナの木といっても、普通、どんな木なのかピンとくる人は少ないだろう。街中で見かけることは少なく、一般にはあまり縁のない木である。私もブナの記憶といえば、少年時代に読んだJ・ヴェルヌの『十五少年漂流記』に出てきたチェアマン島のブナ林くらいのものである。

巨木、名木の本にも、単独でのブナの記述はなく、ブナ林というまとまった生育地として語られている。たとえば、北海道の歌才ブナ自生北限地帯や、広島県の比婆山のブナ純林などが、国の天然記念物に指定されている。

ジャーナリストの櫻井よしこ氏は、若葉が繁りはじめたブナ林を歩くことを楽しみの一つとしている。五月の中旬頃、芽吹いたばかりのモスグリーンの若葉は瑞々しく、そんなブナ林に足を踏み入れると、分厚い絨毯の上のように足が沈むという。それは、前年のブナの葉が落ち、厚い落ち葉の層となり、そこに水が溜められているからだ。この水分が地中に染み入り、いずれは栄養分豊かな川の流れとなって、魚をはじめ、鳥や小動物たちを養うことになる。これは、ブナの根が広く深く張るからこそ起こり得ることで、植林のスギ人工林ではこうはいかないという。

ブナ林は、たくさんの生き物を養う宝のような林なのである。

●『ブラック・ジャック―過ぎさりし一瞬』



●『モモンガのムサ』

プラタナス

プラタナスの葉と実
実は鈴をかけたようになる。

プラタナスの樹形
樹高は15〜20メートルほどである。

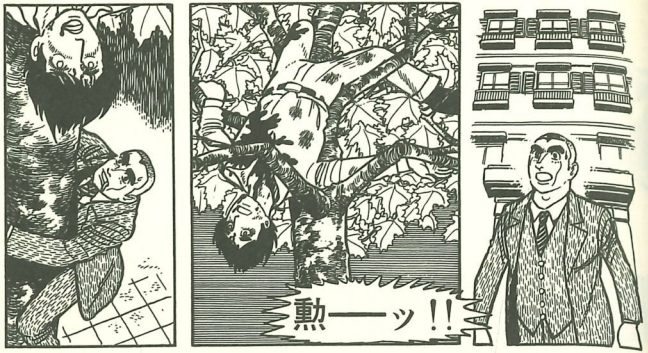
『ある街角の物語』のプラタナス
ペン・シャーンに影響を受けたデザインである。

プラタナスの和名は〝スズカケノキ〟で、鈴のような実をつけるのでこう呼ばれた。しかし、いつの頃からかプラタナスというのが一般的な通り名となり、スズカケという樹名はほとんど聞かれなくなった（学名はプラタヌス）。『奇子』に描かれているのは街路樹として使用されているから、これはモミジバスズカケノキであろう。

街路樹として昔から普及していたためか、流行歌の世界にもよく登場した。一九四二年に灰田勝彦が歌ったのが「鈴懸の径」。また、一九五五年に大ヒットした菅原ツヅ子の「月がとっても青いから」は、〝あのすずかけの並木路は〟の歌詞が印象的であった。それからずっと時代を下ると、はしだのりひことシューベルツの「風」という歌があり、この曲の二番は〝プラタナスの枯葉舞う冬の道で〟で始まる。この曲が発表されたのが一九六九年で、この頃には、すでに一般にはスズカケではなくプラタナスと呼ばれていたようである。

歌の中のプラタナスは、みな平和的であるが、『アドルフに告ぐ』では、峠草平の弟の勲の死にかかわって登場してきておりショッキングだ。その舞台は一九三六年のドイツである。

アメリカにおける研究によれば、プラタナスの葉は一〇センチ四方で、一日に八・八グラムの水分を発散しているという。街路樹のプラタナスは、一種の天然クーラーとして作用しているのである。



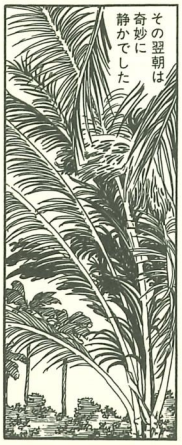
●『アドルフに告ぐ』
プラタナスが実にショッキングに使われている。
描写が細かく、その樹形や葉からプラタナスだとわかる。

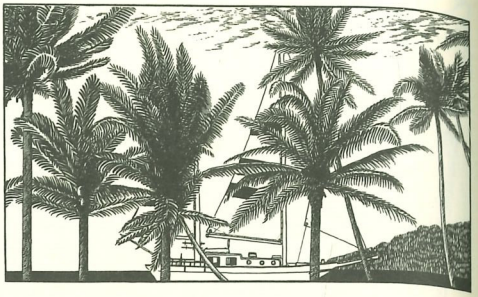
●『奇子』
下田警部と妻のちょっとしたシーンであるがプラタナスがごく自然に情緒を醸し出している。

フェニックス

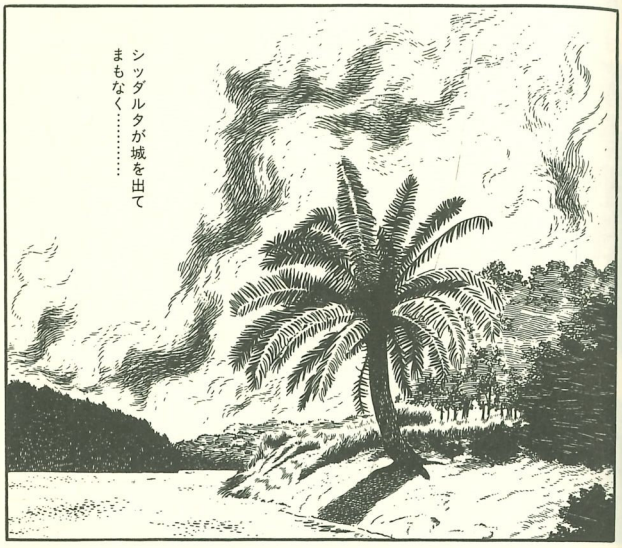
フェニックスという言葉には不死鳥、つまり〝火の鳥〟という意味もあるが、ここでは和名シンノウヤシといわれるヤシ科の樹木のことである。不死鳥もヤシ科の樹木も、ともに〝phoenix〟と書き、まったく同じスペルなのであるが、その由来はさまざまな説があり定かではない。『MW（ムウ）』（右）に描かれているヤシは、その舞台から推測してフェニックスと分析したのだが、手塚作品の中には、どこにもフェニックスという言葉は出てこない。だから、『ブッダ』のややリアルな描写のヤシは、カナリーヤシにも似ているから、本当はフェニックスではないのかもしれない。もっともカナリーヤシも、広義ではフェニックスとされるから、そう呼んでも間違いではない。

フェニックスという言葉から連想されるのは、熱帯、爽快（そうかい）、真夏、そして清いというイメージなので、歌詞の中に出てきたり、また、日本で一番大きいカーフェリーの名前に使われたりもした。それで、その名はよく知られているものと思われるが、樹木のフェニックスは、それほど一般には浸透していないようだ。『MW』（左）のカットは、ヤシ科の木ではあるが、フェニックスではない。このヤシは何という種類のものかはわからないが、私はこれとそっくりのものをタイのプーケットで目撃した。それは、オレンジ色の直径一センチにも満たない実をたくさんつけており、甘酸っぱいよい香りがしていた。

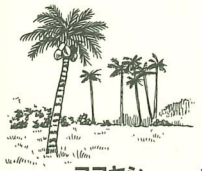




●『MW』（上）　●『ブッダ』（下）
それぞれ、南国の暑い雰囲気を表現している。



ヤシ


ココヤシ

ココヤシの実の断面

シュロ

他の追随を許さない表現というのは、手塚治虫の場合、あまりにも多すぎて、例を挙げるのが困難なくらいだ。そのうちの一つに、ヤシの描写もあてはまる。物語の舞台設定が世界中に及ぶため、当然、熱帯地方、亜熱帯地方特産のヤシもたくさん出てくる。

ドラマの設定が一定方向にかたよっている漫画家、たとえば学園もの、ラブコメの類しか描かないというような作家は、舞台がおのずと決まってしまうため、ヤシはおろか、樹木などをきちんと描いたことがないという人が多い。手塚治虫は人間ドラマはもとより、自然描写にも力を入れた希有の作家であったから、ヤシもいろいろな描き方をして、植物好きの読者の目を楽しませてくれた。

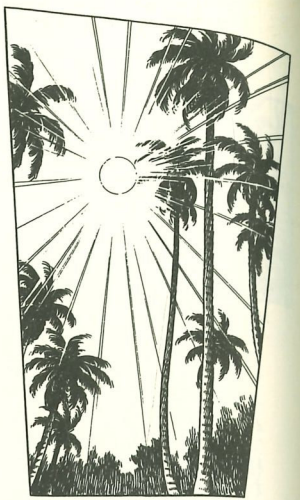
『新宝島』のユーモラスな絵はココヤシで、実の中に甘くて美味しい水が入っている。台湾などでは、この水を自転車で売りにきたりする。中国・北京では、缶ジュースとして一般によく飲まれている。

『ミューズとドン』のヤシは、ニッパヤシのようなものか。

そして『きりひと讃歌』に描かれているものは、ダイオウヤシのように見える。

ヤシは南国のものであるから、日本でも四国の南海岸、南九州には街路樹として植えられているが、四国以北の人には馴染みが薄い。しかし、古い屋敷の庭などで見かけることのあるシュロやシュロチクもヤシの仲間である。

●『きりひと讃歌』
熱帯の強い太陽光線が目に浮かぶようである。

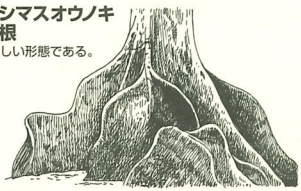


●『新宝島』
手塚治虫の長編デビュー作のユーモラスなカットである。

●『ミューズとドン』
椛島勝一の絵を彷彿とさせるワンシーンである。

マングローブ

メヒルギ
マングローブを形成する。



サキシマスオウノキの板根
大変珍しい形態である。

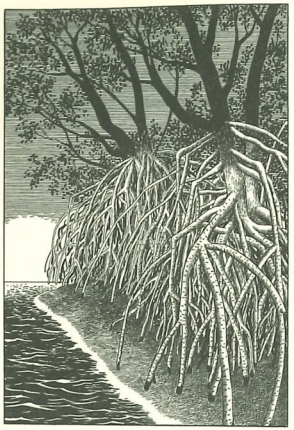
手塚治虫は後期の作品に属する『ブッダ』『ゴブリン公爵』にマングローブを描いている。亜熱帯から熱帯の海岸の砂泥地に根を張り、大きく林をつくる植物で、この海岸林を一般にマングローブと呼んでいる。つまり〝マングローブ〟という独立した樹木があるわけではなく、たとえば沖縄の石垣島の場合だと、マングローブはメヒルギ、オヒルギ、ヤエヤマヒルギといった木で形成されている。

マングローブは干潮時に大きく根が現れ、独特の景観をなす。私は石垣島や西表島でマングローブの林を見たが、一つ素朴な疑問があった。

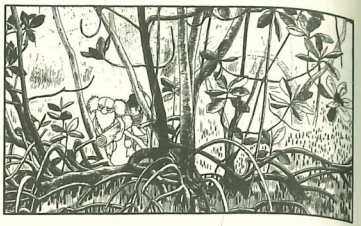
それは、海水に根を下ろしているのだから、当然、木は塩分を吸っているはずで、それで枯れてしまわないのだろうかということであった。

そこで、私は一枚の葉をむしって口に含んでみた。噛むと、かすかに塩辛い味がした。塩分に強い植物は〝塩生植物〟ということを後に知ったが、その意味でも珍しい植物である。ちなみに鹿児島県喜入町のマングローブ林は、世界の最北限自生地として天然記念物にもなっている。

この塩辛い葉のことを手塚治虫に話したことがあった。「うーん、それは知らなかったなあ」と不思議そうに言い、その話から、マングローブではないが、珍しい板根を持つサキシマスオウノキの話に発展した。この木は、根が屏風のようにそそり立つという変わった亜熱帯樹で、私は未見であるが、手塚治虫はえらく気に入ったと話していた。



●『ブッダ』
手塚治虫は樹木の根にかなりの関心を持っていた。



●『ゴブリン公爵』
マングローブが情景描写に使用されている。

バオバブ

バオバブ
幹に9000リットルの水を蓄える。高温で乾燥したサバンナでの生活に適している。

バオバブの花
蜜を吸いにくるコウモリが花粉を媒介する。

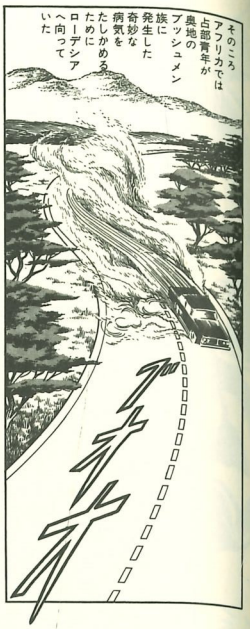
手塚治虫は樹木という対象にも思い入れが深かった。生涯に描いたその種類は数多く、亜熱帯や熱帯地方の樹木にもこだわりを見せている。バオバブの木などは、他の漫画家にはめったに描かれるものではないだろう。手塚作品の舞台は世界各地、縦横無尽に広がっていたため、おのずと奇木、珍木も紙面を飾った。

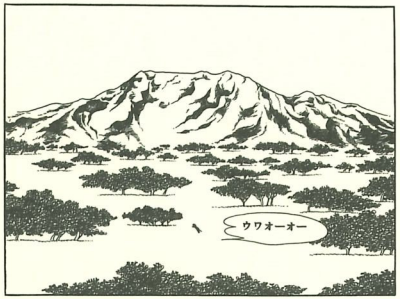
『きりひと讃歌』の縦長のコマの樹木は、アフリカのサバンナ独特のもので、横に広がる枝形はマツの仲間のレバノンシーダやアトラスシーダによく似ている。外国、それもアフリカの樹木については、なかなか資料がなく、詳しいことを調べるのは難しいのである。

『ブラック・ジャック―闇時計』の少年が車を見送っているシーンの大木、これはバオバブだ。この木は幹が大変太くなる異形の木なので、日本でもよく知られている。その幹は直径一〇メートル以上にもなり、〝アフリカ・サバンナの王様〟という別名もあるという面白い木である。ここではシルエットに近い描写であるが、いかにもアフリカらしい重厚な感じの絵となっている。

幹が柔らかく、水を含んだ軟材からなっているので、乾期が長くなると、ゾウがこの木に傷をつけ、樹液をしぼって飲むということはかなり知られている。原住民は一〇～四〇センチにもなるウリのような形の果実を食べるという。大変美味であるらしい。他に、樹皮から紙をつくったり、薬用にしたりと、ヒトにとっても大変役に立つ奇木といえよう。

●『きりひと讃歌』





●『ジャングル大帝』

●『ブラック・ジャック―闇時計』

第六章 草花 有用作物

キク

キクはサクラとともに、日本を代表する花である。時代劇作品も多い手塚漫画には、たくさんのキクの花が描かれていそうなものであるが、これが意外にも少ない。

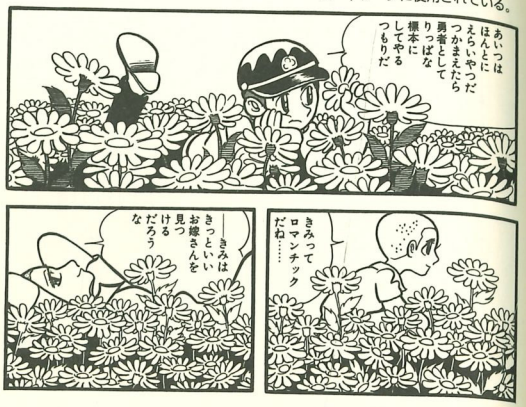
『ふしぎなメルモ』や『ゼフィルス』のキクはデージー（ヒナギク）やノギクの系統で、伝統的な園芸種の大菊ではない。そんななかで『スーパー太平記』の見事なキクは、ひときわ目立っている。『陽だまりの樹』は江戸時代末期という設定で、家庭生活の場面もそこそこにはあるのだけれど、描かれていてもよさそうな大輪のキクはなく、出てくるのはヨメナやノコンギクのような野ギクである。

そもそもキクは中国原産で、奈良時代に薬用として輸入され、江戸時代に入ってから、一般庶民によるキクの品種づくりが盛んになった。

秋の公園などで、たまたまキクの展覧会に出会うことがあり、何度か見学したことがあるが、その見事さとともに、キクづくりの職人たちの執念を感じさせられた。より大きく、より鮮やかにと腕を競い、その技術によって、高度な美しい花を咲かせることができるのだという。人工美の極致というわけであるが、あまりにも整然と並べられたキクを見ていると、私などは、いささか辟易（へきえき）とさせられる。デラックスすぎて、自然が感じられないのだ。私は、秋の野山に咲くノギクに、より趣（おもむき）を感じる。手塚治虫がキクに対してどんな思いを持っていたのかは、今となってはまったくわからない。

●『ふしぎなメルモ』
メルモと花はよく似合うので、この他にも花の出演は数多い。

●『ゼフィルス』
ムードシーンに使用されている。



●『スーパー太平記』これぞキクの典型的な描写といえるであろう。

バラ

テリハノイバラ

セイヨウバラ

ハマナス

バラは、ノイバラやハマナスのような比較的素朴なものから、園芸種の大輪の四季咲きのような豪華なものまで、約数百種がある。そういえば、漢字の「薔薇」という字は豪華な印象であり、気品のある艶やかさは、古くから人類に愛されつづけてきた。それは、人類の文明史から続いていて、エジプト古代王朝の王墓からもバラの紋様が発見されている。バラにまつわる民間伝承は、調べれば、それだけで一冊の本になるくらいの量があると思われる。また芸術家は、競ってこの花をテーマにした。

手塚治虫も、ここに挙げた他、たくさんの作品にバラを登場させているが、白眉なのが『双子の騎士』である。これは『リボンの騎士』の続編ともいうべきロマン溢れる作品で、成人したサファイヤの二人の子供を中心にストーリーが進む。この二人、デージーとビオレッタを、善と悪とに分かれて支えるのが、バラの精の兄弟である。白バラの精・白い王子と、黒バラの精・黒い王子で、この二人が対立するのであった。

実際、イギリスで一五世紀に〝ばら戦争〟というものがあり、王位継承権の正当性をめぐって、ランカスター家とヨーク家の両王家が争ったものである。前者が赤バラ、後者が白バラを記章としたため〝ばら戦争〟と呼ばれた。こういった歴史的事実も、手塚治虫は『双子の騎士』を描くにあたってヒントとしたのかもしれない。

●『ぼくの孫悟空』

●『サロメの唇』

●『双子の騎士』

●『野ばらの精』

チューリップ

私はまったく知らなかったのであるが、チューリップはユリ科であるという。ヤマユリなどのユリの仲間とは、見た目の印象がまるで違うようなのだが、そう思ってみると、雄蕊や雌蕊のつき方が似ている。また、ユリのしゃくれた花弁を丸くして、まわりを囲ったような形にすると、なるほどチューリップだとも思える。もっとも、波打ったような長い葉は、ユリのものとはかなり違って見える。

チューリップには園芸種としてたくさんの品種があるが、調べてみると、パーロットという種は、花弁が漏斗状に開き、ギザギザが入っていて、ユリの花のような趣がほのかに感じられたりする。

チューリップは、誰もが知っている艶やかな花で、西アジア原産とあるが、なぜかヨーロッパの香りがする。それは、オランダなどの風車の見える景色に、咲き誇るチューリップ畑が連想されるからかもしれない。

春先に風に揺れながら咲いているチューリップには、まわりがまだ早春のグリーンの中で、人をハッとさせる新鮮な美しさがある。巨大な宝石のようにすら感じることもある。『サボテン君』の中のセリフに「おーっ、さいた、さいた。みごとにさいたぜ」とあるように、その年初めて見たチューリップには、派手な色彩の中にも、清々しいものを感じる。『サボテン君』の二つのコマからは、そういった爽やかな空気がよく伝わってくるようだ。

ちょっと考えると生き物は運動する動物と運動しない植物とに区別できるようだ ところが実際は植物だって目に見えないくらいゆるやかに動きまわっていくのじゃ 目立った運動をするのはチューリップ サフランなどだ

●『ロストワールド』
手塚漫画はときに教育漫画となる。

●『ザ・クレーター―二つのドラマ』
家の庭先に咲くチューリップである。

●『サボテン君』
手塚治虫がチューリップを特に好んでいたかどうかは定かではない。

アサガオ

アサガオの原種

アサガオの園芸種

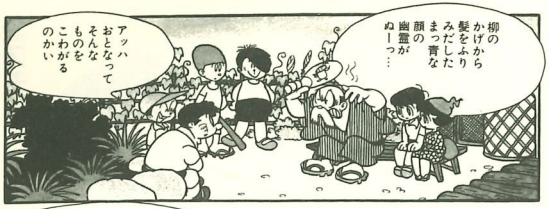
牡丹咲きの一種

台咲き

夏の早朝に開いたアサガオの花は、我々を実に清々しい爽やかな気分にさせてくれる。アサガオは純日本的な落ち着いた美しさを持つが、実際は熱帯アジア原産だという。日本には奈良時代に遣唐使が薬草として持ち帰った。それは、空色の小さな花であったという。

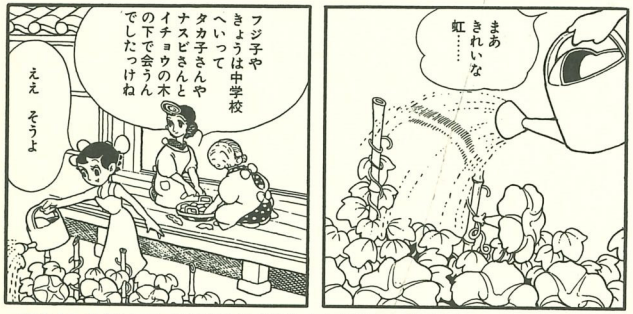
アサガオは朝に咲き、昼前にはしぼんでしまうので、アサガオの花のある情景というのは当然、朝か午前中ということになる。『ロップくん』では、ヒゲオヤジが子供たちに怪談を話しているが、これは夜間のことであるから、もちろんアサガオはつぼみである。『陽だまりの樹』では、アサガオによって季節感を表している。また、『ナスビ女王』のアサガオに水をやるフジ子のジョウロや、母と祖母の縁側（現在ではほとんど見られないが）での会話などは、いずれも一九五〇年代初期の風俗で、日本を代表する映画監督、小津安二郎の名作の一場面のようである。

私は一度、信じられない色のアサガオの花に出会ったことがある。一九八〇年頃、園芸好きの父が、自宅の一階から屋上まで七本の細いロープを張り、そこにアサガオの蔓をはわせた。そして、七月中旬の開花期、一度に三〇〇近い花を咲かせた。壁一面がアサガオの花なのである。赤、白、青の花の中に混じって、たった一つ、私はコーヒー色のアサガオを見つけた。アサガオの専門書を見ても、そんな色の花はのっていなかった。一種の突然変異の個体だったのかもしれない。



●『ロップくん』
1960年代までは、
近所にこういうお年寄りがいて、
恐ろしくも楽しい夏休みを過ごした。

●『陽だまりの樹』
アサガオの花から、
これは午前中の会話であることがわかる。



●『ナスビ女王』 アサガオにかかる虹。なんと爽やかな朝であろう。

コスモス

『花とあらくれ』は、劇画が台頭してきた時期（一九五九年）に描かれた青年向けの作品である。当時、劇画の人気が上昇してきて、自分の漫画はもう古いのではないかと、手塚治虫がノイローゼになるくらい悩んだ末、いくつかの劇画的作品を発表したなかの一つである。

手塚治虫の作品としては、かなり荒々しいタッチで男っぽいが、その底流には優しさが流れており、近来には見られない異色作といってよいだろう。ある流れ者の青年が、男臭くて荒々しい漁師の飯場に、ある人との約束でコスモスの花を咲かせるという話で、あらくれ男と可憐（かれん）なコスモスの花のコントラストがキラリと光る。

コスモスは上品なピンク色や白色の花弁を持ち、初秋の風に揺れる様子は実に日本的で美しく、俳句の季語にもなっている。コスモスはキク科に属するが、漢字では「秋桜」と書き、まさに秋の桜を思わせる。今や伝説的な歌手となった山口百恵も、かつて「秋桜（コスモス）」を歌った。

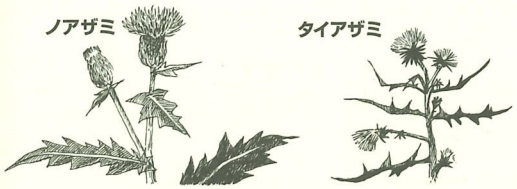
秋の七草のナデシコやキキョウなどと比べても何の遜色もないが、もともとは日本の花ではなく、メキシコ原産の一年草である。園芸化されたのは比較的新しく、ここ一二〇年ほどの歴史である。

英語読みでは「コズモス」となり、その花言葉は「乙女のまごころ」である。そのためであろうか、『花とあらくれ』の中で主人公は、最初、飯場のボスに「娘（あま）っ子」と呼ばれている。

●『花とあらくれ』

どんなあらくれ男の中にも優しい心がある。手塚ヒューマニズムの滲（にじ）む劇画的佳作である。

アザミ



アザミの花は、ちょっと前までは道端や畑の縁などで普通に見られる花であったが、街中ではなかなか見られなくなってしまった。手塚漫画の中でも、ごく普通に咲いているが、ストーリーに関係なく、さりげないところが私は好きである。

一般に知られているアザミはノアザミといい、〝野〟の文字がつく。花はピンクを帯びた赤紫色で美しいが、葉や花がネバネバと粘り、手につくと簡単には取れない。

スコットランドでは、アザミは最も尊ばれている花で、歴代のコインのデザインとされ、勲章や国花ともなっている。それは、アザミが国を救ったといわれているからだ。

一三世紀の昔、ノルウェー軍がスコットランド王の城を取り囲んだ。ノルウェー兵たちは奇襲をかけるため、城の濠を渡ろうと、靴を脱いで素足になったが、濠の底は干上がっていて、アザミが繁っていた。そのため、ノルウェー兵たちはアザミを踏んで大声を出し、その声に気がついたスコットランド兵によって追っ払われたという。それ以来、〝国を救ったアザミ〟と喧伝されている。

ディズニーの「ファンタジア」を意識したイタリアのアニメ「ネオ・ファンタジア」を、手塚治虫はパロディとして一流だと評価していた。この中のドビュッシー〝牧神の午後への前奏曲〟はギリシャ神話〝ダフニスとクローエ〟のパロディでもあり、大地の女神がつくったアザミが抽象的に背景を飾っていた。

●『火の鳥―鳳凰編』

いくらかデザイン的な処理がなされているが、キキョウやアザミが認められる。

●『罪と罰』

アザミとクジャクチョウの美しい光景である。

●『ブッダ』

アザミの赤紫色の花は
高原などでひときわ目立ち、
野の花らしい野性味をたたえている。
右下の花はクローバーであるが、
このように細かいところまで神経を
使って、花をドラマに登場させた。

ツバキ

『カノン』は、成人した主人公が過去の同級生たちと交歓するという一種のタイムトリップSF色を帯びた作品だ。その中で主人公は、敬愛していた西田先生からツバキの花の蜜を勧められるのだが、これは本当に甘いのだろうか。物資の乏しい戦争中は、こんな花のほのかな甘さえも貴重だったのである。

『陽だまりの樹』は大河小説的な、完成度の非常に高い作品で、日本の近代史と手塚家のルーツを描いた風格のある大作である。このツバキのシーンなどは、黒澤明監督の「椿三十郎」のワンシーンを連想させる。手塚治虫は、この日本を代表する監督を大変尊敬していたから、どこかで影響を受けていたのではないかと思われる。

また、ツバキには、文学的な日本の香りがする。古人は、その花より、冬にも落ちない常緑樹の厚みのある葉に神聖なものを感じ、実は葉を見るための木だったという説がある。ツバキの名は、「厚葉木」の〝あ〟を省略したもの、「津葉木」と書き、葉の艶に価値があることを意味する、「強葉木」と書き、強く硬い葉を意味する、などの見解がある。牧野富太郎博士は、一つ目と二つ目の説が有力であると発表した。

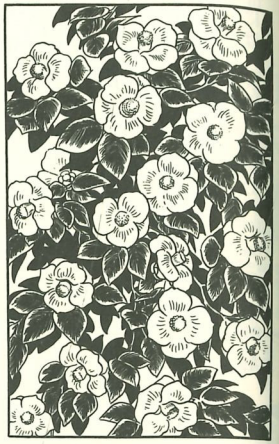
花言葉というものは万国共通のものだと思っていたが、国によって違うらしい。英国では、白いツバキの花言葉は「至上の愛らしさ」、赤いツバキは「謙遜な美徳」であるという。ドイツでは「御身は我が心の至上のもの」となる。

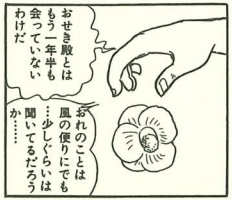
●『カノン』

感涙もののトワイライトゾーン的SFで、何度読んでも泣けてくる。

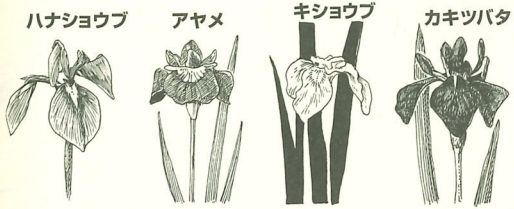
●『陽だまりの樹』

このカットから黒澤明監督の「椿三十郎」が連想される。





オオマツヨイグサ



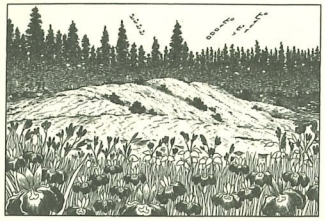
手塚漫画の中にわずかに出てくる花を取り上げてみた。複数の作品に出てくる花もあれば、一回だけの登場という花も多い。『ぼくの孫悟空』のオニユリ、『あらしの妖精』のクローバー、『シュマリ』のオオバコなど、地味な野草たちである。

種を特定できない草花も多く、SFものには架空の植物も多い。特に変わったものとしては、『ブッキラによろしく!』という手塚治虫晩年の作品中に、植物でも動物でもないといわれている〝粘菌〟が、かなり学術的に登場してきている。アウトローの天才・南方熊楠（みなかたくまぐす）が、一番力を入れて研究していた生物だ。

『そよ風さん』は、一九五〇年代の農村を舞台とした少女漫画の佳作である。この作品には、夜に咲く花の代表的存在のオオマツヨイグサがよく出てくるのだが、ここに挙げたコマでも、〝そよ風さん〟と子供たち、それを見守るかのようにオオマツヨイグサが満開だ。

このオオマツヨイグサは〝ヅキミソウ〟と呼ばれることが多いが、これは誤りだ。黄色い花をつけるオオマツヨイグサに対して、ツキミソウは白い花をつける別種である。ちなみにオオマツヨイグサは「大待宵草」と書き、〝夜を待つ〟という意味である。

『シュマリ』では、原野にアヤメが咲き誇っている。私は、端午の節句のショウブと同じ仲間だと思っていたが、ショウブはサトイモ科でアヤメ系はアヤメ科であり、完全な別種なのであった。



●『そよ風さん』
情感溢れるオオマツヨイグサである。

●『シュマリ』
上から順にスズラン、アヤメ、
ヤブカンゾウである。
ほどよくリアルに、
ほどよく漫画的に描かれている。

●『ブッキラによろしく!』
粘菌は南方熊楠によって有名になった。

ハス／スイレン

ハスとスイレンは日本では別ものであるが、西洋では同じ「ロータス」で区別されていないので、ここでも一緒に取り上げたものである。我が国のハスの古名は「ハチス」で、その実が入っている花托（かたく）という部分がハチの巣に似ていることに由来する。

ここ数年、私はアニメの仕事で中国に出張することが多いのだが（手塚プロの中国スタジオ）、中国の人は、このハスの実を生食する。ちょうどドングリと同じような大きさと形のグリーンの実で、皮をむいて食べると少し青臭いが、かすかに甘くピーナッツのようでもある。

ハスの花は直径一五センチもあり、大変美しい。花を開くときにポンという音がするというので、私も体験しようと上野公園の不忍池（しのばずのいけ）に行ったことがある。しかし、朝八時に到着したときには、もう全部咲き終わっていて、実際に聞くことはできなかった。

『ボンゴ』に出てくるオオオニバスはスイレン科で、直径一メートルほどであるが、大きなものになると、体重五〇キロの人間が乗っても沈むことはないという。

『ブッダ』には、ハスもスイレンも両方出てくる。インドの仏教では、ハスはブッダの生誕を受けて花を開いたという。中国に伝わった仏教では、西方浄土は神聖なハスの池であると信じられている。どちらにしても、ブッダとハスの花は関係が深い。日本の寺の境内（けいだい）にハス池がよく見られるのは、このためである。

●『ボンゴ』
アマゾン原産のオオオニバスである。

●『ブッダ』ハスとスイレンが数多く出てくる。

ツタ

ツタの果実

キヅタ

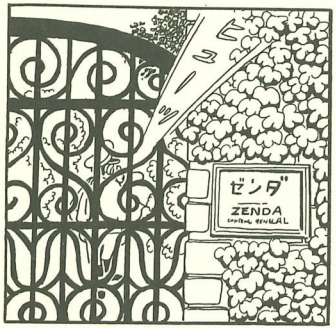
〝つたの絡まるチャペルで……〟という歌詞で始まる「学生時代」という歌は、今やポピュラーソングになっている。私が何人かの知り合いに「ツタっていう植物を知ってる?」と尋ねると、この歌について話す人が多かった。この歌が〝ツタ〟を広く世間に知らしめた(?)ということができるかもしれない。

一年中緑色のツタは、実はウコギ科のキヅタという植物で、ブドウ科のツタとは、蔓植物という共通性はあるが、異なるものである。『ケン1探偵長』や『ナスビ女王』『I・L—箱の女』のツタはキヅタである。つまり、紅葉して葉が落ちるものであれば、本来のツタということができるのである。

キヅタは茎から付着根を出し、樹木や壁をはい登る。『I・L—箱の女』に出てくるような古い洋館や屋敷には、ツタをからませる家が多かったようだ。今ではめったに見かけなくなったが、コンクリートや木の家の中に混じって、その家だけが緑色なのだから、大変に目立つものであった。また以前、有楽町駅のすぐ近くに、全館キヅタで壁をおおわれた喫茶店が名物的存在であったことを覚えている。二一世紀に入って、その有用性が論じられている。

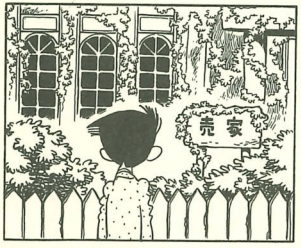
ところで、『鉄腕アトム—宇宙の寄生虫の巻』には蔓性の植物が描かれているが、これはツタではない。説明にあるようなヤドリギでもなく、ヤドリギを表現するための寄生植物を描いたものであろうか。実際のところは定かでない。

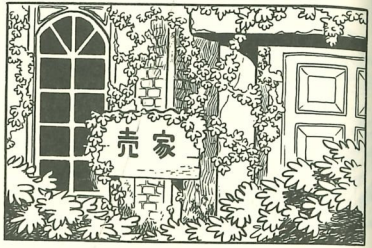
●『ケン1探偵長』



●『ナスビ女王』

●『鉄腕アトム—宇宙の寄生虫の巻』





●『I・L—箱の女』

タケ

タケはイネ科であるから、草か木かといえば草なのであろうが、モウソウチクなどは高さ二五メートル、直径二四センチにもなり、樹木のようである。

ブラック・ジャックがタケに囲まれた道を歩いているシーンなど、一見似合わなさそうな印象だが、よくよく見てみると、実に渋く、格好がいい。ブラック・ジャックの本名である間黒男は、本当は日本的な面も持ち合わせているのだ。

タケは、〝破竹の勢い〟〝竹を割ったような性格〟など、潔い爽やかな表現によく使われる。また、タケ＝日本のイメージどおり、日本のタケ・ササの仲間の種類は世界一である。東南アジアや欧米にも数は多く、北欧を除き世界中で見られる。

その中でも、日本ほどタケに親しみ、竹文化を大事にしている国はないだろう。美術工芸品や日用品への利用、タケノコの食品としての利用など、非常に密接な関係である。また、日本のタケが世界的に有名になった要因の一つに、あの発明王エジソンが、電灯のフィラメントに京都府八幡町の男山のマダケを使用したことも挙げられる。

一九六〇年頃までは、東京近郊にも竹やぶが各所にあり、私などもずいぶん遊んだものだが、そこには独特の異空間が感じられ、心が躍った。タケの葉が風で触れ合い、草や木にはない囁きがあった。手塚治虫の数々の漫画の中のタケを見ていると、あの頃の雰囲気が甦ってくるような気がしてならない。

●『あらしの妖精』

●『ブラック・ジャック―ときには真珠のように』

サボテン

ローマエビ
(アメリカ中西部)

コウホウマル
(アルゼンチン)

ゲッカビジン
(メキシコ)

『夜よさよなら』は、サボテンのノーチェスと少年の限りなく愛情に近い友情を描いた話である。サボテンと少年は離れ離れになるが、サボテンは少年から出るかすかな波動を頼りに、何万キロも旅をして少年に会いにくるのだ。

最初にこの作品を読んだときは、とても面白く感動もしたが、実際には、まさかこんなことがあるわけがない、手塚治虫一流の御伽話的SFだと思っていた。しかし、確かに誇張はあるけれど、まったくあり得ない話ではないと思ったのは、橋本健博士の『植物には心がある』という本を読んでからである。ある種の植物やサボテンには、どうやら人間の感情に似たものがあるらしいということは、科学雑誌で読んだことがあったが、この本を読むと、もはや、そんならしいなどという段階ではないのである。

サボテンに電極をつなぎ微電流が流れるようにしたところ、人間の質問に針を振ることで反応したという。簡単な計算にも正確に答え、「八＋八＝?」の問いには、一六回針を振って答えたというのだ。人見知りもし、愛情を持って接する相手とだけ、針を動かして話をする。「植木鉢から出てきてちょうだい」と訴えると、実際に鉢から飛び出したという事実まであるという。そう考えると、『夜よさよなら』のサボテンが旅をする物語も、必ずしも漫画的ではなくなってしまう。そのことに私はあらためて驚き、ノーチェスが愛しく思える。

●『夜よさよなら』

こんなバカな話と思いながら、いつしかその世界に同化できるのが手塚漫画の特徴の一つで、手塚治虫以外には描けないタイプの作品であろう。

カニサボテン

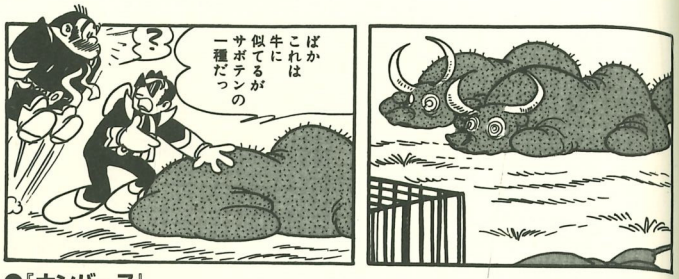
手塚作品の中の植物には、出演頻度の高いものと低いものとがあるが、サボテンは大変高いものの一つであった。ここに挙げた作品以外では、『ロック冒険記』『キャプテンKen』『三つ目がとおる』『ミューズとドン』『ブルンガ1世』……などに出演していて、実に数多い。

サボテンと聞いて、すぐに連想されるのは、西部劇の背景でお馴染みの背の高い種、『大地の顔役バギ』に出てくるようなものか、カニサボテンに代表される園芸種であろう。『ナンバー7』には、ギャグで牛の形をしたサボテンが出てくるが、実際、これほどの奇抜なものはないにしても、ずいぶん面白い造形のものがある。パイナップルのような形のものや球体のもの……夏の夜、大輪の純白の花を咲かすことで有名な〝月下美人〟もサボテンの一種である。一夜にして咲き、しぼんでしまうので、見たことのある人は少なく、その花が満開になったりすると、毎年のようにニュースとなり、新聞に紹介されたりする。

サボテンは〝多肉植物〟であるが、あまりにも種類が多いので、別格として扱われることが多い。また、園芸種には愛好家が多いが、観賞して楽しむ以外にも、メキシコのウチワサボテンのように、菓子に加工して食用にされるものもある。

サボテンの花は原色のものあり、透明感のあるものあり、実に多彩で美しい。その数、実に三〇〇〇種。漢字では「仙人掌」「三布袋」「覇王樹」などと書く。

●『オズマ隊長』
これは、いくらか学術的な描写である。



●『ナンバー7』
アッと驚くギャグの牛型サボテン。

●『大地の顔役バギ』 リアルなタッチのサボテンである。

ライオンゴロシ

ライオンゴロシの果実
湾曲した強力な鉤爪が、裂片の先端についている。

ツノゴマの果実
シカやカモシカの大敵で、一度刺さったら、なかなか抜けない。"悪魔の爪"といわれる。

ダイオウ
ヒマラヤ山脈の希薄な大気の中、海抜4000メートルの氷河の堆石の間などで育つ。

植物学的にはおよそ関連がないと思われるが、ここでは手塚漫画の中に出てきた〝変わった植物〟ということで、四種を選んでみた。

『ミューズとドン』の牛殺し草など、実在する植物かどうかもわからないが、これと似たものにライオンゴロシという植物がある。この植物の果実は先端が湾曲していて、忍者の使う鉄菱のような形をしている。この果実をライオンが踏むと、果実が足に突き刺さり、歩くたびに深く肉に食い込んでいく。

『オズマ隊長』に出てくるネナシカズラは、ヤドリギのような寄生植物の一種で、茎が蔓となり木に巻きつき、そこから木の養分を吸い取るものである。

『ジャングル大帝』のオウギバショウは、別名を〝旅人の木〟ともいう。現在のように情報が多くなかった時代には、世界の七不思議などがカード形式で少年雑誌の付録になっていて、オウギバショウはそのような写真の中に顔を出していた。水を蓄える植物は、他にアナナスなどがあり、筒状部が貯水装置になっているため乾燥に強い。しかし、マラリアを媒介する蚊の繁殖場所でもあり、この水はヒトの飲用にはならない。

〝変わった植物〟を挙げていくとキリがないが、直径一～二メートルの巨花のみを咲かせる世界最大の花、ラフレシアや、ヒマラヤ山中の希薄な大気の中で一メートル以上の高さを持つ噴水のような植物、ダイオウなどが特に珍しいものであろう。

●『ミューズとドン』

●『オズマ隊長』

●『七色いんこ』

●『ジャングル大帝』

ばるぼら草

道端や野原の草
これらの草が重なったところをデフォルメし、手塚流のアレンジを加えたものが〝ばるぼら草〟である。

手塚漫画を読んでいると、ときどき奇妙なデザイン化された草に出会うことがある。それは、略画されたヒトや動物以上にデフォルメされたグラフィックな感じの草で、草と草の間、草や茎が空と重なるところなどが、長細い楕円形や丸みを帯びた三角形のぬけた空間として描かれている。とても面白い造形であると思うし、私はこの草のデザインが大好きであった。

手塚治虫が草を描く場合は必ずこう描くということでもなく、『奇子』に見られるように、〝ぬき〟のない密生した草の描写も多い。これは作品によって描き分けられていた。『ばるぼら』において多用したので、その後、この種の草を手塚治虫自ら〝ばるぼら草〟と呼ぶようになったという。遺作の一つ『グリンゴ』などでも、南米の草むらは〝ばるぼら草〟であった。

もっとも、このデザインにはお手本があり、そのルーツとなったのは、田河水泡の名作『のらくろ』であったという。『のらくろ』は、若き日の手塚治虫が最も影響を受けた作品の一つである。蛇足ながら、『鉄腕アトム』の角状の髪型も、〝のらくろ〟の耳がそのヒントの一つになったとのことだ。

〝ばるぼら草〟は博物的に考証すると、エノコログサ、オヒシバ、メヒシバ、カヤツリグサ、カモジグサなど、道端や野原に自生する単子葉類であろう。〝ばるぼら草〟は、手塚治虫の約七〇〇作品のうちの一〇〇以上に出てくるものと思われる。

●『奇子』

●『三つ目がとおる』

●『ばるぼら』

『鉄腕アトム―植物人間の巻』は、一九五二年公開のSF映画「遊星よりの物体X」ばりであったが、それよりずっとヒューマンな話だ。アルソア人は、最後にサフランとアネモネを足して二で割ったような花になってしまうのである。これはテレビアニメでも扱われており、心に残る感動的なものであった。ちなみに「遊星よりの物体X」では、宇宙から飛来した得体の知れない植物が、最後にフランケンシュタインのような巨大な植物人間に成長する。手塚作品では他に『火の鳥―宇宙編』や『SFファンシーフリー―緑の果て』などに宇宙植物が出演している。

手塚治虫が高く評価したSF作品『トリフィドの日』は、トリフィドという彗星からばらまかれた宇宙植物の種子が成長し、人間を襲うという侵略ものの傑作で、映画化もされた。映画のタイトルは「人類SOS」であった。怪物や宇宙人、UFOが地球人を襲うという話は珍しくないが、それが移動できる植物であるという点がユニークだ。

先の「遊星よりの物体X」について、手塚治虫は一九八〇年のある鼎談で、次のような発言をしている。ある人の「物体Xって、怖いというより気持ち悪いですよね」という言葉に対し、「そこいらが、僕はたまらなく好きなんですよ。白黒映画でね。今度カラーになるそうだけど、あの恐怖感が薄れることはないのかな」と。

そのカラー版のリメイク映画が「遊星からの物体X」である。

●『鉄腕アトム―植物人間の巻』

このように、読後に胸がジーンとくるような漫画は、現在ではめったに見られない。

パイナップル

パイナップル
（ブラジル原産）
別名アナナスともいわれる。

シマサンゴアナナス
（熱帯アメリカ原産）
パイナップルに近縁。

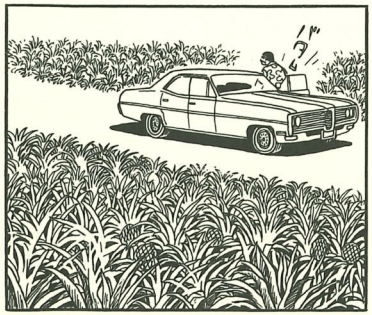
パイナップル畑を舞台にした漫画は、私は他の漫画家の作品では見たことがない。しかし、手塚漫画の中では、この漫画の題材になりにくいパイナップル畑が三作品にわたって出てくる。ここには挙げていないが、初の長編漫画として大ヒットした『新宝島』にも描かれており、昆虫、動物とともに、植物にも幅の広いところを感じる。

パイナップルはパインアップルともいい、それは果実の特徴からきているものだ。すなわち、マツ（パイン）に似ていてリンゴ（アップル）の風味があることに由来する。

私は子供の頃、パイナップルは果物の王様のように感じていた。バナナも高級品のイメージがあり、そしてなるほど美味であったが、縁日の叩き売りによって大衆的になってしまった。それに比べてパイナップルは上品で風格があり、松ぼっくりのような果実がごくたまに食卓に上がると、ドキドキしたものである。不思議なもので、これが缶詰だと、それほど感動しないのだ。生の果実は一九五〇年代にはまだ珍しく、これを家族全員が揃って食べるのは、一つの儀式に近いものがあったのだ。パイナップルのジュースでさえ、めったに飲めなかった。

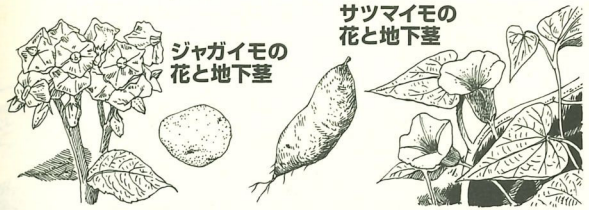
十数年前、私は沖縄の石垣島に行った。そして、手塚治虫が以前泊まったのと同じ川平のホテルに宿泊したのだが、その近くにパイナップル畑が広がっていた。それは見事な畑で、きっと手塚治虫もこの畑を見たに違いないと確信したものだ。

●『MW』



●『ブラック・ジャック―あつい夜』

サツマイモ



手塚漫画には、数はそれほど多くないが、野菜も出てくる。

戦時下の思い出を描いた自叙伝的色彩の強い『すきっ腹のブルース』には、イモ泥棒のシーンがあるが、これはサツマイモ畑だ。この世代の人にとって、サツマイモやスイトンなどの食べ物には、いうにいわれぬ深い思いがあるという。昆虫ミステリー『ゼフィルス』にもサツマイモ畑が出てくる。

手塚治虫中期のヒット作『ビッグX』では、ジャガイモが大役を務めている。主人公の朝雲昭(あさぐもあきら)は、薬品〝ビッグX〟を使って、ジャガイモを家ほどの大きさに成長させる。これにより、村の食糧危機が一気に解決するのだ。

昨今では、ジャガイモといえば北海道というイメージがあり、確かに北海道産のジャガイモは美味(おい)しい。北海道の風土がジャガイモの栽培に適しているのだろう。そんなことを予見させるようなカットが、『シュマリ』の中にときどき見られる。

サツマイモもジャガイモも地下茎が発達したものという点では同じであるが、サツマイモはヒルガオ科で、ジャガイモは、なんとナス科である。ジャガイモがナスの仲間とは驚いてしまう。サツマイモはアメリカ大陸の熱帯原産で、日本へは一七世紀に渡来、ジャガイモはペルー・アンデス山系の原産で、日本へは一六世紀末に渡来と、その歴史は似ている。それぞれ、サツマイモは〝甘藷(かんしょ)〟、ジャガイモは〝馬鈴薯(ばれいしょ)〟という別名があることも共通している。

●『すきっ腹のブルース』
食糧難の時代の風景である。

●『シュマリ』
北海道らしいジャガイモ収穫のシーン。

●『サボテン君』
タルの中身はジャガイモ。

●『ビッグX』
これはまた巨大なジャガイモである。

ダイコン

ダイコン畑

ダイコンの花

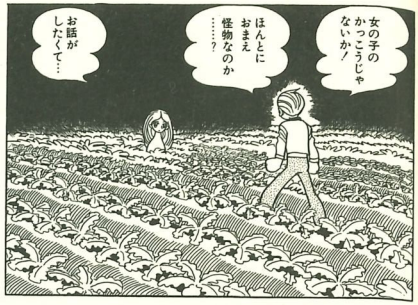
『W3（ワンダースリー）』のトマト畑や、『シュマリ』のトウモロコシ畑など、手塚漫画の中にはいろいろな野菜が描かれているが、その中でもダイコンは複数の作品に出てきており、物語の中では必然性こそないが、季節感を表現するのに多く使用されている。

ダイコン畑の土から顔を出しているダイコンの葉のナチュラルなグリーンは、実に目に鮮やかで美しいものである。私などはダイコンというと、ダイコンの味噌汁やおでん、ダイコンの酢のものや煮つけ、漬けものなど、食べることばかり頭に浮かんでしまうのであるが……。

ところが、『一輝（いっき）まんだら』の兵士の上に干してあるダイコンなどは、美味（おい）しい野菜の一種というより は女性の足のようで、変に色気がある。手塚調といわれる絵は、関節をきちんと描く劇画的なものではなく、ふっくらと優しい誇張の絵であるから、このダイコンが、より女性の素足に近いと感じるのだろう。

子供の頃、大根おろしというのは、ヒリヒリと舌が辛くて、食べた後がつらかった。しかし、大人になると、あの辛さが実にいい。ところが、現在の青首ダイコンというのは、辛味成分のメチルメルカプタンなどを品種改良によってうんと少なくしてあるらしく、ほとんど辛味を感じない。ダイコンの辛味好きにとっては残念なことである。

なお、ダイコンの古名は〝スズシロ〟で、春の七草のうちの一つである。



●『バンパイヤ―第二部』
ダイコン畑という設定がユニークで面白い。

●『一輝まんだら』
女性の足のようで、
〝色っぽい〟ダイコンである。

●『ハトよ天まで』
ハト丸は根性と努力で見事なダイコンをつくった。

キャベツ

手塚漫画の中のキャベツなどというと、どう考えてもうまく結びつかず、まったく不自然に思えよう。ところが調べてみると、キャベツやキャベツ畑が出てくるシーンが意外に多いのである。

『ブラック・ジャック』『アドルフに告ぐ』『ナスビ女王』『新宝島』……それぞれキャベツを背景とした自然が広がっていて、キャベツ畑を眺めるのが好きな私は嬉しくなってしまう。その他『ドースン一家の記録』『魔神ガロン』『W3（ワンダースリー）』などにもキャベツが登場する。キャベツの親類である園芸種のハボタンが出てくる作品もある。これらは、手塚治虫が単に無意識のうちに描いていたというわけではなく、キャベツは造形的に面白く、地面が豊かでにぎやかなものになるので、多く描かれたのだと思われる。

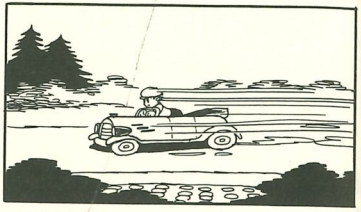
手塚治虫が最初につくった会社、一九六〇年代の虫プロダクションは、練馬区富士見台（ふじみだい）の地にあった。現在では発展した街になっているが、当時はスタジオの隣がキャベツ畑であったし、周辺にもキャベツ畑が実に多かった。もしかすると手塚治虫は、そんな景色にも影響を受けていたのかもしれない。『アドルフに告ぐ』では、キャベツの〝ザウアークラウト〟（酢漬け）の料理法まで出てくるので、手塚治虫の好きな野菜でもあったのかもしれない。

キャベツは誰が見ても面白い結球の形をしているが、学名の一部のカピタータ（capitata）は、〝頭の形の〟という意味だそうである。

●『ブラック・ジャック―ディンゴ』
ブラック・ジャックとキャベツなど、イメージとしてはほとんど結びつかない。

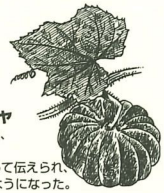
●『ナスビ女王』
キャベツの収穫シーン。

●『アドルフに告ぐ』
これはザウアークラウトの材料にするためのキャベツである。



●『新宝島』
なにげないキャベツ畑が効果的である。

カボチャ



ニホンカボチャ
熱帯アメリカ原産で、
日本へは16世紀に
ポルトガル船によって伝えられ、
各地で栽培されるようになった。

セイヨウカボチャ
最近売られているカボチャは、
ほとんどセイヨウ種になった。
現代人の好みに
合っているのだという。

ここでは、いろいろな有用植物（作物）を取り上げてみた。

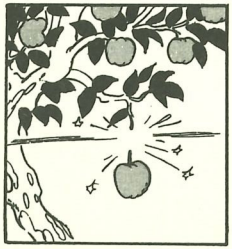
『メトロポリス』では、お化けのようなカボチャに人が住んでいて、これは童画的な絵である。カボチャは他に『ぼくの孫悟空』にも出てくる。漢字で「南瓜」と書く。

南の瓜がカボチャなら、西の瓜はスイカである。今も昔も夏の果物の人気ナンバーワンだ。『ジャングル大帝』のセリフのように、砂漠でスイカが育つのは不思議だが、一九九六年、日本には存在しないはずのインド原産の野生ナスが、JR山手線の高田馬場駅と新大久保駅の間で発見され、ちょっとしたニュースとなった。スイカのように、薄いグリーンと濃いグリーンの縞模様のある三センチほどの実であったという。このようなことが実際にあるから、漫画の中で砂漠にスイカがなっていてもおかしくはない。

『グリンゴ』には作物の象徴としてトウモロコシが描かれている。『W3（ワンダースリー）』では、星真一少年が大暴れしている。イライラは頂点に達し、大事な農作物であるトマトを叩いている。

この他にも、『双子の騎士』のブドウ、『奇子』の茶畑、『グリンゴ』のタバコ、『一輝まんだら』のイネなどがあり、短編『熟れた星』では、珍しい熱帯有用作物のパンノキを登場させている。いずれもストーリー上の必要性から顔を出させていたものであるが、その幅広い博物的な知識、見解に、あらためて驚かされるのである。

●『メトロポリス』
カボチャの馬車を思わせる
童話的なカボチャの家である。



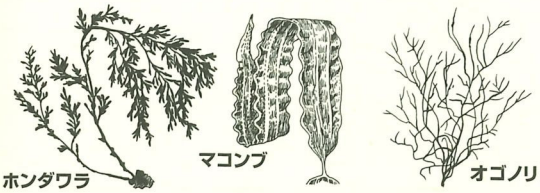
●『サボテン君』
手塚漫画の中のリンゴは数少ない。

●『ジャングル大帝』
スイカは熱帯アフリカ原産である。

●『W3』
トマト畑で大暴れする真一少年。

●『グリンゴ』
トウモロコシは高さ
4メートルほどになる。

ホンダワラ



図鑑をつくれるほどではないにしても、手塚漫画は植物においても、あらゆる種のオンパレードだ。海草までもいろいろな種に描き分けているのに至ると、もう感心を通り越して、びっくりするばかりだ。

『ピピちゃん』は海洋ものの漫画であるから、当然のように海草は出てくるが、ホンダワラとマコンブが見事に描き分けられている。『ロップくん』に描かれている海草は、ワカメかアラメのようなものだが、この絵からは特定できない。このコマの左端の海草だかイソギンチャクのようなものは、人の手の形をしており、これは一つのギャグ、遊びである。手塚治虫は知らん顔をして、このようなものを描く遊び心があり、私はとても面白いと思う。

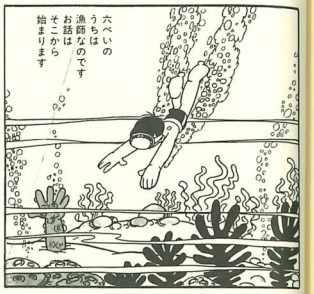
海草の生育に大きな影響を与える条件は、水温であるという。陸上の植物にとっての気候条件に相当するのは海流で、海流が水温を保つ。この三作品の舞台となった海は、どれも暖かい海のようである。暖流や寒流に囲まれた日本列島の海草は、世界でも有数の豊富な海藻相を示し、その数は二五〇〇種にものぼる。食用のノリやコンブ、薬品としての利用など、海草は人間生活とも密接な関係がある。

漫画やアニメーションの中の海草は、海底や海中の情景描写の域を出ず、さすがに表立つようなことはめったにない。しかし、情景専門のバイプレーヤーとして、なければ絶対に困るものである。海底が成り立たないのである。

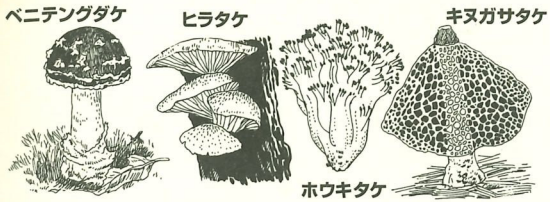
●『ピピちゃん』
マコンブは人間にとって重要な海草である。
また、ホンダワラは古来、正月の飾りに用いられた。

●『ゴブリン公爵』
ここに描かれたオゴノリは世界各地に分布している。

●『ロップくん』
これはワカメかアラメであろうか。



キノコ



キノコは実に不思議な植物である。隠花植物であるが、動物、植物に次ぐ第三の生物である菌類ともいわれる。キノコは主として木材や葉の分解を受け持ち、自然界では重要な役割を果たしている。ヒトもその恩恵に浴し、食用の他、制癌、降血圧、整腸などの医薬効果が期待されている。

また、その形態が可愛いもの、奇怪なもの、キヌガサタケのような幾何学的な様相を示すものなど、絵を描くうえでも興味深いものが多い。だから、手塚治虫もキノコを多様に登場させた。ベニテングダケなどは有毒であるが、姿形だけを見ると美しく、傘の橙赤色には目を奪われるものがある。

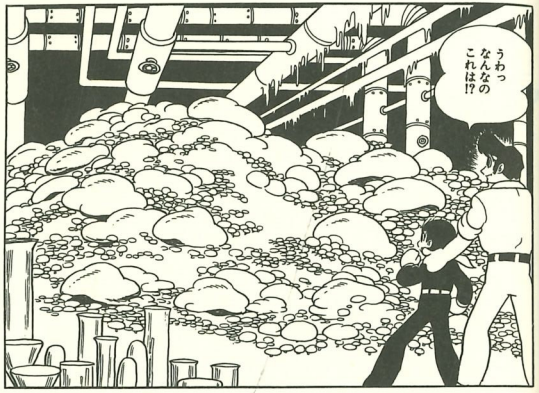
ディズニー映画「ファンタジア」の〝くるみ割り人形〟の中のキノコの踊りは、アニメ史上でも特に有名で、手塚治虫の大好きだったものだ。ディズニーに捧げるという趣旨でつくられた最後の実験アニメーション『森の伝説』には、そのオマージュとして、森の妖精のキノコが登場している。

このように可愛いところもあるキノコだが、『マグマ大使』のように群生し、巨大に成長すると、一転して不気味な印象となる。この人間の心理をうまく扱った恐怖映画が「マタンゴ」で、人間が最後にキノコになってしまうのだ。セミなどに寄生する冬虫夏草と呼ばれる変わりもののキノコもあるから、人間に寄生するキノコがいても、SFにおいてはちっともおかしいことではない。

●『漫画生物学』
これはベニテングダケであろうか。

●『リボンの騎士』
メルヘン的というより化け物的なキノコである。

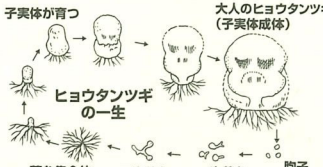
●『三つ目がとおる』
巨大化したアセタケのように見える。怪異的な表現である。



●『マグマ大使』 映画「マタンゴ」のような異変の前触れである。

ヒョウタンツギ

ヒョウタンツギの想像図
もしもヒョウタンツギが実在したら……。



手塚漫画を読んでいると唐突に、ひょうたん形にブタの鼻をつけたようなヘンな奴に出会うことがある。これは、いちおうキノコの一種とされている〝ヒョウタンツギ〟というものである。手塚治虫はすべてのキャラクターにスター・システムをとっていたが、これは最も古いキャラクターの一人、ヒゲオヤジよりも古く、小学生の頃にはもう描いていたという。しかも、これを考えたのは、手塚治虫の妹であった。この妹による〝キノコの一種でガスを吹きますが、冬、スープにして食べると、体がとても温まります〟という能書きまであったという。これは面白い！　というので、兄の治虫が自作に登場させたのが、そもそもの発端であったらしい。

その登場の仕方は、むやみに出てくるというものではなく、描写上の照れを表すときや、ちょっと臭い芝居のときに出てくる傾向にあった。ほとんどがユーモラスな役割だ。手塚キャラクターの中でも大変ユニークな存在で、ファンも多い。

かつて手塚治虫ファンクラブの人が調べたところ、手塚治虫漫画全集（全四〇〇巻）の三〇〇巻までで、一二一の作品に六七七回出演していたという。残り一〇〇巻があるわけだから、その数はもっと増え、ものすごい数になりそうだ。

ホンのチョイ役だが一種の大スターであり、次項で紹介する仲間の近似種〝ブクツギキュ〟などに比べると、知名度においても認知度においても断トツのキノコであった。

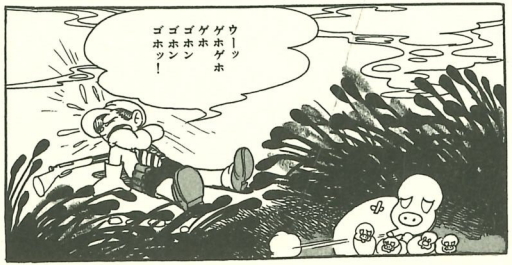
●『ノーマン』
ヒョウタンツギがギターに変形している。

●『バンパイヤ』
ロックの顔がヒョウタンツギになっている珍しい表現。

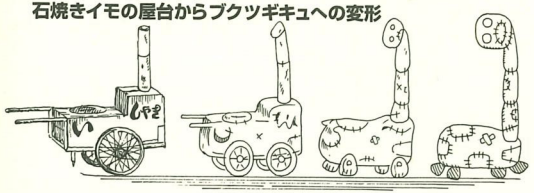
●「赤旗日曜版」
手塚治虫の妹がヒョウタンツギを描いている。

●『ブラック・ジャック　土砂降り』
これは、いかにもキノコらしい描写である。

●『ロック冒険記』
最もヒョウタンツギらしい本来の姿である。



ブクツギキュ



手塚漫画の中に突如として現れる不思議な生物（？）の一つに〝ブクツギキュ〟と呼ばれるものがある。焼きイモ屋の屋台のような形にも、ツギハギだらけのキリンのような形にも見える。〝ヒョウタンツギ〟ほど有名ではなく、その弟分とも同類ともいわれる。

『七色いんこ』に多く登場し、家族までいる〝ママー〟は、手塚治虫の子供の頃の悪戯（いたずら）描きが発展したキャラクターともいわれているが、もとは喉（のど）の薬のマークであったらしい。東京と大阪にあった大木合名会社（おおき）という薬品会社のもので、ミミズクのような形をしていた。それが〝手塚ママー〟の元祖である。出演は多くはないが、人格（？）があり、セリフもしゃべれる。より人間に近い存在である。

いつも「おむかえでごんす」としか言わず、毛が一本のおじさんのようなとぼけた奴が〝スパイダー〟というキャラクターである。単独で出てくることも多く、またアニメーションへの出演も多い。

『未来人カオス』の怪生物〝ロロールル〟は、ふだんは「ほーさよか」しか言わないが、ここでは珍しく多弁である。

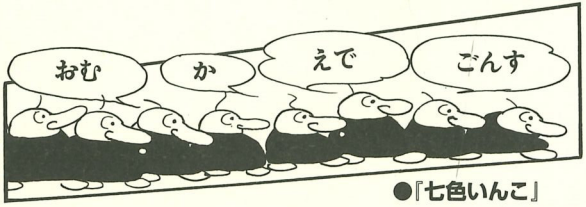
〝ブタナギ〟は、これら不思議生物の中で一番新しいもので、アゲハチョウの蛹（さなぎ）がモデルであろう。

これらのキャラクターたちの経緯（いきさつ）を、私はとうとう手塚治虫から聞くことができなかったが、手塚漫画の中では、まったく違和感なく生きているのである。

●『三つ目がとおる』
ブクツギキュは
突如として出現する。

●『七色いんこ』
ママーはかなり人間に近い。

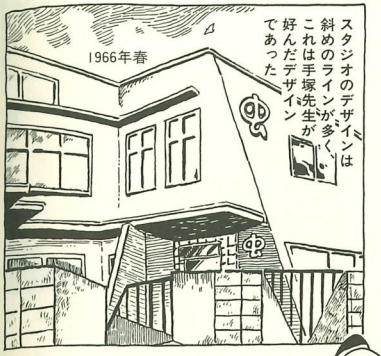
●『未来人カオス』
これは珍しく多弁な
ロロールルである。



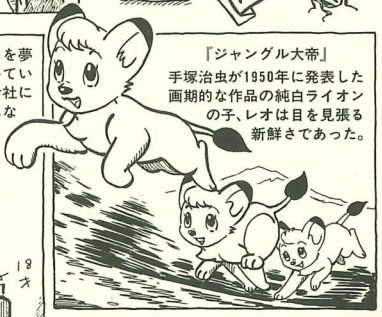
●『七色いんこ』
「おむかえでごんす」しか言わないスパイダー。

●『ブラック・ジャック―奇胎』 ブタナギは、いつも笑ってばかりである。

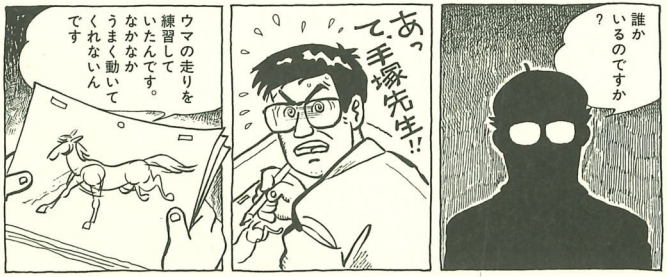
ボクの会った手塚治虫先生



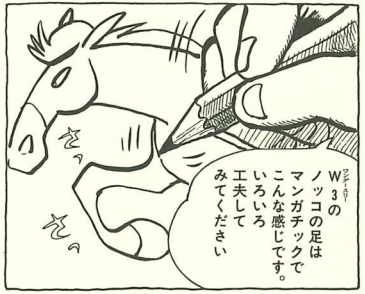
僕が夢にまで見た虫プロダクションのアニメーターになったのは、1966年の春のことだった。当時、アニメーターの入社試験の倍率はン十倍であったから、入社できた嬉しさもひとしおだった。虫プロを目指したのは、なんと言っても〝漫画の神様〟手塚治虫その人がいたからである

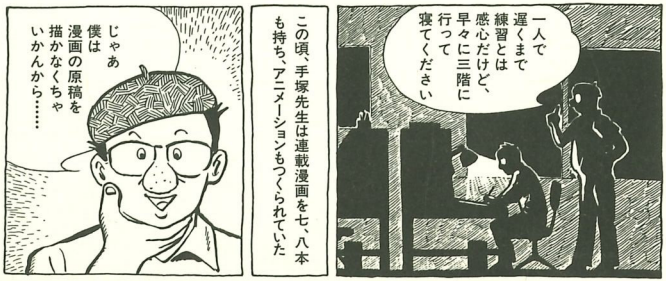


その1年前から、虫プロでは他社に先がけて日本初のカラーテレビアニメシリーズ「ジャングル大帝」を製作していた。そのカラフルな色彩、雄大な音楽に、僕はいっぺんで大ファンになってしまった



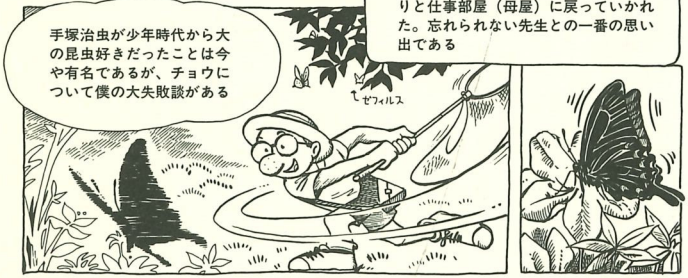
その絵を描く速さ、その生き生きとした線。まるで魔術を見ているような錯覚をした。超一流の漫画家であっても、アニメーションもすごく勉強されているということがすぐにわかった。そんなとき突然、手のデッサンの話になり、「漫画家の○○氏の手は、ちょっと変わったデッサンをとるんです」などと、アニメとは関係のない話が出た。昔から、先生との雑談は、とても楽しかった





この頃、手塚先生は連載漫画を七、八本も持ち、アニメーションもつくられていた

神様は、大きな背中を見せて、ゆっくりと仕事部屋（母屋）に戻っていかれた。忘れられない先生との一番の思い出である



1984年のある日のこと、
高田馬場スタジオ
手塚プロ
2F
コバさんは展翅はできますか？
展翅とは、チョウやガの標本をつくるときに行う、翅をきちんと整えて固める技術のことである
展翅板
展翅テープ
固まった翅を柔らかくするのには、ちょっとしたコツが必要になる
ペルーのチョウ
ベニスカシジャノメ
翅が透きとおっている。
メルポメネドクチョウ
アサギドクチョウ
裏側の翅が数字にみえる。
ウラモジタテハ
トンボマダラ
オオルリオビタテハ
この間、取材でペルー方面に行ってね。あなたが喜びそうなチョウをお土産にたくさん持って帰ってきたんだ
うわー、それはすごいですね！先生！
明日持ってきますから、楽しみにしていてください
ジャンピングを作画中↗

しかし、翌日、そのチョウは持ってこられなかった。先生は超多忙な人だったから、そのうちいただけるのかなとは思っていたのだが……
ある日…
なんだ、この箱は!?
まったく、人の机の上をゴミ箱がわりにして！
その頃、いらないものを人の机の上に置くのがはやっていた
それから数日後
やあ～どうもどうも
あ…先生、おはようございます
この間の見てくれた？
ペルーやコロンビアのいろいろなチョウを取り混ぜておいたんだけど、どうでしたか？
そ、それがどうも間違えられて
僕はそのとき初めて気がついた。あの箱の中身は先生が採集したチョウだったのだ。さすがに捨てたとは言えなかった
捨てられたらしいのです…

↑人のせいにしている

なに！なくなったって？まずいナァ。そりゃまずい！
あれは僕がペルーで一生懸命採ったものなんです
あれには素晴らしいものが入っていたんですよ
すごい素早いフットワークであった
そうだ。ビルの下のゴミ箱にまだあるかもしれない。探してきます
……
ここにもない。うーん変だ
いいからいいから。ないな。変ですね
すみません。先生！
当時、本社スタジオのあったセブンビルは、階段の下がゴミ捨て場であった

とうとう見つからなかった。ゴミの収集に間に合わなかったのかな
よし、僕のぶんをあげます。これは事故です
そのかわり、僕のぶんも展翅してください
とっておきのもんです
ウラモジタテハは面白いですな。こいつは斑紋が98に見える。ハハハ
まったく先生には申し訳ないことをしたものだ
僕がそれらをきれいに展翅して、標本にしたものをドイツ型標本箱に入れてお返ししたのは言うまでもない。今だからえることで…
ヒメベニモン
ウズマキタテハ
80と読める。
は、はい
手塚先生のあんなに嬉しそうな顔はめったに見たことがない。映画とクラシック音楽と昆虫の話のときだけに出る顔であった
先生、キシタです
完
あまりにも申し訳なかったので、後年、僕が台湾で入手したキシタアゲハと小金井公園で採集したクロナガオサムシを差し上げたことがある
台湾の有名採集地
六亀・1986
クロナガオサムシ
手塚先生とは本当によく虫の話をした

あとがき

本書の執筆にあたっては、前回の『手塚治虫昆虫図鑑』と比べ、ジャンルが大変多岐にわたった。

各セクションをどのようにまとめたら効果的か、手塚治虫が博物的な要素をいかに表現していたのか、どんなふうにストーリーの中に溶け込ませていたのか、そのへんを明快に表すということが一番の難題であった。とにかく、一つ一つ、こつこつとまとめていくことにより、なんらかの形が浮かび出てくるだろうと予想した。

それがどこまで成功したかどうかは心もとない。あまりにも博物的シーンが数多く、紙数の関係で収めきれずに割愛したものも多々あった。また、博物館というからには、天文学的なことや地質学的なもの、ミクロの細胞や遺伝子、クローン現象など、そのあたりをテーマにした手塚作品も多いだけに、ぜひ収録したかったが、今回は動植物に限らざるを得なかった。しかし、手塚作品を愛する人たちに、多少なりとも、こんな見方もあるのかと思わせるものになったという自負はある。

この本の企画に賛同していただき、いろいろな意見を頂戴した手塚悦子夫人、手塚プロ社長の松谷孝征氏、出版部の古徳稔氏、手塚作品の資料的な部分で協力をあおいだ森晴路氏、田中創氏、荻原千賀氏、手塚治虫との昔の思い出を語ってくださった実弟の手塚浩氏、素晴らしい解説を書いてくださった荒俣宏氏、一年間にわたる執筆において、いろいろと助言いただいた講談社の村井浩氏、皆様に心から感謝と御礼を申し上げます。

小林準治

わ

●W3（ワンダースリー） 97, 141, 301, 335, 409

●三つのスリル 207
●ミッドナイト 27, 37, 61, 75, 105, 153, 257, 301, 305, 313
●三つ目がとおる 89, 105, 127, 163, 193, 203, 245, 307, 323, 397, 413, 417
●緑の猫 29
●ミューズとドン 49, 61, 361, 395
●未来人カオス 417
●MW（ムウ） 67, 169, 359, 401
●メトロポリス 409
●モモンガのムサ 81, 83, 145, 147, 275, 283, 355
●モンモン山が泣いてるよ 171, 339

や

●やけっぱちのマリア 183
●ヤジとボク 153, 165
●山太郎（やまたろう）かえる 111
●勇者ダン 43, 167, 235, 353
●ユニコ 77, 175
●四谷快談 193
●夜よさよなら 191, 391
●よろめき動物記 33, 53, 119, 129, 143, 155, 195, 227, 255, 299

ら

●リボンの騎士 29, 67, 99, 275, 303, 337, 345, 413
●レオちゃん 239
●レモン・キッド 103
●ロストワールド 209, 373
●ロストワールド私家版 201
●ロック冒険記 415
●ロップくん 375, 411
●ロバンナよ 95
●ロビンちゃん 221, 253
●ロロの旅路 73, 237

●ひまわりさん 275
●百物語 161
●ファウスト 59
●フィルムは生きている 99, 279
●ふしぎな少年 55, 61, 123
●ふしぎなメルモ 369
●ふしぎ旅行記 105, 259
●双子の騎士 89, 283, 303, 371
●二人のショーグン 31
●ふたりは空気の底に 221
●ブッキラによろしく！ 383
●ブッダ 35, 87, 125, 141, 191, 199, 299, 305, 309, 359, 363, 379, 385
●プライム・ローズ 229, 273, 287
●フライングベン 69, 79
●ブラック・ジャック 33, 39, 67, 93, 109, 117, 119, 135, 151, 157, 179, 181, 207, 223, 237, 249, 251, 269, 297, 301, 319, 321, 355, 365, 389, 401, 407, 415, 417
●ブルンガ1世 157, 211, 297, 339
●平原太平記 341
●ベニスの商人 277
●冒険放送局 265
●ぼくの孫悟空 31, 49, 93, 117, 217, 227, 277, 295, 371
●ボンゴ 91, 145, 189, 211, 229, 385

ま

●マアチャンの日記帳 333
●マグマ大使 209, 241, 413
●魔神ガロン 319
●漫画生物学 111, 121, 137, 153, 175, 197, 201, 209, 211, 245, 257, 413
●漫画大学 141
●マンションOBA（オーバ） 31
●ミクロイドS 59
●観たり撮ったり映したり 301

●ドン・ドラキュラ　113

な

●ナスビ女王　329, 375, 387, 407
●七色いんこ　107, 129, 281, 285, 311, 395, 417
●ナンバー7　393
●虹のとりで　97
●人間昆虫記　341
●ぬし　215
●猫の血　67
●ノーマン　131, 213, 287, 415
●野ばらの精　371

は

●走れ！クロノス　101
●八丁池のゴロ　145, 155, 187
●ハトよ天まで　89, 225, 347, 405
●はなたれ浄土　311
●花とあらくれ　377
●ハヌマンの冒険　35, 159
●羽と星くず　295
●ばるぼら　397
●反射　61
●バンパイヤ　57, 65, 71, 155, 197, 405, 415
●陽だまりの樹　107, 237, 277, 311, 331, 337, 375, 381
●ビッグX　149, 255, 289, 403
●ひとでの秘密　261
●火の鳥　41, 43, 71, 91, 107, 135, 157, 163, 195, 201, 211, 213, 221, 241, 263, 285, 291, 299, 315, 325, 329, 343, 345, 349, 379
●火の山　101, 353
●火の輪　71
●ピピちゃん　171, 237, 239, 241, 243, 255, 265, 319, 411

●新選組　171
●新宝島　53, 361, 407
●新・聊斎志異一女郎蜘蛛　351
●スーパー太平記　369
●すきっ腹のブルース　403
●スリル博士　61
●成功のあまきかおり　35, 293
●聖なる広場の物語　289
●世界を滅ぼす男　255, 317
●ゼフィルス　369
●0マン　133, 145
●そよ風さん　187, 383

た

●タイガーランド　39, 43, 85, 157, 191, 225, 315
●大空魔王　123
●大将軍森へ行く　41
●大地の顔役バギ　45, 393
●タイムマシンのみこと　343
●タマサブローの大冒険　267
●丹下左膳　347
●地球の悪魔　103
●地球を呑む　167, 267
●チッポくんこんにちは　81, 121, 247
●地底国の怪人　139, 143, 203
●鳥人大系　273, 275, 283, 287, 309, 315
●珍アラビアンナイト　125
●罪と罰　141, 353, 379
●刑事もどき　89, 95
●鉄腕アトム　41, 135, 137, 149, 165, 171, 173, 189, 205, 229, 243, 263, 307, 387, 399
●どついたれ　169, 295
●どろろ　195

あ

- I・L（アイ・エル） 155, 267, 333, 387
- 悪右衛門（あくえもん） 77, 347
- アトムキャット 153, 167, 273, 289
- アトム今昔物語 131
- アドルフに告ぐ 183, 337, 349, 357, 407
- アバンチュール21 139
- アポロの歌 277, 303
- 奇子（あやこ） 329, 333, 341, 357, 397
- あらしの妖精 283, 337, 389
- アリと巨人 153, 351
- 一輝（いつき）まんだら 169, 201, 205, 405
- 宇宙狂想曲 93
- 海の姉弟（きょうだい） 221, 261
- 海のトリトン 177, 181, 183, 259, 265, 309
- Aチャン日子チャン探険記 227
- エンゼルの丘 159, 249, 267, 269, 281, 305
- お客さまは悪魔です 83
- おけさのひょう六 33
- オズマ隊長 201, 253, 257, 289, 393, 395
- 鬼丸大将 307
- おはようクスコ！ 111
- お山の三五郎 103
- おれは猿飛だ！ 187, 217

か

- 化石島 119, 171
- 化石人間の逆襲 161
- カノン 381

- ガムガムパンチ 81, 173
- カメレオン 197
- 奇蹟の森のものがたり 59, 111, 241
- 牙人（きばんど） 231
- きりひと讃歌 57, 335, 361, 365
- グッちゃんとパイコさん 29
- グリンゴ 51, 193, 229, 321, 409
- くるします・いぶ 97
- 黒い峡谷 99
- グロテスクへの招待 189
- ゲーム 171
- 月世界紳士 177, 253, 295
- ケン1（いち）探偵長 165, 273, 387
- 荒野の弾痕 125
- こけし探偵局 59, 153
- こじき姫ルンペネラ 293
- 虎人境（こじんきょう） 51, 91, 199
- ゴブリン公爵 95, 363, 411
- コラーブス 151
- ころすけの橋 85, 291

さ

- ザ・クレーター 335, 373
- サボテン君 125, 373, 403, 409
- さらばアーリイ 163
- サロメの唇 281, 371
- ジャングル大帝 47, 49, 53, 55, 91, 115, 117, 121, 127, 129, 133, 161, 199, 233, 247, 281, 297, 317, 321, 365, 395, 409
- ジャングルタロ 63, 105, 141, 159, 247
- シュマリ 73, 83, 101, 111, 235, 291, 307, 339, 383, 403
- 白いパイロット 65, 195, 345
- 白くじゃくの歌 293

参考文献

『野生イヌの百科』今泉忠明（データハウス）
『野生のネコ族』M・ブアラー（主婦と生活社）
『ねこ』廣田親子・山崎哲（保育社）
『野生ネコの百科』今泉忠明（データハウス）
『日本の動物』増井光子（小学館）
『世界の動物辞典』小原秀雄（三省堂）
『アニマル・クイズ』小原秀雄（光文社）
『動物世界の愛と悲しみ』伊藤政顕（万里社）
『世界新動物記』西村寿行（徳間書店）
『珍獣図鑑』中川志郎（池田書店）
『アニマルズ・クライシス絶滅！』文藝春秋編（文藝春秋）
『謎の動物の百科』今泉忠明（データハウス）
『日本史と動物100話』小池長之（日本文芸社）
『自然図鑑』さとうち藍文／松岡達英絵（福音館書店）
『動物――ほ乳類・は虫類・両生類』今泉吉典・岡田弥一郎監修（学研）
『カエルの世界』松井孝爾（平凡社）
『日本の両生類・爬虫類』松井孝爾（小学館）
『幻の古代生物99の謎』小畠郁生（産報）
『巨大生物図鑑』D・ピーターズ／小畠郁生監修（偕成社）
『大図説滅びゆく動物』F・バスキエーリ・サルパドーリ他（小学館）
『恐竜〈ポケットペディア〉』瀬戸口烈司監修（紀伊國屋書店）
『新恐竜伝説』金子隆一（早川書房）
『大むかしの生物』八杉龍一・濱田隆士編（小学館）
『人類以前』Z・スピナール（徳間書店）
『新・魚ものがたり』末広恭雄（サンケイ出版）
『365日魚と貝の雑学読本』久保田久喜（啓明書房）
『鮫の世界』矢野憲一（新潮社）
『魚〈標準原色図鑑全集〉』蒲原稔治（保育社）
『熱帯魚・金魚〈標準原色図鑑全集〉』牧野信司・松井佳一（保育社）
『魚貝の図鑑』末広恭雄他編（小学館）
『缶詰大博覧会』センチュリー書籍編集部編（センチュリー）
『自然大博物館』中根猛彦・武田正倫・高橋秀男監修（小学館）
『ナマコとウニ』大島廣（内田老鶴圃）
『手塚治虫エッセイ集④』手塚治虫（講談社）
『大都会を生きる野鳥たち』川内博（地人書館）
『鳥〈標準原色図鑑全集〉』小林桂助（保育社）
『検索入門野鳥の図鑑』中村登流（保育社）
『鳥の日本史』黒田長久監修（新人物往来社）
『謎の巨鳥モア』堀正一（築地書館）
『地上から消えた動物』R・シルヴァーバーグ（早川書房）
『手塚治虫大全』手塚治虫（マガジンハウス）
『鷲と鷹』宮崎学（平凡社）
『木と森の雑学』鈴木啓三（グラフ社）
『世界の樹木』R・プロクター（主婦と生活社）
『京の竹』山本建三写真（光村推古書院）
『竹の記』室井綽（鳩の森書房）
『日本の天然記念物』加藤陸奥雄・沼田眞・渡部景隆・畑正憲監修（講談社）
『植物には心がある』橋本健（ごま書房）
『花ことば　上・下』春山行夫（平凡社）
『世界の珍草奇木』川崎勉（内田老鶴圃新社）
『樹木〈標準原色図鑑全集〉』岡本省吾（保育社）
『森林の一〇〇不思議』日本林業技術協会編（東京書籍）
『植物の図鑑』本田正次・牧野晩成編（小学館）
『花の日本史』木村陽二郎監修（新人物往来社）
『樹の日本史』足田輝一監修（新人物往来社）
『巨樹』八木下弘（講談社）
『あさがお百花』小川信太郎・加藤楸邨（平凡社）
『ファーブル植物記』J・H・ファーブル／日高敏隆・林瑞枝訳（平凡社）
『カラー野菜の花』安藤博写真・加藤要解説（山と渓谷社）
『庭木と緑化樹』全二巻　飯島亮・安蒜俊比古（誠文堂新光社）
『図解週末のナチュラリスト』パキラハウス（講談社）
『直言』櫻井よしこ（世界文化社）

手塚治虫―1928年、大阪府豊中市に生まれ、兵庫県宝塚市で育つ。大阪大学付属医学専門部を卒業後、医学博士号を取得。1946年、『マアチャンの日記帳』で漫画家デビュー。1962年には『ある街角の物語』でアニメーション作家としてもデビューする。おもな作品に、漫画では『ジャングル大帝』『鉄腕アトム』その他多数、アニメーションでは『展覧会の絵』『ジャンピング』その他多数あり、全400巻の『手塚治虫漫画全集』（講談社）も刊行された。宝塚市には手塚治虫記念館がある。1989年に死去。

小林準治―1948年、東京都に生まれる。1966年、アニメーターとして、初めて手塚作品に参加する。1978年には、手塚プロダクション動画部門創設に参画。おもな作品に、『リボンの騎士』（動画）、『森の伝説』（原画）、『ジャングル大帝』（総作画監督）などがある。また、イラストレーターとして、『都市の昆虫誌』『ファーブル昆虫記』などの昆虫画を担当。著書には『手塚治虫昆虫図鑑』（講談社＋α文庫＝共著）がある。日本昆虫協会監事。日本昆虫倶楽部会員。

講談社＋α文庫 手塚治虫博物館

手塚治虫＋小林準治
©Tezuka Production 2003

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での
例外を除き、禁じられています。
2003年8月20日第1刷発行

発行者――野間佐和子
発行所――株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001
電話 出版部(03)5395-3529
販売部(03)5395-5817
業務部(03)5395-3615
装画――手塚治虫
デザイン――鈴木成一デザイン室
カバー印刷――凸版印刷株式会社
印刷――慶昌堂印刷株式会社
製本――有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社書籍業務部あてにお送りください。
送料は小社負担にてお取り替えします。
なお、この本の内容についてのお問い合わせは
生活文化第二出版部あてにお願いいたします。
Printed in Japan ISBN4-06-256770-9
定価はカバーに表示してあります。

本書は一九九八年七月、小社より刊行されたものに
新たに「ボクの会った手塚治虫先生」を加えました。

*辛口！JAZZ名盤一〇〇一	寺島靖国	寺島流名盤一〇〇一枚の魅力と欠点。ジャケット写真、四色口絵、録音評価、索引付き	1200円 D 1-1
辛口！JAZZノート	寺島靖国	ジャズは4ビート、50年代に限る。こだわり続ける著者が綴るジャズとの格闘の日々!!	900円 D 1-2
JAZZの聴き方に法則はない	寺島靖国	本音100%理屈0%。誰はばからず好きなジャズを聴く寺島流快楽宣言。400枚の名盤を紹介。	740円 D 1-3
JAZZを聴く 五感ときには第六感で!	寺島靖国	頭で聴かずに本能で聴く。ジャズをとことん愉しむには、自分の感覚を信じて聴くべし!	780円 D 1-4
ジャズ・オブ・パラダイス	後藤雅洋	ジャズ界の巨人一〇一人、名盤三〇三枚を写真付きでやさしく解説。入門書の決定版!	900円 D 4-1
落語手帖 梗概・成立・鑑賞・藝談・能書事典	矢野誠一	古典落語二三〇余りの梗概・成立・鑑賞・藝談・能書まで。落語ファン必携のうんちく事典	1280円 D 5-1
フルトヴェングラーの全名演名盤	宇野功芳	今世紀最高の名指揮者フルトヴェングラーの完全ディスコグラフィ。録音年代順索引付き	880円 D 9-2
*ジャズ喫茶マスター、こだわりの名盤	鎌田竜也 JAZZ MAGAZINE	全国のマスターたちが頑固に選んだ二〇〇盤。大きな写真、データ、エッセイ等、内容充実	880円 D 10-1
日本昔話100選	稲田浩二 稲田和子 編著	日本人の心が染みこんだ代表的昔話を土地の語り言葉を生かして編纂した決定版昔話集!!	971円 D 13-1
手塚治虫 昆虫図鑑	手塚治虫 小林準治 解説構成	手塚作品の中を飛びまわる数々の昆虫たち。その活躍を知らずして、手塚漫画は語れない	740円 D 14-1

*印は書き下ろし・オリジナル作品

表示価格はすべて本体価格（税別）です。本体価格は変更することがあります